明治と讃美歌

明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相

手代木俊一

はじめに

1859（安政 6）年、開港とともに宣教師が来日した。日本に宣教師を派遣したプロテスタント教会はアメリカ、イギリスが中心で、英語圏の宣教師であった。来日宣教師は最初英語のまま、その後日本語で讃美歌・聖歌（以下、讃美歌）を伝えた。そしてその多くは英語からの翻訳であった。筆者は平成 20（2008）年に『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治篇』[1]を刊行した。これは明治期の讃美歌、讃美歌集を教派別に、網羅的に、時系列に従って記述したものである。

本稿『明治と讃美歌　明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相』（以下、『明治と讃美歌』）は、讃美歌を翻訳した宣教師はどのようなネットワークを持っていたのか、そのことが訳語にどのように反映したのか、また他教派との間にどのような協力関係が生まれたのか、その讃美歌は礼拝以外でどのような働きをしたのか、そして日本のそれまでの音楽、詩歌にどのような影響を与えたかに焦点を当てたものである。

『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治篇』が歴史的叙述である縦軸であるとすれば、この『明治と讃美歌』は讃美歌と日本文化との出会いから生まれた教派を越えた諸問題、宣教師間協力等の横の関係を扱う横軸と言えよう。『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治篇』では讃美歌、讃美歌集の歴史を中心として書いたが、この『明治と讃美歌』では讃美歌をとおして明治期（一部幕末）の日本の言語、音楽、文化、社会を描き出し、同時に日本の近代化における讃美歌の役割について言及する試みである。

わたしはこの間讃美歌の歴史に関心を持ってきた。既に 30 年になろうとしている。もともと図書館員なので書誌をまとめる作業もしてきた。『日本の教会音楽（讃美歌・聖歌）関係資料目録』（フェリス女学院短期大学　平成元年［1989］年）、『アメリカによる東アジア伝道書誌』（東京女子大学　平成 16［2004］年）、『日本讃美歌・聖歌研究書誌　2010』（キリスト教礼拝音楽学会　平成 23［2011］年）。

しかし讃美歌史の中でも一番関心を持ってきたのが明治期の讃美歌であった。著作や監修書のタイトルにもそれがあらわれている。監修・解説『明治期　讃美歌・聖歌集成　全 42 巻』（大空社　平成 8［1996］年に 26 巻迄刊行、27～32 巻は 1997 年刊行、33～42 巻は 1998 年）、『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治篇』（港の人　平成 20［2008］年）。また『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月）も明治期の讃美歌をあつかっている。そしてこの『明治と讃美歌』は、これまで書いてきた論考等を中心にまとめ、系統づけて日本の近代化と讃美歌の関わりを論述したものである。

凡例

1、漢字は、原則として新字体を用いたが、［撰］のように当時慣用されていた文字はそのまま残した。
2、引用文の旧字体は、新字体に変え、送り仮名はそのまま引用いた。（例：用ひ）
3、引用は、なるべく記載されている形式に従ったが、本書が横書きのため漢数字を算用数字にした場合もある。
4、讃美歌・聖歌の歴史上の人物には、敬称を省いたが、研究者には「氏」を付した。
5、外国人のカタカナ表記は、日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』（教文館　昭和 63［1988］年 2 月）、『ニューグローブ世界音楽事典　第 11 巻』（講談社　平成 6［1994］年 4 月）に従った。
6、年号は元号［西暦］の順としたが、慶応以前は西暦［元号］の順とした。起点が西暦の場合、その後年号は西暦［元号］の順とした。日本以外での出来事は西暦のみを記述した。前後に年号が頻出して省略しても構わない場合、どちらかを省略した。典拠等資料の出版年は奥付等の記述の形式に左右されず、元号［西暦］の順とした。
7、本文中の［　］は、補記を示す。
8、文字の繰返しの記号は、1 字の場合（「々」「ゝ」「ヽ」等）は引用のままとしたが、2 文字に及ぶ場合、その文字を繰り返した。（例：ますます）
9、欧文の資料は、日本語の資料に合わせる形式で記述した。
10、讃美歌・聖歌等の曲名は、《　》で囲み、統一した。また論文名は、鉤括弧（「」）、書名・雑誌名は、二重括弧（『』）で囲んだ。
11、本文中の讃美歌の番号は「第 1」のかたちに統一した。
12、出版事項の出版地で、東京は省略した。

目次

はじめに 2
凡例 3
目次 4

第 1 章　勝海舟と讃美歌　時代は蘭学から英学へ（明治期前史） 5
第 2 章　ゴーブルと讃美歌　英語讃美歌から日本語讃美歌へ 20
第 3 章　C. M. ウィリアムズと聖歌（讃美歌）
初期讃美歌の成立と他教派との協力関係 31
第 4 章　来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌 52
第 5 章　日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と
19 世紀アメリカの海外宣教 67
第 6 章　植村正久と讃美歌　日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』 97
第 7 章　島崎藤村、樋口一葉と讃美歌　キリスト教と詩歌
86 調と 75 調 105
おわりに（まとめ） 124
注 128
参考文献 171

第１章　勝海舟と讃美歌　時代は蘭学から英学へ

1、はじめに

序章では、明治期に入る前にオランダ語から翻訳された勝海舟（文政 6［1823］～明治 32［1899］）が訳した讃美歌を扱う。これは、キリシタン時代にカトリックの聖歌が日本語の聖歌として歌われていたが、プロテスタント讃美歌としては勝海舟の讃美歌が最初のものと考えられる[2]。

日本のプロテスタント讃美歌の歴史を振り返ってみると現在の日本国の範囲内からは沖縄を伝道したベッテルハイムの 1846（弘化 3）年 9 月 15 日作《Loochoo Hymn》[3]が嚆矢と考えられる。この讃美歌は琉球語で作詞されており、その後の系譜もなく、日本語の讃美歌にも影響を与えることはなかったので、ここではその存在の紹介に留めることにする。

日本語讃美歌を遡るとその初期の讃美歌としてジョナサン・ゴーブル訳の《よい地ございます》(1860［万延元］～明治 4［1871］年？)、《ヨキ土地アリマス》(明治 5［1872］年)が上げられる[4]。しかし日本語で最初の讃美歌が翻訳されたということだけで言えば、勝海舟がオランダ語詩篇ないし詩篇歌（以下詩篇歌）[5]を《なにすとて》(1862［文久 2］年？)というタイトルで訳しており、ゴーブル訳より古い可能性が高い。

江藤淳氏は「勝海舟の精神構造とキリスト教との関係は、今後の重要な研究課題になるに違いない」[6]と述べている。確かに勝海舟は長崎海軍伝習所時代に敬虔なクリスチャンであるオランダ人教官団団長のカッテンディーケの影響を受けており、また、その後ホイットニー一家（アメリカ人商学教師のウィリアム・ホイットニー、アンナ夫人、その長男の宣教医ウィリス・ホイットニー、長女クララ・ホイットニー)、静岡バンド、勝海舟の伝記[7]を書いたアメリカ人宣教師 E. W. クラーク、またアメリカのキリスト教の影響を受けた日本人牧師、クリスチャン（津田仙、富田鉄之助、新島襄、徳富蘇峰、山路愛人、戸川残花、小崎弘道、横井時雄、長田時行、木村熊二、中島信行、中村正直、原胤昭）と関係を持っている。竹中正夫氏によれば、まさに幕末明治の蘭学から英学に移る時代、キリスト者と共に生きた人物としてキリスト教史の観点からも勝海舟は重要な存在である[8]。

また讃美歌史の上からは、当時のアメリカの讃美歌は上記ジョナサン・ゴーブル訳の《ヨキ土地アリマス》が示すように日曜学校讃美歌と福音唱歌（ゴスペルソング）が主流の時代であった。当時アメリカから各派の宣教師が多数来日したためアメリカのキリスト教の影響を日本は強く受けることになった。現在でも日本では愛唱讃美歌といえばアメリカの日曜学校讃美歌、福音唱歌が中心で、いまだに日本の讃美歌に大きな影響を及ぼしている。また当時詩篇歌の伝統を持つオランダ改革派、ドイツ改革派宣教師がアメリカから来日したが、彼等が日本に伝えた讃美歌は詩篇歌ではなく、日曜学校讃美歌、福音唱歌が中心であった。讃美歌はヘブライ語詩篇歌の英訳から始まっているが、日本では詩篇歌の時代を経ずして日曜学校讃美歌、福音唱歌の時代から始まった。

勝海舟が既にプロテスタントの国であったオランダからの影響で詩篇歌を訳したということは、詩篇歌の時代の経験のない日本の讃美歌史の上からも興味深い。そこで日本語讃美歌の嚆矢としての《なにすとて》について再検討を試みたい[9]。

2、研究史

まず今までの研究史を時系列（一部前後）に従って追ってみよう。最初に、外山正一氏によって『東洋学芸雑誌』第 14 号に紹介された《なにすとて》を以下に記す[10]。

夜頃日勝海舟翁を訪ひ余輩の頃日著せる新体詩抄を贈しに翁も嘗て新体詩の類そのものをものせられし―後略―

なにすとて、やつれし君そ、　哀れその、思たはみて、
いたづらに、我が世を経めや、あまのはら、ふりさけ見つゝ、
あらかねの、土ふみたてゝ、　ますら雄の、心ふりおこし、
清き名を、天に響かし、　かぐはしき、道のいさをを、
天つちの、いや遠なかく、　聞く人の、鏡にせむと、
我はもよ、思たわます、　おほろかに、此の世を経しと、
おもやつれとも

是予壮歳の頃唱気人のローフデンヘールといへる歌をもて　試にみくに詞になせし
（読みやすくするために改行を加えた）

残念ながら原歌詞が何であるか勝海舟は示していない。そのため何からの訳なのか諸説が生まれた。また初行《ローフ・デン・ヘール》から始まる讃美歌は当時から 2 種類（いずれもドイツ語からの訳）が存在し、このことも混乱の原因になっている。この件に関しては後述する。またハイネの詩のオランダ語訳からの翻訳という説もあるが、該当する詩は見当たらない[11]。

その後、佐藤良雄氏により唱気人が『東洋学芸雑誌』の誤植で唱気人はオランダ人を表す（口過）蘭人であることが報告された[12]。日夏耿之介氏はこの翻訳を 1855（安政 2）年から 1862（文久 2）年の間の作としている[13]。

木村毅氏は「勝海舟と新体詩」『明治文化全集』（第13巻、昭和3［1928］年）で《なにすとて》を新体詩の先駆として紹介し、『西洋文学翻訳年表（岩波講座　世界文学）』ではローフデンヘールがオランダの讃美歌であることを発表した[14]。

Loef den Heer（Loof denの誤か？）とは「主を讃ず」の意で、之は讃美歌であることが、前年木村毅がオランダに行つて研究した結果分明になつた。海舟はそれを知らずしてヘールをますら雄の意に解して誤訳したものである。併し前記「やよいの歌」は通詞の訳したものを詩形にしただけだが、これは原文訳なる点に別種の価値がある。

また、木村毅氏は「勝海舟訳の讃美歌（切支丹文学の珍種を拾うて）」『キリスト教伝来四百年記念　第2集』で「ところでこのローフ・デン・ヘールを勝海舟はLoef den Heerと綴つているので、私は今から二十年前オランダに遊んだ時、この原詩を求めていると、下宿の娘がすぐ教えてくれた。『いまはLoof den Heerと綴ります。主をたたえまつる歌の意味で、讃美歌です』と」と述べ、「なるほど、そう云えば、この『おもやつれしも』の主人公は十字架にかゝつたキリストのことなのではあるまいか。『天のはらふりさけみつゝ』は『天國をのぞみつゝ』であろう。『いたづらに我が世をへめや』は『浮世のなげきも心に留めじ』の意味を逆に歌つたのであろう」と述べている[15]。

木村氏は「日本詩前史大観」『近代詩の史的展望』でこの翻訳歌について次のように述べている[16]。

［禁教時に］讃美歌を邦語に訳す大胆さを敢えてした者は勝海舟で、珍什「思いやつれし君」（Loef den Herr）は実に「主を讃ずる歌」の意のオランダ讃美歌である。すでに誰れも知る者だが、詩史である以上、一応掲げておこう。―略―
文久2年頃の作といえば、1862年にあたる。私はしばらく、海舟は主キリストをさす、Herrを英語のHiroの意味に誤解して、誤訳をしているのかと思っていたが、あの食えない爺さんのことだ。禁制の耶蘇の讃美歌なので、わざと、こんなに意味を変改して訳したのであったかも知れない。『新体詩抄』の出た時、著者の一人の外山正一が一本を海舟に献呈すると、「そんな事なら、おれも若い時にやった事がある」といって右の訳を見せた。外山正一が「翁の人に先立ち数十年の昔、既に新体詩を作らるゝの挙あらんとは」と驚歎しているのだから、この一篇はつまり、新体詩の元祖という折紙がついている。

菱本丈夫氏は「勝海舟　オランダ語讃美歌＜ローフ・デン・ヘール＞」『蘭学資料研究会報告』No. 246 で、上記の記述を含むこれまでの《なにすとて》に関する文献を書誌的に、また資料集としてまとめた。そしてこの訳詩についてオランダ語韻文詩篇歌を検出、考証して「海舟の訳詩、第一聯は詩篇第百二篇を要約せるもの也。第二、第三聯は詩篇百三篇、第四聯は詩篇百三。二十節に加うるに、海舟の神への祈願を加えた賛美歌なり」という結論にいたっている[17]。だが、残念ながら結論にいたるまでの過程が述べられていない。日本語訳の《なにすとて》と詩篇とはかなりのへだたりがあり、菱本丈夫氏が詩篇であると

結論づけるプロセスは無理があるように思える。

また、菱本丈夫氏は『礼拝と音楽』（昭和47［1972］年9月）で子母澤寛著『勝海舟』を引用しながら、《思ひやつれし君》を4つに分け次のように述べている[18]。

（第一聯）
なにすとて、やつれし君ぞ、
哀れその、思ひたわみて、
いたずらに、我が世を経めや、

（第二聯）
あまのはら、ふりさけ見つつ、
あらがねの、土ふみたてて、
ますら雄の、心ふりおこし、

（第三聯）
清き名を、天に響びかし、
かぐはしき、道のいさをを、
天つちの、いや遠ながく、

（第四聯）
聞く人の、鏡にせむと、
我はもよ、思たはまず、
おほらかに、此の世を経しと、
　おもやつれとも

（解説）
（第一聯）詩102.悩む者の祈り、ダビデの悩みは海舟の当時の悩みと共通するものが多い。
（第二聯）詩103.エホバをあおぎ見る時に、一切の悩みはいやされ、喜びと力にみたされ、エホバをとこしへにほめたたえ、声高く、きびしい教の道を歩む。
（第四聯）詩103・20.みことばの声に聞き従い、みことば行なう、力ある勇士たちよ、その手本（鏡）に私自身なろうと神に祈る。海舟のキリスト者としてひそかに神にちかう讃美歌である。第一聯の返り歌であるから、「思いたはまず、此の世を経しと、（肉体は）やつれども」と結ばれておる。
海舟はいつ、どこで、どうして、この歌を書いたのか。子母澤寛『勝海舟』巻2、239頁には次のように記されている。

（1860年5月15日）「十五日に子午線を通過、夜は、これまではじめて見るようないい月。ふと吟をとめると、こんどは赤松が、……今様の如く、詩の如く、いい声だ。「なにすとて、やつれし君ぞ」麟太郎が若いころ訳した「思ひやつれし君」というオランダの詩だ。

長崎の本蓮寺に一緒にいて、暇があると、蘭語の勉強に、その原詩と対訳をして教えたものだった」[19]。

これは作家の創作であるが、何か根拠もあることであろう。この詩は文久2年以降という説をうちけすものである点で、私には同意できる。場所も本蓮寺であろう。したがって安政年間ということになる。その動機であるが、これは、毎夕平信徒である、多数のオランダ人が礼拝をする姿に、信仰を守るために戦って建国した、祖国とその同胞の今も変わらぬ信仰生活に、愛国の源泉があることに思い当たり、海舟自身、エホバの前にぬかづき、神をほめたたえ、神にちかった文字であった。当時はまだ、キリスト教禁制の時である。海舟が何人にも説明しなかったのはそのためであり、またキリスト者の根本義をよくとらえていたからでもある。

残念ながらここでも《ローフ・デン・ヘール》=《なにすとて》が詩篇の第 102 と第 103 の翻訳・翻案とする結論にいたるまでの過程が具体的な語句の対比をとおして述べられていない。また冒頭で初行《ローフ・デン・ヘール》から始まる讃美歌は当時から 2 種類（いずれもドイツ語からの訳）が存在すると述べたが、この論文では勝海舟が用いたと思われる原歌詞を、後述する千葉宣一氏が示した J. Daniel Herrnschmidt（1675～1723）《Lobe den Herren, o meine Seele!》（1664 、『讃美歌』（昭和 29 年版）の第 20《主をほめよ》、『讃美歌　２１』第 169《ハレルヤ。主をほめたたえ》）との関連ではなく、『讃美歌』（昭和 29 年版）第 9《ちからの主を》、『讃美歌　２１』第 7《ほめたたえよ、力強き主を》[20]の原歌詞《Lobe den Herren, den mächtgen König der Ehren》（Joachim Neander, 1650～1680、曲:Erneuerten Gwsangbuch, 1665）との関連で説明している。確かに《Lobe den Herren, den mächtgen König der Ehren》は詩篇第 103 に対応はしているが、初行「ちからの主を」、「ほめたたえよ、力強き主を」の力強い表現と勝海舟訳「やつれし君」、「おもやつれども」の脆弱な表現とでは対蹠的で《Lobe den Herren, den mächtgen König der Ehren》と勝海舟訳《ローフ・デン・ヘール》との関連は希薄なように思える。ただここで筆者はあくまでも日本語訳を比較して述べているので、オランダ語から比較すると菱本氏の見解にいたるのかも知れない。菱本丈夫氏は「勝海舟　オランダ語讃美歌＜ローフ・デン・ヘール＞」『蘭学資料研究会報告』No. 246 で、《なにすとて》に対応する散文訳 2 点と韻文訳 5 点のオランダ語詩篇を掲載している[21]。

さらに菱本氏は「長崎の鐘」というタイトルで随想風な創作記事を『キリスト新聞』に寄稿している[22]。

―略―

出島のオランダ屋敷から力強い男性の歌声もひびいて来る。

「ロール・デン・ヘール」

海舟は軍歌だと思った。

―略―オランダの人びとは国王の命をうけて、遠くからやって来た。そして彼らはその重い任務を完了するため日夜、忠実に努力した。朝夕三色旗の下に集まり「ロール・デン・ヘール」の歌声とともに神へのちかいをそだてていた。礼拝を守りつづけて来た。海舟も時折り、彼らと共に出島のヨーロッパ倉庫に姿を見せるようになった。軍歌だと思っていた「ロール・デン・ヘール」はダビデの経文（詩篇歌）の百三篇であることを知る。やがて、その詩篇歌集に親しむ様になった。そして、「みくに詞に試みた」。すなわち、「何すとて、やつれし君ぞ」がそれである。詩篇百二を読んで、自分たちの悩みはダビデの悩みと同じであり、小さなエゴではなく、国王としての悩みである。日本のだけの悩みではなく全人類の悩みであることを知る（詩篇百三の二〇）。「みことばの声にきき従い、これを行なう、力強い勇士たちよ、エホバをほめよ」、海舟はこの「みことばの声をきく」勇士たちの手本（かがみ）とならんと、ひそかに神に誓う。

菱本氏は詩篇の翻案としているが、勝海舟訳と詩篇とを比較すると、勝海舟の翻案が激しいため詩篇との関連は希薄のように思えると前述したが、単に《ローフ・デン・ヘール》「主を賛美する」ということであれば詩篇にはこの言葉が多数見受けられる[23]。翻訳であるという以上たとえ意訳、翻案であっても相対し、具体的に関連する語句が存在するであろう。例えば菱本丈夫氏は『礼拝と音楽』（昭和 47［1972］年 9 月）掲載の（第四聯）「聞く人の、鏡にせむと、我はもよ、思たわます、おほろかに、此の世を経しと、おもやつれとも」を詩篇 103 の 20 節「御使いたちよ、主をたたえよ　主の語らる声を聞き　御言葉を成し遂げるものよ　力ある勇士よ、主をたたえよ」であるとするが、それは見解は意訳、翻案の域をはるかに超え、具体的に関連し、対応する語句が存在するとは考えられない。

千葉宣一氏は「6.《思ひやつれし君》（勝海舟訳）の位相―讃美歌の翻訳―（第3講　近代詩の黎明）」『講座　日本現代詩史　1　明治期』で《思ひやつれし君》の原詩を、J. Daniel Herrnschmidt《Lobe den Herren, o meine Seele!》と推定、その翻訳を掲載し、彼の信仰告白としている[24]。

主をほめよ、わがこころ　いまわのときまで　わが生くる日のかぎり　主をたたえまつれ　この身とたましい　たまいしみかみを。（ハレルヤ　ハレルヤ）　たじろがぬこころもて　ヤコブのたのみし　活ける神あおぐこそ　げにさいわいなれ　こよなきはげまし　うくるぞうれしき。　あめつちとものみなを　つくらせたまいし　わが神のみちかいは　ことごと果されん　世界をこぞりていざ主につかえよ

しかし、上記は部分訳であり、勝海舟が訳したとする《ローベ・デン・ヘルン》＝《Lobe den Herren, o meine Seele!》との関連が述べられていない。

ここまでこの《なにすとて》に関する文献を勝海舟の信仰告白として捉える文献を中心に紹介してきた。しかし讃美歌委員だった豊田実、笹淵友一、原恵の各氏は勝海舟の信仰告白として讃美歌《なにすとて》をとらえる解釈に否定的である。

豊田実氏は『日本英学史の研究』[25]で《なにすとて》を新体詩の歴史のなかで取り上げているが、讃美歌としては取り上げていない。また笹淵友一氏は『浪漫主義文学の誕生』[26]で木村毅氏の「勝海舟訳の讃美歌（切支丹文学の珍種を拾うて）」[27]を紹介しているが、独自の見解は述べていない。原恵氏は「筆者はこの詩の原詩が前記の詩篇歌であろうという点にはほぼ異論がないが、訳文が原文とあまりにも離れ、また晦渋である点から菱本氏の断定にはにわかに賛成しかねるものを感じている。したがって、鎖国禁教時代の日本人による、オランダ語讃美歌にヒントを得た試作の一例としてきわめて興味ふかいものであることを紹介するにとどめたい」[28]と述べている。

3、勝海舟とキリスト教

ここで勝海舟とキリスト教を再考してみたい。この説を最初に引用した江藤淳氏の「勝海舟の精神構造とキリスト教との関係は、今後の重要な研究課題になるに違いない」は次の言葉を遠因としていると考えられる。「海舟の時間軸、非連続な未来に向って伸び、あれほどの先見性をもたらし得た時間軸は果たして剣術と禅学だけから導き出されるものだろうか。ここで第二に考えられる可能性は、海舟とキリスト教とのきわめて近しい関係である。」[29]、「千葉氏は、これ［思ひやつれし君］が海舟自身の信仰告白であるとする諸説をも紹介している。もしそうであるとすれば、興味深い推論が可能であろう。すなわち、幕府をも朝廷をも超越した国家を構想しようとした海舟は、当然国家を超える価値をも感じていなければならなかった。その感覚なしには、おそらく国家の構想そのものが不可能であった」[30]。すなわち詩篇歌を訳す精神的バックグラウンドが存在したということである。

勝海舟は《なにすとて》の推定翻訳年（1862［文久 2］年）より以前の 1860［安政 7］年、咸臨丸の艦長として太平洋を渡り、サンフランシスコでの 3 週間の滞在中礼拝に出席している。「アー、西洋では、いつも礼賛堂（教会）へ行ったよ。大層、褒められたよ。世話をしてくれた親仁が極熱心だったから、その息子などと一緒に行くとネ、ホーリー、ゴースト、ホーリー、ゴーストで固めて祈っているよ」[31]。

海舟の子息、梅太郎の妻クララ・ホイットニーの日記には彼とキリスト教との関係が度々登場し、勝海舟がクリスチャンになるという予測や勝が自分の屋敷に教会を持っているとの評判等が書かれている[32]。また勝海舟は死の直前に信仰告白をしたというクララ・ホイットニーの書簡の一節をクラークは『Katz Awa “The Bismarck of Japan”, or, the story

of a noble life』で紹介している。「伯の薨去の一二週間前、私の兄（？弟？）が伯から直接に信仰に入ったと云う告白を聞いた事を知りまして私はほんとに嬉しく思ひました。尤も私共は伯は何時でも天国に近く居らるゝ事を感じて居りましたが」[33]。

4、オランダ人教官団団長のカッテンディーケ

冒頭にも述べたように勝海舟は長崎海軍伝習所時代に敬虔なクリスチャンであるオランダ人教官団団長のカッテンディーケの影響を受けていた。当時を振り返って勝海舟は明治30年7月15日「西洋の方とは極懇意になった」[34]、また「長崎へ留学の時は、外国から来るものには、みなワシが会ったのサ。そして鼻息を窺う役目だから。ちっぽけな船の船長だが、船長だから対等の交際でネ。それで、何もかも打ちあけて話したよ」と話している[35]。

勝部真長氏は「長崎伝習所五年の修業の間に、オランダ人の海軍教師の人柄に触れて、その西洋的な物の見方、考え方に多くを学んだであろう―略―海舟はオランダ人教師への感謝の言をしばしば述べている」[36]と勝海舟の国家観・世界観の起因するところを解説している。また司馬遼太郎は『明治という国家』で「幕末のいわゆる志士のなかで、明治の革命後の青写真、国家の設計図をもった人は坂本龍馬だけだったろうと思いますが、それは勝という触媒によってできあがって行ったものでしょう。さらに言えば、カッテンディーケが勝にとっての触媒だった」[37]と述べている。すなわち司馬遼太郎は「プロテスタント」をキーワードにしながら、カッテンディーケが触媒となり勝海舟の「“国民の成立”もしくは“国民国家の樹立”」[38]の構想が生まれたとしているのである。

カッテンディーケは2代目長崎海軍伝習所オランダ人教官団団長として1857年ヤパン号（後の咸臨丸）で来日した。彼の日記『長崎海軍伝習所の日々』には次のような彼とキリスト教に関する次のような記述がある。「人間というものは、この至るところに善美の創造主にまします神の御心とさえ一緒に居るならば、決して淋しいことはない」[39]、「とにかく日本人ほど寛容心の大きな国民は何処にもいない。そうしてもし彼等の寛容心が、ただどうでもあろうが構わないという無頓着の結果でなかったならば、この点において我々キリスト教徒はたしかに教え導かるべきであろう」[40]、「日本人のキリスト教に対する先入観を一掃して、キリスト教の生命は、愛そのものであって、近ごろ一部の信者が言うがごとく、決して異教不寛容を唱導するものではないことを、日本人一般に信ぜしめる最善の方法である」[41]。上記の言葉から、オランダは宗教改革時代信教の自由を守った国であったことがうかがえる。また、当時の幕府に「我々の宗教の行事を条約によって自由に少しの拘束を受けずに許可せられた」[42]と礼拝を守ることを公認するように訴えていた。そして「最初、我々の船の中でこれをやっていた。この権利を認められたのは、1857年（安政4）10月に入ってからである。私は早速この権利を行使し、毎日曜日、出島商館の一室において行事を執らしめた」[43]。行事とは礼拝のことであろう。「望むらくは小さな教会堂を建立しようという気持ちになって貰いたいものだ」[44]と個人的に祈りを捧げるだけでなく日曜礼

拝を行ったことが書かれている。当然聖書も読まれ、讃美歌を歌ったことであろう。ここでの讃美歌はオランダ改革派の伝統から詩篇歌が歌われたと考えられ、こうした彼らの信仰生活を目の当たりにする機会を勝海舟は持ち、カッテンディーケの信仰、信教の自由等世界観の影響を受けたものと思われる。江藤淳の「幕府をも朝廷をも超越した国家を構想しようとした海舟は、当然国家を超える価値をも感じていなければならなかった。その感覚なしには、おそらく国家の構想そのものが不可能であった」[45]という感覚はカッテンディーケとの関係から生まれたと考えられる。信教の自由ということでは、禁教下また西郷隆盛からの耶蘇教への対処に対し黙許を称え、西郷がこれを受け入れたと伝えられる。明治４（1871）年の勝海舟の「耶蘇黙許意見」はこのあらわれであろう。

また『長崎海軍伝習所の日々』では勝海舟（麟太郎）が度々登場する。伝習生（生徒）の一人である勝海舟に対し「木村様（摂津守）と艦長役勝麟太郎らとともに生徒十六名（榎本武揚もその一人）水兵五十名」[46]という表現の他、カッテンディーケは勝海舟に信頼と高い評価を与えている。「艦長役の勝氏はオランダ語をよく解し、性質も至って穏やかで、明朗で親切でもあったから皆同氏に非常な信頼を寄せていた。それ故、どのような難問題でも、彼が中に入ってくれればオランダ人も納得した」[47]。このお互いの評価と信頼関係から、そして彼の日常生活である礼拝に触れることにより詩篇歌にも容易に触れることができたと考えられる。

このプロテスタントの信者カッテンディーケの延長線上にホイットニー一家、静岡バンド・アメリカ人宣教師 E. W. クラーク、またアメリカプロテスタントキリスト教の影響を受けた日本人牧師、クリスチャン（津田仙、富田鉄之助、新島襄、徳富蘇峰、山路愛人、戸川残花、小崎弘道、横井時雄、長田時行、木村熊二、中島信行、中村正直、原胤昭）が存在したと考えられる[48]。勝海舟が洗礼を受けたという記録はないが、かなりキリスト教に近い存在であることは確かであり、長崎伝習所時代から詩篇歌を訳す環境にあり、その後もキリスト教精神に共鳴し、その影響から《なにすとて》を所持し続けたのではあるまいか。竹中正夫氏によれば勝海舟の聖句（聖書）の揮毫から「勝海舟は漢訳聖書を座右において読んでいたと推察されます」と述べている[49]。

5、勝海舟訳《なにすとて》

さて、これらの資料から勝海舟の《なにすとて》をどう捉えたらいいのであろうか。またはたして詩篇そのものから訳したものなのであろうか。わたしは《なにすとて》が菱本丈夫氏の見解である詩篇の要約、及び一部分の展開翻案とは考えていない。むしろ千葉宣一氏の説く《Lobe den Herren, o meine Seele!》[50]の翻訳からの翻案の方が実際に近いと思われる。その根拠を示す端緒としてここで《なにすとて》の中西光雄氏による口語訳と彼の見解を以下紹介し、《なにすとて》の意味内容を検討したい[51]。

【本文】

01　なにすとて、やつれし君ぞ、
02　哀れその、思ひたはみて、
03　いたづらに、我が世を経めや、
04　あまのはら、ふりさけ見つゝ、
05　あらかねの、土ふみたてゝ、
06　ますら雄の、心ふりおこし、
07　清き名を、天に響かし、
08　かぐはしき、道のいさをを、
09　天つちの、いや遠ながく、
10　聞く人の、鏡にせむと、
11　我はもよ、思ひたわまず、
12　おほろかに、此の世を経しと、
13　おもやつれども

【口語訳】

01　どうして、（神よ）あなたは痩せ衰えてしまったのか
02　ああ私はどうして、心くじけて、
03　無為に、日々を過ごしてしまったのか
04　大空を、振り仰ぎながら、
05　大地を、踏みしめて立ち、
06　雄々しく立派な男子として、心を奮い立てて、
07　清らかな（神の）名を、天に轟かせ、
08　匂い立つように美しい、信仰の道の勇者として、
09　天と地の果ての、ますます遠く遥かな地まで赴いて、
10　（神の言葉を）聞く者たちの、模範になろうとしたからには、
11　私は再び、心くじけることはない、
12　今までなぜ無為に、この世で生きてきたのかという念で、
13　私の顔は、痩せ衰えてはいるけれども、

【注】

○五・七の句を数回繰り返して、最終句を五・七・七で言い収めるのは、「長歌」の典型的な構成である。
○通常、国文学では、五・七を聯と言い、語句展開の単位としている。
○04～06「あまのはら」「あらかねの」「ますら雄の」は、すべて『古事記』『日本書紀』『万葉集』など（記紀万葉）の古代歌謡に基づく類型的な表現。どの語句も枕詞として用い

られる表現だが、この詩では「あらかねの」のみが「土」を導く枕詞。「あまのはら」と「ますら雄の」は実質的な意味を持つ。

【考証】

〇菱本丈夫氏が、この詩を四聯にわけた根拠はなにか、疑問が残る。

〇02 行（聯）から 04 行までと、11 行から 13 行目までは、表現上対応している。

01　なにすとて、やつれし君ぞ、
02　哀れその、思ひたはみて、
03　いたづらに、我が世を経めや、
↓
11　我はもよ、思ひたわまず、
12　おほろかに、此の世を経しと、
13　おもやつれども

悩み深い青年が、回心して信仰の道へ踏み出すというダイナミックな詩の構成である。

〇しかし、01 行（聯）の「君」は誰であるか、疑問が残る。13 行の「おもやつれども」の主体は明らかに自分だが、01 行は、やつれた神に問いかけているような表現である。対応する詩篇では、神の苦悩は歌われていない。オランダ語原詩を確認してみたい思いにかられる。神を意図的に隠すことによって、わかりにくい表現となってしまったのかもしれない。

〇04 行から 10 行までは、『古事記』『日本書紀』『万葉集』など（記紀万葉）の古代歌謡の類型的表現を用いた信仰告白。長歌では、作者が巡行する形式をとることが多い。この詩もその形式を踏襲している。

6、《なにすとて》と新体詩

中西氏の指摘では、新体詩の先駆というよりむしろ古代歌謡の類型的表現ということである。また、中西氏は口語訳で「神」という言葉を付記している。「神」という言葉を補わないと意味が通じない、という指摘からは、禁教下ゆえ、勝海舟が意図的に隠したということを物語っているようにも思える。そのため判り難い表現になっているという指摘も禁教の時代を考えると当然の成り行きと思われ、かえってキリスト教への信仰を内に秘めていたための表現とも考えられる。

近代詩といえば島崎藤村であるが、『若菜集』（明治 30 年）をはじめとする彼の作品は 2 篇を除いてすべての詩が 75 調である[52]。植村正久も新しい讃美歌の創作を考えた時（明治 16 年）、まず想定したのが 75 調であった[53]。勝海舟の《なにすとて》は、中西光雄氏の分析によると古代歌謡（長歌）の技法が駆使されているがここでも 75 調である。文学者外山正一に《なにすとて》を提示するということは詩としての完成度に自信があったためと思

われるが、木村毅氏は「この外山正一が『翁の人に先立ち数十年の昔、既に新体詩を作らるゝの挙あらんとは』と驚歎しているのだから、この一篇はつまり、新体詩の元祖という折紙がついている。」[54]と新体詩の元祖としての見解を述べている。しかし新体詩、近代詩という新しい詩を模索した時、当時の人が採用したものは新しい詩の誕生に大きな影響を与えた讃美歌などに用いられた 86 調ではなく 75 調だった。75 調の《なにすとて》を示された外山正一他箸の『新体詩抄』(明治 15［1882］年）に収録された詩は 2、3 の例外を除き殆どすべて 75 調であった。

7、《Lobe den Herren, o meine Seele! 》と《なにすとて》

次に《Lobe den Herren, o meine Seele! 》のオランダ語訳がどの版からの訳か特定できない以上、ドイツ語から勝海舟訳《ローベ・デン・ヘルン》との内容で比較してみたい。日本語訳（試訳）は以下のとおりで、この訳と《なにすとて》とを比較検討したい[55]。

我が魂よ、主をたたえよ

1.　1 我が魂よ、主をたたえよ。
2 死に至るまで主をたたえよう。
3 まだ地上で時を重ねているので、
4 私は主をたたえ歌おう。
5 身体と心を下さった主よ、
6 朝に夕にほめたたえられよ。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

2.　1 王侯貴族も人間だ、母から生まれ、
2 そして土にかえる。
3 彼らの予定していたことも無に帰してしまう、
4 お墓が獲物をものにすれば。
5 だれもわれらを救うことができないのだから、
6 神に助けをもとめよ。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

3.　1 幸いだ、そう、幸いだといえる、
2 ヤコブの神の助けを得た者は、
3 信仰から離れず、
4 心安らかにイエス・キリストに望みを託す者は。

5 主を後見につけた者は、
6 最上の忠告と行いを見出す。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

4. 1 主は空、海、地と、
2 その中にあるものを創られた。
3 すべてきちんと満たされなくてはならない、
4 主がひとたびわれらのために与えられたものは。
5 すべての世界の支配者である主こそ、
6 われらを永遠に信仰に示しつづける。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

5. 1 不当に苦しむ者が現れ、
2 彼らに正義を与えるのは主だ。
3 飢えた者には食べ物を与えようとする、
4 彼らの生きる力となるものを。
5 固く縛られた者を主は自由にする。
6 主の恵みはさまざまだ。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

6. 1 盲人には見る目を与え、
2 ひざまずく者は起こして行かせる。
3 信心深き者を見つければ
4 主はその愛を見せたもう。
5 主の監督は見知らぬ者には防壁となり、
6 未亡人と孤児を守ってくださる。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

7. 1 だが、神を忘れた者の足どりは、
2 強い手をもってはねつけ、
3 彼らはおかしな足踏みしかできなくなり、
4 自らの縄に絡まってしまう。
5 主は永遠に王なり、
6 シオンよ、あなたの神はいつもあなたのことを気遣ってくださる。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

8.　　1 人間たちよ、高き名前をたたえよ。
2 とても大きな奇跡を起こす人の名を。
3 生きとし生ける者はみなアーメンと言え。
4 そして明るい気持ちでたたえよ。
5 神の子なるあなたたちよ、たたえよ、ほめたたえよ。
6 父と子と聖霊を。
7 ハレルヤ、ハレルヤ。

《なにすとて》と上記讃美歌《Lobe den Herren, o meine Seele! 》の日本語訳との対応関係を考えてみたい。翻案なので同一の表現ではないが次のような対応関係が考えられる。

「01　なにすとて、やつれし君ぞ」＝「5.1 不当に苦しむ者が現れ、5.2 彼らに正義を与えるのは主だ。5.3 飢えた者には食べ物を与えようとする」、「02　哀れその、思ひたはみて、03　いたづらに、我が世を経めや」＝「7.1 だが、神を忘れた者の足どりは、7.2 強い手をもってはねつけ、7.3 彼らはおかしな足踏みしかできなくなり、7.4 自らの縄に絡まってしまう。」、「04　あまのはら、ふりさけ見つゝ、05　あらかねの、土ふみたてゝ」＝「4.1 主は空、海、地と、4.2 その中にあるものを創られた。4.3 すべてきちんと満たされなくてはならない、」、「06　ますら雄の、心ふりおこし」＝「5.4 彼らの生きる力となるものを。5.5 固く縛られた者を主は自由にする。」、「07　清き名を、天に響かし」＝「8.1 人間たちよ、高き名前をたたえよ、8.2 とても大きな奇跡を起こす人の名を。8.3 生きとし生ける者はみなアーメンと言え。1.1 我が魂よ、主をたたえよ。1.2 死に至るまで主をたたえよう。」、「08 かぐはしき、道のいさをを」＝「3.3 信仰から離れず、3.4 心安らかにイエス・キリストに望みを託す者は。」、「09　天つちの、いや遠ながく」＝「4.1 主は空、海、地と、4.2 その中にあるものを創られた。4.3 すべてきちんと満たされなくてはならない、4.4 主がひとたびわれらのために与えられたものは。4.5 すべての世界の支配者である主こそ、」、「10　聞く人の、鏡にせむと」＝「4.4 主がひとたびわれらのために与えられたものは。4.5 すべての世界の支配者である主こそ、4.6 われらを永遠に信仰に示しつづける。」、「11　我はもよ、思ひたわまず」＝「8.3 生きとし生ける者はみなアーメンと言え。8.4 そして明るい気持ちでたたえよ。8.5 神の子なるあなたたちよ、たたえよ、ほめたたえよ」、「12　おほろかに、此の世を経しと」＝「4.1 主は空、海、地と、4.2 その中にあるものを創られた。4.3 すべてきちんと満たされなくてはならない、」、「13　おもやつれども」＝「5.1 不当に苦しむ者が現れ、5.2 彼らに正義を与えるのは主だ。5.3 飢えた者には食べ物を与えようとする、5.4 彼らの生きる力となるものを。」。

《なにすとて》が翻案である以上想定・類推の域をでない。「飢え（た)」れば「やつれ（し)」るので「01　なにすとて、やつれし君ぞ」と「5.1 不当に苦しむ者が現れ、5.2 彼らに正義を与えるのは主だ。5.3 飢えた者には食べ物を与えようとする」が関連していると

することは想定・類推を駆使すればそうなるとしか言えないが、これらの対応関係は詩篇第 102、第 103 よりも強い対応関係を示していると考えられる。（注 21 参照）

讃美歌はストレートに神を讃え、心情を吐露する歌である。神のことが歌われず、深い解釈なしには理解できない《なにすとて》を讃美歌委員だった豊田実、笹淵友一、原恵の各氏が、讃美歌であり勝海舟の信仰告白である、という説に否定的であるということは頷ける。

8、結語

では、勝海舟はどうしてこの《なにすとて》を訳す必要があったのであろうか。この《なにすとて》はまたなぜ新体詩の先駆であると言われるのであろうか。

当時「詩」といえば漢詩である。勝海舟は漢詩も多く残している[56]。「新体詩」の目指したものは、漢詩の対極にある平易な表現、75調、押韻の法等である。おそらく彼はオランダ語習得の際、詩歌、特に韻文を訳して歌えるようにしてみたかったと考えられる。子母澤寛著『勝海舟』ではこの《なにすとて》を今様のように歌ったとしている[57]。勝海舟も漢詩を作成しているが、漢詩のような意味を中心とした翻訳ではなく、オランダ語の韻文を生かすため、平易な表現で日本語でも韻文訳になるような形式にしたのではあるまいか。57調長歌のかたちに訳したのもそのためであろう。『新体詩抄』も長歌風な詩が多い。そして明治初期アメリカ人宣教師が讃美歌を日本語に翻訳したときと同様に日本語による韻を踏む詩歌を試作したのではないだろうか。来日宣教師のような丁寧な脚韻は踏んでいないが音調が良く、音韻を意識した形跡を見ることができる[58]。

韻文の詩歌を入手するにはカッテンディーケの関係から当時流布していた《ローフ・デン・ヘール》が容易かったのであろう。訳してみると讃美歌であるということが判ったので、禁教下であることから神という文字を表さず、翻案して原詩が判らない程のものにし、しかもその時点では発表しなかったと思われる。しかしその根底にはキリスト教への共鳴、その影響があり、《なにすとて》を訳そうとするさらなる動機となったのではあるまいか。そして翻案の際、当時の心境、将来への自身による暗示が加えられたのではないかと思われる。その後もキリスト教への共鳴と影響を受け続け、それなりに作品の出来栄えに満足していたためその後も所持し続け、外山正一の『新体詩抄』によってその記憶が呼び覚まされ、彼に提示したと考える。

第 2 章　ゴーブルと讃美歌　英語讃美歌から日本語讃美歌へ

1、はじめに

1859（安政 6）年、開港とともにキリスト教各派の宣教師が来日した。プロテスタント教会はアメリカを中心にイギリスと英語圏の宣教師が来日、当初は英語讃美歌が歌われていたが、しだいに日本語讃美歌が歌われるようになっていった。プロテスタント教会では、聖書をラテン語ではなく、その国の言語に訳して読むことと、讃美歌をその国の言語で、しかもプロの歌い手が歌うのではなく会衆がともに歌うこととが基本である。そのため宣教師は聖書と讃美歌をその国の言語に翻訳しなければならなかった。

しかし、讃美歌の翻訳は聖書の翻訳と大きく異なる点が存在する。まず、讃美歌は歌うための詩として訳さなければならない。曲は日本の伝統音楽ではなく西洋音楽が採用された。讃美歌は日本語で歌う最初の西洋音楽だった。しかも翻訳の歌詞が多数を占めている。英語と日本語の韻律が問題になり、また日本語と西洋音楽の適合が問題になる所以である。明治初期、この最初の試みに取り組んだ宣教師たちの労苦が想像される。次に、日本語訳に際し、詩としての韻を踏んでいなければならないと宣教師は考えていたようである。明治初期から 10 年くらいまで宣教師が翻訳した讃美歌は頭韻・脚韻（特に脚韻）を踏んだものが多く存在する[59]。韻を踏むように訳すことは言葉の制限を受ける作業である。これは明治初期だけに限られ、その後韻を踏む日本語讃美歌は殆どなくなった。

そして、現在でも同様だが、讃美歌は宗教詩である以上、詩としての趣を持っていなければならない。そのため翻訳語の選定、選択には様々な検討と様々な辞書を駆使し、訳語が選ばれたと考えられる。これらの問題をジョージ・オルチンはその著『日本における讃美歌』の「3、日本語の教会讃美歌の質について」で次のように述べている[60]。

> この人達［松山氏や奥野氏］は、日本の 75 調以外のものになじまなかった。6 音節・8 音節に割り振られた西洋讃美歌の曲のリズムに、7 音節・5 音節しかとらない日本語の詩形（ミーター）を調和させることの難しさは早くから認められていた。
>
> 明治 11（1878）年に東京で開かれた宣教師会議[61]では、次のようなアドバイスがあった。
>
> 1、讃美歌はすべてできうる限り、その国の作品であること。
>
> 2、その国の詩的韻律に従うこと。
>
> 3、頭韻、脚韻を持って作ろうとしないこと。
>
> 最後の項目は、初期の習慣に関係がある。当時、英語と同じように日本語の讃美歌についても、韻を踏む詩を作ろうとした。しかし、このことは断念された。すぐに日本の詩は英語のような韻を踏まないということが判ったからである。二番目の項目も遂行不可能だということが、すぐに判明した。日本語の韻律で書かれた讃美歌だけを収めてい

る讃美歌集も一冊か二冊は存在する。しかし、このような讃美歌の曲は、どこから来たのであろうか。宣教師達の中で詩を作ることのできる人は少なかったにしても、曲を作ることのできる人はもっと少なかった。もし宣教師達がキリスト教精神と詩的感覚の両方ともに天与の才を持つ日本人を待っていたとしたら、それは今日まで待つことになってしまったであろう。それにしても、そのような人が初期に現れ、趣くままに日本語の韻律の讃美歌だけを作ったとしても、そのような讃美歌は、朗誦はされてもまったく歌われることはなかったかもしれない。そしてもし、歌われたにしても、仏教の巡礼者による御詠歌の歌い方に、クリスチャンが従わなければならなかっただろう。彼らは、33篇もの歌詞を、一つの曲で歌うのである。

日本の讃美歌の多く―特に翻訳された讃美歌―に対して下しうる正当で厳格な判断とは、多分日本の讃美歌は、外国の詩に見られるような韻律におけるものと同様なものを持っておらず、むしろ、韻律そのものを持たないということである。翻訳者は、訳した言葉をその場に応じて、6か7、または8音節に収めることしかしてこなかった。そこで、皆感じていることは―翻訳者も同じだと思うが―、最近訳された讃美歌は原文に忠実ではあるかもしれないが、ただの散文であって詩的要素に欠けているものが多いということである。讃美歌の趣というものは、詩の形態と暗示性にある。そして詩人だけが、散文という平坦な道から離れて、想像力という翼を使って飛翔することができるのである。ここで欠点をあげつらうことで時間を無駄にすることをやめ、欠点は我々すべてが認めていることでもあるし、感謝しなければならないことに目を転ずるべきである。よかれ悪しかれこれら讃美歌のすべてが一体となって、クリスチャンの信仰感覚を燃え上がらせずにはおかなかったのである。そして、結局、このことが讃美歌の主な目的なのである。

この第1章では、これらの問題をゴーブル（1827～1896）の《There is a happy land》の日本語訳の改訳をとおして検証していき、アジアにおける宣教師の交流をこの讃美歌の翻訳過程を通じて考えてゆきたい[62]。

2、《There is a happy land》のゴーブルによる5種の日本語訳

記録に残る最初の日本語訳は、1859（安政6）年11月3日、ニューヨークのレイト・ストリートバプテスト教会でのゴーブル按手礼の席上、サムパッチ仙太郎が歌った讃美歌だが、残念ながら何を歌ったのかの記録は存在しない[63]。何が歌われたかの記録が残る最初の日本語讃美歌は明治5（1872）年横浜で開催された第1回宣教師協議会の席上で示されたクロスビーが訳した《Jesus loves me》の日本語訳《エスワレヲ愛シマス》と、ゴーブルが訳した《There is a happy land》の日本語訳《ヨキ土地アリマス》の2つの翻訳讃美歌である[64]。

明治初期そのゴーブルによる《There is a happy land》の日本語訳は上記《ヨキ土地アリマス》を含めて全部で 5 種が知られている。その 5 種の翻訳讃美歌と原歌詞を以下に示す。

（Ⅰ）

Yoi tci gozarimas,	よい地ござります
Taiso empo,	たいそう　遠方
Seijin yeiyoni tatsu,	聖人　栄耀に立つ
Tan Ocimo（ママ）	楽しも
Ureci utote	嬉し　歌うて
Wa skunuci daikomei	わ　救主　大高名
Hibiku homare	響く　誉れ
Homerareyo	誉められよ

（翻訳年不明、明治 26［1893］年 9 月 10 日附ベンネット宛ゴーブル書簡）[65]

（Ⅱ）

ヨキ土地アリマス、	ヨキ土地キタル、	ヨキ土地スベテ、
タイソフ遠方、	早々コヨ、	人ヒカル、
尊者栄華ニ立ツ、	モフマタマタヌ、	天父カマツテ、
日出ノヤフ、	ソフヨカロフ、	アイキヘヌ、
アゝカレウマク、	アヽワレウレシ、	アヽ天ニハシレ、
主救者ホメル、	罪ヲモユルシ、	御褒美トリテ、
名挙ケホメル、	主汝トモニ、	日ヨリスクレ、
讃美セヨ、	サイワイアロフ、	光明アロフ、

（明治 5［1872］年、早稲田大学大隈重信文書、正木護の報告書）[66]

（Ⅲ）

よい国あります
たいそう遠方
信者は栄えて
光ぞ

（明治 5～7［1872～1874］年、ジョージ・オルチン著「日本における讃美歌」）[67]

（Ⅳ）

楽しい国は

とおくあり
信者は栄え
悦ぶ
（明治７［1874］年、ジョージ・オルチン著「日本における讃美歌」）[68]

（V）

楽(たの)しい国(くに)ハ　楽(たの)しい国(くに)に　其地に

徳(とく)ある　汝(なん)ち来よ　悦(よろこ)ふ

信(しんじん)（ママ）者ハ栄(さか)え　疑(うたが)ふなかれ　耶蘇ハ其(はそこ)（ママ）こを

悦(よろこ)ぶ　早(はや)くも　治(をさむ)る

耶蘇を崇(あが)めよ　楽(たのし)み多(おお)く　此地に来よ

いとよく誉(ほめ)よ　患(うれい)ハ尽(つき)る　其(そこ)（ママ）こに我らも

加様(かよう)に謡(うと)ふ　我と同(おな)しふ　永(なが)き栄(さかい)を

限(かぎ)りない　ます　楽(たの)しまん

（明治７［1874］年「［讃美歌］（高木玄眞筆写本）」）[69]

（VI）

There is a happy land,
Far, far away,
Where saints in glory stand,
Bright, bright as day ;
Oh how they sweetly sing ;
Worthy is our Saviour King ;
Loud let His praises ring-
Praise, praise for aye.

Come to this happy land,
Come, come away ;

Why will ye doubting stand
Why still delay?
Oh, we shall happy be,
When from sin and sorrow free ;
Lord, we shall love with Thee-
Blest, blest for aye ;

Bright in that happy land
Beams every eye ;
Kept by a Father’s hand.
Love cannot die.
Oh, then, to glory run ;
Be a crown and kingdom won,
And bright above the sun,
Well reign for aye.

5 種のうち（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》の翻訳年は不明だが、一番古いと考えられるので最初に掲載した。実際この 5 種の歌詞を歌ってみると、1 つのメロディーで歌った歌詞の変遷とは思えないほど変化している。

冒頭、「讃美歌は歌うための詩として訳さなければならない」と述べたが、讃美歌は日本語で歌う西洋音楽なので日本語と西洋音楽の適合が問題になってくる。

ゴーブル訳の（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》、（Ⅱ）《ヨキ土地アリマス》では、彼は日本語のシラブルを単位として捉えているかのように訳している。（Ⅲ）《よい国あります》はジョージ・オルチンの著書の中にしかあらわれてこない翻訳である[70]。次に訳したと思われる（Ⅳ）《楽しい国は》は日本語の歌としての完成度に高いものを感じさせる。（Ⅲ）《よい国あります》は、この 4 行分しか我々は知ることができないが、しかし次の（Ⅳ）《楽しい国は》はそれに似た訳と思われるものが、（Ⅴ）の『[讃美歌]（高木玄眞筆写本)』[71]に見いだされる。（Ⅲ）《よい国あります》も（Ⅳ）《楽しい国は》もすでに 1 音符に 1 シラブルを当てはめるということから離れ、1 音符に 1 音を対応させるようになっており、日本語で歌いやすいように譜面も本来の 4/8 から 4/4 拍子として歌われたのではないだろうか。ミーター（詩形）も 64646664 だったものが 75 調になっている。そして偶然かもしれないが、この讃美歌はヨナ抜き 5 音階の曲である。（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》、（Ⅱ）《ヨキ土地アリマス》と（Ⅲ）《よい国あります》、（Ⅳ）《楽しい国は》の間に存在する何ものかは、日本語讃美歌がまさに日本語として歌われる讃美歌になった過程をあらわすもののように思われる。日本の歌の特徴である 1 音符に 1 音、75 調、4/4、ヨナ抜き 5 音階が既にここにみられるのである。

また宣教師は讃美歌を日本語に訳す際、詩としての韻を踏んでいなければならないと考えていたようである。原歌詞の第1節の1、3行目「Land」「Stand」のところが、(Ⅰ)《Yoi tci gozarimas》では、「ます」「たつ」、(Ⅱ)《ヨキ土地アリマス》でも「ます」「たつ」、2、4、8行目の「away」「as day」「aye」のところは、(Ⅰ)《Yoi tci gozarimas》では「遠方」の「ぽー」「もー」「よー」と脚韻を踏み、(Ⅱ)《ヨキ土地アリマス》では「遠方」の「ぽう」「よう」「ろう」となっている。5、6、7行目の「sing」「king」「ring」は(Ⅰ)《Yoi tci gozarimas》では、「て」「えい」「れ」、(Ⅱ)《ヨキ土地アリマス》では「うまく」「ほめる」「たかく」となっているが、(Ⅲ)《よい国あります》(Ⅳ)《楽しい国は》でも韻は踏んでいるが、(Ⅰ)《Yoi tci gozarimas》(Ⅱ)《ヨキ土地アリマス》ほど徹底的には韻を踏んではいない。韻を踏むように訳すことは言葉の制限を受ける作業だが、別な理由からだと思われるが、韻を踏むことをやめている。宣教師たちは、このころには韻に単なる語呂合わせ以上の意味を見出せなくなっていたのではないだろうか。その後この翻訳過程同様、韻を踏む日本語讃美歌は殆どなくなった。

讃美歌は宗教詩である以上、詩としての趣を持っていなければならない。(Ⅱ)《ヨキ土地アリマス》の3節4行目に「あいきへぬ」という言葉があるが、「love cannot die」の訳である。聖書翻訳であれば、「愛が絶えるはずがない」とか「愛は決して滅びない」と訳すところであろうが、これでは詩として趣に欠けると思われる。それにこれらの訳では意味を伝わっても曲に合わせて歌うことはできない。この「あいきへぬ」に関しては後述する。

3、ゴーブルと和訳聖書の出会い

さてここで、(Ⅰ)《Yoi tci gozarimas》、(Ⅱ)《ヨキ土地アリマス》の翻訳について検証する。

まず(Ⅰ)《Yoi tci gozarimas》がなぜ彼の翻訳の中で一番早いと考えたかの理由をあきらかにし、ゴーブルと聖書和訳、および聖書翻訳をした人たちとの関係を簡単に触れたい。

彼はペリー艦隊の乗員時代、沖縄でベッテルハイムに会い、信仰上の大きな影響を受ける。ベッテルハイムはギュツラフの『約翰福音書』を座右の書としてその訳業をすすめたといわれ、ゴーブルとギュツラフはサムパッチ仙太郎を仲立ちとしても関わりを持っている。ギュツラフの労作は1837年のものだが、ゴーブルがベッテルハイムの草稿を受け取った1858年までの間に、その日本語訳にはどのような変化が起っていたのであろうか。ギュツラフの『約翰福音書』の冒頭部分を例にとってみると、その箇所は「ハジマリニ　カシコイモノゴザル」となっている。1850年のウィリアムスの訳もまだギュツラフの影響を強く受け、「ハジマリニ　カシコイモノゴザル」である。しかしその後のベッテルハイムの訳では、「はじめに　かしこいものあり」になっている。その後の和訳聖書はギュツラフ風の

文体をとることはなく、「ゴザル」は消えていった。

ゴーブルの 4 種の訳は、ローマ字書きの翻訳年不明のものを除くとその時間的な変化は明らかであると思われる。ではローマ字書きの（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》はどこに位置するのであろうか。それを判断する資料が聖書和訳の変遷だと思われる。訳文の「ゴザル」から「あり」への変化は、ゴーブルの《There is a happy land》の 4 種の訳の変化に対応するように思える。この 2 つを重ね合わせてみると、ローマ字書きのものが最も古いと考えられる。

この（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》は、ベンネット宛書簡でゴーブルが「日本語研究の初期」に訳したもので公表されたものではないと述べていることから[72]、来日以来のゴーブルの日本語習得の状況を考えると「日本語研究の初期」とは、少なくとも彼が『摩太福音書』を刊行した明治 4（1871）年以前、彼の来日の 1860（万延元）年以降と考えられる[73]。（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》以外の 3 点の讃美歌の中でもっとも古いと思われるものが明治 5（1872）年に発表されていることから見て、この推定はおそらく正しいと考えられる。

4、ゴーブルが翻訳上使用したと思われる辞書及び漢訳聖書について

ここでゴーブルがどの辞書を使用して訳語を選定したかを考えてみたい。『摩太福音書』を上梓するにあたってゴーブルはヘボンの『和英語林集成』を活用したといわれるが[74]、この讃美歌の訳に『和英語林集成』に掲載されている語が多く見られる。しかしここで使われている語で『和英語林集成』にも見られる語のほとんどは、ごく日常的な語彙ともいえるもので、これらの語を『和英語林集成』から採ったのか、ゴーブル自身の獲得している語彙を使って訳出したのか、その判断は困難だと思われるが、3 行目の「栄耀」は『和英語林集成』から採った可能性が高い。口語的な表現ではない上に、キリスト教の用語であるにもかかわらず、先行する辞書類に glory の訳として採用されていないからである[75]。『和英語林集成』には glory の訳語としては「yeiyo」「yeiga」の 2 語が採用されている[76]。これはまさに栄耀、栄華であり、現在の我々もこの 2 語を 1 セットとして使うことが多いと思われる。ヘボンがこの辞書を編纂した時代も慣用的な使い方だったのであろう。

次に訳にあらわれるキリスト教の用語に注目してみると、まず興味深いのは saint の訳語「聖人」である。『和英語林集成』は saint に「聖人」の訳語を当てていない。『和英語林集成』が刊行されるまで唯一の英和・和英辞典で、ゴーブルも当然持っていたと思われる 1860（万延元）年のメドハーストの和英・英和辞典[77]には saint の項はない。『和英語林集成』にある訳語は「hi-ji-ri」で、逆に聖「hijiri」から英語を引いてみると、「Buddhist Saint」という訳語があり、ヘボンは「聖人」をキリスト教的な用語としては採用していない。『和英語林集成』の和英の部で「聖人」から英語を引くと対応している語は「sage」である。ヘボンは明治 5(1872)年の『和英語林集成』第 2 版[78]ではこの「sage」に対して「spoken generally of Confucius or of Giyo［尭］and Sun［舜］[79], the ancient emperors of China」

という説明を加えている。初版の当時も「sage」はキリスト教的術語にそぐわないという感じを抱いていたと考えられる。このことを知っていてゴーブルがあえて「聖人」を採ったかは不明だが、ここを聖人とした背景には英華辞典を検討した可能性が考えられる。英華辞典では 1822 年モリソン版[80]、1847 年メドハースト版[81]（彼は和英・英和辞典ばかりでなく英華辞典をも編纂)、1866 年ロプシャイト版[82]ともに saint に「聖人」の訳語を当てている。英華辞典の中に訳出されているキリスト教の用語から我々は現在も多くの語彙を引き継いでいる。例えば前述した glory だが、我々がその訳語として第一に思い浮かべるのは「栄光」ではなかろうか。それはメドハーストの英華辞典の glory の訳語の第一番目に見出される言葉なのである。

この（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》は、その原歌詞と比較すると、その 1 節、1 節が比較的厳密にその意を汲んで訳されていると思われる。すなわち和訳とその原歌詞が 1 節ごとにはっきりと対応している。

4 行目「楽しも」であるが、『和英語林集成』、先行する英華辞典のいずれをとっても、bright にそのような訳語を与えている辞書は存在しない。もっとも近いものはメドハーストの和英・英和辞典で、bright の訳語に「ホガラカ」の一語を当てている。ここからメドハーストの辞典をここで使用したとは断言できないが、使用した可能性は否定できない。

次に 6 行目、our に対応していると見られる「わ」であるが、これは『和英語林集成』第 2 版に「わ」の訳として、「I」「my」「me」、そしてその例として「Wa iye」-「my house」と説明されているところから、「our」の意訳であろうと推測できる。

同じ 6 行目の the Saviour をどうして「すくぬし」（救主）と訳したのであろうか。『和英語林集成』、メドハーストの和英・英和辞典には「saviour」という項は存在しない。モリソン版英華辞典にも「saviour」という項はなく、しかしメドハースト版英華辞典には「救主」という項が見られる。それを採ったとするとなぜシラブルの合う「きゅうしゅ」としなかったが疑問である。また「きゅうしゅ」のように読む語を初めて見たから「すくいぬし」または「すくいのぬし」等と読むべきところを、シラブルに合わせるため送り仮名を抜いてしまったのか、ゴーブルによるローマ字の誤記か、または全く別の理由があるのか現在のところ判断できない。

worthy を「大高名」と訳しているのは、『和英語林集成』を駆使しての訳と言える。「worthy」から「尊ぶ」「尊い」、また「尊ぶ」「尊い」をまた和英で引くと「honorable」、そしてそこから「高名な」を引き出したのではないだろうか。

メドハーストの和英・英和辞典は（Ⅱ）《ヨキ土地アリマス》の方でも使用された形跡がある。この（Ⅱ）《ヨキ土地アリマス》もその使用された訳語のほとんどをヘボンの『和英語林集成』に見出すことができるが、前述したような理由でそのすべてを『和英語林集成』に負っているとは言いがたいと思われる。この訳で注目すべき単語は、3 行目「尊者」、5 行目「アゝカレウマク」、6 行目「主救者ホメル」の 3 点だと思われる。

3 行目「尊者」は『和英語林集成』、および先行する英華辞典のいずれにも登場しない。

唯一あらわれるのがメドハーストの和英・英和辞典である。これをもってこの辞典を使用したとは断言できないが、少なくともここでは「尊者」の訳は「a honorable man」があてられている。しかしどのような経緯でゴーブルが「saint」の訳語として「尊者」を選んだのかは不明である。ここでもう一つ興味深いのは、（Ⅰ）《Yoi tci gozarimas》で現在我々にはなじみの深い漢訳聖書由来と思われる「聖人」を使っていながら、ここでなぜ「尊者」を選んだのかである。

次に 5 行目「アゝカレウマク」だが、これは原歌詞の「Oh how they sweetly sing」の意訳（それもかなり大幅な）と想像できる。メドハーストの和英・英和辞典で「ウマク」を引いてみると、「ripe」があらわれる。しかし他の使用例として、「ウマイサケ」の訳として「sweet wine」という例がのっている。他の辞典類で「sweet」に「うまい」という訳を用いているものはなく、「sweet」に「甘い」、「かわいらしい」（これは『和英語林集成』からの訳語）以外の用例を見出すことは大変困難だったと思われる。

最後の 6 行目「主救者ホメル」だが、この「主救者」という単語はいずれの辞典でも見つけることはできなかった。しかしこれが「our Saviour King」の訳であるところから、「救者」はまさに「Saviour」である。「Saviour」の訳語として「救者」があらわれるのはロプシャイトの英華辞典である。ここでは「救者」に続いて「救主」「救世主」も訳語として登場している。これに先行するモリソン版には「Saviour」の項はなく、それに続くメドハースト版には「救者」のみ。ロプシャイトの辞典はそれに先行するモリソン、メドハーストの辞典から多くの訳語を引き継いでおり、日本にも明治維新とともに大量に流入したと思われる[83]。このことから外国人宣教師たちがこの辞典を聖書和訳などの参考書とした可能性も考えられる。「救者」を「Saviour」とすると「King」は「主」と訳されたことになるのだが、king は『和英語林集成』には「王」、「国王」の訳語しか与えられておらず、先行する英華辞典でもキリスト教的用語の意味合いをもつ訳語が存在しないことからゴーブル自身による意訳である可能性も考えられる。『和英語林集成』には「Lord」の訳語として第一番目に「主（しゅ）」があるところから、当時ヘボン自身は「主」という日本語を知っていたことは確かだが、それにキリスト教的な意味を持たせていたかどうかは不明である。漢語においては「主」には君主、主君の意味もあるところから、王という意味にも近い感じはする。

（Ⅱ）《ヨキ土地アリマス》3 節 2 行目にも大胆とも思える訳文が存在する。3 節の 2 行目、原歌詞 Beams every eye をゴーブルは「人ヒカル」と和訳した。この部分はゴーブルによる『摩太福音書』6 回 22 節「身の光は目なり。それゆえにあなたの目正しければ、あなたの体じゅうが明るくであろう。」（The light of the body is the eye. If therefore thine eye be single, thy whole body shall be full of light.）に対応しているように思える。この訳があったからこそ、「人ヒカル」の訳も生まれたのだと考えられる。

この（Ⅱ）《ヨキ土地アリマス》にはもう一つ興味深い訳文が存在する。それは 3 節 4 行

目に見える「アイキヘヌ」である。この原歌詞は、「Love cannot die」だが、この訳文は1859年に新約、1862年に旧約を出版したカルバートソン・ブリッジマン版漢訳聖書の影響を強く受けている箇所だと思われる。すなわち、「love」の名詞形に対して、それ以前の版では「仁」を用いていたものが、このカルバートソン・ブリッジマン版に至って初めて「愛」を用いているのである[84]。バプテスト系の宣教師ゴーブルが『摩太福音書』を和訳するにあたって底本とした中心はバプテスト系の1853年ゴダード版[85]だが、カルバートソン・ブリッジマン版[86]にも強い影響を受けていた一例であると思われる。「Love」の訳語としては、ヘボンも「愛」ではなく「恩寵」「寵愛」「いつくしみ」等をあげている。英華辞典でもモリソン版（1822 年）「愛慕」、メドハースト版（1847 年）「愛情」「寵」「仁」だが、ウィリアムズの『英華韻府歴階』（1844 年）[87]、ロプシャイト版の英華辞典（1866～69 年）に至って、「愛情」の他に「愛」が登場する。ウィリアムズの『英華韻府歴階』（1844 年）の影響でカルバートソン・ブリッジマン版漢訳聖書（1859年）が編纂されているかは不明だが、いずれにせよどちらかの影響下に「アイキヘヌ」という訳が生まれたのはたしかであろう。これは日本語で「Love」を「愛」と訳した初めての例ではないだろうか。「神は愛」等、日本語として「愛」という言葉は定着しているが、現在使用している「愛」という言葉は英華辞典、漢訳聖書から生まれたと考えられる。

5、結語

このようにゴーブル訳讃美歌の翻訳過程を検証していくと漢字文化圏としての日本語が浮かび上がってくる。明治初期の讃美歌の翻訳に関しては資料も少なく、広く研究されることもあまりなかった。しかし聖書和訳と讃美歌の和訳は同時期に同じ重みをもって推進された宣教事業であり、しかもある時は同一人物によって行われている。このことは 2 つの研究分野が相互に交流することによって、より実り多い成果を手にすることができるということを示しているのではないだろうか。ゴーブルの翻訳讃美歌を通して感じる次第である。

そして、「愛」という言葉、キリスト教の用語としてだけでなく、一般に使われる近代日本語として定着した言葉も、アジアにおけるアメリカの宣教師ネットワークから生まれたということを再認識したいと考える。日本が漢字文化圏であったため、宣教師は英華辞書、漢訳聖書を利用することができた。そしてこの英華辞書、漢訳聖書の影響を受けながら近代日本語の一翼を担うことになったのが、世界宣教をめざしていたアメリカの宣教師であった。

アメリカの海外宣教の拡大化のもとに生まれた日本の讃美歌は、歌詞の翻訳に関しては中国からの多大な影響を受けていたことが明らかになってきた。そのようにして生まれた日本の讃美歌は日本の近代化とともに日本の唱歌に影響を与える[88]。近代化の早かった日本の唱歌が韓国、中国に広がり、そして漢字に翻訳された新しい言葉が中国に伝播する。

そして両国の近代化に大きな役割を果たすことになった[89]。明治初期宣教師ゴーブルが英華辞書、漢訳聖書を使用し、讃美歌を翻訳した。すなわち中国からの影響で生まれた日本の讃美歌が、その中国でまたその姿を変えて花を咲かせることとなったのである。

第 3 章　C. M. ウィリアムズと聖歌（讃美歌）[90]　初期讃美歌の成立と他教派との協力関係

1、はじめに

日本聖公会初代主教となったC. M. ウィリアムズ（1929～1910）は、1859（安政6）年、長崎に上陸、1865（慶応 1）年、「シナ及び江戸監督」となり、明治 2（1869）年、主教座を武昌から大阪に移し、日本宣教に力をそそいだ。明治5（1972）年、大阪英和学舎を創設、翌年東京に移り、明治7（1974）年聖保羅学校（立教学院）、明治10（1877）年には立教女学校、東京三一神学校を設立した。

さて、明治5～7年頃ウィリアムズが訳したとされる聖歌が現在7篇知られており、聖歌集に収録というかたちでは現存しないが、うち 4 篇は歌詞の内容も伝わっている。しかしその内の 2 篇がどの聖歌から訳されたか特定されていなかった。ウィリアムズ訳として知られる《世々岩ハレテ》、及び《エスヲ地ノ主トセン》に触れ、原歌詞が何であるか特定されていない 2 篇の聖歌の原歌詞をあきらかにし、残り 3 篇の聖歌についても検討を加えたい。そしてウィリアムズ訳聖歌がその後の日本の聖歌・讃美歌に及ぼした影響、特に日本の讃美歌に大きな貢献をした日本基督教会牧師の奥野昌綱とアメリカ長老派宣教師ヘンリー・ルーミスに与えた影響について言及し、また逆に日本聖公会が影響を受けた日本基督教会の讃美歌、特に奥野昌綱からの影響にも触れたい[91]。

2、明治期日本聖公会聖歌の概観

ウィリアムズ訳聖歌を検討する前に明治期日本聖公会聖歌を概観する。

明治期聖公会の宣教は、1859（安政6）年来日のJ. リギンズ、C. M. ウィリアムズのアメリカ聖公会、1869（明治2）年来日のG.エンソルのイギリス教会宣教会（CMS）、1873（明治6）年来日のW. B. ライトとA. C. ショウのイギリス海外福音伝道会（SPG）の3つの伝道団体によって始められた。1887(明治 20)年第 1 回総会において日本聖公会の組織が成立する。それまでは各海外伝道団体の宣教師を中心に聖歌集が刊行された。聖歌集に関わる宣教師は、アメリカ聖公会では、C. M. ウィリアムズ、T. S. チング。イギリス教会宣教会（CMS）では、H. エヴィントン、 C. F. ワーレン、W. アンドリウス、W. デニング、J. バチュラー。イギリス海外福音伝道会（SPG）では、 W. B. ライト、H. J. フォス、A. ロイドであった[92]。

T. S. チング（アメリカ聖公会）編の『聖公會歌集』（明治16［1883］年9月）の序にはH. エヴィントン、C. F. ワーレン（CMS）、H. J. フォス（SPG）への賛辞があり、3つの伝道団体の協力態勢がうかがえる。明治 20（1887）年第 1 回総会後、3 つの伝道団体の共通

讃美歌である吉澤直江編著『聖公會讃美歌』が明治 25（1892）年に、古今聖歌集編纂委員会編『古今聖歌集』が明治 35（1902）年に刊行され、A. ロイドはこの『古今聖歌集』のローマ字版を作成した。以後この『古今聖歌集』の改訂版が日本聖公会の聖歌集の主流となる。

またB. H. チェンバーレンは詩篇の個人訳「讃美之歌」（詩篇歌）を明治 13（1880）年 4 月に論文「Suggestions for a Japanese Rendering of Psalms」とともに『Transaction of Asiatic Society in Japan』(Vol. VIII, Pt. 3.Apr. 1880)の誌上で発表した[93]。

明治期の日本聖公会の聖歌集を年代順に掲載する。（詳細は拙著「日本聖公会聖歌目録」参照）[94]

*明治 7（1874）　たゝへのうた　エヴィントン著
*明治 9（1876）　使徒公會之歌　［W. B. ライト］編
*明治 9（1876）　使徒公會之歌　［W. B. ライト］編
*明治 10（1877）　讃美之歌［フォス］
*明治 11（1878）　聖公会讃美歌　アンドリウス編
*明治 11（1878）　眞神讃美頌　耶蘇降世 1878 年　［ワーレン］編
*明治 13（1880）　眞神讃美歌　シ、エフ、ワレン・エイチ、ゼ、フォス著
*明治 13（1880）、4　讃美之歌　B. H. チェンバーレン訳編
*明治 14（1881）　基督公會之歌　［フォス］編
*明治 14（1881）、8　讃神歌　［W. デニング］編
*明治 15（1882）　祈祷の歌　アンドリウス編
*明治 15（1882）　聖公会讃美歌　アンドリウス編
*明治 15（1882）　眞神讃美歌　全［アンドリウス］編
*明治 16（1883）、9　聖公會歌集　［チング］編
*明治 17（1884）　聖公會歌集　［増補］　［チング編］
*明治 20（1887）、4　聖公會歌集　チング編　再版４版
*明治 23（1890）　基督降誕日の歌　［フォス］編
*明治 23（1890）、11　日曜学校うたあつめ　THE SUNDAY SCHOOL HYMNBOOK　辻井良吉編
*明治 24（1891）、7　聖公會讃美歌　ヒウ・ゼ・フヲス［編］
*明治 25（1892）、9　聖公會讃美歌　譜附　耶蘇降生 1892 年　吉沢直江著
*明治 28（1895）　NIPPON SEIKOKAI AINU KARISIA　［J. バチュラー］編
*明治 29（1896）　受苦節の歌　フォス編
*明治 29（1896）　受苦節聖日の歌　フヲス編
*明治 29（1896）　降誕日のうた　CHRISTMAS CAROLS　［H. J. フォス］編
*明治 29（1896）　聖日の歌　フォス師編
*明治 34（1901）、12　古今聖歌集　古今聖歌集編纂委員会編

*明治 35（1902）、6　　古今聖歌集　譜附　HYMNS NEW & OLD WITH MUSIC 古今聖歌集編纂委員会編
*明治 35（1902）、6　　KOKIN-SEIKASHŪ　HYMNS OLD AND NEW　アーサー・ロイド著
*明治 35（1902）、11　　降誕日の歌　譜附　著者兼発行者　ヒュ　ゼームス　フォス
*明治 35（1902）、11　　降誕日のうた　　（［　］は補記を示す）

聖公会系の現存する聖歌集でもっとも古い聖歌集は『使徒公會之歌』であるが、記録に残る最初の聖歌集は、明治七年の『たゝへのうた』（エヴィントン著）である。しかし残念ながら所蔵先不明である[95]。

3、C. M. ウィリアムズと聖歌

C. M. ウイリアムズと聖歌に関する記述はきわめて少ない。大江満著『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』には ウィリアムズが明治 43（1910）年 12 月 2 日にリッチモンドで就眠し、12 月 4 日に東京聖三一大聖堂で行われた遥葬式の様子が書かれている。この時聖堂に響いた曲がウィリアムズ愛唱聖歌《聖歌 311》であった[96]。この《聖歌 311》とは『古今聖歌集』（明治 35 年）の第 311《つかるるものみな》のことであろう[97]。この《つかるるものみな》は後述するウィリアムズが訳したとされる聖歌の一つではないようである。

大江氏が遥葬式の典拠としてあげている『基督教週報』第 22 巻第 16 号（1910 年 12 月 16 日）は「老監督記念号」で、ウィリアムズの遥葬式で歌われた他の聖歌が記載されている。北東京地方（監督マキム）では、第 125、第 311（監督愛誦）、第 293、第 95（式次第順）が歌われ、12 月 9 日に行われた京都地方（監督パートリッヂ）の追悼式では第 349、第 293、第 153（式次第順）が歌われた。北東京地方、京都地方で共通に歌われた『古今聖歌集』（明治 35［1902］年）第 293 は《ちとせのいはよ》でウィリアムズが《Rock of ages》から明治 5（1872）年頃訳したとされる《よよいわわれて》の別の訳（改訳？）である。『古今聖歌集』（明治 35 年）では「雑歌」にあたり「送別」とは無縁の聖歌であるが、彼の聖歌翻訳での偉業をたたえる目的で歌われたのであろうか。

ちなみに第 125 は《For all the saints who from their labours rest》の訳《このよのいくさをへ》、第 95 は《Jesus lives! no longer now》の訳《主いきたまへば》、第 349 は《Nearer, my God, to Thee》の訳《主よみもとに》、第 153 は《Now the Labourer’s task is o’er》の訳《たゝかひをへ》である。第 349 は《Nearer, my God, to Thee》の訳《主よみもとに》も後述するがウィリアムズが明治 5 年頃訳したとされる《われのかみに》の別の訳（改訳？）である。

C. M. ウィリアムズと聖歌に関する記述はきわめて少ない上に、大江満氏によればウィリアムズ自身が書簡等に翻訳した聖歌に関して記録を残していないとのことである[98]。また、その後の聖公会の聖歌の翻訳、作詞、作曲、聖歌集の編集にはウィリアムズはまったく関わっていない。

さて、上記遥葬式、追悼式以外の記録では、明治5（1872）年頃、C. M. ウィリアムズが5篇の聖歌を翻訳したという記述「《Rock of ages》《よゝいわわれて》を訳し、続いて《われをばたのまじ》、《なみかせのあらき》、《われのかみに》、《十字架にかかりし》等を訳された」が元田作之進著『老監督ウイリアムズ』に存在する[99]。しかも元田作之進著『老監督ウイリアムズ』には《Rock of ages》の日本語訳が歌われたことが明治6（1873）年3月14 日付モリス書簡の一節に存在することが書かれている[100]。大阪時代に《よゝいわわれて》を訳し、築地に来てから《われをばたのまじ》、《なみかせのあらき》、《われのかみに》、《十字架にかかりし》等を訳したのであろうか。これは、明治7（1874）年の『たゝへのうた』（エヴィントン著）よりもはやく、日本聖公会聖歌の嚆矢といえるであろう。しかし残念ながらどのような訳詞であったか、また原歌詞の記述もなく、どのような聖歌であったか知ることはできず、伝聞だけが残った[101]。

明治7（1874）年になるが、フルベッキはその著『日本プロテスタント伝道史　上』の「第三章　一八七四年の諸教派」でウィリアムズが《千歳の岩よ》を訳したことを報告している[102]。

昭和40（1965）年に、矢崎健一氏は「手写本『早晩祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号（昭和40［1965］年9月）[103]をあらわし、手写本をタイプライターによって打ちかえたものから4篇の聖歌（《十字架ニカケラル》《世々岩ハレテ》《エスヲ地ノ主トセン》《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》）を活字化した。矢崎健一氏はこの資料を立教大学小川徳治教授から立教大学図書館に寄贈された同教授の岳父貫民之介（元立教大学教授、日本聖公会司祭）旧蔵資料の中から発見した[104]。矢崎健一氏も述べているが、これにより元田作之進著『老監督ウイリアムス』記載の《よゝいわわれて》、《十字架にかかりし》の歌詞を知ることができるようになった[105]。また矢崎健一氏はこの論文でこの聖歌4篇の訳者がウィリアムズであることを証明している[106]。ここにその4篇を転載する[107]。

4、明治初期ウィリアムズ訳日本聖公会聖歌

1、　十字架ニカケラル
　　ワカキミミルトキ
　　世ノトミ利アラス
　　タカブリナサマシ

　　十字架ノホカニハ
　　ホマリヲイダサヌ
　　ワカスクモノヲバ
　　主ノ血ニソナヘン

2、世々岩ハレテ
　　ワカ身ヲカクセ
　　キツセシ脇ニ
　　ナカシシ水血
　　ツミヨリ救フテ
　　我ムネアラヘ

　　ナミダ流セト　力ヲイダスモ
　　是ハ罪ケサス（ママ）　主ノミタスク

罪代モタアズ　十字架ニスガル

ミヨ主ノ御身ヨリ
苦ト愛トナカレル
苦愛カリアワマシ
イバラヲ□トセス

天ト地ヲサヽクモ
供物ニタラマシ
タルモノナラネト
イノチヲアグベシ

マブタヲトサシ　ヒキトルイキニ
ミヌ世ニノホリ　ミ位ヲミルニ
世位岩ハレテ　ワカ身ヲカクセ

3、エスヲ地ノ主トセン
アマネクソヲサメン
ソノマツリコトハ
カキリナクアレナ

人ハエスニネカハン
マタツネニ貴トバン
エスノナハナカク
イノリテアケラル
ヲサムルトコロニ
メクミミチミテル
ナヤム人ハスベテ
エスノ地ニヤスメ

カレハコレヲ　ウ
信者ガタスケヲ受
コノ身ハシヌトモ
タマシイハ天ニアル

バン民ハ今神ヲ
イヤタカク救ヨ
天ノ使ハシラセン
ミナウヘヨ　　アーメン

4、アマ使ガウタウホメヨ生レシ王
カミト人シタシム地ニハ太平アル
クニグニタチテカチドキアハセ
アマ使トイヘヨベツレヘムニ生ルト

天ヨリホメラルキリストイケレ主
地ニクルヲミヨヲトメノウム子

エスイマヌエル人トトモニスム
カクレシ神ノ人トナルヲミヨ
ヒカリトイノチスベテサヅケシ
太平ノアルジト義ノ日ヲホメヨ

5、《世々岩ハレテ》の2つの出典の比較

また昭和 59（1984）年、別のルートからこの《よよいわわれて》が今井烝治司祭によって『礼拝研究』(No. 3）で紹介された。今井氏はロンドン、ウェストミンスターのUSPG（合同福音宣教協会）の資料室で1874年6月23日付W. B. ライト書簡の中からローマ字で書かれた《よよいわわれて》を発見した。この書簡の発見により明治7年には《Rock of ages》の翻訳聖歌《よよいわわれて》が存在したことが明らかになった。ここに『礼拝研究』(No. 3）掲載の《よよいわわれて》を載録する[108]。

よよいわわれて	Rock of ages, cleft for me,
わがみをかくせ	Let me hide myself in thee,
きずせしわきに	Let the water and the blood
ながれしみずち	From thy side, a healing flood,
つみよりすくいて	Be of sin thy double cure,
わがむねあらえ	Cleanse me from its guilt and power.
なみだながせど	Should my tears for ever flow,
ちからいだすも	Should my zeal no languor know,
こはつみけさぬ	All for sin could not atone:
ぬしのみたすく！	Thou must save, and thou alone;
つみしろもたず	In my hand no price I bring,
じゅうじかにすがれ	Simply to thy cross I cling.
まぶたをとざし	While I draw this fleeting breath,
ひきとるいきに	When mine eyelids close in death,
×××にのぼり	When I rise to worlds unknown
みくらをみるに	And behold thee on thy throne,
よよいわわれて	Rock of ages, cleft for me,
わがみをかくせ	Let me hide myself in thee.

2つの資料は活字化する際、本来同じものを見間違えてしまった可能性はあるが、2点の資料には多少の相違点が存在する。2つの翻訳を比較してみたい。

今井烝治氏資料	矢崎健一氏資料
よよいわわれて	世々岩ハレテ

わがみをかくせ　　ワカ身ヲカクセ
きずせしわきに　　キツセシ脇ニ
ながれしみずち　　ナカシシ水血
つみよりすくいて　　ツミヨリ救フテ
わがむねあらえ　　我ムネアラヘ

なみだながせど　　ナミダ流セト
ちからいだすも　　力ヲイダスモ
こはつみけさぬ　　是ハ罪ケサス（ママ）
ぬしのみたすく！　　主ノミタスク
つみしろもたず　　罪代モタアズ
じゅうじかにすがれ　　十字架ニスガル
まぶたをとざし　　マブタヲトサシ
ひきとるいきに　　ヒキトルイキニ
×××にのぼり　　ミヌ世ニノホリ
みくらをみるに　　ミ位ヲミルニ
よよいわわれて　　世位岩ハレテ
わがみをかくせ　　ワカ身ヲカクセ

「きずせしわきに」「キツセキ脇ニ」、「ながれしみずち」「ナカシシ水血」、「つみよりすくいて」「ツミヨリ救フテ」、「ちからいだすも」「力ヲイダスモ」、「こはつみけさぬ」「是ハ罪ケサス（ママ）」、「つみしろもたず」「罪代モタアズ」、「じゅうじかにすがれ」「十字架ニスガル」、「まぶたをとざし」「マブタヲトサシ」、「みくらをみるに」「ミ位ヲミルニ」、「よよいわわれて」「世位岩ハレテ」が相違点であるが、二つの訳は同じものと考えて構わないのではなかろうか。ローマ字から人を介して伝わったため多少の誤差が生じたものと思われる。今井烝治氏は「×××」と解読不明箇所を不明のまま記載し、特に注記をしていない。この時点では今井氏は矢崎健一著「手写本『早晩祷文・利多仁伊』について」の存在を知らなかったのではないかと思われる[109]。

6、どの英語讃美歌（集）から訳したのか、原歌詞との対比

さて、《世々岩ハレテ》は《Rock of Ages》の翻訳であることは判明しているが[110]、他の聖歌は何から訳されたものなのであろうか。次に展開してみたい。

現存する日本聖公会の聖歌集の最も古い聖歌集は明治 9（1876）年の『使徒公會之歌』（W. B. ライト編）であるが、『使徒公會之歌』に収録された 26 曲の聖歌には《Rock of Ages》の翻訳もなく、ウィリアムズ訳聖歌は受け継がれなかった。W. B. ライトは SPG なので、

ウィリアムズと同じアメリカ聖公会のチング編『聖公會歌集』(明治 16[1883]、明治 17[1884]、明治 20［1887］年）収録聖歌を見てもウィリアムズ訳聖歌の系譜はみとめられない。既に 10 年以上たっているからであろうか。あくまで試訳して手元においておいたもので、公開はされなかったものなのであろうか。この『聖公會歌集』と《Rock of Ages》の翻訳に関しては後述する。

翻訳から原歌詞を特定すると、《エスヲ地ノ主トセン》はアイザック・ウォッツの《Jesus shall reign where’er the sun》の翻訳であろう。また矢崎氏が指摘[111]しているように《エスヲ地ノ主トセン》と同様の訳《エス地の主とならん》が『教のうた』(明治 7［1874］年）に収録されており、これはアイザック・ウォッツの《Jesus shall reign where’er the sun》の翻訳であることがあきらかになっている。

翻訳歌詞の内容から《十字架ニカケラル》は、これもアイザック・ウォッツの《When I survey the wondrous cross》で、《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》はチャールス･ウェスレーの《Hark, herald angels sing》であろう。現行『古今聖歌集』(昭和 34［1959］年 4 月）では、《十字架ニカケラル》が第 77《みさかえのきみの》、《世々岩ハレテ》は第 387《ちとせのいわよ》、《エスヲ地ノ主トセン》は第 46《日のてるかぎりは》、《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》は第 18《かみにはさかえ》である。

7、原歌詞と翻訳を対比する[112]。

1、十字架ニカケラル	(1)	When I survey the wondrous Cross
ワカキミミルトキ		On Which the Prince of Glory died,
世ノトミ利アラス		My richest gain I count but loss,
タカブリナサマシ		And pour contempt on all my pride.
十字架ノホカニハ	(2)	Forbid it, Lord, that I should boast
ホマリヲイダサヌ		Save in the Cross of Christ, my God;
ワカスクモノヲバ		All the vain things that charm me most,
主ノ血ニソナヘン		I sacrifice them to His Blood.
ミヨ主ノ御身ヨリ	(3)	See from His Head, His Hands, his Feet,
苦ト愛トナカレル		Sorrow and love flow mingling down;
苦愛カリアワマシ		Did e’er such love and sorrow meet,
イバラオ□トセス		Or thorns compose so rich a crown?
天ト地ヲサヽクモ	(4)	Were the whole realm of nature mine,
供物ニタラマシ		That were an offering far too small;

タルモノナラネト　　Love amazing, so divine
イノチヲアグベシ　　Demands my life, my soul, my all.

2、世々岩ハレテ　　(1) Rock of Ages, cleft for me,
ワカ身ヲカクセ　　Let me hide myself in thee;
キツセキ脇ニ　　Let the Water and the Blood,
ナカシシ水血　　From Thy wounded Side which flowed,
ツミヨリ救フテ　　Be of sin the double cure,
我ムネアラヘ　　Save from wrath, and make me pure.

ナミダ流セト　　(3) Nothing in my hand I bring,
力ヲイダスモ　　Simply to thy Cross I cling:
是ハ罪ケサス　　Could my tears for ever flow,
主ノミタスク　　Could my zeal no languor know,
罪代モタアズ　　All for sin could not atone,
十字架ニスガル　　Thou must save and Thou alone.

マブタヲトサシ　　(4) While I draw this fleeting breath,
ヒキトルイキニ　　When mine eyelids close in death,
ミヌ世ニノホリ　　When I rise to worlds unknown,
ミ位ヲミルニ　　See thee on Thy judgment throne,
世位岩ハレテ　　Rock of Ages, Cleft for me,
ワカ身ヲカクセ　　Let me hide myself in thee.

3、エスヲ地ノ主トセン　　Jesus shall reign where’er the sun
アマネクソヲサメン　　Doth his successive journeys run;
ソノマツリコトハ　　His kingdom stretch from shore to shore,
カキリナクアレナ　　Till moons shall wax and wane no more.

人ハエスニネカハン　　People and realms of every tongue
マタツネニ貴トバン　　Dwell on His love with sweetest song,
エスノナハナカク　　And infant voices shall proclaim
イノリテアケラル　　Their early blessing on His Name.

ヲサムルトコロニ　　Blessing abound where’er His reigns;
メクミミチミテル　　The prisoner leaps to lose His chains;

ナヤム人ハスベテ　　The weary find eternal rest,
エスノ地ニヤスメ　　And all the sons of want are blest.

カレハコレヲ　ウ　　Let every creature rise and bring
信者ガタスケヲ受　　Peculiar honours to our King;
コノ身ハシヌトモ　　Angels descend with songs again,
タマシイハ天ニアル　　And earth repeat the loud Amen.
　　Amen

バン民ハ今神ヲ
イヤタカク救ヨ
天ノ使ハシラセン
ミナウタヘヨ　　アーメン

4、アマ使ガウタウ　　Hark! the herald-angels sing
ホメヨ生レシ王　　Glory to the new-born King,
カミト人シタシム　　Peace on earth, and mercy mild,
地ニハ太平アル　　God and sinners reconciled.
クニグニタチテ　　Joyful, all ye nations, rise,
カチドキアハセ　　Join the triumph of the skies;
アマ使トイヘヨ　　With the angelic host proclaim
ベツレヘムニ生ルト　　Christ is born in Bethlehem.
　　Hark! the herald-angels sing
　　Glory to the new-born King.

天ヨリホメラル　　Christ, by highest heaven adored,
キリストイケレ主　　Christ, the Everlasting Lord,
地ニクルヲミヨ　　Late in time behold Him come,
ヲトメノウム子　　Offspring of a Virgin’s womb.
エスイマヌエル　　Veiled in Flesh the Godhead see,
人トトモニスム　　Hail the Incarnate Deity!
カクレシ神ノ　　Pleased as Man with man to dewll,
人トナルヲミヨ　　Jesus our Emmanuel.
ヒカリトイノチ　　Hark! the herald-angels sing
スベテサヅケシ　　Glory to the new-born king.

太平ノアルジト	Hail, the heaven-born Prince of Peace!
義ノ日ヲホメヨ	Hail, the Sun of Righteousness!
	Light and Life to all He brings,
	Risen with healing in His wings.
	Mild He lays His glory by,
	Born that man no more may die,
	Born to raise the son of earth,
	Born to give them second birth.
	Hark! the herald-angels sing
	Glory to the new-born king. Amen.

試訳のためか《十字架ニカケラル》《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》では原歌詞と翻訳が対応していない部分があるが、《十字架ニカケラル》は、アイザック・ウォッツの《When I survey the wondrous cross》で《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》はチャールス・ウェスレーの《Hark, herald angels sing》からの翻訳と考えて間違いないであろう。

8、《エスヲ地ノ主トセン》と奥野・ルーミス訳《エス地の主とならん》の比較

ここで矢崎健一著「手写本『早晩祷文・利多仁伊』に紹介された《エスヲ地ノ主トセン》と奥野・ルーミス訳《エス地の主とならん》を比較したい。

ウィリアムズ訳		奥野昌綱・ルーミス訳『教のうた』
エスヲ地ノ主トセン	一	エス地の主とならん
アマネクソヲサメン		あまねくおさめなん
ソノマツリコトハ		そのまつりごとは
カキリナクアレナ		かぎりなくあれな
人ハエスニネカハン	二	人はエスにねがはん
マタツネニ貴トバン		またつねにたつとばん
エスノナハナカク		エスの名はながく
イノリテアケラル		さかえてあげらる
ヲサムルトコロニ	三	おさむるところに
メクミミチミテル		めぐみみちみてり
ナヤム人ハスベテ		なやむひとはすべて

エスノ地ニヤスメ　　エスのちにやすめ

カレハコレヲ　ウ　　四　ゑすはたれをすくふ
信者ガタスケヲ受　　しんじやをたすけまもる
コノ身ハシヌトモ　　この身はしぬとも
タマシイハ天ニアル　　たましいはいけるぞ
バン民ハ今神ヲ　　五　ばんみんはいまかみを
イヤタカク救ヨ　　いやたかくほめよ
天ノ使ハシラセン　　てんのつかひあはせん
ミナウタヘヨ　　アーメン　　みなうたへよあゝめん

2つの翻訳讃美歌を比較すると奥野昌綱・ルーミス訳とされる《エス地の主とならん》はウィリアムズの試訳を改訳したというより、多少の変更を加えたとはいえほとんどそのまま使用している。おそらく奥野・ルーミスはウィリアムズ訳聖歌を所持しており、それに手を加えたのではあるまいか。

9、元田作之進著『老監督ウイリアムス』掲載の聖歌

元田作之進著『老監督ウイリアムス』に書かれている他の 3 つの聖歌《われをばたのまじ》、《なみかせのあらき》、《われのかみに》はどの聖歌を訳したものであろうか。明治期、この 3 つの聖歌と同じ初行の讃美歌が他の教派の讃美歌集に収録されている。特に一致教会系『教のうた』（明治 7［1874］年）にはこの 3 篇とも収録されており、奥野・ルーミス訳として伝わっている。その歌詞は以下のとおりである。

第九

一　われをばたのまじ　じうじかにのぼりし
　　エスわれをよべり　われキリストにゆく
二　われはまちをらで　エスにこそすがれ
　　つみをあらはんため　われキリストにゆく
三　われはつねにまよふ　しばしばぞうたがう
　　うれひはうちそと　われキリストにゆく
四　われらのまづしさ　めしひとなやみは
　　エスみないやせば　われキリにストにゆく
五　エスはわれをいれん　きよくしてむかへん
　　しんずればやすません　われキリストにゆく
六　エスわれをあいして　めぐめばこそつかへ

第七

一　なみかぜのあらき　うきよをたちさり
　　のがるべきところ　あはれみのしたぞ
二　あゝエスとわれらが　よろこぶところわ
　　このちにまさりし　めぐみのみざなり
三　みなしんかうによりて　もろともにつどへ
　　すみかへだつとも　みざのもとふしあふ
四　よろこびてのぼる　つみやうれひなく
　　てんこくのさかえぞ　めぐみあるところ

まことにそむかで　　われキリストにゆく

第六

一　われのかみに　　ちかづかん
　　よしやうれひ　　しのびなん
　　われうたふべき　われのかみに
　　ちかづかまし　　ともならん
二　さまようままに　われらも
　　めさへくらみ　　なほうたふ
　　いはのまくら　　ねむらんときは
　　かみとわれや　　あらんかも
三　われのぼりて　　てんにゆかん
　　かみのみわざ　　よくあらん
　　かみのつかひ　　われをまねき
　　われのかみに　　ともなはん

《われをばたのまじ》、《なみかぜのあらき》、《われのかみに》の原歌詞の初行は奥野・ルーミス訳では《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、《Nearer, my God, to Thee》と伝わっている。原歌詞と翻訳を対比すると確かにそれぞれの翻訳の讃美歌であることが認められる。

『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』,No.392.

一　われをばたのまじ
　　じうじかにのぼりし
　　エスわれをよべり
　　われキリストにゆく
二　われはまちをらで
　　エスにこそすがれ
　　つみをあらわんため
　　われキリストにゆく
三　われはつねにまよふ
　　しばしばぞうたがう
　　うれひはうちそと
　　われキリストにゆく

1　Just as I am, ―without one plea,
　　But that thy blood was shed for me,
　　And that thou bidd’st me come to thee,
　　O Lamb of God, I come.
2　Just as I am, ―and waiting not
　　To rid my soul of one dark blot,
　　To thee, whose blood can cleanse each spot,
　　O Lamb of God, I come.
3　Just as I am, ―though toss’d about
　　With many a conflict, many a doubt,
　　Fightings and fears within, without,
　　O Lamb of God, I come.

四	われらのまづしさ	4	Just as I am, —poor, wretched, blind—
	めしひとなやみは		Sight, riches, healing of the mind,
	エスみないやせば		Yea, all I need, in thee to find,
	われキリストにゆく		O Lamb of God, I come.
五	エスはわれをいれん	5	Just as I am, —thou wilt receive,
	きよくしてむかへん		Wilt welcome, pardon cleanse, relieve;
	しんずればやすません		Because thy promise I believe,
	われキリストにゆく		O Lamb of God, I come.
六	エスわれをあいして	6	Just as I am, —thy love unknown
	めぐめばこそつかへ		Has broken every barrier down;
	まことにそむかで		Now to be thine, yea, thine alone,
	われキリストにゆく		O Lamb of God, I come.

『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』,No.402.

一	なみかぜのあらき	1	From every stormy wind that blows,
	うきよをたちさり		From every swelling tide of woes,
	のがるべきところ		There is a calm, a sure retreat;
	あはれみのしたぞ		'Tis found beneath the mercy-seat.
二	ああエスとわれらが	2	There is a place where Jesus sheds
	よろこぶところわ		The oil of gladness on our heads—
	このちにまさりし		A place than all beside more sweet,
	めぐみのみざなり		It is the blood-stained mercy-seat.
三	みなしんこうによりて	3	There is a spot where spirits blend,
	もろともにつどへ		Where friend holds fellowship with friend;
	すみかへだつとも		Through sunder'd far, by faith they meet
	みざのもとふしあふ		Around one common mercy-seat.
四	よろこびてのぼる	4	There, there, on eagles' wings we soar,
	つみやうれひなく		And time and sense seem all no more;
	てんこくのさかえぞ		And heaven comes down, our souls to greet,
	めぐみあるところ		And glory crowns the mercy-seat.

『Hymns ancient and modern』,Hymn 200.

一	われのかみに	1	Nearer, my God to Thee,
	ちかづかん		Nearer to Thee;

よしやうれひ　　E’en though it be a cross
しのびなん　　That raiseth me,
われうたふべき　　Still all my song shall be,
われのかみに　　Nearer, my God to Thee,
ちかづかまし　　Nearer to Thee!
ともならん

二　さまようままに　　2 Though, like a wanderer,
われらも　　The sun gone down,
めさへくらみ　　Darkness comes over me,
なほうたふ　　My rest a stone;
いはのまくら　　Yet in my dream I’d be
ねむらんときは　　Nearer, my God to Thee,
かみとわれや　　Nearer to Thee!
あらんかも

三　われのぼりて　　3 There let my way appear
てんにゆかん　　Steps unto heaven:
かみのみわざ　　All that Thou sendest me
よくあらん　　In Mercy given;
かみのつかひ　　Angels to beckon me
われをまねき　　Nearer, my God to Thee,
われのかみに　　Nearer to Thee!
ともならん

奥野・ルーミスとウィリアムズの訳が初行では一致しているが、別々の場所で異なる人間が翻訳して偶然に一致するものであろうか。すなわち、「Just as I am, without one plea, But that thy blood was shed for me」から「われをばたのまじ　じうじかにのぼりし」という訳が、「From every stormy wind that blows, From every swelling tide of woes」から「なみかぜのあらき　うきよをたちさり」、「Nearer, my God to Thee, Nearer to Thee」から「われのかみに　ちかづかん」という訳が別々の人間が翻訳して偶然生まれるものであろうか。前述のウィリアムズ訳《エスヲ地ノ主トセン》と奥野・ルーミス訳《エス地の主とならん》の比較からもウィリアムズが最初に訳し、それに奥野・ルーミスが手をいれたと考えても構わないではないだろうか。しかし残念ながら奥野・ルーミス訳とされる翻訳歌詞は伝わっているが、ウィリアムズ訳は初行のみが知られるだけで全文は発見されていない。

また、《われをばたのまじ》、《なみかぜのあらき》、《われのかみに》とともに《エスヲ地ノ主トセン》の改訳と思われる《エス地の主とならん》も『教のうた』に収録されている。

ウィリアムズ訳の《十字架ニカケラル》の原歌詞《When I survey the wondrous cross》も奥野昌綱は《サカエノキミノ》として『教のうた』に収録されている。すなわち元田作之進著『老監督ウイリアムス』に紹介された 5 篇の日本聖公会の聖歌は奥野・ルーミス、本田・バラ訳として一致教会系の讃美歌集『教のうた』にすべて登場するのである。単なる偶然であろうか。讃美歌・聖歌の歴史では今までに奥野・ルーミス訳とウィリアムズ訳の関連は言及されたことはなく、『教のうた』に収録されている《Jesus shall reign where'er the sun》、《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、《Nearer, my God, to Thee》の訳はルーミスと奥野が独自に訳したものとして伝えられているが[113]、両者に深いつながりがあることは間違いないと思われる。

なお奥野昌綱訳《さかえのきみの》と本田・バラ訳《われたるいわや》と聖公会の聖歌集に関しては後述する。

10、C. M. ウィリアムズ訳聖歌と奥野・ルーミス訳讃美歌から

奥野昌綱・ルーミス訳とされる《エス地の主とならん》に関しては、ウィリアムズはなにも述べていない。彼の性格・人格からくるのであろうか。元田作之進は『老監督ウイリアムス』の序で次のように述べている。「師は謙譲陰徳の人であって如何なる形式にても自己の世に現はれんことを欲せられず、自己の性行と事業が世に公にせらるゝは決して師の素志でなかつた」[114]。ウィリアムズは彼が先行して行った事業の栄誉を他の人間に譲ろうとさえしていた。この件に関して矢崎健一氏は『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』の中で次のように書いている。「ウィリアムズが長崎に上陸した日はいつであるかははっきりしない。彼が六月二九日に着いたと語ったという説もあるが、『老監督ウイリアムス伝記』では七月四日（安政六年六月二日）の前後とし、『教会歴史問答』ではウィリアムズ自身六月下旬と記している。彼は日本最初の宣教師としても名誉をリギンズに与えたかったので自分の事については詳にしなかったようである」、また「ウィリアムズは常にリギンズを最初の日本宣教師として推している」[115]。しかし大江満氏によれば実際は「リギンズは健康状態がかなり深刻と診断され、帰国の可能性を含めた一時的な保養目的で訪日したのであり、彼は宣教師として日本の地を踏んだのではなく、英語講師として長崎に入った」のであり、「彼（ウィリアムズ）は日本伝道の使命を帯びて、琉球を除く日本本土に最初に上陸したプロテスタント宣教師であった」[116]。

ウィリアムズの性格・人格は大いにこの件に影響を及ぼしていると思われるが、C. M. ウィリアムズ訳聖歌と奥野・ルーミス訳讃美歌の相似から、教派の違い、築地と横浜の伝道拠点の違いがありながらウィリアムズと奥野、ルーミスには現時点ではうかがい知れない交流があったことは間違いないと思われる。

大江満著『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』の「第三章　ウィリアムズへの追想　4 日本人の追憶」では次の文章を引用している。

「当時詩篇の翻訳を企て居られ、奥野昌綱氏（日本基督教会牧師、聖書翻訳でヘボン、ブラウンを助け、讃美歌編集にも尽力した－引用者）は毎日来りたすけ居られた。時々は午食すらわすれて二時過に及んだ　こともあった」[117]。

「監督が祈禱書を用ひて祈らるゝときも、其態度といひ其語声といひ、迚もこれを祈禱書によりて、祈らるゝとは思われなかった。師の説教に感じないものでも、其厳粛な荘重な敬虔な、而して力に満ちた祈禱には動かされた。奥野昌綱翁、監督を訪問した時、談偶ま祈禱書のことに及んだ事があった。翁は監督に向って、祈禱書によりて祈禱するは、形式的で誠実を欠くと非難した。監督は滔々其然らざる所以を答弁せられたが、最後に監督は祈りませうと云って、椅子を離れ跪いて、例の謙虚な態度、敬虔の語気を以て、祈禱を捧げられた。続いて翁も祈禱をせられたが、後で、監督さん、只今貴下のお祈には実に感じました。私は今日までこんな霊的の祈禱を聴いた事はありませんと云うと、監督は只だ一言、これが貴下のお嫌いな祈禱書の祈禱でありますと答へられた。翁はそれ以来聖公会祈禱書を尊重し、常に座右に備へて、公私祈禱の模範とせられたそうである」[118]。

上記の記述には残念ながら年代は特定されていない。詩篇の翻訳はウィリアムズが聖歌を翻訳したとされる時期より少し後の事情であるが[119]、長崎時代に手をつけた祈祷書の和訳は明治 5 年末には完成していた。元田作之進著『老監督ウイリアムス』の聖歌翻訳の年号は明治 5 年頃でほぼ符合する[120]。上記の記述から、ウィリアムズと奥野昌綱はわれわれが想像するよりかなり早い時期から関係があったのではなかろうか。いずれにしても上記には奥野昌綱とウィリアムズが親しい関係にあることと、奥野昌綱がウィリアムズ訳の聖公会祈祷書を尊重していたことが述べられている。

11、日本聖公会聖歌の源流、その一例

奥野昌綱側だけが一方的にウィリアムズを尊敬していたのであろうか。ウィリアムズも奥野昌綱の讃美歌作家としての資質を高く評価していたのではなかろうか。推論の域を出ないが筆者がそう考える理由を以下に展開する。

「どの英語讃美歌（集）から訳したのか、原歌詞との対比」の章で筆者は「『聖公會歌集』と《Rock of Ages》の翻訳に関しては後述する」と述べた。アメリカ聖公会のチング編『聖公會歌集』(明治 16［1883］、明治 17［1884］、明治 20［1887］年）では、《Rock of Ages》の訳としてウィリアムズ訳《世々岩ハレテ》、あるいはその改訳を採用しないばかりか、本田・バラ訳《われたるいわや》の改訳と思われる訳を採用している。そして『聖公會歌集』では、アイザック・ウォッツの《When I survey the wondrous cross》の翻訳としてはウィリアムズ訳《十字架ニカケラル》、あるいはその改訳を採用しないばかりか、奥野昌綱訳《さかえのきみの》の改訳と思われる訳を採用しているのである。そしてこの 2 曲の訳は改訳されて現行『古今聖歌集』の第 387《ちとせのいわよ》、第 77《みさかえのきみの》と

して受け継がれている。日本聖公会聖歌の源流の一つに日本基督教会系の讃美歌の流れがあるということになる。なお、T. S. チング（アメリカ聖公会）編の『聖公會歌集』(明治16年）の序にはH. エヴィントン、C. F. ワーレン（CMS)、H. J. フォス（SPG）への賛辞とともに奥野昌綱への賛辞も述べられている。

《Rock of Ages》の第一節を『教のうた』収録の本田・バラ訳、『聖公會歌集』、『古今聖歌集』(明治35［1902］年)、現行『古今聖歌集』、及び『基督公会之歌』、『真神讃美歌』で比較してみる。

本田・バラ訳（明治7年）
『教のうた』第8

われたるいわや　われをかこめな
さけたるわきの　みづまたちしほ
つみもなやみも　きよくあらへよ

『聖公會歌集』(明治16年）
第96

いはなるエスよ　わがみをかこみ
さかれしわきの　ちとみづをもて
わがつみあらひ　みをきよめてよ

『古今聖歌集』(明治35年）
第293

ちとせのいはよ　わがみをかこめ
さかれしわきの　ちしほとみづに
つみもけがれも　あらひきよめよ

現行『古今聖歌集』(昭和34年）
第387

ちとせの　いわよ　わが　身を　かこめ
さかれし　わきの　ちしおと　みずに
つみも　けがれも　あらい　きよめよ

『基督公會之歌』(明治14年）
第24

イエスなるいわよ　わがみをかこめ
さけしみわきの　ちとみづをもて
つみもなやみも　あらひきよめよ

『眞神讃美歌　全』(明治15年）
第41

破（われ）たる岩よ　われをばかこめ
さきたるわきの　水と血をもて
つみもなやみも　あらひきよめよ

ウィリアムズ訳「世々岩ハレテ　ワカ身ヲカクセ」では他の訳「かこめ」が「かくせ」になっている。他の聖公会系の訳は本田・バラ訳の影響を受けていると思われる。ウィリアムズ訳「キツセキ脇ニ　ナカシシ水血」の部分は影響関係が判断できない。ウィリアムズ訳「ツミヨリ救フテ　我ムネアラヘ」の部分は「あらう」ということでは本田・バラ訳と共通だが、本田・バラ訳「きよく」が「きよめ」となって他の聖公会系聖歌に連なっていく。上記聖公会系の訳は本田・バラ訳の影響の下に生まれたと考えてよいであろう。

一方日本基督教会系はどのような系譜になったのであろうか。第1節を掲載する。

『改正讃美歌』(明治9年）
第21

われたるいはや　わがみをかこめな
さきたるわきの　水また血しほ
つみもなやみも　きよくあらへよ

『讃美歌　全』(明治14年）
第11

われたるいはよ　われをかこめな
さかれしわきの　みづまたちしほ
つみもなやみも　きよくあらへよ

『讃美歌』(明治36、昭和6、29年）
第215、262、260

ちとせのいはよ　わが身をかこめ
さかれしわきの　ちしほ（お）とみづに
つみもけがれも　あらひ（い）きよめよ

この系譜をみると、本田・バラ訳を多少改訳しただけで『讃美歌』（明治 36 年）で固定化し、『讃美歌』（明治 36［1903］年）は昭和 6（1931）年、29（1954）年と 2 度の改訂があったが歌詞の変更はしていない。『古今聖歌集』（明治 35［1902］年）と『讃美歌』（明治 36 年）の歌詞が同一なのは 2 つの讃美歌集の協力関係をあらわしている。それぞれ序文には共用（共通讃美歌）の経緯が述べられている[121]。

『聖書之抄書』（明治 7［1874］年）収録の奥野昌綱訳《サカエノキミノ》と聖公会の歌集を比較してみよう。

奥野昌綱訳（明治 7 年）
『聖書之抄書』第 6

サカヘノキミノ　ジウジカヲミレバ
タフトキモノモ　モノヽカズカハ
ホコレルコトモ　ナニモアラジナ

『聖公會歌集』（明治 16 年）
第 31

さかえのきみの　じふじをみれば
よのとみほまれ　のぞみはすべて
わがみにとりて　ものヽかずかは

『古今聖歌集』（明治 35 年）
第 74

さかえのきみの　十字架をみれば
とみもほまれも　のぞみもなべて
ものヽかずかは　ほこるにたらず

現行『古今聖歌集』（昭和 34 年）
第 77

さかえの　きみの　十字架を　あおげば
世の　とみ　ほまれぞ　うたかたと　消ゆる

『眞神讃美歌　全』（明治 15 年）
第 40

さかえのきみの　十字架をみれば
たふときものも　ものヽかずかは
ほこれることも　なにもあらじな

『聖公會讃美歌』（明治 25 年）
第 71

さかえのきみの　じふじをみれば
とみもほまれも　のぞみもすべて
われにとりては　ものヽかずかは

日本基督教会系では「さかえの・・・」ではじまる讃美歌が『改正讃美歌』（明治 9 年）、（『讃美歌　全』（明治 15 年）、『讃美歌［改正増補］』（明治 16 年）、『新撰讃美歌』（明治 21 年）、『讃美歌』（明治 36 年、昭和 6、29 年）、そして『讃美歌　２１』（平成 9 年）と系譜していく。『讃美歌』（昭和 6 年）から「さかえのきみの」が「さかえの主イェス」に変更されている。『讃美歌』（明治 36 年）の訳が『古今聖歌集』（明治 35 年）と同一なのは《ちとせのいわよ》の場合と同様である。第 1 節のみを掲載する。

『改正讃美歌』（明治 9 年）
第 28

さかえのきみの　十字架をみれば
たふときものも　ものヽかずかは
ほこれることも　なにもあらじな

『讃美歌　全』（明治 14 年）
第 21

さかえのきみの　十字架をみれば
たふときものも　もののかずかは
ほこれることも　なにもあらじな

『讃美歌［改正増補］』（明治 16 年）
第 109

さかえのきみの　十字架をみれば
たふときものも　もののかずかは
ほこれることも　なにもあらじな

『新撰讃美歌』(明治 21 年)　　『讃美歌』(明治 36 年)

第 109　　第 84

さかえのきみの　じふじかをみれば　　さかえのきみの　十字架をみれば

たふときものも　ものゝかずかは　　とみもほまれも　のぞみもなべて

ほこるべきこと　われにはあらじ　　ものゝかずかは　ほこるにたらず

『讃美歌』(昭和 6、29 年)『讃美歌　２１』(平成 9 年)

第 129、142　　第 297

さかえの主イェス　十字架をあおげば

世のとみほまれは　ちりにぞひとしき

《When I survey the wondrous cross》のウィリアムズの訳は以下の如くである。

十字架ニカケラル

ワカキミミルトキ

世ノトミ利アラス

タカブリナサマシ

ウィリアムズと奥野昌綱の訳では「十字架」は共通している訳語だが、他の日本聖公会系では「サカエノキミノ」、「モノノカズカワ」と奥野昌綱と同じ訳語を使用し「ホコレル」「ほこる」等同じ意味の言葉が多用され、文脈も同様である。これは奥野昌綱の影響の下で生まれたと言って過言ではないであろう。

12、結語

『聖公會歌集』(明治 16［1883］年) をはじめとする日本聖公会系の聖歌集では、《Rock of Ages》の訳は本田・バラ訳からの影響を受け、《When I survey the wondrous cross》の訳は日本基督教会系奥野昌綱訳の改訳であった。これをどう考えればよいのであろうか。その後の日本基督教会系の讃美歌集は多少の改訳が加えられながら《われたるいわや》《さかえのきみの》の訳が継承されていくが、日本聖公会系ではなぜウィリアムズ訳は改訳の対象とならなかったのであろうか。筆者は両者に翻訳上の優劣はないと考える。すなわちウィリアムズ訳が翻訳として劣っているとは思えない。『聖公會歌集』はアメリカ聖公会のチングが編集しているが、同じアメリカ聖公会の、しかも主教、監督のウィリアムズをさし

おいて日本基督教会系の讃美歌を改訳した理由は何であろうか。W. B. ライト、A. R. モリス、元田作之進のようにウィリアムズが聖歌を翻訳していたことを知る人はいたのである。

筆者はその理由はウィリアムズ自身にあったと考える。彼は先駆者として評価されることを嫌った。もしかすると、日本で最初の讃美歌を翻訳したとされるゴーブル、クロスビーより先に訳していたのであるまいか。そのことを自覚していたので、日本最初の宣教師としての名誉をリギンスに与えたように、かえってこの件で何も発言しなかったとも考えられる。

またウィリアムズが試訳はしたものの聖歌翻訳の改訂を多忙等何らかの理由で断念し、聖書翻訳の場合と同様、奥野、ルーミスに託した可能性も考えられる[122]。ウィリアムズは奥野昌綱の讃美歌作家としての資質を高く評価していたのではなかろうか。まだ当時は讃美歌・聖歌の揺籃期である。ウィリアムズは奥野昌綱の讃美歌作家としての将来性を見抜いていたのではなかろうか。それ故自ら訳した聖歌を奥野に託し、それを使用されても（『教のうた』）クレームもつけず、聖公会の聖歌集（『聖公會歌集』）に教派が違う奥野訳の改訳を採用しても問題にしなかったのではなかろうか。なお、塩谷栄二氏によればエヴィントンの『たゝへのうた』（明治 7 年）には、奥野昌綱及び日本基督教会系『教えのうた』の影響が認められるとのことである[123]。

その後奥野昌綱は日本の讃美歌史に重要な働きをする。約 30 年後日本教会音楽の父[124]宣教師オルチンは述べている。「松山［高吉］師と奥野師の名前は、この三〇年間の日本の讃美歌のことを思い起こさせる。彼らは、この分野の先駆者としてクリスチャンの中に、感謝の念とともにいつまでも記憶されるであろう。現在まで残って、使われている讃美歌に、これほど貢献した人は二人をおいて他にはいない」[125]。

大江満氏によれば「ウイリアムスは伝道主教として、つねに自分にとってでなく、ミッションにとって有益かどうかを判断基準にしていた」[126]。さらにこの聖歌翻訳に関しては、ウィリアムズはキリスト教界にすぐれた聖歌、讃美歌が残るのであれば、教派も超え、ましてや日本聖公会、あるいは日本最初の聖歌の作者であるという個人の栄位は、既に関心のないところだったと考えられるのである。

最後の節は推論の域をでていない。推論から脱却するためにもウィリアムズの他の翻訳聖歌の発見が待たれるとともに、奥野昌綱側からの資料の発掘にも期待したい。

第 4 章　来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌[127]

1、はじめに

神の摂理の普遍性を信じる宣教師が海外宣教を展開する中、19 世紀日本布教につとめたプロテスタント教会宣教師は主にアメリカから来日した。吉田亮氏は宣教、及び宣教師について次の様に述べている。

> ひとつの宗教的背景をもって、異文化の中へその背景の根源を全く移植しようとする宣教師は文化間接触の最前線で活動する文化的エージェントである。彼等は派遣団体とその向こうの多数の賛助者からの支援と期待に応えるため、かつ自らの動力となっている福音の伝播のためにあらゆることを行った。それらは多くの場合、受容されやすい事業と共に提供される。教育、出版、医療、看護、福祉、音楽、体育、芸術などがそれである。被伝播者の許容するところを推し量りながら活動のスタイルを作っていく[128]。

盲人教育は教育、出版（点字の聖書、讃美歌）、医療（眼科）、看護、福祉、音楽に関わる重要な宣教事業であるとともに、弱者、病者への伝道はキリスト教精神そのものである。またそれは同時に明治政府も推し進めようとしていた事業でもあった。音楽（平曲、箏曲、三弦等伝統芸能）は歴史的にも盲人の有力な生計の手段であった。

聖書には盲人に関する記述、譬えが随所に書かれている[129]。石松量蔵氏はその著『盲人とキリスト教の歩み』の序説で次のように述べている。

> 「その時、目しいの目は開かれ、耳しいの耳はあけられる。その時、足なえは、しかのように飛び走り、おしの舌は喜び歌う。それは荒野に水がわきいで、さばくに川が流れるからである」（イザヤ書 35 ノ 5、6）
>
> 「盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている」（マタイ伝 11 ノ 5、6）
>
> この聖句はメシア来臨の預言と、これにたいする、イエスのメシア（救主）たることの宣言である。
>
> キリスト教の伝道が行われるところ、必ず盲人や身体障害者が、福祉をうけ、喜びの生涯に入りつつあることは、歴史の事実である。
>
> わが国においても、キリスト教が伝えられるや、盲人達がその福音と福祉に与り、したがつて霊眼も開け、人生の意義をも悟って、意義ある生活に入りつゝあるのであって、キリスト教と盲人の救いとは、必然的につながつていることがうかがはれるのである[130]。

2、アメリカの海外宣教と音楽、盲人教育

明治期、日本におけるプロテスタントの宣教はアメリカから来日した宣教師が中心だったと冒頭で触れたが、19 世紀のアメリカ都市部では工業化と商業化がすすみ、工業生産の増大、楽器の製造の増加は楽器の中流家庭への普及を生んだ。そしてこの中流家庭の人達は『ミッショナリー・ヘラルド』、『スピリット・オブ・ミッションズ』等の海外宣教の雑誌を購読し、海外宣教のための献金をしていた。楽器の大量生産は市場を海外に求めていった。後述する明治 13（1880）年アメリカから来日した音楽教育のお雇い外国人ルーサー・ホワイティング・メーソン（1828～1896）の日本派遣に関して『ボストン・ヘラルド・サップルメント』の記者は「メーソン氏の仕事によってそのような楽器［ピアノ・オルガン］の需要が起れば日本という国は楽器の最大の海外市場になるだろう。[131]」と述べている。この時代は海外宣教と音楽産業が結びついていた。海外宣教の情熱はこの中で起っていたのである。

宣教事業を実際に行うのは宣教師が主であるが、それを資金的に支える人、また平信徒で海外には行かず、国内で海外宣教事業の一翼を担う人も多数存在した。海外宣教を思い描き、メーソンを日本に派遣したアメリカのエバン・トゥルジェ（1834～1891）がそれにあたる人物である。彼については後述する。

また 19 世紀アメリカの海外宣教を特徴づける考えに〈音楽による宣教〉があげられる。『ドワイト・ジャーナル・オブ・ミュージック』1880 年 8 月 14 日の「日本における音楽」という記事では、日本では単なる音楽のお雇い外国人であるメーソンを音楽に満ちた宣教師（tuneful missionary）と呼び、彼の信仰と初心をつらぬく勇気に賛辞を送り、そして「我々は彼の信仰が報われることに疑念を抱いてはいない。なぜならば音楽とは神の力によって魂に植えられた最も重要なものである。アメリカは神の御業を日本人に実現させるための最適な人材を、その鍵穴に合う鍵とともに送りだしたのである[132]」と結び、メーソンが日本宣教の適任者であることと、宣教における音楽の力の揺るぎない確信を表現している。そしてキリスト教と音楽は盲人教育とも強く結びついていた。

これら 19 世紀の海外宣教の特徴である＜音楽と宣教＞という観点も含めて「明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽」を以下展開していきたい。

明治期、日本におけるプロテスタントの宣教はアメリカから来日した宣教師が中心ではあったが、盲人の伝道ではアメリカ人以外の宣教師の活動も顕著であった。

明治期の盲人教育は明治 9（1876）年スコットランド一致長老教会宣教医フォールズ、アメリカのドイツ・ルーテル教会宣教師（ドイツ生まれ）ボルシャルト、中村正直、津田仙、岸田吟香、古川正雄らクリスチャンによる楽善会によって計画され、後に大内青巒ら仏教徒も加わって設立した東京築地の楽善会訓盲院がその嚆矢である。

フォールズは築地病院で眼科の治療をする一方で日本に盲人が多いことに気付き、盲学校の設立を提唱する。当時の日本の状況は「日本に盲人多き埃及の二倍し英国に三倍し、欧米諸国には未だ曾て見えざる所なり。是は目眵より典伝染する一種の眼病あるに依れり」

[133]。そして「此の如き多数の盲人は之を訓ゆるにバイブルを以てするより善きはなし、而してバイブルを授くるや、先ず之を日本語に翻訳するを以て急務とす、然れば速かに日本の有志者共謀協力して一の訓盲院を設立し、日本訳の聖書を凸字で製し、大に盲人の為に利益を起こすべし[134]」と彼は提唱する。

アメリカのドイツ・ルーテル教会宣教師（ドイツ生まれ）ボルシャルトは中村正直が開いた同人社で教師をしていた。

明治 8（1875）年 5 月 22 日、6 人はフォールズ邸に集まり盲人教育について語り、この教育を推進する楽善会を組織した。会頭には古川正雄、書記に岸田吟香を選び、ヘボン訳ヨハネによる福音書 9 章のローマ字版とカタカナ版をそれぞれ 100 部、凸字版にすることを米国聖書会社に依頼した。そして明治 9（1876）年には訓盲院設立に対し、宮内省より 3000 円が下賜された[135]。

3、ゴーブルと盲人教育

ヨハネによる福音書 9 章のイエスの言葉は、視覚障害を前世の因縁によるとされて差別、抑圧されてきた盲人に対する福音となっている。現在でも障害があれば前世の因縁といわれる場合がいまだに存在する。まして当時はこのようなことが根強い俗信として広まっていたであろうことは想像にかたくない。このヨハネによる福音書 9 章が盲人への宣教として最初に翻訳されたことは大変意義深いことだと思われる。このヨハネによる福音書 9 章は楽善会によって日本で最初に作成された盲人教育のための書で、現在も筑波大学附属盲学校に保存されている[136]。しかし、このヨハネによる福音書 9 章に関して、楽善会ではなく最初に作成したのは宣教師ゴーブルであるという説を唱える研究者も存在する。C. パーカー氏は『Jonathan Goble of Japan』で次のように述べている。

日本人の中において盲目となる主な原因は「眼炎とはしか」であった。R. オールコックは、床屋で普通に提供されているサービスである、瞼をひっくり返してその上を「こすり上げて、ひっかき、銅製のヘラで磨きあげる」という代わった風習がその原因の一つであろうという考えを述べている。その原因がなんであれ、乞食をすることなく、鍼治揉療治、金子貸出、音曲指南などという「見苦しくない」方法で生計をたてている盲人が多数存在する。

オールコックがかつて見捨てられた文盲の人々にローマ字で印刷された聖書を読むことを教えたように、ゴーブルは今、彼の創案による版木によって印刷された聖句の読み方を、盲目の人に教えたのである。その小冊子は、アルファベットと触覚にすばやく訴えるために目立つよう、盛り上がった文字による聖書の聖句 8 頁で構成されている。「18 歳の青年が」とゴーブルは書いている。「3 歳の頃よりまったくの盲目であるが、彼はほとんど何の指示も受けずに、私が初版の入門部を渡してから 2 週間程でその本のすべて

を理解したのである」。予想していた通り、ゴーブルはその小冊子を参考資料にしながら手紙で訴えている。「全世界の兄弟姉妹の人たち、そして慈善家の皆様」、資金調達を請け負った人に彼は言う、「どうぞ援助の手をお差し伸べください。そうすれば、我々は二重に見えなくなっている者たちからの光の養成に応えることができるかもしれないのです」。ゴーブルはより多くの書籍を盲目の人たちに対して印刷するため、その「印刷機と器具」に必要な資金を求めていた。彼が応答として受け取った全額はわかっていない。ネーサン・ブラウンが指摘しているように、ゴーブルはイギリスのバプテストから寄贈されたアルビオン印刷機を「その印刷機で聖句の一つも印刷していなかったので、結構よい値段で」売っている。だが彼は再び厚かましくも印刷機を求めてきている。いかに彼の動機がガツガツと貪欲なものであったとしても、他の人々の中でゴーブルは見捨てられていたマイノリティーへの気づかいを喚起しようとしたのである。その年の年末に向けて盲人たちに読むことを教えるという一大目的のために、東京である教会が形成された。そして明治天皇は「彼等が創設した団体に慈悲深くも 3000 円を下賜された」のである。

―中略―

彼は東京府への嘆願書の中で「盲人教育のために設立しようとしている学校の地所と書籍を購入するため、税収の一部を都合してくださるようお願いいたします」と述べている。[原注　東京日日新聞　明治 10（1877）年 11 月 7 日、読売新聞　明治 10（1877）年 11 月 7 日をも見よ。ゴーブルの嘆願書の日付は明治 10（1877）年 11 月 7 日]

それに対して東京府の広報官は、要請されたような形での税収の割り当てを決定する規則がなく、また、日本人の人力車発明者の申請者がいるためゴーブルを人力車の発明者として認定できないとその立場を説明した。東京府は中央政府にその嘆願書を付託しただけで、それ以上のことは行わなかった。ゴーブルはまったく資金を集めることができず、盲人のための学校は建設されなかった[137]。

またこの件に関して川島第二郎氏はその著『ジョナサン・ゴーブル訳「摩太福音書」の研究』で次のように述べている。

こうした不遇な時代に、彼は罰せられたように病気勝ちになり、眼を患って半年近く視力を失う状態に見舞われた。彼はこのような不幸を、深い信仰的内省によって、次の活動へ繋げていった。明治 9（1876）年に『ジャパン・ウィークリー・メイル』紙は、彼がローマ字の点字試作本『ヨハネ福音書』9 章を作ったことを報じている。この関係の報道はその後も継続されて、点字による盲人教育を目的とする組織が日本人たちによって作られ、年末に皇室からの恩賜金を下されたと伝えている。彼はこの組織と関係を続けていたらしく、翌々年に自分の発明した人力車への課税の一部を訓盲院設立のために廻すよう、東京府に訴え出ている。[原注　Brown to Murdock, Mar. 18. 25. Jury 15. Dec.

23. 1876. 東京日日新聞　明治 11（1878）年 10 月 7 日］

これはなお究明を要する課題であるが、西洋の点字を日本に導入し訓盲院の事業の端緒を作ったのは恐らくゴーブルだったと見てよいのではなかろうか[138]。

川島氏の発言にもあるように、ヨハネによる福音書 9 章は楽善会、ゴーブルのどちらが作成したのかについては今後の研究を待たなければならない。しかし、アメリカ人宣教師ゴーブルが日本語の聖書、讃美歌ばかりでなく、日本人への盲人教育の嚆矢ともなったのであれば、彼は宣教事業に欠かせない聖書、讃美歌の翻訳、そして社会事業・慈善事業にも大きな役割を果たした最初の宣教師であったと言えよう。

4、宣教師による盲人伝道

訓盲院は明治 15（1882）年には唖生徒も加え、盲唖教育双方の先駆となった。その後会友は官吏、僧侶が増えフォールズの影響力は低下し、キリスト教精神も失われたので彼は脱退していった[139]。しかし、フォールズの築地病院内には盲人用図書印刷のための活字、印刷機があり、盲人用図書室も設置されていたという[140]。

これらの宣教師の盲人に対する伝道は盲人伝道者を生んだ。明治生まれの盲人伝道者は藤田匡（明治 20 年伝道師試験合格）を始めとして 14 人に及ぶ[141]。

その後各地に盲唖学校が設立されたが、宣教師、クリスチャンによるものが少なくない。宣教師によって創設された学校は 4 校（横浜訓盲院、函館訓盲院、岐阜聖公会訓盲院、同愛訓盲院）、ミッションスクールに準ずる学校は 4 校、クリスチャンによって創設された学校は 8 校である[142]。この他にも明治期の社会事業・慈善事業にキリスト教（プロテスタントが主流）が大きく影響を及ぼすが、実際の施設数は仏教徒のそれが圧倒的に多かった[143]。

一方明治政府も同時期、文部省から「盲者教育論」『教育雑誌』第二一号（明治 9［1876］年 11 月）を刊行。これはアメリカ教育局年報からの抄訳で、視力障害者への音楽教育の効用を述べたものだが、中村理平氏の見解「文部省発行の機関誌に掲載された各論は、わが国においても将来の実施を想定した命題である場合が多く[144]」にもあるように明治政府は盲人教育への取り組みを見せはじめていた。「盲者教育論」は欧州の視力障害者の歴史に触れ、北米諸州の視力障害者の盲学校では唱歌・音楽の初歩、及び手芸を授け、障害者の生計の基礎としていることについて次のように述べている。

館中ニ於イテ手芸ヲ学ヒ得シモ十ノ八九ハ手芸ヲ以テ活計ノ基礎トスルモノナシ大抵音楽ノ各科ヲ学ヒ人ニ授クルニ唱歌及音楽ヲ以テシ又『ピアノー』学器を販売シテ其生計ヲ営メリ今ニ音楽ヲ以テ盲者ノ活計ヲナセシモノ幾多ナルヤヲ掲示スルハ喜フヘキコトナリ何トナレハ音楽ハ盲者ニ於テ大ニ学ム所ニシテ視楽ノ闕乏ヲ補フヲ以テナリ[145]

また、後述する伊沢修二の上司にあたる留学生監督の目賀田種太郎は『教育雑誌』（第八九号、明治 12〔1879〕年 2 月）に「米國ペルキンス盲院［パーキンス・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインド］状況報告書」を執筆し、その概要が『東京盲学校六十年史』に紹介されている。この中で「教科について、本院教科の趣意は二あり、第一は生徒の心思を発達せしめ、第二には彼等をして他人の扶助を仰がざらしめんが為切実なる職業を分ちて、文学科　音楽科　音律科　職業科の四科とす」と述べ、アメリカの盲人教育においては、音楽科、音律科を職業教育ととらえていることを報告している[146]。目賀田種太郎はフルベッキ等来日宣教師と深い関係を持っている。このパーキンス・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインドに関しては後半で触れる。

前述の楽善会訓盲院は後の明治 18（1885）年官立の東京盲唖学校になった。明治 8（1875）年、創設当時の訓盲会社条例に「一、音楽及ビ唱歌ヲ教ユ」、また明治 9（1874）年の楽善会規則（訓盲院設立ノ目的　第二條）には「和洋ノ楽器ヲ以テ音楽唱歌ヲ教ユ[147]」と書かれていた。明治 19（1886）年にこの条文が現実化され、東京盲唖学校ではフランシス・ハーレルによって、風琴、唱歌の学習が開始された。彼女の夫のフランク・ハーレルはアメリカ聖公会宣教医だった。さらに 20 年からは、白井規矩郎にピアノ、21 年には多久随にヴァイオリン教授の嘱託が行われ、音楽と盲人教育が結びついていった[148]。

これ以前の明治政府の盲人教育への動きとして岩倉使節団の報告『米欧回覧実記』があげられる。ここでは盲人教育と音楽が結びつき、職業訓練となっている様子が報告されている。

明治 4（1871）年 12 月 20 日、アメリカ、オークランドの訓盲唖院訪問の際に「盲唖院ハ、全州政府ノ公校ニテ、―中略―盲生ニ授クル工芸少シ、多クハ楽工トナス、」と述べている[149]。

また、明治 5（1872）年 1 月 25 日、パリの盲院を訪れ「午後二時ヨリ、盲院ニ至ル、―中略―抑育盲ノ趣意ハ、―中略―第二ニ其生業ヲ授クルニ至リテハ、目ニ盲スルモノハ、耳ニ聡ヲマシ、指ニ慧ヲマスヲ以テ、音楽ヲ教ヘ、婦人ニハ唱歌ヲ兼教シ、説教ノ伶人ヲツトメシムルヲ以テ主トス[150]」、「盲女ハ一余百人アリ、女教師アリテ之ヲ授業ス、授クル所ノ業ハ、読書、算筆ノ外ハ、歌謡ヲ首トス、[151]」、「殊ニ盲女ハ婬欲ナキユヘ、説教ノ楽師ニ恰好ナリト云[152]」、「此日楽堂ニテ於テ、盲男ニ楽ヲ調シ、盲女ニ歌ヲ諷シテ、数闋ヲ奏セリ、玲瓏縹渺トシテ、他ノ楽ヨリ、殊ニ清穆聞ヘキヲ覚ヘヌ、盲人ノ音楽ニ聴慧ナルハ、実ニ天ヨリ此職業ヲ命セシモノヽ如シト、西洋ニテモ称美スルトナリ、周公ノ制ニ、楽官ヲ瞽師ニ託ス、真ニユヘアルナリ」と報告している[153]。

これ以前京都では、明治 11（1878）年古川太四郎が知事宛に『盲唖生募集御願』を提出。同年「仮盲唖院」が開業し、明治 12（1879）年にはこれが正式に府立学校（古川太四郎監事［院長］）となった。この京都府立盲唖院（後の府立盲学校）が日本で最初の公立の盲学校である。この京都府立盲唖院の第 2 代の院長鳥居嘉三郎はクリスチャンで、『京都府盲聾教育百年史』には次のように述べられている。「困難な状況におかれた盲唖院を支えた人々

の中に良心的なプロテスタントの一群があったことを記しておかねばならない」[154]。

これ以後の宣教師と盲人教育に関して明治 24（1891）年に横浜訓盲院、明治 28（1895）年に函館訓盲院を設立した女性宣教師ドレーパーと、明治 27（1894）年イギリス教会宣教会（CMS）宣教師 A. F. チャペルの岐阜聖公会訓盲院設立が特筆される。また宣教師の設立ではないが、美普教会牧師大喜見源一郎が明治 37（1904）年に浅草ではじめた同愛訓盲院が存在する。同愛訓盲院はアメリカ人信徒の寄金により設立されたものである。以上の 4 校はミッションスクールとして数えられるが、函館は昭和 24 年に、岐阜は昭和 15 年に公立に移管され、同愛訓盲院は戦中に廃校になった。横浜訓盲院だけがキリスト教教育を現在も続けている[155]。以下、横浜訓盲院、函館訓盲院、岐阜聖公会訓盲院について簡単に触れる。

C. P. ドレーパーは明治 22（1889）年横浜居留地に息子夫婦と住んでいて、按摩の笛を耳にし、その盲女子から日本の盲人の実情を聞いたことが横浜訓盲院開設の契機になったという[156]。彼女は横浜訓盲院での教育で聖書を教える必要を感じ、日本点字が発表されたこともあって、凸字ではなく点字のヨハネによる福音書を横浜の米国聖書会社に依頼した。これが日本最初の点字出版物である。その後、マタイ、マルコ、ルカ、使徒言行録が出版され、大正 4（1915）年には新約聖書の 11 冊が完成した[157]。

横浜訓盲院は明治 33（1900）年、横浜基督教訓盲院の名で私立学校認可。大正中期経営危機に直面したが今村幾太が再建、家庭的教育環境を形成した。昭和 26（1951）年、学校法人横浜訓盲院が設立されキリスト教主義に基づいた学校として現在に及んでいる。盲人野球も考案され、川口省吾は昭和 10（1935）年、訓盲院ハーモニカ・バンドを結成、戦後は器楽合奏団を編成した。川口省吾は「音楽は文字や言葉にまさる偉大な力を持っている」と述べている[158]。

C. P. ドレーパーは後に明治 25（1892）年、函館に転任し、横浜訓盲院の経験から明治 28（1895）年、函館訓盲院を創設した。明治 31 年第 1 回卒業の篠崎清次が鍼按の技術を教えるとともに函館訓盲院ではキリスト教教育を行った。篠崎清次もクリスチャンであった[159]。

A. F. チャペルは明治 21（1888）年に岐阜聖公会宣教師として赴任、同教会の伝道師森巻耳とともに、明治 27（1894）年岐阜聖公会訓盲院を設立した。明治 38（1905）年に岐阜訓盲院（私立）と改め、大正時代には点字聖書を刊行。点字聖書の刊行の成功により、訓盲院讃美歌集、日本聖公会祈禱書、日本聖公会古今聖歌集、日曜学校讃美歌集等次々と出版していった。音楽教育も進められており、三部合唱、四部合唱が教えられ、クリスマスが近づくと練習が 1、2 ヶ月前から始められた[160]。また大正 14（1925）年には西洋音楽の向上をはかるためシカゴからピアノを購入、スマイル夫人達により披露演奏会を開催した[161]。

岐阜聖公会訓盲院に関して、A. ハミッシ・アイオン氏は「十字架の使節　カナダ人宣教師が日本に与えた影響」の中で次のように述べている。

また岐阜のカナダ聖公会盲学校（訓盲院）は重要な、しかし等閑視されていた領域に、キリスト教の事業が行われたことを例証している。それは社会事業の必要な領域で、日本政府が一層努力すべき道を示した。この学校は、1891 年の濃尾大地震のあとにつくられた男子盲人クラブに起源をもつ。当時日本には、盲人のための学校は他に一つあっただけであった。1920 年代末、訓盲院がカナダ聖公会の手から日本政府の管理に移されるまで、カナダ聖公会の宣教師は社会的に高い価値をもつ奉仕をした。日本における宣教活動の主要な貢献の一つは、例えば盲学校や幼稚園のような領域においてであった。―中略―このような努力は社会事業の開拓を進めた力であり、施設の規模は小さかったが影響は大きかった[162]。

5. 京都府立盲学校を巡って

さてここまで、イギリス（スコットランド）、カナダ人宣教師の盲人に対する宣教事業を述べ、アメリカ人宣教師のドレーパーとゴーブルについて簡単に触れてきたが、ここでアメリカによる宣教と音楽と盲人教育の関係を京都府立盲学校を訪問した人達の関係から明らかにしていきたい。

筆者は平成 10(1998)年 9 月 21 日京都府立盲学校にうかがった。そこで私は明治 14(1881)年 1 月 3 日のルーサー・ホワイティング・メーソン訪問の記録を確認[163]。また電話の発明で知られるグラハム・ベルや、アン・サリバンとの関係で知られるヘレン・ケラーの同校訪問の記録・写真を閲覧した。また、同校には明治 16（1883）年に伊沢修二がアメリカから持ち帰ったと伝えられるリードオルガンも所蔵されている[164]。メーソンとベルはどうして京都府立盲学校を訪れたのであろうか。またどうして伊沢修二がアメリカから持ち帰ったと伝えられているリードオルガンが京都府立盲学校に所蔵されているのであろうか。アメリカ人であるルーサー・ホワイティング・メーソン、グラハム・ベル、アン・サリバン、ヘレン・ケラーと伊沢修二、これらの人達にはどのようなつながりがあるのだろうか。まずメーソンが京都府立盲学校を訪問した理由から考えてみたい。

メーソンの日本滞在期間（明治 13［1880］～15［1882］年）は政府が盲学校を設立するため模索した時期にあたる。メーソン自身も日本滞在期間中盲人への音楽教育に関心を示していた。明治政府の盲人教育への関心、盲学校設立の意向と合致させ滞在期間を延ばしたいという希望と彼自身の日本宣教の意思のあらわれと思われる。メーソンは日本に自らが作り上げた音楽教育のシステムを伝えたいという意思ばかりでなく、海外宣教の意思をも持っていた。前述したように彼はアメリカでは音楽に満ちた宣教師(Tuneful Missionary)と呼ばれていた[165]。そして盲人への宣教は来日宣教師が望んでいたことでもあった。この件は後述する。メーソンは明治 13（1880）年 6 月 21 日付のジョン　S. ドワイト宛書簡で次のように述べている。

もし私の記憶が正しければ、あなたはパーキンス・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインドの理事の一人だと思います。私は盲人のための印刷楽譜のサンプルと音楽の初歩的な教授法をしるしたサンプルのすべてを手に入れたいと考え、この手紙を書いています。ここ日本には一カ所ではありますが、小規模ながら盲人のための教育施設があります。それは政府の援助を受けたものではありません。日本滞在中に、私は盲人のために何かをなしたいという、強い願望を持っています[166]。

彼は明治 14（1881）年 1 月 3 日京都府立盲唖院を訪問したが、そのための旅行申請書である「メーソン冬期休業中旅行伺」では、次のようにその旅行主旨を述べている。

私は貴国における盲人の教育に大変興味を抱いております。そして、私は音楽という分野において盲人のために何がしかのことができると考えております。京都には盲人のための施設があると聞き及んでおります。それゆえ、京都のそのような施設の訪問を希望する次第です。―中略―[167]

6、メーソンと盲人教育

明治 15（1882）年 7 月からメーソンは自らの教科書改訂と日本の音楽教育のための新資料収集を目的としてヨーロッパを旅行しているが、ハンブルグでは「幼稚園ヨリ訓盲院ニ到ルマデ音楽教授ノ方法等訊」と伊沢修二に書簡（明治 15 年 11 月 20 日付）を書き送っている[168]。そして突然の解雇を知ったメーソンは明治 16 年 1 月 15 日付、文部卿福岡孝弟宛の解雇通知の返信に「貴国教育之為殊ニ盲人教育之為種々計畫仕候事等御座[169]」と盲人教育に意欲があったことを示し、伊沢修二宛書簡（明治 16 年 4 月 22 日付）でも「私は盲人のために、音楽という分野では特に記譜法、読譜法に関して何がなされているのかに大変注意をはらってまいりました[170]」と同様のことを伝えている。そこにはメーソンの盲人教育への強い意志を感じる。彼は実際に盲人教育がおこなわれている京都へ行き、その実態を見学したかったのであろう。また京都へ行きたい旨には、彼と同じ教派であるコングリケーショナル派を中心とした宣教団体アメリカン・ボードが関西をその宣教の拠点としていたことも考えられる。メーソンは自らの音楽教育システムを日本に伝えたいという意思とともに海外宣教の意思を持っていた。彼は日本からアメリカの牧師 A. C. アダムス氏に「私はかつてしたかったこと、そう、音楽と宣教の両方の仕事をしているのです」と手紙を書き送っている[171]。そして実際京都訪問の前後に大阪在住のアメリカン・ボード女性宣教師コルビーと会っている[172]。

メーソンは再来日の強い意志を持っていたが、アメリカン・ボードもメーソンの日本招聘の強い希望を持ち、メーソンを宣教師として来日させようとしていた[173]。アメリカン・ボ

ード宣教師ジョージ・オルチンは宣教本部主事クラークへメーソンの日本招聘の依頼とその理由を述べている[174]。

この書簡で宣教師オルチンがメーソンを高く評価する中で彼は盲人への教育をあげ、メーソンのこの件に関する役割について、次のように述べている。

> 自分自身の芸術性や技術で自分と家族を養っているプロの音楽家が数人私たちの教会にやってきました。そのような人の一人（盲目の女性）が郡山教会をつくった人達の中にいました。そして、わたしにとってはそのような技術を教会の中にとどめ、そしてそれを純粋な手段に変えるようにすべきだと思います。こうして、彼らを以前のように自分の技術で生活できるようにするのです。教会の仕事の中にこの分野を、彼（女）のすべての時間をそれに捧げると思われる一人［メーソン］の特別な管理のもとに行う時がやってきました[175]。

前述の女性宣教師コルビーはで次のように述べている。

> 日本人は琴と呼ばれる美しい楽器を持っています。それはこの国でつくられたもので、どこへでも持ち歩くことが容易です。私が考えるに、それはどのような輸入楽器よりも有効なものとされるでしょう。そして、盲目の楽師たちの一団が存在します。彼らは楽器を操るのにすばらしい技術を持っています。私は、ここにはすぐれた知性の持ち主をキリスト教に導くためにひたすら待ち続けた力が存在していると思っています[176]。

ここでは音楽と盲人と宣教が一体となって考えられている。当時日本には音楽を職業にしていた盲人が多数存在した。オルチンはその書簡の中で当時「日本のクリスチャンは、クリスチャンになったことにより現在では使うには不適切な日本の音楽をやめたので、わたしたちはそのかわりのものを与えなければなりません」[177]。しかしこれでは盲人は失業してしまう。そこで教会で再教育して、それまで同様自活の道を歩ませる。この盲人への教育にメーソンが最適だとも述べている。ここでは音楽は娯楽や教養ではなく、クリスチャンとしての社会参加（労働、自立）としてとらえられており、宣教事業として重要な分野である。

宣教師オルチンが、帰国したメーソンをあえて待望するのは、音楽の宣教師としての資質を高く評価していたからに違いない。そしてメーソンの盲人教育への意欲だけでなく、メーソンがすでに何らかの方法論を見いだしていたからであろう。その一例として、音楽取調掛のメンバーの一人、盲人山勢松韻[178]への教育が挙げられる。メーソンは前述ドワイト宛書簡で次のように述べている。

「私には盲人の学生が一人おります。彼は琴の最高の奏者であり、先生でもあります。琴とは、日本の 13 弦のハープのことです」。この書簡の盲人の学生とは山勢松韻であろう。

メーソンは盲人のため撫譜（なでふ）という楽譜を作成した。「米國人メーソン叙勲之件」では次のように述べられている。

氏ハ御用掛山勢松韻ノ爲メ特ニ盲人使用ノ一ノ撫譜ヲ創製セリ此ノ撫譜ナル者ハ槻ノ盤面ニ黄銅ヲ以テ五線ヲ装置シ又別ニ黄銅ノ薄片ヲ以テ作リタル音楽上各種ノ記号（則チ音度記号、音符、休符、付点、縦線等）数十百個ヲ列置スルモノニシテ松韻ハ此盤ニ対シ且ツ撫デ且ツ探リ五線ニ各種ノ記号ヲ排置シ以テ能ク自箇記憶ノ日本箏曲ヲ表出スルニ至レリ是レ豈ニ盲人記譜ノ一大良器ニ非ズヤ[179]

山勢松韻とメーソンについて『ミュージカル・ヘラルド』（1880 年 4 月）の「チルドレンズ・デパートメント」という子供向け記事には次のような記載がある。

学生としては少し年をとった目の不自由な宮廷楽師が 1 人、メーソンさんを訪問して、彼のピアノを大変注意深く調べました。宮廷楽師が私たち西洋の音階と彼ら日本の音階の違いを理解した時に、彼は、「自分たちの音楽が改善されることを長い間願っていました。そしてその時が今まさにやってきたのだと思いたい」と言いました。

その時、宮廷楽師は日本の琴（13 本の弦のあるハープ。他の国よりも日本では普通に用いられる楽器）について語りました。そして、それの弦を張り替えることができないかどうかと尋ねました。メーソンさんは、いろいろなサイズの弦を使うことによって、日本の古い音階に代わって、ピアノの音階を琴に与えることができるだろうと考えました[180]。

伊沢修二は「三弦ニ用フル各調子ノ上ニ掲ル所ノ如キハメーソン氏ノ早ニ発見セシ所ニシテ[181]」と述べているが、この日本の古い音階に代わってピアノの音階を琴に与える様子を、大森貝塚の発見で有名なエドワード・モースは、その著『日本その日その日』で次のように描いている。

その午後ドクタア・ビゲロウと私とは、小石川にある高嶺［秀夫］[182]氏の家へ、晩餐に招かれた。―中略―食事が終るに先立って、美しいコト（日本の竪琴（ハープ）が二面持ち込まれ、畳の上に置かれた。その一つは高嶺夫人に、他は東京に於て最も有名な弾琴家の一人であるところの、彼女の盲目の先生（山勢松韻）に属するのである。高嶺夫人[183]は、彼女が巧妙は演奏者であることを啓示した。次に彼女は提琴（ヴァイオリン）を持って来た。盲目の先生は、弦を支える駒を、楽器のあちらこちらに上下させて、それが提琴と同じ音調になるようにし、彼の琴を西洋音楽の音階に整調した。高嶺夫人が提琴のような違った楽器で、本当の音を出すことが出来るとは信じられぬので、私は、どんな耳をぶち破るような演奏が始まるのかと心ひそかに考えた。いよいよ始まると吃驚した。彼女は大いなる力と

正確さとを以て、「オウルド・ラング・サイン」、「ホーム・スイート・ホーム」、「グロリアス・アポロ」を弾奏し、盲人の先生はまるでハープでするような、こみ入った伴奏を、琴で弾いた。高嶺夫人は曲譜なしで演奏し、盲目の弾琴家は、いう迄もないが、曲譜なぞは見ることも出来ぬのである。音楽は勿論簡単なものであるが、私を驚かせたのは、その演奏に於る完全な調和音である。彼女はたった 47 日間しか提琴を習っていない。私は、外国の、全然相違した楽器を弾いた高嶺夫人と、彼の楽器を変えて、彼にとってはまったく異物であるところの音調と音階とで、かかる複雑な演奏を行った弾琴家と、そのいずれに感心すべきか知らなかった。我々は、非常に遅くまで同家にいた。この経験は実に楽しかった[184]。

山勢松韻自身はメーソンについて次のように述べている。

音楽学校の先輩は、大概メーソン先生の薫陶をお受になりましたが、別して私は盲人の不自由なる身ゆゑ一方ならぬ御世話になりました。先生の申さるゝに、貴方は多忙なる身、殊に晩年にて西洋音楽の修業は甚た難事なれば、其初歩と併せて学理の一班を学ぶ方然るべしとて、時々一二時間づゝ御教授下されました。それが終わると何時も私の右の手を握りて「ライト、ハンド」、又は、頭を撫でて「ヘッド」などという工合に、簡単なる英語を御教へ下され、実に其懇切なる事は言葉に尽されませんでした、私のような不具人ながら今猶ほ学校に出勤して或は古典保存、或は新作書写等に普通楽譜を取扱ふことの出來るのは、全くメーソン先生と伊沢先生との賜だと存じ感謝に堪へません、先生は日本の音楽が御好で度々私を御招きなされて御聴きになり、又拙宅への時々御出になりましたが、御邦の風習が御好にて、箸を以て食事をなさることも一ツの御自慢でありました、先生がお独で御来訪の時は、宅に英語を解する者が居りませぬので、大概手まねと推量とで御咄しする事故、折々抱腹に堪へぬ様な間違がありました、御帰国後も屢々御書状を戴き、私よりも写真など御贈り致しましたが、唯今でも先生の御厚情はしばしも忘れません、この後とても忘れてはならむ御恩と肝に銘じておきます。

（ルビ省略、「メーソン氏逸話」[185]）

ここではメーソンと伊沢修二への感謝の念をもあらわしている。山勢松韻はカタカナ、ローマ字、五線譜による『箏曲譜』（文部省音楽取調掛、明治 21［1888］年）の選曲をした。これはメーソンによる音楽教育の賜物であろう。オルチンは『Hymnology in Japan』（明治 33［1900］年）[186]でこの『箏曲集』の序文（和文と英文）の英文を引用している。この時点でもオルチンはメーソンが行った盲人への音楽教育がどのような効果をもたらしたのか関心を持っていたと思われる。

オルチンは前述の書簡で「もし音楽教育に対する全国的な動きがあれば、それは教会をとおしてやってくるに違いありません[187]」と述べている。メーソンは盲人への音楽教育に

関して、オルチンのように直接教会のこと、また宣教については触れていない。盲人への音楽教育は彼らの社会参加をすすめるためのものだけでなく、キリスト教精神のあらわれ、すなわち弱き者、小さき者への眼差しと言えよう。彼も盲人への音楽教育に関して当然キリスト教の宣教のことが念頭にあったことは想像に難くない。そもそも欧米では音楽とキリスト教は不可分の関係にある。そして何よりメーソンは宣教の意志をもって来日した。盲人への音楽教育こそが彼にとって一番の相応しい宣教事業だったのであろう。

7、19 世紀アメリカの宣教

当時アメリカの音楽教育の最先端はボストンだった。そのボストンからメーソンは来日してきたのである。ボストンでは、日曜の礼拝に奉仕できる人材を育てるため、月曜から金曜まで基礎的な音楽の技術を習得させるという理由で、公立学校の授業に音楽の科目を導入すべきであるという見解が主流を占めていた[188]。教育の場面でも音楽とキリスト教は不可分であり、それを担う中心は教会なのである。オルチンの言葉「もし音楽教育に対する全国的な動きがあれば、それは教会をとおしてやってくるに違いありません」はこのことが背景になっている。そしてその教会で盲人を再教育して、それまで同様自活の道を歩ませるというのである。

ここでの音楽とは単なる技術の一つではない。19 世紀アメリカにおけるキリスト教の宣教活動を特色づけるものの一つに音楽による宣教がある。当時の宣教活動の中に占める音楽の役割は今日我々が考えるものをはるかに超えている。彼らは熱心に西洋音楽の導入をその宣教地ですすめている。このムーブメントの根底にあるものは音楽とは神の摂理のあらわれであるという考え方であった。神の摂理は「自然で完璧な音階」としてこの世にあらわれている。神のみの業のあらわれの一つである音楽を広めること、すなわち盲人に音楽を教育すること自体宣教としての意味を持っている[189]。同様に学校教育の現場で唱歌の曲に讃美歌の曲をはじめとする西洋音楽を採用することは神の摂理を伝えることになり、宣教そのものと考えることができる。メーソンが『小学唱歌集』に讃美歌の曲を採用したのも、メーソンを日本に派遣したトゥルジェがその報告を聞いて「日本のキリスト教化はキリスト教音楽によって大いに助けられている[190]」と述べ、「日本はすでに引き離すことのできない絆でわれわれと結びついている[191]」と海外宣教の結実を宣言したのも、音楽による宣教が念頭にあったからだと考えられる。この件に関しては次章「第 4 章　日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教」でさらに展開する。

8、メーソン、ベル、サリバン、ヘレン・ケラー、伊沢修二

さてここで冒頭に名をあげたメーソン、ベル、サリバン、ヘレン・ケラー、伊沢修二のつながりを考えてみたい。

前述ジョン S. ドワイト宛書簡にあらわれるパーキンス・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインドはボストン郊外ウォータータウンにある、当時より最先端の教授法で教育を行っていた盲学校である。ヘレン・ケラーの家庭教師として著名なアン・マンスフィールド・サリバンが 1886 年卒業している。資産家のヘレン・ケラーの父が娘の教育を相談するのが電話の発明で有名なグラハム・ベルである。ベル博士の紹介でパーキンス・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインドのアナグノス校長宛にアラバマ州のヘレン・ケラーの父は依頼状を書き、推薦・派遣されたのがアン・マンスフィールド・サリバンだった。ヘレン・ケラーは籍をおいてはいないがパーキンス・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインドに度々通学している。

グラハム・ベルの祖父は吃音矯正法をつくりだし、父のメルビル・ベルは聾唖教育の方法である読唇法・視話文字（法）の発明者だった。グラハム・ベル自身も聾唖教育に熱心で、私財を投じてワシントンで学校経営をしたこともあり、1890 年にはアメリカ聾唖教育促進協会を設立するため 25000 ドルを寄付した。キリスト教精神のあらわれであろう。1863 年から 1864 年までスコットランド北岸マレー州エルギンで音楽（ピアノ）とエロキューションの教師として過ごした[192]。またメーソンがニューイングランド音楽院に在籍の頃、ニューイングランド音楽院の夏期学校（イースト・グレンヴィッチ・アカデミー）の教員名簿にその名が掲載されている。すなわちメーソンとベルは一時期同僚だった。音楽家になることを希望していたベルとメーソンとの間で盲人教育・音楽について話し合う機会が持たれた可能性も考えられる。

留学中の伊沢修二は英語習得（特に発音）に苦学していたが、1876 年フィラデルフィア米国独立記念博覧会に出品されていたグラハム・ベルの父が発明した視話文字から「唖者が発音矯正できるなら、普通人の発音矯正ができない道理はあるまい」とボストンに戻るとグラハム・ベルから視話法を学び、英語習得の初志を貫くことができた。また、唖者教育に使われていた視話法との接触は、その後彼の吃音矯正の事業においても成果をあげるにいたった。グラハム・ベル自身が盲人教育にも熱心だったことから、ベルから盲人教育に関しても感化を受けていたに違いない。音楽と盲人教育は結びついており、それを深く認識していた伊沢修二はリードオルガンを京都府立盲学校に贈ったのではなかろうか。リードオルガンはピアノに比べ安価で移動に便利である。軽量で折畳みできるリードオルガンはミッショナリーオルガンと呼ばれ宣教と結びついており[193]、僅かな例外を除いて宣教師、また宣教師夫人はまず間違いなくオルガンを演奏することができた。ちなみに伊沢修二はボストンでグラハム・ベルと電話連絡をしたことがあり、彼は日本人で最初に電話で話した人として知られている[194]。

グラハム・ベルは、明治 31（1898）年来日、伊沢修二と再会、伊沢修二は明治 31 年 11 月 11 日、東京盲唖学校におけるベルの演説の通訳をしている。ベルは明治 31 年 11 月 21 日京都府立盲学校を訪問、彼の盲人教育への関心の強さを感じさせる。ここには盲人教育と音楽と宣教がどのような結果をもたらしたか確かめたかったという事情もあったのでは

なかろうか。後にヘレン・ケラーも京都府立盲学校（昭和 12 年 5 月 10 日）を訪問した[195]。彼女は盲、聾、唖の三重苦だが、キリストの愛に接し多くの著作を残した。世界各国を回って障害者の厚生、福祉のための講演、募金に努め、各地に福音と身体障害者への愛情を訴えた。これも一種の宣教事業と言ってよいのではなかろうか。自伝『わが生涯』はグラハム・ベルへ捧げられたものである[196]。

メーソンと伊沢修二のボストンでの出会い以来の強い絆はここで述べるまでもない。マコナシーの論文には「そして、二人の学生がメーソンの家に次の土曜日、夕食にやってきて、その後日本の音楽について語り合うことが申し合わされた。これは、定期的な日曜の夕方の集まりの始まりだった。そこで、若い学生（伊沢、目賀田）はメーソンに日本の音楽について教え、そしてそのお返しとしてわれわれの西洋音楽システムを教わったのである[197]」と書かれている。伊沢修二はメーソン招聘に尽力し、彼の来日後は音楽取調掛の責任者として彼を擁護し、また数々の書簡の中で常に尊敬と信頼の念をもって接していた[198]。

これらの人たちは、伊沢修二については断言できないが、すべてキリスト教をバックボーンに持つ人たちである。その伊沢修二であるが、師範教育・音楽教育・体操教育・実業教育・国語と中国語研究・聾唖教育・吃音矯正事業・台湾教育・教科書編纂学制研究会等多方面で活躍した明治の先覚者である。彼は、冒頭ご紹介した吉田論文に述べられている宣教師が行った事業である教育、出版、医療、看護、福祉、音楽、体育、芸術とパラレルな事業を成し遂げた人物である。洗礼を受けてはいないが、彼の行動の動機には宣教師がめざしたことから受けた強い影響があるのではないだろうか。

9、結語

明治期の盲人教育と音楽を調べていくと、盲人教育そのものが、キリスト教をバックボーンに持つ人たちと宣教師のネットワークによってなされた宣教事業であるという側面が浮かび上がってくる。

これまで盲人教育と音楽は関連性をもって語られることは多くはなかった。メーソンの作成した撫譜を伊沢修二が彼個人によるものとしようとしたため、メーソンの盲人教育の業績が伝わりにくくなったこともその原因の一つであろう[199]。しかし、最大の原因は日本の盲人教育史と音楽教育史が宣教、宣教師の観点から論じられることがほとんどなかったためであろう。盲人教育と音楽の関係は大きな宣教事業の一角としてとらえるべき課題であったと考える次第である。

第 5 章　日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教

1、はじめに

明治期さまざまな日本語歌詞の歌の曲に讃美歌が使用された。日本人が作曲した曲（洋楽）がまだ未発達だったこともあろうが、讃美歌や南北戦争の曲に魅力的な曲が多かったことが最大の原因であろう。現在でもそうであろうが、替歌になる曲は印象に残る曲が多い。その筆頭が《ごんべいさんの赤ちゃん》＝《Battle Hymn of the Republic（リパブリック讃歌)》であろう。本家アメリカでも多くの替歌になっている。この場合原曲が明らかになっており、由来も知られている。しかし、日本の唱歌の場合、特に『小学唱歌集』の場合には数曲を除いてはその原曲は明らかにされてこなかった。その理由として 19 世紀アメリカの海外宣教と当時の日本の特殊な事情があることが知られるようになってきた。この章の第 1 節では、日本の讃美歌、唱歌と 19 世紀アメリカの海外宣教[200]を論じ、第 2 節では、日本の替歌と南北戦争の歌、讃美歌の関連[201]について述べてゆきたい。これらの根底には音楽による宣教という 19 世紀独自の考え方が背景になっていると思われる。これらを代表する人物が、お雇い外国人としてボストンから来日したルーサー・ホワイティング・メーソン。彼は自らの音楽システムの導入とともに海外宣教の意思をももっていた。そして彼を日本に派遣し、本国アメリカで海外宣教に意欲を燃やしていたボストンのエバン・トゥルジェ。そして、日本で音楽による宣教を実践したジョージ・オルチン。彼はボストンに本部のある宣教団体から派遣され、日本における教会音楽の父と呼ばれている[202]。

第 1 節　日本の讃美歌、唱歌と 19 世紀アメリカの海外宣教

2、トゥルジェ、メーソン、オルチンの略歴

エバン・トゥルジェ（Eben Toujée）[203]は、19世紀アメリカを代表する音楽教育家、教会音楽家であった。彼は1834年、ロードアイランド州ウォリックで生まれ、父方の家系はユグノー教徒であった。イースト・グリニッジ神学校で一般教養を、プロヴィデンスで音楽を学んだ。15才でプロヴィデンスの音楽ストアーの店員になり、この間雑誌『キーノート』を編集、出版している。この『キーノート』が誌名変更して、1855年『マサチューセッツ・ミュージカル・ジャーナル』になった。1853年ボストンに音楽学校を設立しようとしたが失敗し、その後、おそらくアメリカ最初のコンセルヴァトリーである音楽学校をマサチューセッツ州フォールリヴァーに設立した。生徒数は約500人であった。1855年ニューポートに転居し、オルガニストとプライベートの音楽教師になり、1861年から1863年までトゥルジェはイースト・グリニッジ・セミナリーの音楽監督になった。このイースト・グリニッジ・セミナリーの音楽学部の規模が大きくなったところで、1864年彼はこれをミュ

ージカル・インスチテュート・オブ・プロヴィデンスに再編成した。1867年からボストンに移り、ロバート・ゴールドベックとともにアメリカ最初の音楽教育機関であるニューイングランド音楽院を設立した。このニューイングランド音楽院には、政府給費留学生の第1号である幸田延が留学（明治22［1889］～23［1890］年）しており、安部正義、園部順夫等教会音楽家が留学している。現在でも多くの日本人が留学し、また近年はオルガンの主任教授を林祐子氏がつとめたこともあり、日本との関係は深い。

1873年、ボストン・ユニヴァーシティー設立に際しては音楽部長に就任し、1869年ウェスレニアン・ユニヴァーシティーから名誉音楽博士の称号が与えられた。1891年ボストンで死去。

著作は『3 lectures on music, 1868-1870』、『The New England Conservatory’s Pianoforte Method』（Boston, 1870?）。また雑誌の主幹としては前述『The Key Note』（Fall River, 1851～1855?）、『The Massachusetts Musical Journal』（Boston, 1855～1856）。他に『Boston Music Journal』（Boston, May～June, 1856）、『Boston Musical Journal and Musical Gazette』（Boston, 1856～1857）、『The Musical Herald』（Boston, May, 1880～1891）。

教会音楽に関しては、オルガニスト、聖歌隊指揮者、讃美歌編集者として活躍した。

聖歌隊指揮者としてのトゥルジェは、1869～1872年ボストンのピース・ジュビリーの大聖歌隊を組織し、そして1877年、ムーディー・サンキーのリヴァイヴァル運動がボストンで行なわれた時、2000名からなる大聖歌隊を指導した。

編纂した讃美歌集は、『The Tribute of Praise』（New York and Cincinnati, 1874）、『Chorus Choir』（Boston, 1875）、『The Lesser Hymnal』（New York and Cincinnati, 1875）、『Hymnal of the Methodist Episcopal Church with Tune』（New York and Cincinnati, 1878）の4点。

彼はプレイズ・ミーティングの儀式の創始者と言われている。プレイズ・ミーティングとは、聖書の句を音楽に乗せて歌う礼拝儀式のことで、アメリカのリヴァイヴァル運動で福音唱歌が台頭する大きな要因になったと考えられている。

トゥルジェは公立学校の音楽教育促進にもつとめ、1869年には彼の提唱により、音楽教師最初の全国集会が全米音楽会議としてボストンで開催された。また1876年、アメリカの音楽教育者の間で、Music Teachers National Association（全米音楽教師連盟）が組織されると、その初代会長になっている。この時の副会長の一人にL. W. メーソンがいる。

またトゥルジェは音楽家であるとともに、熱心なメソジストのクリスチャンでもあった。彼の中では音楽とキリスト教が強く結びついており、「音楽はわれわれを天国へ導く神の声である」[204]と述べている。社会的なキリスト教の活動としては、ボストンYMCA、ボストン・ミッショナリー・ソサエティー、ノースエンド・ミッション・ソサエティー等の会長を歴任している。彼の海外宣教意識は日本側の要請に応えるかたちで、メーソンの日本への派遣を計画することであらわされ、そしてメーソン派遣は実現に至ったのである[205]。

音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メーソン（Luther Whiting Mason）[206]は、1818年、アメリカ、メイン州ターナーに生まれた。1840年、ローエル・メーソンが指導するボストン・アカデミー・オブ・ミュージックの課程を修了。各地の音楽教師等の職につき、1856年、オハイオ州シンシナティの公立学校の音楽教師を務めた。1860年、シンシナティ教育委員会の要請で『ヤング・ジンガー』を編纂、掛け図（チャート）も作成する。1871年からボストンのギン社から『National Music Course』（『国楽体系』）を順次出版する。この『国楽体系』がボストンの公的カリキュラムに採用され、1876年、目賀田種太郎、伊沢修二と知り合い、音楽の教授をする。1879年、目賀田と日本での2年間の就任契約をかわし、1880年3月来日、1882年帰国。1896年、メイン州バックフィールドで死去。日本での功績からこの年、勲四等瑞宝章を授与されたがアメリカに送られた時には死去していた。在日期間は短いが、『小学唱歌集』、『唱歌掛図』の発行。ピアノ、オルガン、楽譜（バイエル等）の購入、整備。調律、音楽教師の養成、令人への指導、演奏会の開催等をとおして日本の音楽教育の礎を築き、ピアノ教則本『バイエル』の使用等現在でも大きな影響力をもっている。

またメーソンは来日直前、4種類の讃美歌集を編纂しているが、通常の讃美歌集だけでなく、女声用、男声用、混声用と聖歌隊用の讃美歌集も同時に刊行している[207]。そしてこの時期に蓋を閉めればオルガンから事務机に変わるオルガンデスクも考案している[208]。聖歌隊用讃美歌集、オルガンデスク、唱歌掛図とメーソンは創意・工夫の人でもあった。

ジョージ・オルチン（George Allchin）の日本の教会音楽史における貢献は大きい。

オルチンは、1852年イギリス、ケント州プラムステッドに生まれた。1872年カナダに渡り、1877年アメリカに移住。1880年バンガー神学校、1881年ウイリアム・カレッジ卒業。1882（明治15）年、ボストンに本部があるアメリカン・ボード（The American Board of Commissioners for Foreign Missions、コングリゲーショナル教会が母体 ）宣教師としてその年結婚したネリー・ストラットン（Nellie Stratton）と来日。1935年ニューヨークで死去。3度の帰国をはさんで、1920（大正9）年迄日本（主に大阪）で伝道した。

日本の教会音楽に果たしたジョージ・オルチンの功績は、大きく分けると4つがあげられるであろう。

第一に、明治初期各派独自に出版していた讃美歌集の統一をはかり、そして〈日本におけるトニック・ソルファ方式の父〉と呼ばれるように、讃美歌における歌唱の分野に大きく貢献した。彼は2教派（日本基督教会［長老派、改革派］と組合教会［会衆派］）共通の『新撰讃美歌』（明治21［1888］年、歌詞だけの版）、5教派（組合教会、日本基督教会、メソジスト教会、浸礼教会、基督教会）による『讃美歌』（明治36［1903］年）、『讃美歌第二編』（明治42［1909］年）の編集委員となり、特に音楽の編集を担当。彼の功績は『新撰讃美歌』の序文に次のように述べられている。「編輯ニ従事セシハ松山高吉奥野昌綱植村正久ノ三氏ナリ而シテ諧調ヲ附シタルハ専ラオルチン氏ノ労ナリ」。

第二に、彼は明治初期の讃美歌集をはじめとする讃美歌のコレクションのすべてを神戸

女学院に寄贈し、後学の徒に道を開いたことである。このコレクションはオルチン文庫と呼ばれている。

第三に、『Hymnology in Japan』（「日本における讃美歌」[209]）を著した。これは日本における讃美歌に関する最初の本格的研究論文であり、日本の讃美歌史と日本における讃美歌の特質を述べている。この『Hymnology in Japan』は、明治33（1900）年10月、東京で行なわれた第3回宣教師協議会の席上発表されたもので、明治34（1901）年『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24～31, 1900(Methodist Publishing House)』に収録された。この論文の発表された同じ年の4月、大阪で開催された福音同盟会で共通の讃美歌集を出版することが満場一致で採択され、統一讃美歌集刊行への機運が一気に高まっていた。そして10月、ジョージ・オルチンが東京の宣教師協議会の席で、この『Hymnology in Japan』を発表し、この年の内に5教派による讃美歌委員会が組織された。そして3年後の明治36年に5教派合同の『讃美歌』が出版されたのである。この『讃美歌』は版を重ね、改訂が加えられ、今日に至るまで継承されている。

第四に、日本で最初の本格的オルガン教本[210]である『風琴教授詳説』（明治24［1881］年）[211]を著した。彼はまた明治24年頃オルチン宅で音楽を学び、楽器製造に興味を持っていた岸和田の辻茂治を上海のメーソン・アンド・ハムリン社に紹介した。辻茂治は5年後に帰国、その後リードオルガン製作者になっている[212]。

上記『風琴教授詳説』以外の著作は、トラクト『ほととぎす　放蕩息子の話』(警醒社　明治33［1900］年6月)、『世はなさけ　The good Samaritan』(警醒社　明治33［1900］年6月)、『The Parables of Jesus and Sermon on the Mount in modern English』(Kyo-Bun-Kwan, 1914）が知られている。

オルチンは幻灯を使った伝道旅行で知られ、その際上述のトラクト『ほととぎす　放蕩息子の話』、『世はなさけ　The good Samaritan』を配布していたようである。オルチンは前述のように日本における教会音楽（讃美歌・オルガン）に貢献した。彼の死にあたって、ニューヨーク・タイムズは、「日本における教会音楽の父」と彼のことを報じている[213]。

3人に共通するキーワードは＜ボストン＞という土地である。トゥルジェはボストンにアメリカ最初の音楽教育機関であるニューイングランド音楽院を設立し、音楽教育に取りくむ。そのニューイングランド音楽院のスタッフの一人であるメーソンはボストンの音楽教育監督でコングリゲーショナル派の教会員であった。メーソンと同じ教派のオルチンはボストンに本部のあるアメリカン・ボード＜コングリゲーショナル派が母体＞の宣教師として来日している。

3、宣教師ジョージ・オルチンから見た日本の音楽

「宣教師から見た日本の日本の音楽」をジョージ・オルチンの目をとおして展開してゆ

きたい。

明治 13（1880）年 3 月、音楽のお雇い外国人として明治政府に招聘された L. W. メーソンはボストンから来日した。教派はコングリゲーショナル派でり、同じ教派のオルチンとメーソンは既知の存在だった[214]。明治 15（1882）年 7 月メーソンは帰国し、メーソンは再度来日するつもりでいたが、この年の 11 月文部省から突然解雇されてしまった[215]。まるで入れ替わるように 11 月、アメリカン・ボード宣教師、ジョージ・オルチンは来日する。この宣教団アメリカン・ボードはコングリゲーショナルを中心とした団体であった。オルチンは来日してからボストンのアメリカン・ボード本部へ報告のための書簡をたびたび送っているが、この書簡には、当時の日本の教会の実態や、音楽教育の様子が描かれている。そして、その書簡の中には、オルチンの目から見た日本の音楽（多分にメーソンの影響があると思われる）が述べられている。まず、はじめに彼のアメリカン・ボード本部への第 1 報（1882 年 11 月 14 日、大阪）を見てみよう。

クラーク様

わたしは喜んであなたに日出ずる国に無事に到着したことをお知らせいたします。日曜日（12 日）の午後 5 時に私たちは神戸に上陸しました。―略―わたしはミス・ギューリックにともなわれて日本語の礼拝に行きました。上陸してから 2 時間後わたしは日本語の讃美歌を歌っていました。わたしは日本語がまったく判らないにもかかわらず、心から歌いました。―略―

日本語がまったく判らないオルチンはいったいどのようにして日本語で讃美歌を歌ったのであろうか。上記の書簡の他の部分で、彼を歓迎した人の一人としてアメリカン・ボード宣教師カーチス（1845～1913）の名も登場する。このカーチスによってこの年の 3 月、日本で最初の本格的讃美歌集『讃美歌并楽譜』[216]が刊行され、同年宣教師用のローマ字版『SAMBIKA SONGS OF PRAISE 』[217]も刊行されていた。おそらくこの『SAMBIKA SONGS OF PRAISE』収録の讃美歌の何曲かがオルチンたちによって歌われたのであろう。また、同じカーチスによる明治 12 年刊『さんびのうた』[218]のローマ字版『SANBI NO UTA』[219]も既に刊行されており、この『SANBI NO UTA』収録の讃美歌を歌った可能性も考えられる。

アメリカン・ボード女性宣教師タルカットのクラーク宛書簡によれば、メーソンはアメリカン・ボード宣教師カーチスと明治14(1881)年7月から9月の間に日光で会っていた[220]。『讃美歌并楽譜』の編纂者であるアメリカン・ボードのカーチスと文部省の『小学唱歌集』（明治 15 年～17 年）を刊行するメーソンが日光で会っていたわけである。偶然であろうか、『讃美歌并楽譜』と『小学唱歌集』が刊行される前年である。メーソン編纂による『小学唱歌集』（初編～第三編）には 91 曲中 16 曲、讃美歌と同一曲が存在し[221]、唱歌と讃美歌の関係が近年マスコミでも話題になったが[222]、この二人の人間関係も唱歌と讃美歌が非常に近い関係にあったことを示している。『讃美歌并楽譜』と『小学唱歌集』には共通の曲が

含まれているなど互いの影響関係を感じさせるが[223]、残念ながら、日光でメーソンとカーチスが何故会っていたのか、また何を話し合ったのか示す資料はいまのところ存在しない。

さて、来日した宣教師オルチンは日本のキリスト教（教会）音楽をどのように報告したのだろうか。来日約1年後、オルチンは第2信（明治16［1883］年11月2日、大阪）で、＜音楽による宣教＞の現場について次のように述べている。

クラーク様

1年前の今日、わたしと妻は神戸に上陸しました。―略―ミス・コルビーは、別の仕事をするので女学校での音楽の授業から解放され、喜んでいました。カーチス師は、わたしたちの教会を改善するのを可能にするでしょうが、彼の衰弱した健康なりの仕事をしています。その仕事は現在ほとんどすべてわたしの上に降り懸かっています。二つの教会は讃美歌の歌唱指導を毎週定期的に受けています。

日本の人に教え易く、使用するに値する讃美歌のストックは増えていますが、わたしは彼らには今までも歌われ、これからも歌い継がれていくような曲の練習も必要だと時々感じています。そう、わたしは歌のリーダーと見なされる3、4人の人を3つの大阪の教会から選び、リーダーのクラスをつくりました。

このクラスは音楽理論の授業のため週 1 度、わたしの家に集まります。現在は、そのほか毎週定期的に 4 つの音楽の授業をしています。わたしが知っている日本語は何と少ないことでしょう。そしてわたしのほんの少しの言葉のストックが使い果たされたとき、クラスにいる英語の判る人に訴えます。時々は英語の話せる人がいなくて、それからしばし静かな時があります。

言葉が足りないとき、わたしのジェスチャーはとても表現に富みます。

クリスチャンが音楽に対してみせる熱烈さを見るのは喜ばしいものです。日本の歌の大部分はクリスチャンが使うには不適当です。これらは常に何かの楽器、三味線や琴の伴奏で歌われます。

日本人がクリスチャンになった時、日本の歌は歌われなくなり、三味線や琴もまったく演奏されなくなるでしょう。日本人は失った日本音楽のかわりに、彼らを満たすものとして熱心にキリスト教の讃美歌に向かっています。―略―

女性宣教師コルビー、カーチスから讃美歌の歌唱指導がオルチンに移ってきたこと、讃美歌の歌唱指導の実際、組織化が述べられている。そして伝道が成功し、日本人がクリスチャンになった場合、日本伝統音楽を捨て去り、西洋音楽（讃美歌）に向かうであろうこと、その理由として、日本伝統音楽はキリスト教音楽として使用するにふさわしくないという見解が述べられている。

オルチンは日本の音楽についてどのように捉えていたのか、前述第2信（1883年11月2日、大阪）で次のように報告している。

すべての人が歌うということは、日本の礼拝にとって喜ばしい特徴です。日本では歌うことがいつもユニゾンであるので、宣教師の洗練された耳は不協和音のショックにあわずにすんでいます。いくつかの西洋の音程は、現在の多くの日本人にとっては、正確に歌うことができないことがあります。わたしが調査した楽器では、西洋の音階のすべてを見つけました。

しかし日本人は西洋の音階の中に現れる秩序に従って音を使わないし、わたしたちの音楽のフレーズには馴染みがないのです。ほとんどの彼らの音楽は短調です。わたしが送るこの手紙に、日本の音楽のサンプル［5 音階］を同封します。これは日本語の讃美歌《ぬばたまのよも　ほのぼのと　しののめあくる　あしたより。あおひとぐさの　まごころのくゆればつみも　きよぬめれ》で日本の古い曲［今様］の曲が採用されています。歌詞は英語讃美歌《The morning light is breaking》の翻訳で今様は何度か東京で使われましたが、わたしはここのクリスチャンのために先週はじめて大阪で教えました。今まで讃美歌《ぬばたまのよも》には《Webb》という曲を使っていました。この讃美歌には 3 節の歌詞があります。そしてもし音楽を友とする誰でもがこれらの歌詞を望むなら、カーチス氏が次の讃美歌集にそのままの歌詞で残してくれるのはまちがいありません。

―略―

曲はユニゾンで歌われ、演奏されます。もしピアノで演奏され、同時に 1 オクターブ下が演奏されたならば、その効果は琴（日本のハープ）に似ています。言葉の発音に関しては『皇國 The Mikado's Empire』の 16 ページを参照することができます。

わたしは音楽に関してとてもたくさん書いたので他のことを書く時間が少しもなくなってしまいました。

第 2 信（1883 年 11 月 2 日）でのオルチンの日本音楽に対する評価はオルチン自身が考えた独自のものであろうか。オルチンは日本音楽の特徴として、短調が多いこと、ユニゾンで歌うこと、5 音階であることをあげているが、5 音階に関しては、日本の音階が 5 音音階であることの発見者はメーソンだといわれている[224]。地方紙 『ボストン　ヘラルド　サップルメント』(1879 年 11 月 8 日) の記者はメーソンが来日する前、メーソンを特集 (Music in Japan) して次のように述べている[225]。「日本音楽の特徴について、西洋の 7 音階とは違う 5 音階であること、従って不完全なハーモニーにしかならない」ので、「洗練された耳には大変不愉快な結果をもたらす」とまで書いている。オルチン書簡の「日本の歌の大部分はクリスチャンが使うには不適当」、「日本では歌うことがいつもユニゾンであるので、宣教師の洗練された耳は不協和音のショックにあわずにすんでいます。」と併せて考えると、日本の伝統音楽はキリスト教の音楽としては不適格であり、西洋音楽のみが適しているとメーソン、オルチン双方とも考えていたと思われる。この問題は「6、音楽に関する 19 世紀日米の見解の差」で論述する。

また、この『ボストン　ヘラルド　サップルメント』のこの記事には、ヨナ抜き 5 音階で、例外的に美しい曲として讃美歌《There is a happy land》を紹介している。そしてこの讃美歌《There is a happy land》の曲が、メーソン来日後彼が編集者の一人だった『小学唱歌集』の《春のやよひ》と《わが日の本》の曲に採用された。

オルチンは、宣教地である日本のことを知ろうとしていたと思われる。ボストンのアメリカン・ボード宣教本部はオルチンに対し、彼の来日以前から音楽の分野へ貢献を期待しいた[226]。音楽と宣教をむすびつけて考えていたオルチンは、当然同じ教派のメーソンの活動に注目していたであろう。ボストンの宣教本部とコンタクトをとっていたオルチンは恐らくこの新聞記事も読んでいたと思われる。もし読む機会がなかったにしても、これから紹介するボストンで刊行された雑誌のいずれかの記事を読んでいたのではあるまいか。これらの雑誌には、日本滞在中のメーソンの様子と、日本音楽の分析、すなわち日本の音楽が 5 音階であることなどが随所に述べられている。この第 2 信はオルチンがメーソンの日本の音楽に関する論を再確認し、そのことを中心に報告した書簡と考えるべきではないかと思われる。

4、L. W. メーソン伊沢修二、目賀田種太郎

さて、メーソンは何故来日前に日本音楽のことを分析できたのであろうか？　ここでまずメーソンと日本人との出会い、当事者の日本人である伊沢、目賀田の側の資料からみてみたい。

伊沢修二は 1851（嘉永 4）年 6 月 29 日信濃国伊那郡高遠の生まれ、昭和 6（1931）年 5 月 3 日没。師範教育・音楽教育・体操教育・実業教育・国語と中国語研究・聾唖教育・吃音矯正事業・台湾教育・教科書編纂学制研究会等多方面で活躍した[227]。

目賀田種太郎は 1853（嘉永 6）年 7 月 21 日江戸本所太平町の生まれ、大正 15（1926）年 9 月 10 日没。米国留学生監督・横浜米国領事裁判所代言人・専修大学創設・大蔵省官吏・横浜税関長・主税局長・韓国財政顧問・貴族院議員及び枢密院顧問官等で活躍し、メーソン来日時から司法省に転じ（5 月 5 日）、音楽取調掛に関わっていない。このため日本の洋楽導入に関して伊沢修二一人の働きと思われているが、目賀田のメーソン来日までに果たした功績は大きい[228]。

アメリカでの 2 人に関して、特に洋楽導入については既に山住正己著『唱歌教育成立過程』等[229]に述べられているので、ここではメーソンと伊沢・目賀田の出会いと唱歌掛図に関してだけ触れたい。

伊沢修二はメーソンとの出会いを次のように述べている。

其頃幸に友人由利子爵の子息に三岡丈夫と云ふ人があり、矢張同じく米国に留学してボストン府に居られたが、自分が同府に赴いて同氏に面会したところ、三岡氏が云ふに

は、近頃奇怪な米人に邂逅したが、同人は是非日本人に音楽や唱歌を教えてやりたいと言ひ、頻りに僕に習ひに来い来いと勧めるけれども、僕は「エンジニー」工学を学んで居るのだから、音楽などは用がないのであると云はれたが、丁度自分が音楽の事で、大に苦心して居るといふことを聞き、一つ同人に教はつては如何と、話されたものだから、自分は丁度好い時節であつたから、三岡氏に連れられて、其米人を訪問することゝなつたが、其人は即ち音楽家メーソンと云ふ人であつた、これからメーソンの懇切なる世話で、毎週土曜からメーソンの家に赴き、其夜一心に音楽と唱歌とを教へて貰ひ、翌日曜には同人の紹介にて、各種の学校を参観し、其夜も同家に一泊し、翌月曜の朝、再び唱歌の稽古を為して、後旅館に帰ることになり、自分は深くメーソンの厚意に感じ、大に奮発して稽古したのであるが、やがて日本の言葉をつけて、唱歌をやることにし、『蝶々蝶々菜の葉に止まれの』の唱歌の音譜は、実は当時メーソンの宅にて作つたものである。

「予が関係したる創業教育」[230]

此頃余が留学中の友人に三園丈夫と云ふ人あり、一日ボストン府に行き図らずも三園氏に遇ひけるに、同氏の言に、余は過ぐる日偶然途上にて物好きなる米人にあへり、彼レ先ツ余に日本人なるや、支那人なりやと問ふ、余日本人なりと答へしに、されば我家に来るべしとて其家に伴ひ行き、余に唱歌を教へんと試みけり、余もあまりの事の意外なるに驚き、何故ぞと問ひければ、彼は是非とも日本人に唱歌を習はせ、日本国に音楽を導き入れたきためならば、その望に応ぜられたしといへり、されど余の目的は工学の修業にあればとて、終、断はれりと語る、余は此言を聞き世にも有り難き仕合のあるものかな、我こそ彼の人に就きて聴こえぬ耳をも開き、歌へぬ声をも発してんと、直チに三園氏に紹介を請ひてメーソン氏の家に到り、こゝに余が意中を打ちあけて告げゝれば、君の喜大方ならず、応答終る否や忽チド、レ、ミ、ファ、の教授に取掛られたりき、爾後毎週土曜日午後の同氏の宅に到ることゝし、その度毎に夕食を振舞はれ、それより唱歌の教授をうけ、翌朝また朝食を振舞はれ、後所々の音楽校書籍館等に伴はれ、有名なる人々に逢い有益なる談話を聞き、午後よりは十数里隔たるブリッヂウォートルの師範学校に帰り来るを例とせり、かくて追々耳も聞こえ、声も出で来りければ、少しにても出来得るだけ彼音楽を日本化して、我に利用するの途を開くべしとして、彼是打開け相談して、ド、レ、ミ、ファに代ふるに、ヒ、フ、ミ、ヨを以てライトリーロウ、ライトリーロウに代ふるにチョーチョ、チョーチョを以てするなど今日、我国の学校唱歌発達の仁子ともいふべきものは、早くもメーソン氏が家隅の一室中に成立てるなりけり、当時目賀田氏もボストンに駐留し、三園氏も相替らず同府に留学したりければ同氏等も折々相会して歌ひ、又メーソン氏の二嬢ヴヲルジニア、ケチーは常にピアノを弾じて唱歌を助け、時々ピアノ（ケチー嬢）オルガン（ヴヲルジニア嬢）ヴァイオリン（メーソン氏）などを合わせ高尚の音楽を奏して聞かせられき。　「メーソン氏を弔ふ」[231]

誤植のためか、三岡が三園になっているが、三人の日本人とメーソンとの出会いの経緯、唱歌《蝶々》の成立が述べられている。三岡丈夫は東京府知事由利公正の長男。明治5(1872)年、15歳で父とともに渡米、ボストンのバタナム家に寄宿留学した。帰国後明治13(1880)年文部省嘱託として岡倉天心が就任するまで音楽取調掛でメーソンの通訳をした[232]。

また、目賀田は次のように書いている。

> 続いてたいへんおもしろい事件が起こりました。三岡君が言うには、あるアメリカの紳士の宅に連れてゆかれたのだそうです。ヨーロッパ人の音楽が日本人の音楽の基礎として役に立つかどうか発見しようとしていて、彼はこの問題を独自に研究したがっていたのだそうです。私が伊沢君を紹介したのはこの時です。研究や調査がすんだころ、私たちは、文部省にこの成果について請願しました。学校音楽は日本の教育の法律の一部として公布されていました。しかし、当初、開始されなかったようです。ルーサー W.メーソン氏のこの示唆がわれわれの今日の学校音楽の基礎となったのです。『米國在留日本人　The Japanese in America』(安田寛訳)[233]

アメリカ側の資料はメーソンと日本人の出会いをどう紹介しているのであろうか。T. B.ローラー著『教科書出版の七〇年　ギン社の歴史』には次のように述べられている[234]。

> 1876年、フィラデルフィアで開催されたアメリカ独立100年記念博覧会には、ギン社の展示も行われた。ルーサー・メーソンは、博覧会会場をあちこち歩き回っているときに、偶然ギンの展示のところにやってきた。そしてメーソンの掛け図の前に立って、それを写している日本人を見かけた。メーソンはその異邦人に自己紹介をした。その異邦人は、日本政府から特に教育に関する展示を視察するようにと派遣されたのだと言った。この博覧会の視察により、メーソンが日本に招聘されるはこびとなった。従来使われていた日本の音階のかわりに、メーソンの音楽システムを導入することで音楽のシステムを刷新するためである。新しい体系は、日本中に広まった。そして、何年かの間に、日本の音楽はメーソンの歌として知られるようになった。メーソンは、3年間(ママ)日本に滞在した。なおいっそうの研究のために、彼は現在ドイツを訪問している。そして彼のシステムが、ドイツ語に翻訳されたことを知って喜んでいた。彼のシステムは歌の国からのすばらしい贈り物といえよう。

ここに登場する異邦人とは目賀田種太郎であろう。掛け図を写しているという記述が興味深い。またメーソン・伊沢の出会いはオズボーン・マコナシー著『日本における「メーソンの歌」』に述べられている[235]。

メーソンは地球の隅々から集められてきた驚くべきものの中を目を凝らしながら歩き回った。しかし、日本の美術と工芸ほど強烈な驚きや興味をかき立てる展示はなかった。日本がアメリカにその至宝の品々を紹介するのは、今回が初めてだった。そして、われわれアメリカの国民は、心から歓迎した。古風な趣のある品々や繊細な芸術品は魅惑的であり、われわれの祖父母はこの新しくて珍しい展示品の中から、数え切れないほどたくさんのみやげ物を熱心に家へと持ち帰っていった。

ボストンの家に戻ってまもなく、メーソンは偶然にトレモント通りで若い日本人と出会った。なにかに関心を持ったときの彼のいつもの習慣で、メーソンは情報の大本へと直接突き進んだ。そう、彼はその若い男性を呼び止めて、彼を大変魅了したフィラデルフィア博覧会のことについて述べたのだった。「しかし」とメーソンは言った。「私は日本音楽に関する展示品をなにも見ませんでした[236]。日本には音楽はないのですか？」「確かに、最上級の音楽が存在します」と若い日本人は答えた。「私たちには大変古くから続く、そして高度に進んだ音楽があります。しかし、残念なことに私は音楽に堪能ではありませんので、あなたにそれについてお教えすることはできません。しかしハーヴァードに通っている私のルームメイトは音楽に堪能です。彼があなたに喜んで説明してくれることでしょう。」

そして、2 人の学生がメーソンの家に次の土曜日、夕食にやってきて、その後日本の音楽について語り合うことが申し合わされた。これは、定期的な日曜の夕方の集まりの始まりだった。そこで、若い学生は、メーソンに日本の音楽について教え、そしてそのお返しとしてわれわれの西洋音楽システムを教わったのである。

若い日本人とは三岡丈夫であり、ハーヴァードのルームメイトとは伊沢修二であろう。これまでの資料からは事実関係に微妙な相違が存在するが、メーソンが積極的に日本人とコンタクトを取り、日本の音楽を分析しようとしている様子がうかがえる。日本の音楽への関心は、この時点（明治 10 年頃）で既にメーソンには日本へ行く意志を持っていたのであろう。

マコナシーの論文には「そして、2 人の学生がメーソンの家に次の土曜日、夕食にやってきて、その後日本の音楽について語り合うことが申し合わされた。これは、定期的な日曜の夕方の集まりの始まりだった。そこで、若い学生は、メーソンに日本の音楽について教え、そしてそのお返しとしてわれわれの西洋音楽システムを教わったのである。」と書かれているが、ではいったいどのようなことがメーソン、伊沢、目賀田の中で、日本の音楽として話題になり、どのような日本の音楽の分析がなされたのであろうか。

メーソン、伊沢、目賀田の 3 人は明治 11 年文部次官田中不二麻呂に提出した日本語による 15 曲からなる唱歌掛図の制作者でもあった。この掛図が大幅に増補改訂されたものがメーソン来日後刊行された『小学唱歌集』初編で、日本の唱歌の端緒を開くものである。唱歌掛図の製作がメーソンにとって、日本の音楽の分析ばかりでなく、日本語と（西洋）音

楽を検討する良い機会になっていたと考えられる[237]。

東京芸術大学には遺族によって寄贈された目賀田種太郎関係資料が残されているが、近年弘前大学（発表当時）の安田寛氏によって目賀田種太郎関係資料中の掛図に関する資料について分析・研究が発表された。この中に残されている手書きの楽譜はすべてが目賀田の手によるものであるが、目賀田の手になる楽譜にメーソンの書き込みがあるものがあることが判明した[238]。これらの楽譜から彼らの検討の様子がうかがえる。これらの楽譜の中には、掛図に採用された数え歌《一ト夜明ければ　賑やか（に)》(歌詞と楽譜）と《Happy Land》を含む数曲（楽譜のみ）の手稿譜があり、《一ト夜明ければ　賑やか（に)》はそのまま、また《Happy Land》は《春の弥生》となってともに掛図の曲に採用された。安田寛氏によれば、掛図 15 曲の構成は『A Preparatory Course and Key to the Second Series Music Charts and Second Music Reader 』から 8 曲、『National Music Charts　First Series』から 1 曲、不明 4 曲、目賀田関係資料の数え歌《ひとつとや》、《春の弥生》である[239]。そしてこの数え歌《一ト夜明ければ　賑やか（に)》、《春の弥生》は 5 音階である。また、目賀田は 4 分の 2 拍子の軽快な曲《HAPPY LAND》を、この掛図の《春の弥生》では、『小学唱歌集』の《春のやよひ》と同様に 4 分の 4 拍子で記譜し、原曲とは趣を異にしたゆったりとした曲調になっている。安田寛氏によれば、掛図の選曲にあたって、3 拍子、アウフタクトの曲が外されている。日本語歌詞の選定において目賀田は、西洋のミーター（詩形）ではなく、日本の詩形に多く見られる 75 調を採用しようとしていた[240]。日本の唱歌の端緒ばかりか、日本語で歌う西洋音楽の原型が既にここで検討されたと言って過言ではないと考える。その後の日本語の歌は、75 調の歌詞、4 分の 4 拍子、ヨナ抜き 5 音階が中心で、アウフタクトや 3 拍子を避ける傾向になっている。

5、メーソンにおける＜音楽と宣教＞、19 世紀アメリカ

メーソンはどうして、日本人に呼びかけ、日本の音楽を分析し、日本行きの意志を持ったのであろうか。日本人とのコンタクトの取り方に、何か使命観のようなものを感じるが、彼自身の音楽教育システムをただ単に日本に伝えたいというだけならばそこまではしないであろう。近年メーソンの来日の動機の中には、彼自身の音楽教育システムを日本に伝えたいというだけでなく、宣教の意思があった、ということが注目されるようになった[241]。アメリカ、コングリゲーショナル派の機関誌『コングリゲーショナリスト』（1885年9月10日）に宣教師アダムスが書いた記事「インタレスティング・ヒストリー」には次のように述べられている[242]。

> メイン州ガーディナーのコングリゲーショナルチャーチの50周年記念の行事のことは、パンフレットになって発表されています。前任の牧師であったA. D. アダムス氏の手紙には、かつてその町にいたルーサー　W. メーソン氏のことが述べられています。そして、

現在は再び彼の生まれ故郷にいます。アダムス氏は次のように述べています。

かつての兄弟たちの一人について更に立ち入って触れることは、現時点ではなんら問題がないと思っています。メーソンが、18歳か20歳の青年の時でした。彼はまさに教会に入ってきたところでした。メーソンは、宗教的な教育を受けてはいませんでしたし、初等教育だけしか受けていませんでした。メーソンは、彼の兄の店で日々の糧を得ていました。しかしメーソンの心の中のキリストが、彼の向上心と、特に肉体労働を超えたところにあるこの世の善きことを為そうという強い願望を目覚めさせました。彼が音楽を教えたかったのか、または異教徒の宣教師となりたかったのかは、メーソン自身まだはっきりとは判ってはいませんでした。何人かの人はメーソンのことを世間知らずだと笑いました。そして何人かは、彼がその道を進むように熱心に勧めました。メーソンの牧師は、彼を力づけるため、そして彼の勉強を助けるために牧師その人ができることを惜しむようなことはありませんでした。

そして今この話を手短にいうと、メーソンが導入した、また教授した音楽のシステムと音楽教育の指導法は、シンシナティとボストン、また他の公立学校によって、他のシステムや指導法よりも優れていることが証明されています。それ以上に、数年前に来た海の彼方、日本の東京と消印の押された彼の手紙で、メーソンは次のように語っています。

「荒野の中を40年の間さまよった後、私はここに、まさに私が望んだその場所におります。私は帝国日本の公立学校の音楽教育システムを作り出すために日本政府に雇われています。そして私のもとには私のシステムに従っている500人の若い男女がいます。彼らは教師になる準備をしているのです。私は曲を書いています。そして委員の助けを得ながら唱歌の選曲をしています。私はかつてわたしがしたかったこと、そう、音楽と宣教の両方の仕事をしているのです。」（下線筆者）

誰がガーディナー教会から、しかもその教会員の中から善きことが生まれると考えたでしょうか。

メーソンの来日の背景にはアメリカ19世紀の海外宣教の情熱とメーソン自身の宣教の意思があったということをテーマに展開された著作が、安田寛著『唱歌と十字架』（音楽之友社　平成5［1993］年6月）である。この著作ではまず神戸女学院の音楽学部を創設したアメリカン・ボード女声宣教師タレイの言葉「もともと立場は違っていましたが、日本の宣教師はメーソンの仕事の協力者になりました」（安田寛訳）[243]が紹介され、この言葉の真意を追って謎解きの旅が始まる、という筋立てになっている。そして何故唱歌に十字架が架せられたかの謎を解くキーワードは＜宣教＞及び＜宣教師＞である。

そしてこのキーワードから、いままで日本では問題にされなかったメーソンとキリスト教の関係が解きあかされ、いままで日本では紹介されなかった資料が紹介された。

しっかりとした信仰のもち主だったメーソンの最高の望みは宣教師になることだった。彼は神の創造物のすべてに対してやさしい思いやりの気持ちをもっていた。これは、一世代前には、ニューイングランドの血統の最良の部分の特徴だったのである。W. S. B. マシューズ『メーソンと学校音楽』（安田寛訳）[244]

若い頃、メーソンは深い信仰心にあふれた性格を育んだ。彼は異教徒の世界の状況に強く心を動かされていた。それで、彼は宣教師になる決心をした。しかし、不幸なことに、言葉に障害をもっていたために、実現できなくなった。『メーソン・スクール・ミュージック・コース、ティーチャーズ・マニュアル』（安田寛訳）[245]

しかし、メーソンの生涯は、神の深い摂理が時には、一人の人間が望んだとおりには導かないで、若い魂が最初に望んだ以上のことを実現させたもうことがあるという良い実例なのです。もし、実際に、メーソンが宣教師になり、福音を伝道していったなら、彼が実際なし得たような善行をなすことができたかどうかはたいへん疑わしい。神は彼を導いて、日本への道を開かれたのです。そこで天皇と貴族の承認を得て、まさに政府の中心地で彼は、讃美歌を教え、すぐにそれは日本のいたるところで異教徒たちに歌われたのです。メーソンの奉仕がキリスト教を導入するためにこの異教徒の国を開き、そこに渡って仕事をしていた宣教師の成功にどれほど関係があったのか、たとえわたしたちが知らなくても、彼らの仕事の成功のために道を準備したメーソンの奉仕の偉大な価値を証言しているのはあの宣教師たちなのです。『ローレンス牧師の弔辞』（安田寛訳）[246]

メーソンのしたかったこと、＜音楽と宣教＞という言葉は、アメリカ側の資料からもその宣教という部分が強く裏打ちされている。キリスト教の宣教との結びつきという点では、メーソンは短い滞在期間に北海道（明治13［1880］年夏）、関西（神戸から京都、明治13年12月～14年1月）、日光（明治14年夏）とかなり旅行をし、そのつど宣教師とあっていたようである。メーソンの北海道旅行に関して、前川公美夫氏はその著『北海道音楽史』「第六節　メーソンの北海道旅行」で次のように述べている[247]。

来日四ヶ月のメーソンが、最初の観察地に北海道を選んだのはなぜだろうか。開拓使がおかれてから十年ちょっとの北海道が、日本の実状を代表する場ととらえることは考えにくい。選ばれた理由としては、かつて暮らしていたボストンに気候が似かよっていること、お雇い外国人が多かったこと、キリスト教の浸透が早かったことなどが、興味を惹いたのではないかと推察される。函館と札幌を訪れたメーソンは、それぞれの場所で教会関係者などに会っているのではないかと思う。―略―

日光の旅行では、宣教師カーチスと会っていたことは既に述べた[248]。関西旅行では、アメリカン・ボード女性宣教師コルビーと会っており[249]、同じアメリカン・ボード女声宣教師パーメリーとは親交があった[250]。前川氏も指摘のように彼は北海道旅行で教会関係者（宣教師）と会っていたのではないかと思われるが、このことを示す資料は今のところ明らかになっていない。

＜音楽と宣教＞という観点は、日本側（日本語）のいままでの資料にも新たな意味合いを加えるにいたっている。パーメリーは次のように述べている。

> 初めて基督教々師の日本に渡来せし時より、彼らは音楽の真精神は神を礼拝する心情に大関係のあることを教えた。
>
> 日本政府に聘せられて初めて外国から来た音楽教師メーソン教授は私の親交のある人であった。教授は赴任当時より日本の西洋音楽を了解し又それを実演し得べき可能性を有て居る事を認め、且つ然かあらん事を望で居た。「日本の音楽研究者に向て」『月刊楽譜』（大正9［1920］年11月）[251]

メーソンと親交があると証言しているパーメリーは、来日した宣教師は音楽の本質は神を礼拝する心情に関係が深いことを述べ、そのためにメーソンは来日し、メーソン自身もその希望を持っていた、と述べている。また牧師植村正久はメーソンの＜音楽と宣教＞について次のように述べている。

> 当時の文部省から音楽の取り調べのために米国に派遣された役人（伊澤修二氏であつたらう）が連れ帰つた所謂<u>お雇ひの音楽教師はメエソンと言つて基督教の熱信者</u>で、其の日本の小学児童に歌はせた唱歌の多くは、讃美歌などの譜其のまゝ若しくは少しく作り更へたものであつた。<u>其の副産として小学校で教育された人たちが基督教の讃美歌を同じやうに容易く、或ひはもつと巧く、歌ひ得るやうになつて居ることである。基督教の伝道には至極便利な結果である。</u>（下線筆者）「今昔の感」『福音新報』（大正13［1924］年8月）[252]

> 日本の基督者が外国風の歌を歌つたり、更に発展してオルガン等を使用し始めてから程を経て当時の文部省は外国の音楽家を雇ひ入れて、漸く唱歌を教え始めた。其の多くは米国に行なはれる讃美歌と同じ譜であつた。当時の基督者は小学校の唱歌を聴いて其の未熟なるを気の毒に思つたかも知れない。然し近年は余程発達進歩して教会の音楽、ミツシヨン・スクールの援助でもなければ世間の唱歌に劣るやうなことになつた。世の中は随分変るものである。此のことを考えると外にも凝れに類した例がある。基督者の自ら省ねばならぬことであらう。然し近来は如何なる片田舎に伝道しても往事と違つて伝道者の歌ひ出す讃美歌に奇異の思ひを為したり噴飯したりするものは一人もない。反つ

てみな基督者の集会であるかの如く、之に和して屢上手に歌ふ。又以て基督教興隆の瑞相とも見られるであらう。『福音新報』（大正10［1921］年11月）[253]

ここで、メーソンをキリスト教の熱信者と呼び、そして唱歌、讃美歌が共に発達・進歩・普及している様子が牧師の目をとおして述べられている。またメーソン自身もキリスト教の集会に参加していた。『七一雑報』には次のような記事が見られる。

東京基督教演説会予定論題
東京にて近頃一演劇場にて大説教会を開かんとの目論見ありしが都合によりすこしく模様がへとなり昨年廿八浅草須賀町井上村楼にて更に基督教演説会を開かるゝ事となり論題は信仰の理由（小崎弘道）拘泥の弊害（平岩愃保）天啓の必要及び適合（デニング）仏道の基礎（高橋五郎）聖霊の必要（バラ）信仰の徳（ワデル）無神論を駁す（井深梶之助）日本基督教の現況（植村正久）論題未定（奥野昌綱）の諸氏にて音楽は博士メーソン氏唱歌は男女諸生徒なるよしなお実況は後報にゆずる（ルビ省略、下線筆者）『七一雑報』（明治14［1881］年7月1日）[254]

『七一雑報』は明治8年、神戸の雑報社（社長今村謙吉、編輯長村岡俊吉）から創刊されたキリスト教を基調とした週刊誌で、主筆はアメリカン・ボード宣教師0. H. ギューリックであった。新聞紙条例で外国人による新聞の発行が認められなかったため日本人を代表者にしているが、実際の主宰者はギューリックで、明治16年まで刊行された[255]。ギューリックがアメリカン・ボード（コングリゲーショナル）宣教師であるためか、東京にいるはずのメーソンのお雇い外国人としての仕事が関西のギューリックに報告されている。

東京にて先頃公立になりし音楽の学校は音楽教師米人メーソン氏を御雇入に相成て本邦の音楽教師と共に彼其の音楽につひて調べ今基督信徒のなかに行はるゝ如き日本語をもって西洋の音調に合わせたるものを新たに作らるゝ由之は追々に所々の小学校に於て用んとするのを目的にて其文句は或は皇上をほめ或は四時を詠ずるの類其他色々にて今のところでは古歌或は古き文句より採りもちいらるゝもの多きよし例えば「きみがよはちよにやちよに、さざれいしの、いはほとなりて、こけのむすまで」といえる古歌の如きを西洋の音調に合わせて調子よくうたい又信者の常にうたふ「たのしきくにはとほくある」という節の如きも「はるのやよいのあけほのに」と云う古き文句によりて同じ音調の歌うの類なりと楽器は琵琶、鼓弓、琴笛の類をヲルガン、ヒヤノに調和せ用ひらるゝ故に余程面白く聞ゆるよし現今生徒の数は二〇名ばかりにして教師の方が多きほどなりと又メーソン氏の尽力によりて此頃本邦人の手にてヲルガン二箇を製造し既に落成せるよしなるが其機械に中に本邦にて出来ぬもの一つあるにつき其は西洋より取寄るなりといふ（ルビ省略）『七一雑報』（明治14［1881］年8月12日）

この号は『小学唱歌集』初編が刊行された明治15年より前に出ているが、使用されている曲や歌詞などの内容が具体的にしるされている。その上にオルガン製作などにまで言及しており、メーソンの働きをうかがい知ることができる。

また伊沢修二はメーソンを追悼する中で次の一文を掲げている。

> 又君が我国楽に尽くさんとするの志如何に深かゝりしかは、斯道の為め、宣教師の群れに入らんとまで決心せしを見てしるべし。「メーソン氏を弔ふ」[256]

これら日本側の資料から見て、メーソンにおいて＜音楽＞と＜宣教＞は不可分であったことはあきらかであろう。これらの資料は入手が困難というわけではなかったが、今迄は音楽とキリスト教、すなわち唱歌と讃美歌を別々なジャンルとして研究していたため、音楽と宣教の結びつきが見過ごされていたものと思われる。

さてこの＜音楽と宣教＞は、メーソンの独自の考えであったのだろうか。19世紀アメリカでは政治経済的な海外進出が盛んになるとともに、海外宣教も盛んになった。その原動力になったのが、音楽の力だった。メーソンの日本における働きをとおして、宣教における音楽の力を述べている資料（「日本における音楽」『ドワイト・ジャーナル・オブ・ミュージック』1880年8月14日）を紹介したい[257]。

> さらに何通もの手紙を、我々ボストンの学校の前任監督者であり、この春帝国日本の学校に我々西洋のシステムに従って音楽教育を導入するために日本政府に雇われて行ったルーサー W. メーソン氏から受け取った。そこでの準備は大変な仕事であったが、それを惜しまずしたことで、住居は住み心地よくなった。メーソンは心からの尊敬を持って歓待された。そして、偉大な教育の試みを遂行するためにメーソンが望んだ設備はすべて彼の自由にまかされた。その試みとは、いわばはじめから彼が始めなければならないものだった。なぜならば、異教徒である日本人は、我々から言わせれば、音楽について何も知らなかったからである。彼らの音階はたった5音で構成されており、日本人の耳を、実際の音楽の基本となる完全な音階にあうよう、現実問題として調整していかなければならなかったのである。その結果、メーソンは、音楽を教えると同様に、音楽の感覚というものをつくりあげていったのである。―略―
>
> 何と、日本人を音楽的な国民にすることに着手した音楽に満ちた宣教師の行動は、コロンブスに新世界を発見させたような信仰と初心をつらぬく勇気を、まことに我々に示している。そして、我々は彼の信仰が報われることに疑念を抱いてはならない。なぜならば、音楽とは神の力によって魂に植えられた最も重要なものであり、もしそうでなくとも音楽は我々の人間性のいたるところに共通に存在するという可能性を我々が信じているからである。アメリカは神の御業を日本人に実現させるためあの最適な人材を、そ

の鍵穴に合う鍵とともに送り出したのである。そして、その日本人は、多方面にわたる教育を国民が受けることの重要性を深く認識し、そのことを我々に示している。

もしこの件に関して教授と連絡を取りたいと思う方々のために、彼の住所を書き加える。「音楽教授L. W.メーソン、日本国　東京　本郷　加賀屋敷16」

メーソンを音楽に満ちた宣教師（tuneful missionary）と呼び、彼の信仰と初心をつらぬく勇気に賛辞を送り、そして「我々は彼の信仰が報われることに疑念を抱いてはいない。なぜならば、音楽とは神の力によって魂に植えられた最も重要なものであり、もしそうでなくとも音楽は我々の人間性のいたるところに共通に存在するという可能性を我々が信じているからである。アメリカは神の御業を日本人に実現させるための最適な人材を、その鍵穴に合う鍵と共に送り出したのである。」と結んで、メーソンが日本宣教の適任者であることと、宣教における音楽の力の揺るぎない確信をあらわしている。これは19世紀アメリカの時代精神をあらわす一例である。20世紀に入って宣教における音楽の力への揺るぎない確信は薄れてしまい、このため19世紀の宣教活動の中に占める音楽の重要性が次第に忘れられていったのであろう。

6、エバン・トゥルジェにおける＜音楽と宣教＞と＜ホーム＞

一方メーソンを日本に送ったトゥルジェは＜音楽と宣教＞をどう考えていたのであろうか。

『ミュージカル・ヘラルド』（1881年8月）には、来日したメーソンの指導のもと皇后の御前で明治14(1881)年5月24日に開催された演奏会の曲目が掲載されている[258]。《Sicilian Italian Hymn》がオーケストラで演奏され、讃美歌《Happy Land》、《Auld Lang Syne》が曲目として上がっているが、もちろん讃美歌が歌われた訳ではない。オーケストラで演奏された《Sicilian Italian Hymn》は後の『小学唱歌集』では《雨露》として収録されている。《Happy Land》は唱歌《春のやよひ》、《Auld Lang Syne》は唱歌《蛍》（《蛍の光》）の曲である。日本では唱歌の曲として讃美歌の曲が採用された。当時ボストンの学校では唱歌教育として讃美歌が教えられていた。すなわち唱歌と讃美歌は曲も歌詞も同一・不可分の関係にあった。メーソンを日本に派遣したトゥルジェは日本からの報告とこれらの曲目を見て、ボストン、ニューイングランドの音楽システム＝讃美歌教育がメーソンの手によって着実に日本に浸透し、成果をあげていると感じていたに違いない。トゥルジェはメーソンの日本派遣を後日高く評価している。『マニュアル・オブ・ニューイングランド・コンセルヴァトリー・オブ・ミュージック』[259]には次のように書かれている。

どのような教育システムも道徳的な面を見落としているという欠陥があり、ホームこそ道徳というものを教えるのに最適なところであるので、私は長い間この国から遠く離

れた所からボストンに勉強に来る女性のためのホームの必要性を感じていた。そして私は、このすばらしい建物の取得をお許しになったこと、学校として使うために見事に改造されたこと、そして若い女性のためのクリスチャンホームが維持されていることを、心の底から全能の神に感謝したい。300人の若い女性とともに過ごしたこの実験的な年は、神の承認のみしるしのような大変祝福された結果をもたらした。家族の祈りとミーティングが毎日続けられた。いくつかの魂は改宗し、ほかの魂は神聖なものの経験の中でおおいによみがえった。そして寛大な家族の親しい交わりが形成されていった。音楽による宣教という考えが心に植え付けられた。そこで、学生は、帰国した宣教師や敬虔な教師の演説、特に大日本帝国の音楽の方法を改革したルーサー・ホワイティング・メーソンの業績に関心を寄せていたのである。彼の数々の成功は、各国の宣教に影響を及ぼす新しい刺激をあたえたのである。（下線筆者）

ここでトゥルジェは19世紀アメリカのキーワードである＜ホーム＞[260]についても述べ、この＜ホーム＞が「＜音楽による宣教＞を心に植え付けた」とも述べている。トゥルジェのもとに留学した日本最初の給費留学生・幸田延もここで述べられている＜クリスチャンホーム＞に居住していた。その様子を1889年9月19日メーソンは伊沢に書き送っている。「御承知の事と存候共当時ツールヂー氏は家族一同音楽院に住居在候得ば、幸田嬢も家族の如く諸事御世話被成居候」（伊沢修二訳）[261]。幸田延は既に三浦徹牧師より受洗[262]しており、クリスチャンになっていた幸田延はその信仰をさらに深めたことであろう。

＜ホーム＞の概念を生んだ19世紀アメリカを森孝一氏は『宗教からよむ「アメリカ」』の中で、ジョサイア・ストロング牧師の著作『膨張　新しい世界状況のもとで』を紹介し、次のように述べている[263]。

ストロングは『膨張』において、アメリカの膨張政策を正当化するものとして、経済的理由をその主張の中心に据え、『膨張』全体の3分の2をこれに当てている。

ストロングは19世紀のアメリカがアメリカ史上はじめて、余剰エネルギーと余剰生産物を持つに至ったことに注目する。

1850年から1890年の40年間に、アメリカの工業生産は18倍に増加した。工業生産のとどまるところを知らない増加は、海外市場を必要とするのであり、もし、海外市場が開発されなければ失業が増大し、アメリカはそれまでに経験したことのない厳しい状況を迎えることになる。彼は海外市場を求めての膨張は、「自然と同様に必須な」ものであると認識していた。―略―

当時の国際的の経済戦争における最重要地域は太平洋地域であり、その中心は中国であった。

当時のアメリカ都市部では工業化と商業化が＜ホーム＞と＜ワーク＞の場所の分離を生

じさせていた。その結果＜ホーム＞は家族だけのプライベートな場所へと変化していった。ここにおいて男性は外＜パブリック＞＜ワーク＞＜世俗＞を司る役割を果たすようになっていったのに対し、女性は内＜プライベート＞＜ホーム＞＜敬虔・モラル＞を司るという対称的な関係が成立した。女性は＜ホーム＞の中心となり、道徳的指導者としての地位を確立していったのである[264]。前述『マニュアル・オブ・ニューイングランド・コンセルヴァトリー・オブ・ミュージック』に書かれていた「ホームこそ道徳というものを教えるのに最適な所である。―略―ボストンに勉強に来る女性のためのホームの必要性を感じていた」はこのことを示していると考えられる。

19世紀アメリカには、タイトル中に＜Home＞の文字が入る曲が多数生まれる。代表曲である《旅愁》の曲に採用された《Dreaming of home and mother》や《埴生の宿》の原曲《Home, sweet home》は日本でもよく知られている。

人が還っていくところ＜ホーム＞＝＜家庭＞＜わが家＞、そしてそれは＜故郷＞＜本国＞を示す言葉でもあるのは言うまでもないが、この時代の＜ホーム＞とは人の魂が還っていくところとしての＜ホーム＞であり、そして女性が司る倫理・道徳はキリスト教に根ざしたものであることは言うまでもない。そして、ここにはピューリタンの伝統、小さな教会としてのホーム、すなわち＜ホーム＞をキリストを中心とした最小の集まりととらえる考え方が強くあらわれていると思われる[265]。

ピューリタンは信仰生活の最小単位をキリストを中心とした人々の集まりと捉えていた。それは家庭という意味だけにとどまらず、祈り集う人がいれば、それがいわば小さな教会であった。そのようなピューリタン的伝統が信仰と倫理を中心に置いた〈ホーム〉＝〈家庭〉の成立の底辺に流れている。またトゥルジェの言う「ボストンに勉強に来る女性のためのホーム」とは、まさにこのピューリタン的な伝統に基づく信仰生活の最小単位の近代的な読み替えであろう。

当時のアメリカの工業生産の増大は楽器の中流家庭への普及を生んだ。この＜ホーム＞（キリストを中心とした最小の集まり）にもピアノ・オルガンが普及し、家庭で音楽を楽しむ機会が設けられ、讃美歌が歌われていた。1872年から1875年にギン社から出版されたメーソンの『National Music Charts』、『The National Music Teacher』、そして『Music Reader』のシリーズには学校及び家庭用と書かれており、家庭内でも使用も考慮されていた[266]。そしてこの中流家庭の人達は『ミッショナリー・ヘラルド』等の海外宣教の雑誌を購読し、海外宣教のための献金をしていた。海外宣教には潤沢な資金が必要であるが、この人達がそれを支えていたのである[267]。

また楽器の大量生産[268]は市場を海外に求めた。メーソンの日本派遣に関して『ボストン・ヘラルド・サップルメント』の記者は「メーソン氏の仕事によってそのような楽器（ピアノ・オルガン）の需要が起れば日本という国は楽器の最大の海外市場になるだろう」[269]と述べている。海外宣教と楽器も結びついている。メーソンを日本に派遣したトゥルジェは、メーソン・アンド・ハムリン社（リードオルガン製作会社）のカタログに推薦文をよ

せ[270]、オルチンを日本に派遣したアメリカン・ボードの当時の海外宣教主事N. G.クラークもスミス・アメリカン・オルガン社のカタログに推薦文を掲載している[271]。

19世紀アメリカの都市部での工業化とともに＜ホーム＞の概念が生まれ、経済的な海外進出と同時に海外宣教の熱意がおこり、「（ホームにより）音楽による宣教という考えが心に植え付けられた。そこで、学生は、帰国した宣教師や敬虔な教師の演説、特に大日本帝国の音楽の方法を改革したルーサー・ホワイティング・メーソンの業績に関心を寄せていたのである。彼の数々の成功は、各国の宣教に影響を及ぼす、新しい刺激を与えた。」ということになるのである。

また、メーソンは来日中に書いた姪の子供宛の手紙でも、クリスチャン・ホームについて触れている[272]。

> 日本に来て明日でちょうど1年になります。私はとても忙しいです。でも、いつもよりずっと元気で、毎日楽しく過ごしています。私はこの1年で、私のこれまでの人生のどの1年と比べても、たくさんの仕事をしました。―略―
>
> キリスト教の国の最上のものの一つは、キリスト教の家庭です。ここは、男の人は選べるだけたくさんの女の人を妻にしています。そして好きな時に、捨てることができるのです。（安田寛訳）

エドワード・ドワイト・ウォーカー著「ジ・ニュー・イングランド・コンセルヴァトリー・オブ・ミュージック」『コスモポリタン』には〈音楽と宣教〉とニューイングランド音楽院について「キリスト教の布教のためには、音楽が宣教にとって有効であるということは、ニューイングランド音楽院創設の根本にある考えの一つである。」[273]と書かれているが、前述『マニュアル・オブ・ニューイングランド・コンセルヴァトリー・オブ・ミュージック』で〈音楽と宣教〉とニューイングランド音楽院についてトゥルジェは次のように述べている[274]。

> 学校規則の第5条は、どのようにして理事会を構成するかを示しているという点で重要である。条文で見られるように、理事会の重要な構成メンバーの大部分は、アメリカにおける大きな宗教団体と宣教団を代表した人物である。<u>この原則を理事会に導入する目的は、ニューイングランド音楽院がキリスト教的でない者の手による管理に落ちることを永久に防ぐためであり、音楽による宣教という考えを育成するためである。</u>（下線筆者）

そしてトゥルジェはこのマニュアルで確信に満ちた言葉で自らの海外宣教の結実を書きしるすのである[275]。

われわれの事業が与える影響力の及ぼす範囲の示す重要性は、ニューイングランド音楽院に入学する学生の出身地が表す広大な地域の中に見てとれる。極北の地から始まって、学生はウィニペグからノバスコシアまで、英国領のいずれの地方からも来ている。その南の地帯では、モンタナからメインまでのすべての州と準州が含まれる。その次はオレゴン（ワイオミングをのぞく）からロードアイランドまでのすべて、その次はニューメキシコとインド準州をのぞくサザンカリフォルニアからサウスカロライナまで、そしてその次は、リオグランデからフロリダ海岸までのすべてから学生は来ている。ヨーロッパの3つの国は、開拓者の代表の目を通して我々のことに注目している。そして、我々がまさに進出していった時代に、中国は芸術を学ぶ学生をアメリカに送っている。南アフリカはニューイングランド音楽院の調律科で学ばせるため、男性をアメリカに向け出発させている。その一方で、日本はすでに引き離すことのできない絆で我々と結びついている。（下線筆者）

このマニュアルが書かれた当時には、まだ日本からの給費留学生はニューイングランド音楽院にはいなかったが、すでにこの時には日本で唱歌教育が始まっており、西洋音楽は着実に浸透していった。そしてこのマニュアルが書かれた数年後、「改革の成果」の証しとしてはじめての日本人給費留学生である幸田延がニューイングランド音楽院に入学する。

幸田延が留学する前年（1888年）にニューイングランド音楽院卒業生のビングが長崎の活水女学校の音楽教師として赴任している[276]。トゥルジェにとってビングの活水女学校への赴任や幸田延の留学は「日本にすでに引き離すことのできない絆で我々と結びついている」ということを実感させる出来事であったのだろう。西洋音楽のプロをめざし、既に受洗していた幸田延に日本における＜音楽と宣教＞の結実を見て格別の思いを持ったに違いない。明治22（1889）年5月、幸田延はボストン到着の様子を「廿七の夜十二時頃ボストンへ安着す、―略―トゥルジェ氏と共に鉄道馬車に乗りて音楽学校へ到る、道すがら氏は如何に我が辞するするとも許し給わで、わがカバンを終始携へらせしには驚嘆せり」[277]と伝えている。

このトゥルジェが創設したニューイングランド音楽院の理事には、前述学校規則第5条にあるように各教派の海外宣教局の代表が就任することになっていた[278]。もちろんオルチンが書簡を送ったN. G. クラークが当時主事であったアメリカン・ボード海外宣教主事も理事の一人であることはいうまでもない。また、トゥルジェはアメリカン・ボードに関係する宣教師になろうとする学生には授業料を免除していた。それに対してアメリカン・ボードのプルーデンシャル・コミッティーはトゥルジェに感謝状をおくっている[279]。

ここでも音楽と宣教が強く結びついている。さらに繰り返すまでもないがメーソンは自らも音楽教育システムの普及と宣教の2つが来日の大きな原動力になっていた。

このように日本の讃美歌史・唱歌史を歴史的に検証していくと、アメリカ、ニューイン

グランドの中心ボストンとコングリゲーショナル（組合）教会に収斂していく。今まで別々の分野と観点から論じられていたジョージ・オルチンとL. W.メーソンの二人、そしてエバン・トゥルジェは、圧倒的な経済力を背景とした19世紀アメリカ、ニューイングランドの海外宣教への情熱と、ボストンの音楽教育システム拡充の流れの上に立つ人物だったのである。

7、音楽に関する19世紀日米の見解の差

これまで19世紀アメリカの経済力を背景にした海外宣教に関して述べたが、異教の地にイエスの教えを伝えようとした核心は何だったのであろうか。これも＜音楽＞をとおして考えてみたい。

エドワード・ドワイト・ウォーカー著「ジ・ニュー・イングランド・コンセルバトリー・オブ・ミュージック」『コスモポリタン』（1889年9月）では、トゥルジェと目賀田種太郎の対話が描かれている。当時文部省官吏目賀田種太郎はメーソン来日と同時に文部省を離れたので、唱歌教育導入に関して伊沢修二ほど評価されていないが、アメリカにおける折衝の中心は目賀田種太郎であった。彼は日本の音楽教育についてトゥルジェに相談する。

音楽は、文明開化にあたっての根本的な因子になる、とはトゥルジェ博士が好む格言の一つである。20年前、トゥルジェ博士はメイン州の森の中に日本公使である目賀田氏とともにいた。トゥルジェ博士は二人の会話の中で、「あなたは西洋の学校と学問をあなたの国日本に投入しようとしています。しかしあなたが無視している本質的なものが一つ存在します。そして、それは根本的に重要なものです。もしひと続きに並んだピアノのワイヤーの一本一本を二つ折りにした紙ではさむようにして、そのワイヤー中の一つを叩いたとすると、他のワイヤーの上に乗っている紙も振動するでしょう。なぜなら、それらは自然で完璧な音階として共振しているからです。あなた方の楽器ではそんなことは起らないでしょう。なぜなら、弦が正しく調整されていないからです。ところで、日本は西洋音楽も取り入れなければ、われわれの記譜法の持つ利点を完全に得ることはできないでしょう。そして、われわれの記譜法をも採用しなければ、キリスト教の基準に沿った文明開化はできないと思います。日本の学校で十分に西洋音楽の教育が続けられたならば、10年後には日本は別のものになっているでしょう。」

公使は深く引きつけられた。そして「しかし、わたしたちは何百年も使ってきた日本の楽器を手放すことはできません。それらの弦を張りかえることはできないでしょうか？」と彼は言った。

「可能です。あなた方が日本の楽器を使うときに日本音楽の楽器としての不都合が起らないように、楽器製作者がそれらを正しい音階に再調整することができます。その上、わたしたちの音楽に合わせることもできます。」

日本の楽器が、トゥルジェ博士の元にたくさん送られてきた。そして、日本の楽器の音階が直された。これらの楽器のもともとの異教的な音階とキリスト教的に変えられた音階を示す図はニューイングランド音楽院の博物館で見ることができる。この時を期して、日本の3万の学校と大学では、この刷新された音楽が教えられている。そして、日本のキリスト教徒はキリスト教音楽によって大いに助けられているのである。

昨年、改革の成果は、日本から最初の学生がニューイングランド音楽院に留学してきたことによって知ることができる。その学生［幸田延］は、母国日本での音楽の勉強を西洋音楽の修得を通して完全なものにするために皇后によって送り出された優秀な若い女性である。キリスト教の布教のためには、音楽が宣教にとって有効であるということは、ニューイングランド音楽院創設の根本にある考えの一つである。―略―

日本の楽器が何点か壁の上で異彩を放っている。それらの楽器は日本のキリスト教化の記念すべき遺産である。そして、日本政府からトゥルジェ博士に贈呈されたものである。

「日本の楽器が、トゥルジェ博士の元にたくさん送られてきた。そして、日本の楽器の音階が直された。これらの楽器のもともとの異教的な音階とキリスト教的に変えられた音階を示す図はニューイングランド音楽院の博物館で見ることができる。」と書かれており、これが事実とすると日本音楽の西洋化にはトゥルジェが大きな貢献をしたことになる。何人かの日本音楽関係者に尋ねてみたが、事実関係は不明とのことであった。また現在ニューイングランド音楽院の博物館にあたるところには日本の楽器は展示されていない。

さて、ここで目賀田は日本の伝統音楽の楽器を問題にし、トゥルジェに解決策を提示され安堵したと思われる。

ここでトゥルジェの言う「われわれの記譜法をも採用しなければ、キリスト教の基準に沿った文明化はできないと思います」を目賀田はどう捉えたのだろうか。おそらく国楽創成に西洋音楽は一つの手段として必要ではあるが、キリスト教と音楽の強い結びつきを想定していなかったと思われる目賀田はトゥルジェの発言の真意を掴みかきれなかったのでないだろうか。そして「音楽が宣教にとって有効であること」とは何を意味するのであろうか。

＜音楽と宣教＞というと、たとえば聖書の教えも歌で歌えば親しみやすい、文字が判らなくても曲がつけば歌詞を歌うことができ，神のメッセージが伝わる。讃美歌には心うたれる曲がある、オルガンの音に魂の息吹を感じるなど、音楽を通じて神に近づくことができるということを思い浮かべる場合が多いであろう。すなわち＜音楽＞をもちいることが、技術的に＜宣教＞に大いに役立つということが考えられる。しかし、ここでトゥルジェは西洋＜音楽＞は神の摂理の一つのあらわれであり、それが音階という秩序となってあらわれている、と考えている。それ故、その秩序を書き記すことのできる西洋音楽の記譜法を採用しなければならない、と述べているのである。日本の伝統音楽が否定される所以であ

る。そのことを説明して「もしひと続きに並んだピアノのワイヤーの一本一本を二つ折りにした紙ではさむようにして、そのワイヤーの中の一つを叩いたとすると、他のワイヤーの上に乗っている紙も振動するでしょう。なぜなら、それらは自然で完璧な音階として共振しているからです。―略―われわれ［西洋音楽］の記譜法をも採用しなければ、キリスト教の基準に沿った文明化はできないと思います。」

神の摂理は「自然で完璧な音階」としてこの世にあらわれている。神のみ業をあらわすすべてのものを日本が取り入れない限り、キリスト教の基準に沿った文明化はできないと考えているのである。すなわち近代化しようするならキリスト教も受け入れなければならない、と述べているのである。「文明化」とは、我々が「キリスト教の基準」ということに目をつぶって「近代化」と言っているところのものである。16世紀に神のみ業を知ろうとして、神の秩序を求める学としてコペルニクス、ガリレオに代表される近代科学が生まれた。それから数百年を経て、その科学は発展をとげ、19世紀に入ると広範囲にわたって近代科学が大きく展開した。近代科学およびその応用と技術が結びつき、近代科学技術と言えるようなものが初めて出現する。本来キリスト教を基盤にしていた西洋近代科学[280]、そこから派生した産業、軍備、そしてそれ自体も神の摂理をあらわしている［西洋］音楽、日本の文明化＝近代化にあたってそれらすべてを取り込む必要があると、トゥルジェは述べているのである。神のみ業を知らんがため、神の秩序を求めんがために興った近代科学も、そして教会も音楽も彼にとっては等しく神の摂理のあらわれなのである。しかし、それぞれは強く結びついているものであり、一つ一つが独立して存在し得るものではない。そしてこの神の摂理とは普遍性を持つものである。普遍性を持つということは、時と場所と相手を選ばず成り立っているということである。すなわち、神の摂理はいつの時代でも、地球上のどこでも、そして人種をも超えて及んでいるということである。キリスト教徒にとって、この世界とは神の摂理があまねく支配する世界であり、それ故まだこの神の摂理を知らない異教の地の人々にも神の摂理に対して目を開かせなければならない。すなわちその地に行って、宣教しなければならないのである。神の摂理の普遍性は海外宣教の動機でもあったと考えられる。

この観点に立って＜音楽と宣教＞を捉え直してみると、音楽は宣教にとって一つの「手段」ではなく、宣教と等価のものであると考えられる。神のみ業のあらわれの一つである音楽を広めることが、すでに宣教そのものであるということになってくる。これがトゥルジェ、メーソン等が日本に積極的に音楽教育を導入しようとした動機の一つであると思われる。

現在、日本で音楽といえば西洋音楽のことをあらわし、学校教育も西洋音楽が中心である。しかし、音楽教育システム導入の際、西洋音楽を生んだキリスト教は受け入れなかった。日本は近代化にあたって欧米の科学技術・文化・制度を導入したが、その文化を生み出したキリスト教は抜け落ちてしまった。

日本の近代化は2世紀目に入っており、音楽も科学技術も世界の最先端を歩んでいる。し

かし、音楽、科学を日本に伝えようとした人たちが何をもって伝えようとしたかに関心を払ってこなかった。音楽ばかりでなく日本の近代とは何であったかを問う際、キリスト教と関連を再考すると、また違った歴史が浮かび上がってくると思われ、「日本の讃美歌、唱歌と19世紀アメリカの海外宣教」をテーマに論述した。

第２節　替歌（南北戦争の歌）と讃美歌

1、はじめに

1859 年の開港とともに宣教師が再来日したが、プロテスタント教会の宣教師は主にアメリカから来日した。しかも東部出身者が多かった。すなわち、南北戦争で北軍にあたる地域の出身者が多かったことになる。東部出身（北軍）の宣教医ヘボンは、内戦への憂いと平和への祈りをその書簡の中で本国アメリカに書き送っている[281]。

宣教師は伝道に際して讃美歌とともに出身地である北軍の歌をも信徒に教えていた。しかも英語（カタカナ）で指導していた。

2、北軍の歌

その１例として《ジョージアを行進して》の作詞・作曲で有名なヘンリー・クレイ・ワーク作詞・作曲の《Babylon is fallen》[282]がある。

ドンチシゼーブラックラント	Don’t you see de black clouds
ウイヂング オバヨンダー	risin’ ober younder
ウエワゼツツセス オールパンティ	Whar de Massa’s ole plantation am?
ションネー ネバユミフライテン	Nebber you be frightened,
ド デーミツオンリーダッキ	Dem is only darkeys,
スカントジャイナエントアン	Come to jine an’fight for
クルサン バビロンイズフローレン	uncle Sam.
	(Look out dar, now! We’s a gwine to shoot,
	Look out dar, don’t you understand?)
	Babylon is fallen!
バビロンイズフローレン	Babylon is fallen!
エンドワイザーゲンチオオ	And we’s a gwine to
キウパーイトライ	occupy de land.　　（歌詞はメモ用紙のまま）

少女時代にこの南北戦争の歌を憶えた女性は晩年になってもこの歌を忘れずカタカナの歌詞で歌っていたそうである。本人は宣教師から教わったので讃美歌と思っていたようだが、黒人が北軍に従軍したときの心情をあらわす、黒人英語で書かれた北軍の歌だった。曲が軽快なためいつまでも憶えていたのであろうか。

当時はラジオもレコードもない。アメリカで流行っていた曲が宣教師を通じて日本に伝わったのであろう。丁度現代のアメリカン・ポップスをわれわれが聴くように当時の日本

人は宣教師からアメリカのヒット曲を聴いていたと思われる。当時アメリカで流行していたフォスターの歌《故郷の人々》も日本の讃美歌《はなよりもめでねし》(『讃美歌』明治36年版、第317)になっているが、これも宣教師が伝えた可能性が高い。

このように当時アメリカの宣教師を通じて南北戦争(1861～1865 年)の歌が日本にもたらされている。さて、南北戦争の歌でよく知られるのは、前出の《Marching thro' Georgia(ジョージアを行進して)》と《Battle Hymn of the Republic(リパブリック讃歌)》(ウィリアム・ステッフェ作曲、ジュリア・ウォード・ハウ作詞、1862年頃)である。両方とも日本の讃美歌の曲として採用され、唱歌、軍歌と明治期の様々なジャンルの歌の曲として採用された。

3、北軍の歌と日本の唱歌、軍歌、讃美歌

《ジョージアを行進して》は、最初に《ますらたけを》『日本軍歌　全』(明治25[1892]年)[283]という軍歌の曲に採用され、その後讃美歌《われらのいくさは》『基督教福音唱歌』(明治 31[1898]年)[284]の曲に、そして唱歌、遊び歌《ラメチャンタラギッチョンチョン》になった。

《リパブリック讃歌》の歌詞は聖書に基づくものである。原歌詞とは違うが、曲は《うたへ、いはへ》というクリスマスに歌う子供讃美歌になり、奥野昌綱・戸川安宅編の『童蒙讃美歌』(明治23[1890]年)[285]に収録された。そして軍歌《すすめすすめ》(『日本軍歌　全』)[286]になり、そして《おたまじゃくしはかえるの子》、《権兵衛さんの赤ちゃんが風邪ひいた》として広くし親しまれ、現在もコマーシャルソングとして歌い継がれている。ちなみに日本における最初の楽譜付軍歌集『日本軍歌　全』を編纂した納所弁次郎と軍歌《すすめすすめ》を作詞したと戸川安宅(やすいえ)はともにクリスチャン(納所弁次郎は当時)であった。

子供讃美歌ではなく一般の讃美歌の曲として採用されるのは《あくまとたゝかへ》で、福音系三谷種吉編の『基督教福音唱歌』(明治31[1898]年)[287]に収録された。讃美歌《われらのいくさは》、《あくまとたゝかへ》はこの讃美歌集の 1 曲目と 2 曲目にあたる。この讃美歌集の最初の曲が南北戦争の歌だったのである。

当時ボストンの出版社オリバー・ディットソンから『WAR SONGS, for anniversaries and gatherings of soldiers, to which is added a selection of songs and hymns』(1883年)[288]が刊行された。この歌集は南北戦争の歌を中心とした歌集で、もちろん《Marching thro' Georgia》、《Battle Hymn of the Republic》、《Babylon is fallen》が収録されている。『基督教福音唱歌』には、「祈祷」、「聖き生涯」等の項目があるが、《われらのいくさは》、《あくまとたゝかへ》は「軍歌之部」の項目のところに掲載されており、その項目の対応する英語は「WAR SONGS」である。『基督教福音唱歌』は『WAR SONGS』の影響を受けているのではなかろうか。

讃美歌（聖歌）《あくまとたゝかへ》は、中野重治・坂井勝次郎編『リバイバル唱歌』（明治 42 年）[289]に引き継がれるが、『基督教福音唱歌』を編集した三谷種吉による『霊感賦』[290]（大正 11［1922］年）には引き継がれず、現在も福音系では讃美歌（聖歌）の曲としては採用されていない。

《うたへ、いはへ》『童蒙讃美歌』（明治 23［1890］年）は、その後の子供讃美歌としては受け継がれていかなかったようである。

現在《リパブリック讃歌》が讃美歌（救世軍軍歌）の曲として採用されているのは救世軍で、『救世軍歌集』（平成 9［1997］年）[291]の第 317《いのちおしまね三百の》と第 356《こは同胞(はらから)を》で、ともに山室軍平作詞である。この 2 曲は、『救世軍歌集』（大正 3［1914］年）[292]から採用され、昭和 10 年、昭和 29 年の『救世軍歌集』にも収録され[293][294]、多少の変更を加えられ現在に至っている。なお《こは同胞を》は 4 節まで歌詞があるが、ヘンリー・ホッダー編『救世軍軍歌』（明治 34 年）[295]には、3 節までで、1 節は《こは同胞を》とまったく同じ歌詞だが、2 節と 3 節の歌詞が違う《こははらからを》が存在する。これも曲は《リパブリック讃歌》で、山室軍平の作詞によるものである。救世軍本営音楽担当鈴木肇氏によれば、《こは同胞を》は明治 32（1998）年 10 月 15 日『ときのこえ』が初出とのことであった。

4、結語

さて、どうして南北戦争の歌やアメリカの讃美歌が当時受け入れられたのであろうか。日本のキリスト教、讃美歌(音楽)がアメリカから大きな影響を受け、南北戦争の歌やアメリカの讃美歌が大量に持ち込まれた事情は容易に理解することができる。しかし日本も当時、南北戦争の歌や讃美歌を必要な音楽として受けいれたのではなかろうか。明治の時代精神をあらわす言葉として富国強兵があげられる。軍隊や教練には行進曲が必要である。それまでの日本の音楽より、南北戦争の歌や讃美歌には行進曲に向いている曲が多く存在する。《リパブリック讃歌》は北軍の行進曲である。また俗な歌《タンタンタヌキ》の曲は讃美歌《Beautiful River》で、明治 7 年に訳[296]されて福音系では現在でも歌われている[297]。この讃美歌は、明治期に瓜生繁編『進行曲』（明治 32 年）[298]に《The Beautiful River》という曲名で行進曲に使用され、その後政府公認の行進曲集『進行曲粋　教科適用　第一集（文部省検定済）』（明治 37 年）[299]に収録されるようになった。余談ではあるが、この曲が《タンタンタヌキ》になったのは一度行進曲になったからではないだろうか。歌詞がないのでこの曲を覚えるのに「タンタンタタタータ」とリズムをとっているうちに《タンタンタヌキ》が誕生したように思える。この讃美歌《Beautiful River》をはじめ、行進曲に採用された讃美歌の曲や南北戦争の歌にはピョンコ節のものが多い。それまでの日本に少ないリズムである。

このピョンコ節では多くの歌詞を歌うことができる。滝廉太郎は浪々と歌う《荒城の月》

では、付点の少ない音譜を中心に曲をつくったが、歌詞の多い《箱根八里》ではピョンコ節で作曲している。明治に生まれた讃美歌、唱歌、軍歌は曲としては短いものばかりである。この短い曲で多くのメッセージを伝えたい場合、それまでの日本の音楽ではなく、南北戦争の歌や讃美歌の曲が持つピョンコ節が必要だったと考える。

メッセージ性と言えばコマーシャル・ソングだが、《リパブリック讃歌》と讃美歌《Beautiful River》を2つのカメラ店（ヨドバシカメラ、ビックカメラ）がコマーシャル・ソングとして現在使用している。明治に伝わった南北戦争の歌と讃美歌が現在もかたちを変えながら息づいている一例であるといえよう。

第6章　植村正久と讃美歌　日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』

1、はじめに

植村正久（安政4［1858］～大正14［1925］）は、江戸の旗本の長男として生まれる。幼名は道太郎。横浜、バラ塾、ブラウン塾に学び、明治6（1873）年、17歳の時J. H. バラから受洗。明治12（1879）年東京一致神学校を卒業、下谷教会、番町一致教会（後の一番町教会、富士見町教会）の牧師をつとめた。明治22（1889）年明治学院教授に就任、明治36（1903）年明治学院教授を辞して明治37（1904）年東京神学社（現東京神学大学）を創設、牧師を養成した。明治13（1880）年小崎弘道、井深梶之助と東京キリスト青年会を組織し、機関紙『六合雑誌』を創刊。明治16（1883）年『東京毎週新報』、明治23（1890）年『日本評論』、『福音週報』（後の『福音新報』）を創刊して主筆となった。『真理一班』他著作は多数存在する。大正14（1925）年に柏木の自宅で急逝した[300]。

キリスト教界きっての論客であり、ワーズワスの評伝を『日本評論』に発表するなど英文学にも精通していた。バーンズ、ロングフェロー等数多く詩作品を訳している[301]。また讃美歌も多数翻訳し、讃美歌集の編集、そして讃美歌論も展開している。翻訳に関しては、島崎藤村の詩《逃げ水》（『若菜集』所収）に影響を与えた《ゆうぐれしづかに》（S. R. ブラウンの母、フィービ・ブラウン作）を翻訳したことで知られる。本章では、日本の讃美歌全体に関する彼の果たした役割を中心に論じる。『新撰讃美歌』の中で彼が翻訳した讃美歌は第4《ゆうぐれしづかに》以外、第19《いのりはくちより》、第163《みめぐみあるひかりよ》、第206《さりにしひとの》と言われている。また明治43（1910）年、アレキサンドル讃美歌伝道団来日の際は、《かみのまもり＝God will take care of you》、《すくい主の愛＝My Saviour,s Love》、《耶蘇引き上ぐ＝He lifted me》と3篇の讃美歌を翻訳している[302]。

植村正久の讃美歌に関する主な業績は以下の3件があげられる。

1）明治16（1883）年、『東京毎週新報』に「讃美歌編輯の事を記す」を投稿した。これは日本人最初の讃美歌論である[303]。[304]
2）明治21（1888）年、『新撰讃美歌』の編集の中心を担った。（楽譜付は明治23［1890］年）
3）讃美歌に関する論文、記事、エッセイ等を雑誌、新聞等に多数執筆した。これらの記事が『植村正久と其の時代』や著作集、全集にまとめられ、明治ばかりでなく、大正、昭和の讃美歌に関する貴重な情報源となっている[305]。

2、植村正久の讃美歌論

上記3件の内1）2）の時系列に従い、まず植村正久が執筆した『東京毎週新報』の「讃

美歌編輯の事を記す」から「植村正久と讃美歌」を進めたい。以下「讃美歌編輯の事を記す」を転載する[306]。

『東京毎週新報』第16号（明治16［1883］年11月30日、10〜11頁）

讃美歌編輯の事を記す

頃日府下に開かれたる一致教会の大會において従来の讃美歌改正編纂の委員を置かれたり。日本基督各教会の事はすべて創業に係るを以て容易に完全を期すべからずといへども礼拝に用うる音楽讃美歌の如きは最も不整頓の有様なりと思はる。故に彼の大会が左る委員を置かれたるは至極目下の事情に適切の事なるべし。近来は文部省にても頻りに音楽の事に熱心せられ、また民間には近体詩とか称ふるものを作る学者ありて、早晩音楽詠歌の体裁を一変する支度最中なりと覚ゆ。余は今日までにしばしば詩歌音楽の事を論じたることありしが、いささか感ずる所あればこゝ又二三の考案を述べて此道に志ある人々に問い試みんと欲す。

第一　彼の近体詩とかいふものは往々野卑にして毫も字句言語の法則に従はず、余輩をして自ら厭棄の情を起こさしむるもの少なからず。此は余が曩に六合雑誌に批評したるが如し。左れと此の卑俗に流るゝは一方の極端なれど之に反して他の極端に流るゝものも亦好ましからず。兎角吾が邦の風として古に泥みて今を俗とするの弊は万般の事物を渋滞せしめたるなり。殊に言語のごときは日に月に変遷するものなれば、強ちに古書にあるものゝみを雅として用うるは大いに不可なるべし。譬へば吾が眼前に少壮肥大の活物あるをも顧みず、深山の雪をかきわけて古代の遺骨を取り集め之を牛馬の形に組み立て使用せんと欲するに同じ、また陋ならずや。此誤謬の由来を尋ぬれば雅俗の意義を解し過まりたるなり。蓋し雅とは古書に用ゐたるが故に雅にあらず、実際今人の耳に品良く聞ゆるをもて雅とすべし。俗とは後世の書籍俗間の野史などにのみありて古書には之なきが故に俗なるにあらず、実際今人の耳に聞くを厭ふをもて俗なりとす。故に従来雅言と稱へたるものにも俗語あるべく、また俗語とて和学者流の卑しめたるもののうちにも吾が所謂雅言は之あるならん。此緊要なる差別あるを忘るゝよりさまざまの弊風を生じたることなり。讃美歌など編輯せんと欲するものは、最も此の要点に注意し成るべく野卑ならぬ近代の言を採り用うるこそよけれ、如何に雅言なればとて強ちに古書の語を使ふは笑ふべき僻事なり。自らは雅言なりと心得たることばも世移り物換わりて、今は早や無下の俗語となれるも多かるべし。且すべて詩歌といふもの殊に讃美歌などは聞く人に解し易きを要す。古今集国歌の部に、甲斐が根をさやにも見しかけゝれ（心）なく云々とあるが如きを見ても知るべし。甲斐の国歌として民間に流布せしめんには心字を訓てけゝれと爲さゞるべからず。言はゞけゝれは甲斐の雅言なりとするも可なり。古來吾邦の歌人にして国歌のうちに顕はれたる此真理を会得したらましかば詩歌の進歩今

までに著しかりなるべし。

第二　吾邦の言語発音の風は極めて平滑にして抑揚に乏し。故に一句を五文字若くは七文字より多くなすときは句調甚だ悪し。是れ五文字七文字の慣例を起せる一原因ならんか。然し何づれの場合にても必らず此の制に従はざるべからずとするは膠柱の論なるべし、時によりては他の方法を用うるも苦しからずとす。成る程今の讃美歌のうちに言の稍雅にして優なるものは唯五七の数首なるが如く思ふべけれど、実際につきて見れば、八八、八六等の句にして五七に優れるもの少なからず。故に讃美歌をすべて五七に爲さんと欲するは余の興みし難き論なり。

第三　然かれども五七の体に作るの最も容易なるは敢て論を待たず。故に此体に適へる種々の調子を新創するは目下の急務なりとす。近頃流行する今様の節のごときは讃美歌に最も不似合なりといふべし。余之を米人フルベッキ氏に聞くに五七の調にても隨分西洋の『オウルド、ハンドレッド』、『コロネション』、『オウタム』等の如き、或ひは正大厳粛にして人をして襟を正さしめ、或ひは悲壯慷慨にして感涙を催ふさしむる調子を新創することを得可しと。果して然らば余輩の最も喜ぶところなり。

第四　五七とは文字の五七と心得べからず即はち音の五七をいへるなり、八八其他の体製亦同じ。ヨルダンは三音より成れるものなるを文字の数に泥みて四つと做し之を歌うときに至りてヨルダーンなどいふは最も聞苦し。およそ今日の詠歌には此の誤謬最も多く見えたり。

第五　讃美歌の完成は一人の手に出ることを望むべからず、多くの人折に触れ感ずる所あるに従ひて、情を歌に述べその秀逸なるを編輯するを最も良策とす。今日の如く一人して一巻の讃美歌を作れりなどといふのは不都合といはざるべからず。今や基督信徒は僅々六千人になりといへども中には歌よむ人少なからず。若し斯の人々心を合はせて其の霊魂の所思所感を讃美歌に述べ、之を『毎週新報』若しくは『福音新報』に載せて江湖に示されなば至極の便利と謂うべし。此を取捨編輯するは世必らず其人に乏しからず、彼の大会委員の若き己に之を期望する者あらん。新聞上公示するを好まれざる人は其の宿所姓名を附記し、東京麹町区一番町七番地友人奥野昌綱氏宅まで寄送せらたし（ママ）。咀眞居士謹んで白す（ルビ省略）

ここで植村正久は編集の必要性、近代詩、75 調について述べ、特に讃美歌では 75 調は文字の数ではなく音の数であることを強調している。例えば《蛍の光》は、文字の数からは 75 調［ほたるのひかり　まどのゆき］であるが、楽譜が 86 調なので歌う場合［ほたるのひかあり　まどのゆうき］と歌っている場合が多い。すなわち音の数に支配されているのである。

来日した宣教師とその協力者である日本語教師が、歌詞と曲を組み合わせる作業を繰り返すうちに、日本的な詩形というものを見出していくことになったのであろう。それなくして「一音符に一音を」を意味する発言がありえただろうか。先ほどの《蛍の光》では、

75 調の歌詞を 86 調で歌うため、母音を伸ばして歌うというより、母音を一つ足して 86 調にし、「一音符に一音を」の原則に従っているように思える。現在では歌を歌う上で自明なことがここにおいて既に指摘されているのである。

彼がもっとも多く紙面をさいて論じている「ことばの選択」という問題は、「ことば」を文化の中にどのように位置づけていくのかということである。「雅俗」という考え方を用いているが、このことは近代を生きるその時代の人間自身が決めることなのである。「考案」の「第五」で彼が述べている考えは、みごとに『新撰讃美歌』に生かされたと言うべきであろう。従来歌われてきた讃美歌の集大成になることなく、その内容の多くをいわば新作によっている。そして一人の主観によってまとめられた讃美歌集になることなく、多くの英知を集めることによって、6000 人もの信徒の心をみずみずしく潤すものとなったのである。それは日本の讃美歌の未来を見すえた意欲的な讃美歌論と言えよう。

ここで彼が訴えたことによって、どれほどの作品が奥野昌綱の所に寄送されたかは不明であるが、彼の意図した讃美歌集の基本となる骨組みは、確実に『新撰讃美歌』の編集の骨子になっているのである。

このように植村正久の『新撰讃美歌』に与えた影響は大きいものであるが、それはいまだ研究されつくしているわけではない。後述する歌詞における植村正久・奥野昌綱・松山高吉の 3 人と曲における G. オルチンがいわば車の両輪のように、日本の讃美歌の近代化を進めていったといっても過言ではない。讃美歌では 75 調は文字ではなく音であることなど、近代化の波に揺れた明治期に生きた植村正久が残した讃美歌論は、現代のわれわれをとりまくものを読みとく鍵の一つになるであろう。

3、植村正久と『新撰讃美歌』

植村正久が関わった、また彼の讃美歌論の結実とも言える『新撰讃美歌』に関して、その書誌事項から記載する。

『新撰讃美歌』(明治 21［1888］年 5 月)

讃美歌委員編　植村正久・奥野昌綱・松山高吉・オルチン著、植村正久他出版、印刷者は須原徳義（印刷所　横浜市太田町 5 丁目 90 番地　製紙分社)。8×12cm。286 曲　歌詞のみ。巻頭部分に、序・目次・いろは分け見出し。巻末に英文で、PREFACE, CONTENTS: INDEX OF SUBJECTS / INDEX OF TUNES / METRICAL INDEX / INDEX OF FIRST LINES がある。

一致教会と組合教会による教派連合讃美歌集。

讃美歌委員（著者以外)、宮川経輝、田村初太郎、瀬川浅、フルベッキ。

『新撰讃美歌［譜附改訂版］』(明治 23［1890］年 12 月)

讃美歌委員編　植村正久・奥野昌綱・松山高吉・オルチン著、植村正久他出版、印刷者は須原徳義（印刷所　横浜市太田町5丁目90番地　製紙分社）。23cm。286曲。巻頭部分に、序・目次・いろは分け見出し。巻末に英文で、PREFACE, CONTENTS: INDEX OF SUBJECTS / INDEX OF TUNES / METRICAL INDEX / INDEX OF FIRST LINES がある。

一致教会と組合教会による教派連合讃美歌集。明治21年5月の譜附改訂版。讃美歌委員（著者以外）、宮川経輝・田村初太郎・瀬川浅・フルベッキ。

上記以外にローマ字の版（明治23［1890］年12月）とトニック・ソルファー譜付の版（明治24［1891］年10月）も存在する。

序文[307]には、編集者と編集過程、編集者（著者）とその実務内容、収録された讃美歌の典拠、版権（現在の著作権とは異なる）、出版の目的、そして出版費用を負担した湯浅治郎氏への謝辞が書かれている。植村正久は委員の筆頭にあげられている[308]。

また序文に、編集者（著者）の実務内容では、植村正久・奥野昌綱・松山高吉の 3 人が主として編集を担当したことと、G. オルチン[309]の音楽（楽譜）の編集について述べられている。彼は日本人の音程に合わせるために約 100 曲のキーを下げた。この楽譜校正には G. オルチン夫人によるものと述べられている[310]。

収録された讃美歌は、(1) 一致教会の『讃美歌　全』、組合教会の『讃美歌并楽譜』（重複を除き 72 曲）。(2) 許諾を得た他の教派の讃美歌集（『聖公会歌集』、メソジスト教会系の『基督教聖歌集』と重複を除き 31 曲）。(3) 英語讃美歌からの翻訳。(4) 委員による新作。このうち (3) (4) が最も多いと述べている[311]。この翻訳に植村正久が関わっていた。

明治22年に『大日本国憲法』、『新撰讃美歌』が刊行された。明治23年に『教育勅語』が発布され、日本が国家主義、国粋主義の方向をめざす事になり、またキリスト教会では一致教会と組合教会による教派合同が明治23年4月8日、失敗におわるという時代背景の中でこの讃美歌集は生まれた。明治21年5月に歌詞のみの版が出版された頃合同問題が進行中で、植村正久も組合、一致教会合同委員の一人であった。

日本人として歌いにくいはずの 3 拍子の曲も多く、曲だけのレベルでいえば現在まで出版された讃美歌集で最もレベルの高い讃美歌集と考えられる。別所梅之助は「なにせよ、『新撰讃美歌』あって、日本のキリスト教会は、はじめて讃美歌らしい歌集を得たのです」と述べている[312]。

また、新体詩に対し形式的、ローマン主義的、恋愛至上主義的影響を与えたことで文学的評価も高い。

文学（詩壇）との関連で笹淵友一氏は『礼拝と音楽[季刊]』第2号の＜特集日本の讃美歌＞の中で「『新撰讃美歌』について」を執筆し、次のように『新撰讃美歌』を位置付けている[313]。

わが讃美歌史は大体 4 期に分けることができる。―略―以上 4 期の中で第 2 期は近代詩史の草創期に当たり、「新体詩抄」（明治 15 年）以後近代詩への試みがつづけられていた。第 2 期の讃美歌はこの詩壇の機運と多少の関連を有するものがあるが、しかもその成果においては詩壇を数歩先んじており、詩壇に影響を与えたものもある。

この期を代表するものは―略―中でもとくに重要なのは「新撰讃美歌」である。―略―本集は別所梅之助が示唆したように讃美歌史に一期を画したものであるが、これを詩壇との関係についてみれば、詩壇との距離が最も近接しかつこれに数歩を先んじて近代詩の行手に新領域があることを示唆したものといってよい。それを証明するのは本集と藤村詩との関係である。

藤村と植村正久の関係は冒頭で触れたが、植村正久は英文学を研究し、詩にも関心を寄せていた。『新撰讃美歌』のどの部分の編集を担当したかは具体的に明らかにすることはできないが、歌詞の部分での役割が大であったことは想像に難くない。

なお、『新撰讃美歌』の装丁にはクロス、皮、折皮等があり、書籍の装丁でも他の詩歌の書籍と一線を画していた。この装丁に関して小川和佑氏は『文明開化の詩』の中で次のように述べている[314]。

この四六判、背丸総皮装、金箔押の楽譜付の本格讃美歌集であった。この見事な洋装本は当時、また完全な洋本装幀が少なかった時代に『新撰讃美歌』そのものがキリスト者でなくても、この 1 冊の手触りが「近代」そのものを感じさせたのではあるまいが（ママ）。和本装の『新體詩抄』（その再販本は木版本であった）と並べて見れば、この 1 冊の具現した西洋が第 2 の文明開化であった鹿鳴館の時代の直後に置かれている歴史的時間と考えあわせて、それが明治 20 年代の日本の「近代」というものがいかなるものであったかが実感としてわかるような気がする。

『新撰讃美歌』は文学、音楽、日本の近代化というものの先端を歩んでいた。しかし編集に関わった植村正久は、これ以後明治 27 年讃美歌編集委員に選出されるが[315]、5 教派共通の明治 36 年版『讃美歌』には彼の名前が書かれていない。『讃美歌』を編集する上での資金をめぐって宣教師との間で争いがあり、そのことが原因で讃美歌編集委員を辞してしまったのであろうか[316]。

4、植村正久の讃美歌情報

植村正久には讃美歌論や『新撰讃美歌』の編集ばかりでなく、讃美歌に関する論文、記事、エッセイを多数残している。『植村正久と其の時代』には讃美歌に関する 1 章[317]が存在し、日本の讃美歌に関する貴重な情報源となっている。特にここで讃美歌と唱歌の関係

を論じていることと日本の最初の讃美歌学者と言ってよい松本幹について記述があることが特筆される。

植村正久は讃美歌と唱歌に関して以下のように述べている。

当時の文部省から音楽の取り調べのために米国に派遣された役人（伊澤修二氏であつたらう）が連れ帰つた所謂文部省お雇ひの音楽教師はメエソンと言つて基督教の熱信者で、其の日本の小学兒童に歌はせた唱歌の多くは、讃美歌などの譜其のまゝ若くは少しく作り更へたものであつた。其の副産として小学校で教育された人たちが基督教の讃美歌を同じやうに容易く、或ひはもつと巧く、歌ひ得るやうになつて居ることである。基督教の伝道には至極便利な結果である。(ルビ省略)「今昔の感」『福音新報』(大正 13［1924］年８月）[318]

日本の基督者が外国風の歌を歌ったり、更に発展してオルガン等を使用し始めてから程を経て当時の文部省は外国の音楽家を雇ひ入れて、漸く唱歌を教え始めた。其の多くは米國に行はれる讃美歌と同じ譜であった。当時の基督者は小学校の唱歌を聴いて其の未熟なるを気の毒に思ったかも知れない。然し近年は余程発達進歩して教会の音楽が、ミツシヨン・スクールの援助でもなければ世間の唱歌に劣るやうなことになつた。世の中は随分変るものである。此のことを考えると外にも之に類した例がある。基督者の自ら省ねばならぬことであらう。然し近來は如何なる片田舎に伝道しても往時と違つて伝道者の歌ひ出す讃美に奇異の思ひを爲したり噴飯したりするものは一人もない。反つてみな基督者の集会であるかの如く、之に和してしばしば上手に歌ふ。又以て基督教興隆の瑞相とも見られるであらう。『福音新報』（大正 10［1921］年 11 月）[319]

植村正久はキリスト教の音楽ついて次のように述べている。「基督教徒の讃美歌とオルガンは新音楽における西洋音楽の先駆なり。文部省の音楽学校を設くるや、其基督教信徒の音楽はこれに対して数年の長者たり。彼我の長短を比ぶれば基督教徒はその優者にてありき」[320]。

ここで登場するメーソン（メエソン）は「私たちの評判のよい曲を多く使って、それらに日本語の歌詞をつける。それ故、この方法で行えば急激に変化したようには見えずに、日本の人々に音楽教育をする上で、ほとんど無意識のうちによりよい音楽の形態を受容するように日本人をさらに導くことであろう」[321]と述べている。ここには日米のキリスト教（宣教）と音楽（讃美歌・オルガン）をめぐる奇妙な構図が見てとれる[322]。

これら植村の発言、メーソンの発言を裏付ける研究、すなわち讃美歌と唱歌、日本におけるキリスト教（宣教）と音楽の研究が進んでいる。また最近は東アジア、環太平洋を含めた研究が行われている[323]。

また、『植村正久と其の時代』にはユニオン神学校でマスター論文を提出した松本幹（つよし）についての記事が存在する[324]。おそらくこの提出論文は讃美歌学における日本人初のマスター論文であろう。長い間彼の名前と論文だけが伝わり、松本幹とは誰のことなのか知られていなかった。近年園部不二夫著の「明治学院音楽史　明治学院における戦前戦後の音楽活動」[325]によって明治学院神学部の卒業生であることが判明した。歴史の中に埋もれてしまった讃美歌学者の存在を記憶の底から呼び起こすことができたのも、松本幹に関する植村正久の記事があってこそなのである。

第 7 章　島崎藤村、樋口一葉と讃美歌　キリスト教と詩歌　86 調と 75 調

第 1 節　島崎藤村

1、はじめに

この章では文学者が、新しい詩歌、キリスト教、86 調と 75 調にどう向き合ったのかを第 1 節・島崎藤村（明治 5［1872］～昭和 18［1943］）[326]と第 2 節・樋口一葉（明治 5［1872］～明治 29［1896］）をとおして検証したい。

島崎藤村は明治学院普通学部本科に明治 20（1887）年に第一期生として 16 歳で入学、明治 24（1891）年に卒業した。明治 30（1897）年には『若菜集』で日本近代詩の新しい門出を告げ、その後小説家として『破戒』（明治 39［1906］年）で自然主義の作家として名声を得、自伝的作家として『家』（明治 43［1910］～明治 44［1911］年）、『新生』（大正 7［1918］～大正 8［1919］年）、『夜明け前』（昭和 4［1929］～昭和 10［1935］年）を発表している。また讃美歌や明治学院が背景になっている『春』（明治 41［1908］年）、『桜の実の熟する時』（大正 3［1914］～大正 7［1918］年）を執筆している。1906 年には明治学院校歌《人の世の》を作詞した。

前節「植村正久と讃美歌」の中で「［植村正久の］翻訳に関しては、島崎藤村の詩《逃げ水》（『若菜集』所収）に影響を与えた《ゆうぐれしづかに》（S. R. ブラウンの母、フィービ・ブラウン作）を翻訳したことで知られる。」と植村正久訳讃美歌と島崎藤村の詩《逃げ水》の関係に触れた。また前節において、植村正久が編集者の 1 人だった『新撰讃美歌』に関して「新体詩に対し形式的、ローマン主義的、恋愛至上主義的影響を与えたことで文学的評価も高い」ということを、笹淵友一氏の「第 2 期の讃美歌はこの詩壇の機運と多少関連を有するものがあるが、しかもその成果において詩壇に数歩先んじており、詩壇に影響を与えたものもある。この期を代表するものは―略―中でもとくに重要なのは『新撰讃美歌』である。―略―これを［『新撰讃美歌』］と詩壇との関係についてみれば、詩壇との距離が最も近接しかつこれに数歩を先んじて近代詩の行手に新領域があることを示唆したものといってよい。それを証明するのは本集［『新撰讃美歌』］と藤村詩との関係である」[327]を引用し、影響関係に触れた[328]。

2、島崎藤村と讃美歌

第 1 節では、キリスト教（植村正久他編『新撰讃美歌』）と藤村の関連ばかりでなく、「詩形論」と「音楽」の観点からも「島崎藤村とキリスト教音楽（特に讃美歌）」を論じたい。

藤村の詩の中で韻律・内容ともに讃美歌（『新撰讃美歌』）の影響を受けて成立したとす

る詩は《逃げ水》と《月光》である[329]。

《逃げ水》と《月光》の初出は『文学界』第46号（明治29年10月）所収『一葉舟』の中「こひぐさ」の《其八逃げ水》と《其九月光》である。その後「こひぐさ 其一～其九」は『若菜集』（明治30年）に1つ1つ独立した詩として収録され、大正6年の『藤村詩集』に「小詩二首」としてこの2つの詩はまとめられている。『藤村詩集』でこの二首だけまとめられたのには何らかの理由があるのであろう。

この2つの詩の詩形は75調ではなく86調、87調で、それだけでも讃美歌の影響を感じる。《逃げ水》の詩形は 8686 で、これは讃美歌ではコモン・ミーターと呼ばれ、讃美歌でもっとも多い詩形である。またこの 2 つの詩以外藤村詩の詩形は《椰子の実》に代表されるようにすべて75調、57調である[330]。そしてこの2つの詩は平仮名中心で書かれ、漢字をあまり使用しておらず、それは藤村の他の詩には見られない特徴である。『新撰讃美歌』も平仮名中心で平易な漢字しか用いられていない。この 2 首だけが藤村の詩の中で独自の位置を占めているのである。この 2 点だけでも明らかに讃美歌の影響を受けていると言えるであろう。

3、島崎藤村とキリスト教

島崎藤村（1872～1943）がミッション・スクール明治学院に入学した明治 20（1887）年（16歳、明治24年卒業）当時、明治学院の「唱歌、音楽」の教師はジョン・バラの妻 R. F. バラとジョン・バラの妹 A. B. バラで、音楽の教科書は Charles S. Robinson 編の讃美歌集『Spiritual Songs』と文部省の「唱歌掛図」であった[331]。そしてこの文部省唱歌にも讃美歌の影響が及んでいたと考えられる[332]。すなわち明治学院の音楽の授業はきわめてキリスト教的であったと言っても過言ではなく、その授業を島崎藤村は受けていた。

明治 21（1888）年には植村正久が編集者の一人だった『新撰讃美歌』の歌詞だけの版が刊行され、その後明治23（1890）年には楽譜付が刊行されている。

藤村は明治21年高輪台町教会（現高輪教会）の木村熊二牧師から洗礼を受ける。その後明治22年明治学院教授に就任した植村正久が牧する麹町一番町教会（後の富士見町教会）に転籍、明治 26（1893）年には退会しているが、植村から感化を受け、後年においても藤村は植村の文学的才能を高く評価していた[333]。また藤村は在学中明治23年の第2回基督教夏期学校（会場：明治学院、講師：植村正久他）に参加している。藤村の文体は簡素であるといわれるが、植村の影響であろうとする指摘も存在する[334]。彼はこの期間ミッションスクールである明治学院、そして教会で学生生活を送り、そして明治学院卒業後明治 25［1992］年、キリスト教主義女学校である明治女学校の教師に就任した。ここでの教え子佐藤輔子との件は後述する。この時期まで藤村は、讃美歌に親しむ環境にいたのである。

藤村の自伝的小説『春』（明治41年）、『桜の実の熟する時』（大正8年）には随所に讃美歌に関する記述があり、『新撰讃美歌』の歌詞が引用されている。

検屍も済み、棺の用意も調い、いよいよ青木（クリスチャンであった北村透谷がモデル）は十七日の午後に埋葬されることに成った。―略―

「浪風(なみかぜ)の荒きうき世のなかにも
休らふ処はめぐみの宝座(みざ)なり。
吾等が遁(のが)るるめぐみの宝座には、
罪も、哀(かなしみ)も、消えてあとぞなき。
歓喜(よろこび)の膏油(あぶら)うくべき処は
主の血に潤(うるお)ふめぐみの宝座なり。
すみかへだつとも主を呼ぶみ民は
めぐみの宝座にて共にころあらめ」

これは小説『春』の中で青木（北村透谷がモデル）の葬儀の場面であるが、この讃美歌は『新撰讃美歌』第 21《なみかぜのあらき》（礼拝　祈祷）[335]で、平仮名で書かれた歌詞の多くを漢字で表記し、句読点を付け加えている[336]。

こういう声が起こった。穴の中へ棺の滑(すべ)り落ちる音がした。やがて人足の土を掻落す音が烈しく岸本（モデルは藤村自身）の胸を打った。彼は青木（北村透谷がモデル）の埋められるところを見るに堪えないような気がしたのである。
その時、信徒の群は讃美歌を歌い出した。

「短きこの世の旅の友よ、
しばしは別れて、離るるとも、
再び会見てともに語らん―
心をおとさで勇み進め。
主の手に縋(すが)りて、ただ静に
もとゐある城を望みて行け。
霊(たま)の戸開きて父は友の
帰るを今かと待ちたまへり
あとに後(おく)れゐて友を見やる
心は御国の岸まで行かん」（ルビの一部省略）

これも小説『春』の中で、青木（北村透谷がモデル）の葬儀での記述であるが、この讃美歌は『新撰讃美歌』第 198《みじかきこのよの》（基督教徒の死　死別を慰む）[337]で、多くの平仮名を漢字に改め、句読点を付加している[338]。この讃美歌《みじかきこのよの》

の曲《COOLING》は植村正久訳《ゆうぐれしづかに》の曲としても採用されている。

『桜の実の熟する時』（大正 8 年）は明治学院在学中の明治 20 年から明治 24 年までのことを描いた自伝的小説である。彼は明治学院を明治 24 年に卒業しているが、明治学院が背景になっている場面も多く、前半にキリスト教音楽、讃美歌に関する記述が頻出する。

「英語の讃美歌の節を歌いながら庭を急ぐものがある」[339]、「執事が讃美歌集を彼方此方と配って歩いた」[340]、「式が始まるにつけて婦人席の中から風琴の前の方へ歩いて行つたのは繁子だ。捨吉（藤村自身がモデル）は多勢腰掛けて居る人達の間を通して、彼女を見た。彼女が腰掛を引寄せる音や鍵台の蓋を開ける音や讃美歌の楽譜を繰る音はよく聞こえた。捨吉はその風琴の前に、以前の自分を見つけるような気がした」[341]、「手に持った讃美歌集を彼の方へ見せて、一緒に歌えという意味を通わせた」[342]、「凱歌を奏するような信徒一同の讃美が復た始まった。ハレルヤ、ハレルヤー」[343]、「一同の合唱に一層気勢を添えるように聞えた。ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤーアーメン」[344]、「捨吉（藤村自身がモデル）達同級生の一人のお父さんにあたる人で、新撰讃美歌の編集委員たる白い髯を生した老牧師（奥野昌綱がモデル）が通った」[345]、「日曜々々に定った会堂へ通い説教を聞き讃美歌を歌わなければ済まないことをしたと考えるような信徒気質」[346]、「『ゆうぐれしずかに　いのりせんとて、世のわずらいより　しばしのがる』　讃美歌の声が奥座敷の二階から聞こえて来る。玉木さん達は夫婦だけで小さな感謝会でも開いたらしい。その讃美歌の合唱は最初は口吟むように静かで、世を忍ぶ心やりとも貧しさを忘れる感謝とも聞えた」[347]、「聖書の朗読があり、讃美歌の合唱があり、別離の祈祷があった」[348]。（ルビ省略）

藤村は若き日、キリスト教音楽を聞き、讃美歌を歌う環境の中にいた。教会は当時男女が同席できる当時まれな場所であり、藤村は音楽の演奏に関わる人に関心を持ち、『桜の実の熟する時』でも風琴（リードオルガン）を弾く繁子に惹かれていく。後述する佐藤輔子も明治女学校の学生であった時、オルガンを練習し、卒業後は東京音楽学校への進学を希望していた[349]。ここで藤村の《逃げ水》と『桜の実の熟する時』に登場する植村正久訳《ゆうぐれしづかに》（『新撰讃美歌』第 4）を比較検討してみよう。対照しやすいように《逃げ水》の行の取り方に変更を加えた。

4、島崎藤村の《逃げ水》と讃美歌《ゆふぐれしづかに》

『若菜集』（明治 30 年）　　『新撰讃美歌』第 4「礼拝夕」植村正久訳（明治 21 年）
『藤村詩集』小詩二首（明治 37 年）

一［《逃げ水》］

ゆふぐれしづかに
　　ゆめみんとて
よのわづらひより
　　しばしのがる

きみよりほかには
　　しるものなき
花かげにゆきて
　　こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを
　　おもひみるに
こひこそつみなれ
　　つみこそこひ

いのりもつとめも
　　このつみゆゑ
たのしきそのへと
　　われはゆかじ

なつかしき君と
　　てをたづさへ
くらき冥府まで
　　かけりゆかん

一　ゆふぐれしづかに
　いのりせんとて
　よのわづらひより
　しはしのがる

二　かみよりほかには
　きくものなき
　木かげにひれふし
　つみをくいぬ

三　すぎこしめぐみを
　おもひつゞけ
　いよゝゆくすゑの
　さちをぞねがふ

四　うれひもなやみも
　わがみかみに
　まかすることをぞ
　よろこびとせん

五　身にしみわたれる
　ゆふくれどきの
　えならぬけしきを
　いかでわすれん

六　このよのつとめの
　をはらんその日
　いまはのときにも
　かくてあらなん

《逃げ水》については、影響というより、藤村は《ゆうぐれしづかに》の文言の文字を少し変え、恋愛の詩にしたという印象を受けるが、小玉晃一・小玉敏子氏の「語句を少し変えただけで、清純な恋愛詩にしたてた藤村は、けっして凡手ではなかった。[350]」という

見解も存在する。教会から離れて 4 年経っている藤村が何故讃美歌の影響そのままの詩を書いたのであろうか。《逃げ水》は《ゆうぐれしづかに》を改変、翻案、換骨奪胎、パロディという表現がよく使われるが、三好行雄氏は内容について「讃美歌の改変という試みにおいてすでに背教的な《逃げ水》は、恋ゆえに神を捨てるというテーマにおいて、いっそう背教的である」と述べている[351]。

また笹淵友一氏は『島崎藤村事典　新訂版』に次のように書きしるしている[352]。

「新撰讃美歌」（明治二一・五刊、日本一致派・日本組合教会讃美歌集）第四＜ゆうぐれしづかに―略―＞の翻案ということは知られている。とくに第一連はいのりをゆめに、第二連はかみをきみに、木かげを花かげに、つみをくいぬをこひを泣きぬに改めただけである。翻案の方向は清教徒的信仰から恋愛至上主義の方向であって、それはかみをきみに変わるところに端的に現われている。藤村の信仰の対象としての神が恋愛の対象おきかえられた過程は『桜の実の熟する時』にも書かれている。この詩の構成は、宗教感情を浪漫的な恋愛感情に変質させた一・二連から出発して第三連に＜こひこそつみなれ＞という罪意識を前提としながら＜つみこそこひ＞という意識的異端、反宗教の態度を打ち出し、第四連に楽園を自ら拒否して＜なつかしき君と／てをたづさへ／くらき冥府（よみ）まで／かけりゆかん＞という、終連において地獄の苦患をかけて恋に殉じようとする想念に到達している。この終連の想像はダンテ「神曲」地獄編第五歌のフランチェスカとパオロとの恋と関連があると思う。（第四連の罪意識にもフランチェスカとパオロの恋がかげを投げていよう。）いずれにせよ、藤村の内部にはこういう暗い情熱が潜んでいた。なお『逃げ水』という題については「行方をまどわす暗い情熱の力」を意味するという解釈がある。

背教的、反宗教的という三好行雄氏、笹淵友一氏の解釈に対し青木美穂氏は次のように述べている[353]。

この詩は、本当に「いのりもつとめも」捨て去って恋愛に耽溺するとことを意味しているのだろうか。

罪の自覚が深まれば深まるほど「いのりもつとめも」また真剣なものになるであろう。信仰はここにおいてはじめて人間の血肉に食い込んだ真実となるのだ。恋愛は信仰から人を背かせるものではなく、むしろ真の信仰に人をいざなうものでもあるのだ。

「いのりもつとめも／このつみゆゑ」に、こうしてかつて覚えなかったほどに切実な営みとなった。いっぽう恋の苦しさは、「いのりもつとめも」甲斐のない苦しさとして、いや深まる。「いのりもつとめも」及ばぬ苦しさがあればこそこれも人間の真実に違いない。この詩は二つの人間の真実―恋と信仰―の間に立つ苦しみのうただ。この苦しみにはたやすく答は出ない。もし答があるとすれば、この世を超えたところにあるのかもし

れない。ここに死ということが問われることになる。

青木氏はこの後、小説『春』で歌われた《みじかきこのよの》が「基督教徒の死」であることを述べ、「ここで、青木とは北村透谷を指し、岸本は藤村とみてよいであろう。この記述から、藤村は北村透谷の葬儀に参列し、『新撰讃美歌』第188を歌った可能性が高くなる。また、佐藤輔子などの身近な人の死の際、自室にこもって、あるいは、ひとり野道を歩きながら、この讃美歌を口ずさんだであろうことは推測に難くない」と想像している。また後述する《月光》については、『新撰讃美歌』第207の影響を示し、この曲《ST.SYLVESTER》が『新撰讃美歌』第201《世にてまたあはぬ》の曲でもあり、これも「基督教徒の死」であることを述べ、これらの讃美歌が死のイメージで繋がっているという見解を示している。そして『新撰讃美歌』が広く歌われていたことを述べ、「基督教徒の死」には天国での再会をも意味すること、恋愛と信仰は矛盾しないことと展開し、最後に「『逃げ水』『月光』の中で、恋愛と同様、信仰・死ともまじめに向きあっている。これらのもののどれか一つが否定され、捨て去られた形跡は見い出せない。信仰・恋愛・死は、後年の藤村文学の中でも共存したまま、さらに追求され続けたと考えるべきであろう」と結論づけている[354]。

本論考では藤村の信仰には触れず、キリスト教音楽（讃美歌）との関連だけを問題とする。

小説『春』の中で讃美歌が 2 曲歌われるのは青木（北村透谷がモデル）の葬儀の場面である。しかもその内の1曲《みじかきこのよの》の曲《COOLING》は植村正久訳《ゆうぐれしづかに》の同じ曲である。藤村はよほどこの《COOLING》という曲に思い入れがあり、そしてこの曲に友人の死のイメージを重ね合わせていたのでないだろうか。《逃げ水》は恋愛の詩である。藤村はこの《逃げ水》を書いたとき、明治女学校での教え子佐藤輔子に愛情を抱いていたことを思いだしていたと思われる。そしてクリスチャンだった彼女は他家に嫁ぎ、明治28年に亡くなっている。《COOLING》という曲が藤村に恋愛と死を想起させ、《逃げ水》の作詩にいたったのではあるまいか。その前に《逃げ水》は読まれるための詩ではなく、藤村にとっては歌うための詩でなければならなかった。青木氏が想像するように、「佐藤輔子などの身近な人の死の際、自室にこもって、あるいは、ひとり野道を歩きながら」歌うためには、既に教会を離れている藤村にとっては讃美歌ではなく、新しい詩が必要だったと思われる。曲は《COOLING》でなければならない。そして《COOLING》で歌うには 86 調でなければならないので、このような関連でこれまでの作詩からは前例のない86調で詩をつくったのであろう。

5、島崎藤村と讃美歌《しづかにさしくる》

次に《月光》と《しづかにさしくる》と比較してみよう。

小詩二首　二［《月光》］

しづかにてらせる
　　月のひかりの
などか絶間なく
　　ものおもはする
さやけきそのかげ
　　こゑはなくとも
みるひとの胸に
　　忍び入るなり

なさけは説(と)くとも
　　なさけをしらぬ
うきよのほかにも
　　朽(く)ちゆくわがみ

あかさぬおもひと
　　この月かげと
いづれか声なき
　　いづれかなしき

『新撰讃美歌』第 207 訳者不詳

一　しづかにさしくる
　　ゆふ日(ひ)のかげに
よをさりしとものの
　　おもかげのこる
二　はかなくうきよを
　　さりにしともを
しのべるこゝろは
　　いまもかはらず

三　身(み)ははなるれども
　　こゝろはともに
たのしきあめにて
　　とはにすまゝし

四　かゞやきいでくる
　　ほしやそれかと
おもふ天(あめ)にゆく
　　みちのしるべか

《逃げ水》ほど讃美歌の歌詞からの影響は見られない。出だしが似ていることや全体が《しづかにさしくる》を前提としてつくられているためと考えられるが、これも恋愛の詩である。勿論これも歌うことを前提としたため、87 調で作詩したのであろう。

《しづかにさしくる》も（基督教徒の死　友を慕う）であり、『春』に登場する《みじかきこのよの》も（基督教徒の死　死別を慰む）である。《しづかにさしくる》の曲《ST.SYLVESTER》は『新撰讃美歌』第 201《世にてまたあはぬ》（基督教徒の死　主の旨）の曲でもある。これら（基督教徒の死）の項目の讃美歌にはこの世での別離とともに天国での再会が歌われている。そしてそのイメージを想起させる《COOLING》《ST.SYLVESTER》という曲が存在する。藤村はこの曲をとおして北村透谷と佐藤輔子との天国での再会をも念頭に置いていたのではあるまいか。

6、島崎藤村と西洋音楽

ここで讃美歌から離れ、藤村と西洋音楽について考えてみたい。藤村は西洋音楽にも深

い関心を持っていた。彼は明治 30 年 26 歳のときヴァイオリンを購入し、ドルドラの《思い出》などを弾いていたという[355]。また明治 30 年 9 月東京音楽学校（当時高等師範学校附属音楽学校専科下級に入学（明治 31 年 7 月退学）している[356]。東京音楽学校も教会同様男女が同席する当時まれな場所であり、後述の資料にも女性が頻出する。彼の詩はローマン主義的、恋愛至上主義といわれるが、その環境にいたことの影響があるとも考えられる。また明治 30 年といえば、『若菜集』が春陽堂から刊行された年である。選科といえば現在の聴講生（研究生）にあたる。文学のために音楽にも関わろうとしたのであろうか。藤村は「韻文について」で次のように述べている[357]。

音楽の楽器に於けるは詩の言語に於けるが如きものなるべし。天籟の妙趣に触れては破れたる琴にも無限の声調を繰り返しとゞむとは言ひながら、不完全なる楽器に円満微妙なる音楽を望むべからざるが如く、不完全なる言語に変化自在なる韻文を望むべからざることは明らかなり。幾多の詩人が苦心と研究とを重ねて未だ自在なる妙音を発する能はざるは、韻文と名のついたる琴自身の楽器に於て欠くる処あるにあらざるか。
自然に帰れといふルソウは隠れもなき革命的の思想家にして又音楽家なりき。

藤村の東京音楽学校入学は「詩に於ける韻律の新しい探求の決意」とする島崎翁助氏の説[358]がある。

第三回目五月二日の「土曜日の音楽」は、上野、東京音楽学校の演奏会に関する文章である。その中で藤村は―略―「―略―詩歌に至りては東西言語の組織性質いたく異なりたれば、微妙なる声調を伝えんことは難し」と書いてゐるのを見ても、詩に於ける韻律の新しい探求の決意が、「若菜集」以後の新規な課題となつて、仙台を早々に引上げたのも、最早「若菜集」のできた時のやうに、溢れるにまかせて「旅情をほしいまゝにしたりしたやうな」時期は過ぎ、詩作への徹底した探究へと翻意したためであつたらう。その一つの現れが、この年新設された東京音楽学校選科へ入つて、下級ピアノの担任助教授橘糸重に就いて、ピアノ習得の試みとなつたものであらう。

また韻律に関する瀬沼茂樹氏の説も存在する[359]。

さて、小久保から帰った藤村は本郷森川町の長兄秀雄の宅に住い、近くの山口はつ（いさの小学友達）の離れを仕事部屋にした。ここで、ヴァイオリンを買って、ドルドラの「思い出」などを弾いたと伝えられる。藤村は、すでに仙台名掛丁の旅館で、そこの娘徳江きくよ（セントポオル女学校の生徒）が四竄仁邇（仙台師範学校教師）についてヴァイオリンの自宅教授を受けていたのに興をおぼえ、この楽器を弾くことを、習得していた。まもなく、長兄一家と本郷湯島新花町九十三番地（猿飴横丁）に移るが、三兄友

弥の竹柏園仲間の歌人で、音楽学校助教授の橘糸重を知って、上野公園の音楽学校選科に通い、ピアノ学習にしたがった。一見、突飛な行為にみえるが、物事に執するところのある藤村は、ようやく「歌のしらべ」の千篇一律に流れるのを嫌って、詩の韻律上の変化をもとめる真面目な努力をしていたものといえる。―略―

しかし音楽学校通学は同時に上野図書館に通って外国の書物を読むことでもあったらしい。

上野の図書館に通っていたことでは、親戚の証言も存在する[360]。

翌三十年の春の学校をやめて仙台から帰られました。―略―古い家の一室を春樹様がお借りになり、音楽学校へ通って、バイオリンを奏きはじめられました。兄の秀雄様も事業を始め、暮しが楽になったので、三十年から二年ほど、音楽学校へ通われましたが、音楽が目的でもないらしく、いつも上野の図書館へ通って外国の書物を読み、家ではいつも何かを書いて居られました。―略―

音楽学校のお友達には堤千代子とか、栗山、鈴木など、ピアノ専攻の方や、声楽家もあり、堤千代子さんはなにをやってもお上手で、絵もお上手でした。ピアノの先生は橘糸重、幸田延子、バイオリンの先生は幸田（安藤）幸子さんなどでした。音楽学校の演奏会には出られることはなかったそうで、あまりお上手ではなかったのでしょう。合唱位にはお出になったことはありました。バイオリンを奏きながら泣いて居られることもあり、悲しみの曲をひいていると一緒に悲しくなるよといわれながら、バイオリンを抱くようにして手足を震わせながらひいて居られました。

藤村自身は東京音楽大学入学について、「沈黙」の中で次にように述べている[361]。

僕はあらゆる芸術を味へるだけ味はうといふやうな若い量見をもつて、いくらか取つて居た教師を辞し、東北の方から帰つてもう一度書生の身に返つた。―略―君に逢つた頃はまた、しきりに文学と音楽とを並べて考えたい時代で、シュウマンの『音楽と音楽者』などはあの当時僕が読み耽つた書籍の一つだ。一度思ひ立つたことは兎も角もそれを試みないでは居られないのが僕の性分だ。そこで僕は音楽の世界へもいくらか足を踏み入れた。僕は上野の音楽学校でそこに蔵つてある図書を猟ることを許された。バハの伝などが有つて、借りて読んで見た。

斯ういふ僕の位置は我儘な気楽なようでも、苦しいことも多かつた。僕はあまり自分の為たいことを為ると言つて非難されると同時に、一方では真実に自分をショパンやワグネルまで連れて行つて呉れるような人も見当らなかつたから。

ここで藤村は「文学と音楽とを並べて考えたい時代で、シュウマンの『音楽と音楽者』

などはあの当時僕が読み耽つた」、「バハの伝などが有つて、借りて読んで見た」と述べ、「自分をショパンやワグネルまで連れて行つて呉れるような人も見当らなかつたから」と入学の動機を書いている。また前述「韻文について」でも「ルソウは隠れもなき革命的の思想家にして音楽家なりき」とルソーが音楽家でもあったことを強調している。やはり音楽家をも目指していたのではなかろうか。東京音楽学校在学中の藤村は、上野の図書館にばかり行っていたのではなく、「藤村の音楽学校に学ぶや、面白半分の道楽にあらずして、一意其道を究めんとすと言ふ。毎朝八九時より通学して、三四時に至るといふにても、其熱心の程知るべし。[362]」と音楽に打ち込んでいる姿が書かれた記事も存在する。また明治 27 年 4 月 1 日、当時のお雇い外国人であるルードルフ・ディートリッヒの演奏（東京音楽学校奏楽堂、音楽学校校友会主催）を聴き[363]、「初めて私が西洋音楽に興味をもつたのは、東京上野の音楽学校の演奏会で、ヂツトリヒのワイオリンを聞いたころからであつたと思ふ[364]」と述べている。

7、結語

これらの資料から藤村は文学同様に音楽を追求しようとしていたと思われる。ここで藤村と讃美歌に関して音楽をとおしてまとめてみよう。藤村は何故 75 調ではなく 86 調、87 調の詩を書いたのであろうか。讃美歌とは詩として読まれるだけでなく、歌われるものである。讃美歌は詩（文学）と音楽と神（神学）という 3 つの要素から成り立っている。讃美歌は歌われるものであるゆえに、詩に対応する曲（楽譜）が存在する。また詩は歌うことによって情感はさらに強まるものである。藤村は歌うことを前提として、すなわち讃美歌《ゆうぐれしづかに》の曲《COOLING》で歌うことを念頭にこの《逃げ水》を作詩したのではあるまいか。おそらく藤村にとって《COOLING》は忘れられない曲だったのではあろう。尊敬する植村正久が訳詩をした讃美歌の曲だったことも影響したとも考えられる。藤村は北村透谷を天才と呼び敬愛し続けた[365]。葬儀で歌われ、愛した人、既に亡くなっている佐藤輔子を思い出させる。この詩は二人への追悼、佐藤輔子との恋愛、このことを歌う詩としてつくろうとしたと考えられる。その際《COOLING》は 86 調なのでそれに引きつけられるようにして植村正久訳《ゆうぐれしづかに》の歌詞を参考にしたのではないだろうか。《COOLING》はゆっくり歌うと鎮魂歌のように聞え、テンポを速めると歌曲に聞える。まさに恋愛に歌にふさわしい曲と考えられる。《ST.SYLVESTER》も同様に北村透谷と佐藤輔子への追悼、天国での再会の歌と佐藤輔子との恋愛の歌と考えられ、藤村はこの 2 曲を一人静かに口ずさんでいたのではないだろうか。藤村は自伝的なことを作品にしているが、彼は讃美歌を歌うというキリスト教の環境の中にいた時代があった。恋愛を詩にしようとしたとき、当時のことを思い出し、友人の追悼の曲に思い当たった。《COOLING》と《ST.SYLVESTER》である。藤村はまず《COOLING》《ST.SYLVESTER》という曲から出発し、それからその曲に合う詩をつくった。このため 86 調、87 調という他の藤村の詩には例をみない詩が生まれ、

そして特別な詩ゆえに「小詩二首」としてまとめたと考えられるのである。

第2節　樋口一葉と讃美歌[366]

1、はじめに

キリスト教がまだ禁教であった 1859（安政 6）年、開港とともに宣教師が来日し、まだ準備段階ではあったが、再布教が行われた。プロテスタントは聖書をその国の言語に訳し、会衆がその国の言語で讃美歌・聖歌（以下、讃美歌）を歌うことをその基本としている。このため再布教にあたって聖書、讃美歌の翻訳が行われた。開港以降、特に明治期に訳された讃美歌は日本におけるキリスト教史の一分野として研究されるばかりでなく、日本の近代化に大きな影響を与えたことで、近代史の一つのテーマともなっている。讃美歌と文部省唱歌の関係がその良い例である。また、おおよそキリスト教に縁のないと思われる人々[367]が讃美歌を歌ったり、関心を寄せていった。その一例が樋口一葉（明治 5［1872］～29［1896］）と讃美歌である。

2、樋口一葉が翻訳した讃美歌

小説三部作[368]『たけくらべ』、『にごりえ』、『十三夜』（いずれも明治 28［1895］年）の作者、樋口一葉は小説家として評価される以前は中島歌子の歌塾「萩の舎」で学び、歌人として短歌を詠み、そして讃美歌を翻訳したことでも知られている[369]。昭和 54（1979）年刊行『全集　樋口一葉③　日記編』（小学館）収録の彼女の日記には讃美歌翻訳の事情が次のように書かれている[370]。

二九日［明治 25（1892）年 3 月］[371]
―略―

讃美歌の翻訳

此日午後、伊東夏子ぬし来訪、「英和学校にてピヤノに合せてうたふべき彼の国のうた、是れのに詞に訳さんとするに、五七に計ならひたる身、八六の調べのいと六つかしく、又意味をもよく取がたければ、あはれよき知恵かし給へ」とて也。諸共にしばし案ぢて「さは斯くなさん」とて。「をかしくも」と、

。たのしいくにあり　　老せぬたみ
　とこしへのはるに　　かれせぬはな。
。日はつねに照りて　　うきやみもなし。
。とみれば隔つる　　死出のながれ。

其の二

。ときはの野べは　　かはのあなた
ヨルダンもカナをぞ　　へだてたりし。
。モッセのごとたちて　　御(み)くにをれば。
。いさみてこゆべし　　さかまくなみ。

「すべてほんやくの難(かた)きは、我れと彼れとならはしのことなりたる故(ゆゑ)なめり。猶(なほ)原文を残りなくかみ砕(くだ)きて、更に我が詞(ことば)にていひ出さんにはしかず。かかる短時間にておもふこと得よくも尽しがたきを、其うちに又参らせ給はずや。もろ共にこれが研究せまるほしきを」などかたる。雑談(ざふだん)いろいろ、夕飯(ゆふげ)を出す。日没少し前に帰宅しけり。此夜十二時過(すぐ)るまで工夫を更(ふか)したり。

九　神田区駿河台袋町の駿台英和女学校。明治八年にバプテスト派宣教団によって、森有礼の支援を得て開校。校長はアンナ・キダー。伊東夏子は二十五年七月にこの学校を卒業し、キリスト教青年会に入っていた。

一〇　英国の讃美歌“The life everlasting” アイザック・ワッツが一七〇七年に作詩したもの。

一一　一節が八、六、八、六の音節構成をもつ四行詩で、全六節から成る。

一二　以下の訳は第一、二、三、六節に該当する。「カナ」はカナンで、古代パレスチナの名称。「モッセ」はモーセ（共同訳は「モーシェ」）。『申命記』第三章第二十五節による。

樋口一葉訳の讃美歌は「カナ」が「カナン」、「モッセ」が「モーセ」と字句を訂正、「かれせぬはん」が「つきせぬはな」、「ときはの野べは」が「みどりなるのべは」、「ヨルダンもカナをぞ」が「ヨルダンもカナンをば」と歌詞の一部が改訂されバプテスト系讃美歌集である『基督教讃美歌』（明治 29［1896］年）に収録された。

313　〇第三百十三

一　たのしいくにあり　　おいせぬたみ
とこしへのはるに　　つきせぬはな
ひはつねにてりて　　うきやみもなし
とみればへだつる　　しでのながれ

二　みどりなるのべは　　かはのあなた
ヨルダンもカナンをば　へだてたりし

モーセのごとたちて　　みくにをれば
いさみてこゆべし　　さかまくなみ

3、樋口一葉訳と現歌詞との対比

日記の注に歌詞は《The life everlasting》と書かれているが、《たのしいくにあり》はアイザック・ウォッツ作詞《There is a land of pure delight》の翻訳である。現歌詞を比較してみると、3節まであり、《たのしいくにあり》が抄訳であることが判る[372]。

THERE is a land of pure delight,
　Where saints immortal reign;
Infinite day excludes the night,
　And pleasure banish pain.
There everlasting spring abides,
　And never-withering flowers;
Death, like a narrow sea, divides
　This heavenly land from ours.

2　Sweet fields beyond the swelling flood
　Stand dressed in living green;
So to the Jews old Canaan stood,
　While Jordan rolled between.
But timorous mortals start and shrink
　To cross this narrow sea;
And linger, shivering on the brink,
　And fear to launch away.

3　Oh, could we mark our doubts remove,
　Those gloomy doubts that rise,
And see the Canaan that we love
　With unbeclouded eyes:—
Could we but climb where Moses stood,
　And view the landscape o’er,
Not Jordan’s stream, nor death’s could flood,
　Should fright us from the shore.

Isaac Watts

5 教派統合の『讃美歌』（明治 36［1903］年）は以下の歌詞になっており、樋口一葉訳が継承されていないが、『讃美歌』（明治 36［1903］年）に採用されなかった理由に関しては後述する。

346　第三百四十六

一　きよきみたみらの　住むみくには
　　はれてのどかなる　とこ世のはる
　　つきせないづみは　野邊にわきて
　　うつろはぬ花の　　いろがきよし

二　おもへばしたはし　天(あま)なるカナン
　　へだつる川なみ　　たかゝらねど
　　なほそのきしべに　おぢまどいて
　　船出しかねつゝ　　人はたてり

三　ビスガの峯より　　モオセのごと
　　三國のたのしさ　　のぞみ見れは
　　巌(いは)ばしるヨルダン　なにかはあらん
　　いさみにいさみて　われゆかまし

4、樋口一葉とキリスト教

キリスト教の詩を訳した樋口一葉の当時の人との関係はどうだったのであろうか。森まゆみ氏は『一葉の四季』で次のように述べている[373]。

樋口一葉のまわりにはクリスチャンとなるものがいた。野々宮菊子はプロテスタントで一葉に新約聖書を貸してくれた二十五年三月二十一日、菊子に教会行きを誘われたが行かなかった。－略－

「龍子ぬし今日は御徒町の会堂に巌本善治君の父君を会葬する也といふ」（26・2・11）この時期、下谷教会には木村熊二、木村鐙子、巌本善治、幸田成行（露伴）らがいた。そして創刊された『文学界』は、巌本が校長である明治女学校の教師、星野天知、北村透谷、島崎藤村らがかわった雑誌である。一葉もしらずその文化圏に引きよせられていたことになる。

友人伊東夏子（結婚して田辺姓）がクリスチャンであることは日記の注[374]に書かれているが、樋口一葉とキリスト教、西洋文明の関係について笹川洋子氏は「夢の館――旧上野図書館」で次のようにまとめている[375]。

古典に読みふける一葉の姿が浮かんでくる。源氏物語等の素養は、一葉の雅な文体に結実したが、一方一葉には、賛美歌の翻訳に協力をし、教会に行くかどうか迷った時期があった。後年伊東夏子は、一葉は横文字はわからなかったが、英詩の意味を味わう事が好きで「英文には英文で、日本語に言ひ現はせぬ好さがあるものね」と言い、涙ぐんだと回想している。上流階級が集った「萩の舎（一葉の通った私塾）」には西洋文明への憧れが色濃く流れていたであろう。貧しい一葉にとって、上野図書館の瀟洒な館は、彼女を文学と西洋の文化を誘う夢の館だったのではないか。そして、本郷から通う道すがら、一葉も上野音楽学校から流れる「かの国」の音楽に耳を傾けたのかも知れない。

上野の図書館について森まゆみ氏は次のように述べている。「家に本はそうなかったであろう。新聞ですらよその家のを借りて読んだこともある。読書欲の強い一葉はどうしたか。まずは友人から借用した。そして上野の東京図書館へ読みに行った。わが国初の公共図書館で、そのころは東京芸術大学美術部のうらにあった」[376]。笹川洋子氏が述べるように「一葉も上野音楽学校から流れる『かの国』の音楽に耳を傾けた」可能性は高い。木村毅氏は「もし樋口一葉が、讃美歌の訳に心を砕いたことがあるといつたら、人は瓜のつるに茄子がなつたほどの驚きを感ずるであろう」[377]と述べているが、樋口一葉はわれわれが考えていた以上にキリスト教、西洋文明の影響を受ける環境にいたことが想像される。とまどいなく讃美歌の翻訳に入ったのもこの環境がそうさせたのではあるまいか。

さてここで樋口一葉が翻訳した讃美歌をさらに検証していきたい。まず最初に、詞の形に注目したい。それまで短歌を詠んでいた樋口一葉が 75 調ではなく、86868686 のコモンミーター・ダブルの詩形で翻訳したことである。讃美歌は詩として読まれるばかりでなく、歌われるものである。日記には「英和学校にてピヤノに合せてうたふべき彼の国のうた」と書かれており歌うために訳すことを前提としている。また日記には「是れのに詞（ことば）に訳さんとするに五七（ごしち）に計（ばかり）ならひたる身、八六の調べのいと六（む）つかしく」と書かれており、原曲と同じ楽譜で歌うためには詩形も同じにしなければならない。このため 868686868 のコモンミーター・ダブルの詩形で翻訳したものと思われる。日記には短歌に親しんだ樋口一葉の言語感覚からはかなり違和感の残る作業であったことが感じられる。また詩形の束縛ばかりでなく、翻訳にはそれまでとは別な感慨があったものと想像される。伊東（田辺）夏子の回想には樋口一葉は「英詩の意味を、味ふ事が好きでした。『英文には英文で、日本語に言ひ現はせぬ好さがあるものね。』と、言ふておりました。」と書かれている[378]。

5、結語

そもそも樋口一葉は何故讃美歌を翻訳したのであろうか。ここには歌塾「萩の舎」の友人伊東（田辺）夏子の存在が大きく影響しているように思われる。また伊東夏子は何故讃美歌翻訳を樋口一葉のところへ持ち込んだのであろうか。

伊東夏子はクリスチャンで、バプテスト派の学校である駿台女学校を卒業し、キリスト青年会に入会していた[379]。そして駿台女学校の創立者、アンナ・キダーについての回想を残している[380]。

バプテスト派では明治 20 年に歌詞だけの版の『基督教讃美歌』を刊行しているが、これを明治 29 年に改訂増補して楽譜付の『基督教讃美歌』を刊行している。伊東夏子が樋口一葉のところへ讃美歌翻訳を持ち込んだ明治 25 年 3 月はこの改訂増補版の準備期にあたる。明治 29 年の『基督教讃美歌』の序文には編集の経緯、代表者が書かれているが、個々の讃美歌の翻訳者までは書かれていない。想像の域をでないが、キダー、または『基督教讃美歌』の編集委員から伊東夏子にアイザック・ウォッツ作詞《There is a land of pure delight》の翻訳が託され、樋口一葉は英語が得意ではないので[381]、伊東夏子が下訳をし、それを樋口一葉のところへ持って行き、樋口一葉が手を加えコモンミーター・ダブルの形に讃美歌を翻訳したのではないだろうか。その訳が『基督教讃美歌』の編集委員に渡され、編集委員により訂正、修正が加えられて《たのしいくにあり》として明治 29 年版の『基督教讃美歌』に採用されたと考えられる。

最後に原歌詞と翻訳を対照してみたい。《たのしいくにあり》は原歌詞の抄訳になっているが、どのような対応関係になっているか以下に示す。

一

1 たのしいくにあり おいせぬたみ	1. THERE is a land of pure delight, Where saints immortal reign;
2 とこしへのはるに　つきせぬはな	3. Infinite day excludes the night, And pleasure banish pain.
3 ひはつねにてりて　うきやみもなし	2. There everlasting spring abides, And never-withering flowers;
4 とみればへだつる　しでのながれ	4. Death, like a narrow sea, divides This heavenly land from ours.

二

5 みどりなるのべは　かはのあなた	5. Sweet fields beyond the swelling flood　Stand dressed in living green;
6 ヨルダンもカナンをば　へだてたりし	6. So to the Jews old Canaan stood, While Jordan rolled between.
7 モーセのごとたちて　みくにをれば	But timorous mortals start and shrink To cross this narrow sea;
8 いさみてこゆべし　さかまくなみ	And linger, shivering on the brink, And fear to launch away.
	Oh, could we mark our doubts remove, Those gloomy doubts that rise,
	And see the Canaan that we love With unbeclouded eyes:—

7.Could we but climb where Moses stood,　And view the landscape o’er,

8.Not Jordan’s stream, nor death’s could flood,

『讃美歌』(明治 36［1903］年）に樋口一葉訳が採用されなかった理由には、原詩に忠実な訳でなく、抄訳である樋口一葉訳が最初から考慮されなかった可能性が考えられる。また『讃美歌』(明治 36 年）は 5 教派統合の讃美歌集である。5 教派とは、組合教会、日本基督教会（一致教会)、メソジスト教会、浸礼教会（バプテスト)、基督教会で、基督教会は独自の讃美歌集を発行していなかったが、他の 4 教派は独自の讃美歌集を刊行していた。メソジスト教会の『譜附　基督教聖歌集』(明治 28［1895］年）には《There is a land of pure delight》の翻訳讃美歌として《いともたのしきは》が、一致教会・組合教会合同の『新撰讃美歌』(明治 21［1888］年）には《たのしきくにあり》と既に樋口一葉とは異なる訳がある。これに『基督教讃美歌』(明治 29［1896］年）の樋口一葉訳を加え 3 つの訳の内のいずれかを採用するという選択より、新しく訳しなおした方が後に禍根を残さないと考える次第である。

おわりに（まとめ）

「第１章　勝海舟と讃美歌　時代は蘭学から英学へ（明治期前史）」では、明治期の前史である江戸時代、勝海舟がオランダ語から訳した讃美歌《なにすとて》について触れ、日本が蘭学から英学へ推移する中、勝海舟が翻訳するに際し、何故漢詩風ではなく、75 調に訳したか、なぜ新体詩の先駆であると言われるか、そして勝海舟とキリスト教との関係を検証した。

当時「詩」といえば漢詩である。勝海舟は漢詩を多く残しているが、「新体詩」の目指したものは、漢詩の対極にある平易な表現、75調、押韻等である。彼はオランダ語習得の際、詩歌、特に韻文を訳して歌えるようにしてみたかったのであろう。勝海舟も漢詩を作成しているが、漢詩のような意味を中心とした翻訳ではなく、オランダ語の韻文を生かすため、平易な表現で日本語でも韻文訳になるような形式にしたと考える。57調長歌のかたちに訳したのもそのためであろう。『新体詩抄』も長歌風な詩が多い。そして明治初期アメリカ人宣教師が讃美歌を日本語に翻訳したときと同様に日本語による韻を踏む詩歌を試作したのであろう。

韻文の詩歌を入手するにはカッテンディーケの関係から当時流布していた《ローフ・デン・ヘール》が容易かったのであろう。訳してみると讃美歌であるということが判ったので、禁教下であることから神という文字を表さず、翻案して原詩が判らない程のものにし、しかもその時点では発表しなかったと思われる。しかしその根底にはキリスト教への共鳴、その影響があり、《なにすとて》を訳そうとするさらなる動機となったのであろう。その後もキリスト教への共鳴と影響を受け続け、それなりに作品の出来栄えに満足していたため所持し続け、外山正一の『新体詩抄』によってその記憶が呼び覚まされ、彼に提示したと考える。

「第 2 章　ゴーブルと讃美歌　英語讃美歌から日本語讃美歌へ」では、記録に残る最初の日本語讃美歌について言及した。最初の日本語讃美歌とは、ゴーブル、クロスビー、C. M. ウィリアムズの翻訳讃美歌であるが、ここではゴーブルを中心に扱った。ここで問題にしたのは、宣教師のアジアにおけるネットワーク、75 調、ヨナ抜き 5 音階、頭韻脚韻の扱い方であった。

ゴーブル訳讃美歌の翻訳過程を検証していくと漢字文化圏としての日本語が浮かび上がってくる。聖書和訳と讃美歌の和訳は同時期に同じ重みをもって推進された宣教事業であり、しかもある時は同一人物によって行われていた。

「愛」という言葉、キリスト教の用語としてだけでなく、一般に使われる近代日本語として定着した言葉も、アジアにおけるアメリカの宣教師ネットワークから生まれたということを再認識したいと考える。日本が漢字文化圏であったため、宣教師は英華辞書、漢訳聖書を利用することができた。そしてこの英華辞書、漢訳聖書の影響を受けながら近代日本語の一翼を担うことになったのが、世界宣教をめざしていたアメリカの宣教師であった。

アメリカの海外宣教の拡大化のもとに生まれた日本の讃美歌は、歌詞の翻訳に関しては中国からの多大な影響を受けていたことが明らかになってきた。そのようにして生まれた日本の讃美歌は日本の近代化とともに日本の唱歌に影響を与える。近代化の早かった日本の唱歌が韓国、中国に広がり、そして漢字に翻訳された新しい言葉が中国に伝播する。そして両国の近代化に大きな役割を果たすことになった。明治初期宣教師ゴーブルが英華辞書、漢訳聖書を使用し、讃美歌を翻訳した。中国からの影響で生まれた日本の讃美歌が、その中国でまたその姿を変えて広まっていった。。

「第 3 章　C. M. ウィリアムズと聖歌（讃美歌）　初期讃美歌の成立と他教派との協力関係」では、C. M. ウィリアムズが翻訳した讃美歌から他教派との協力関係を想定した。

『聖公會歌集』(明治 16［1883］年）をはじめとする日本聖公会系の聖歌集では、《Rock of Ages》の訳は本田・バラ訳《われたるいわや》からの影響を受け、《When I survey the wondrous cross》の訳《さかえのきみの》は日本基督教会系奥野昌綱訳の改訳であった。日本聖公会系ではなぜウィリアムズ訳は改訳の対象とならなかったのであろうか。『聖公會歌集』はアメリカ聖公会のチングが編集しているが、同じアメリカ聖公会の、しかも主教、監督のウィリアムズをさしおいて日本基督教会系の讃美歌を改訳した理由は何であろうか。W. B. ライト、A. R. モリス、元田作之進のようにウィリアムズが聖歌を翻訳していたことを知る人はいた。

筆者はその理由はウィリアムズ自身にあったと考える。彼は先駆者として評価されることを嫌った。日本最初の宣教師としての名誉をリギンスに与えたように、かえってこの件で何も発言しなかったとも考えられる。

ウィリアムズは奥野昌綱の讃美歌作家としての資質を高く評価していたのではなかろうか。まだ当時は讃美歌・聖歌の揺籃期である。ウィリアムズは奥野昌綱の讃美歌作家としての将来性を見抜いて、自ら訳した聖歌を奥野に託したと考えられる。

「第 4 章　来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌」では来日宣教師と社会事業、ここでは讃美歌と盲人教育を取り扱った。

明治期の盲人教育と音楽を調べていくと、盲人教育そのものが、キリスト教をバックボーンに持つ人たちと宣教師のネットワークによってなされた宣教事業であるという側面がある。

これまで盲人教育と音楽は関連性をもって語られることは多くはなかった。最大の原因は日本の盲人教育史と音楽教育史が宣教、宣教師の観点から論じられることがほとんどなかったためである。盲人教育と音楽の関係は大きな宣教事業の一角としてとらえるべき課題であった。

「第 5 章　日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教」では、日本の近代音楽、特に唱歌と讃美歌を 19 世紀アメリカの海外宣教と音楽を中心に論じ、替歌と讃美歌との関連にも触れた。

日本のキリスト教、讃美歌(音楽)はアメリカから大きな影響を受け、南北戦争の歌やア

メリカの讃美歌が大量に持ち込まれた。しかし日本も当時、南北戦争の歌や讃美歌を必要な音楽として受けいれたのではなかろうか。明治の時代精神をあらわす言葉として富国強兵があげられる。軍隊や教練には行進曲が必要である。それまでの日本の音楽より、南北戦争の歌や讃美歌には行進曲に向いている曲が多く存在する。《リパブリック讃歌》は北軍の行進曲である。讃美歌《Beautiful River》をはじめ、行進曲に採用された讃美歌の曲や南北戦争の歌にはピョンコ節のものが多い。それまでの日本に少ないリズムである。

明治に生まれた讃美歌、唱歌、軍歌は曲としては短いものばかりである。この短い曲で多くのメッセージを伝えたい場合、それまでの日本の音楽ではなく、南北戦争の歌や讃美歌の曲が持つピョンコ節が必要だった。

「第 6 章　植村正久と讃美歌　日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』」では、明治の讃美歌史は 5 教派統合の明治 36 年版『讃美歌』へ各教派の讃美歌が収斂していく過程が中心であるが、その中で明治 21（1888）年版『新撰讃美歌』に関った植村正久と彼の讃美歌論を紹介し、その後の讃美歌（集）にどのような影響を与えたのかを論述した。

植村正久は日本人最初の讃美歌論「讃美歌編輯の事を記す」で、編集の必要性、近代詩、75 調について論じた。特に讃美歌では 75 調は文字の数ではなく音の数であることの重要性を述べた。

そして彼は編集した『新撰讃美歌』について分析し、讃美歌史上の位置づけをした。また植村正久による讃美歌情報を紹介した。

「第 7 章　島崎藤村、樋口一葉と讃美歌　キリスト教と詩歌　86 調と 75 調」では、島崎藤村、樋口一葉の詩歌と讃美歌との関わり、讃美歌から受けた影響を扱い、キリスト教との関係、86 調と 75 調を論考のテーマとした。

島崎藤村は文学同様に音楽を追究しようとしていたと思われる。藤村は何故 75 調ではなく 86 調、87 調の詩を書いたのであろうか。讃美歌とは詩として読まれるだけでなく、歌われるものである。藤村は歌うことを前提として、すなわち讃美歌《ゆうぐれしづかに》の曲《COOLING》で歌うことを念頭にこの《逃げ水》を作詩したと考える。その際《COOLING》は 86 調なので、植村正久訳《ゆうぐれしづかに》の歌詞を参考にしたと考える。《ST.SYLVESTER》も同様に歌うことを意識したものであろう。

樋口一葉は何故讃美歌を翻訳したのであろうか。ここには歌塾「萩の舎」の友人伊東（田辺）夏子の存在が大きく影響している。また伊東夏子は何故讃美歌翻訳を樋口一葉のところへ持ち込んだのであろうか。伊東夏子はクリスチャンで、バプテスト派の学校である駿台女学校を卒業し、キリスト青年会に入会していた。

バプテスト派では明治 20 年に歌詞だけの版の『基督教讃美歌』を刊行しているが、これを明治 29 年に改訂増補して楽譜付の『基督教讃美歌』を刊行している。伊東夏子が樋口一葉のところへ讃美歌翻訳を持ち込んだ明治 25 年 3 月はこの改訂増補版の準備期にあたる。キダー、または『基督教讃美歌』の編集委員から伊東夏子にアイザック・ウォッツ作詞《There is a land of pure delight》の翻訳が託され、伊東夏子が下訳をし、それを樋口一葉のと

ころへ持って行き、樋口一葉が手を加えコモンミーター・ダブルの形に讃美歌を翻訳したと考えられる。その訳が『基督教讃美歌』の編集委員に渡され、編集委員により訂正、修正が加えられて《たのしいくにあり》として明治 29 年版の『基督教讃美歌』に採用されたと考えられる。

今後は「はじめに」でも述べたように今まで明治期ばかりに関わったので、大正、昭和、平成の讃美歌史を扱っていきたい。また論文以外でも、讃美歌を扱った軽い読み物を書いてみたいと思っている。そして「日本における教会音楽の父」といわれるジョージ・オルチンの宣教本部往復書簡を全訳し、彼の伝道の生涯を明らかにしたいと考えている。

注

[1]手代木俊一著『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治篇』(港の人　平成 20［2008］年 3 月)。

[2]手代木俊一著「勝海舟と讃美歌」『礼拝音楽研究』 第 9 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 22［2010］年 3 月)。

[3]山口栄鉄著『異国と琉球』(本邦書籍　昭和 56［1981］年 9 月)。

[4]この讃美歌に関しては本書第 3 章で扱う。

[5]勝海舟自身が何から訳したのかを明記していない。詩篇そのものから訳したとする説と詩篇歌（讃美歌）から訳したとする説があるが、筆者は《なにすとて》は詩篇歌（讃美歌）《Lobeden Herren, o meine Seele! 》からの翻訳、翻案と考えている。

[6]江藤淳著「海舟論」『勝海舟（日本の名著 32)』(中央公論社　昭和 53［1978］年 2 月)、20 頁。

[7]Clark, Edward Warren,『 Katz Awa“ The Bismarck of Japan” or The Story of a Noble Life』(New York: B. F. Buck & Company, 1904)。

[8]竹中正夫著「勝海舟とキリスト教」『基督教研究』第 55 巻第 2 号（同志社大学神学部内基督教研究会　平成 6［1994］年 3 月)、109～113、126～137 頁。

勝海舟とキリスト教を論じた以下の論文、著作が存在する。

岩楯幸雄著「海舟とキリスト教」『六浦論叢』第 20 号（関東学院六浦学会　昭和 58［1983］年 10 月)。

渋沢輝二郎著『海舟とホイットニー』(TBS ブリタニカ　昭和 56［1981］年 4 月)。

竹中正夫著「勝海舟とキリスト教」『基督教研究』第 55 巻第 2 号（同志社大学神学部内基督教研究会　平成 6［1994］年 3 月)。

竹中正夫著『勝海舟と新島襄（新島講座)』(同志社　平成 11［1999］年 4 月)。

拙著「勝海舟訳《なにすとて》―オランダ語詩篇歌（開港以前の日本及び日本人におけるプロテスタント讃美歌)」『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治期』(港の人　平成 20［2008］年 3 月)。

拙著「勝海舟と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 9 号(キリスト教礼拝音楽学会　平成 22［2010］年 3 月)。

下田ひとみ著『勝海舟とキリスト教』(作品社　平成 22［2010］年 10 月)。

守部善雅著『勝海舟　最後の告白（聖書を読んだサムライたち)』(いのちのことば社フォレストブックス　平成 23［2011］年 7 月)。

[9]拙著「勝海舟と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 9 号(キリスト教礼拝音楽学会　平成 22［2010］年 3 月）と拙著「勝海舟訳《なにすとて》―オランダ語詩篇歌（開港以前の日本及び日本

人におけるプロテスタント讃美歌)」『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治期』（港の人　平成 20［2008］年 3 月）で既に発表しているが、後者は研究史を中心としたものである。

[10]『東洋学芸雑誌』第 14 号（興学会出版部　明治 15［1882］年)、364～365 頁。

[11]勝海舟著「蘭詩和訳長歌・長歌および薩摩琵琶曲譜」『勝海舟全集 14』(勁草書房　昭和 49［1974］年 11 月)、347～348 頁。

[12]佐藤良雄著「海舟の訳詩と唱気人について」『東洋学芸雑誌』第 139 号 (興学会出版部　昭和 38［1963］年 5 月)、351～353 頁。

[13]日夏耿之介著『明治大正詩史　上巻』(新潮社　昭和 4［1929］年 1 月)、26 頁。

[14]木村毅・斎藤昌三共著『西洋文学翻訳年表（岩波講座　世界文学)』(岩波書店　昭和 8［1933］年 7 月)、22 頁。第 1 章「明治以前」(3～29 頁）は木村毅氏の執筆。

[15]木村毅著「勝海舟訳の讃美歌（切支丹文学の珍種を拾うて)」『キリスト教伝来四百年記念　第 2 集』(白鯨社　昭和 24［1949］年 5 月)、9～10 頁。

[16]木村毅著「日本詩前史大観」『近代詩の詩的展望』(山宮允教授華甲記念文集編纂会編　河出書房　昭和 29［1954］年 3 月)、144 頁。

[17]菱本丈夫著「勝海舟　オランダ語讃美歌＜ローフ・デン・ヘール＞」『蘭学史料研究会報告』No.246（蘭学史料研究会　昭和 46［1971］年 5 月)、1～3 頁。

[18]菱本丈夫著「勝海舟と讃美歌―《なにすとて　やつれし君ぞ》について」『礼拝と音楽』Vol.18 No.9（昭和 47［1972］年 9 月)、17～18 頁。

[19]子母澤寛著『勝海舟　上（子母澤寛全集 6)』(講談社　昭和 48［1973］年 3 月)、410～411 頁で確認。この部分を転載する。

15日に子午線を通過したが、夜は、これ迄に、はじめて見るようないい月であった。畳を敷いたような海に、皎々と照る青い月光を浴びて、麟太郎は更ける迄、甲板に出ていた。昼のように明るかった。麟太郎ばかりではない、非番の士官達は殆ど甲板にいた。―……（略）……

―舳先の方で、赤松と根津が並んで、両腰へ手を当てて、根津が詩吟をはじめた。青天月アッテコノ方幾時ゾ、我今盃ヲ停メテ一タビ之ニ問ウ、人明月ヲ攀ジテ得ベカラズ月行却ッテ人ト随ウ―。

李白の把酒向月の詩の、それから先きを忘れたのか、ふと吟をとめると、こんどは赤松がうたいだした。今様の如く、詩の如くいい声だ。

なにすとて　やつれし君ぞ、あわれその、思いたわみて、いたずらに、
わが世をへめや、あまのはら、ふりさけみつつ、あらかねの、土ふみたてて。

麟太郎が、若い頃に訳した「思いやつれし君」という阿蘭陀の詩だ。長崎の本蓮寺に一緒にいて、暇があると、蘭語の勉強にその原詩と対訳をして教えたものだった。長崎の思出が、まるで夕立雲のように、麟太郎の胸へ湧くようであった。が、

大きな声で、「赤松、止せ止せ」うしろから、声をかけられて、赤松はびっくりしてすぐに止めた。
「そ奴あ今時、うたう詩じゃあねえよ」「は」

[20] 《ほめたたえよ、力強い主を》には《なにすとて》に対応する歌詞の部分はないと思われる。第1節のみ掲載する。

1 ほめたたえよ、力強き主を
わが心よ、今しも目さめて
たてごと　かきならしつつ
み名をほめまつれ

[21] その一例は以下のとおりである。

EEN psalm van David (1875 散文訳)

1 Loof den HEERE mijne ziel!
en al wat binnen in mij is, zijnen heilige naam.
2 Loof de HEERE, mijne ziel,
en vergeet geene van zijne weldaden.
3 Die al uwe ongeregtigheid vereegft,
die al uwe krankheden geneest ;
4 Die uw leven verlost van het verderf,
die u kroont met geedertierenheid en barmbartigheden
5 Die uwen mond verzadigt met het goede,
uwe jeugd vernieuwt als een arends.
6 De HEERE doet geregtigheid en gerigten al dengenen
die onderdrukt worden
7 Hij heeft Mozes zijne wegen bekend gemaakt,
den kinderen Israëls zijne daden.
8 Barmhartig en genadig is de HEERE,
langmoedig en groot van goedertierenheid.
9 Hij zal niet altoos twisten,
noch eeuwiglijk den toorn bebouden.
10 Hij doet ons niet naar onze zonden,

en vergeldt ons niet naar onze ongeregtigheden.
11 Want zoo hoog de hemel is boven de aarde,
is zijn goedertierenheid geweldtig over degenen, die Hem vreezen.
12 Zoo ver het oosten is van het westen,
zoo ver doet Hij onze overtredingen von ons.
13 Gelijk zich een vader ontfermt over de kinderen,
ontfermt zich de HEERE over degenen, die Hem vreezen,
14 Want Hij weet, wat maaksel wij zijn,
gedachtig zijnde, dat wij stof zijn,
15 De dagen des menschen zijn als het gras,
gelijk eene bloem des velds, alzoo bloeit hij.
16 Als de wind daarover gegaan is, zoo is zij niet meer,
en hare plaats kent haar niet meer.
17 Maar de goedertierenheid des HEREN is van eeuwigheid
en tot eeuwigheid over degeden, die Hem vreezen,
en die aan zijne geregtigheid aan kindskinderen;
18 Aan degenen die zijn vebond houden,
en die aan zijne bevelen denken, om die te doen
19 De HEERE heeft zijnen troon in de hemelen bevestigal
en zijn koningrijk heerscht over alles.
20 Looft den HEERE, zijne Engelen!
gij krachtige helden, die zijn woord doet,
gehoorzamende de stem zijns woords.
21 Looft den HEERE, al zijne heirseharen!
gij zijne dienaars, die zijn welbehagen doet!
22 Looft den HEERE, al zijne werken!
aan alle plaatsen zijner heersehappij,
Loof den HEERE, mijne ziel

注 17、11 頁による。韻文訳は菱本丈夫氏によれば「1773 年韻文化され、現在も使用されている」ということなので 1773 年版を掲載した。韻文の詩篇 103 の 10 節は散文 20 節に相当する」とのことである。

[22]菱本丈夫著「長崎の鐘」『キリスト新聞』(昭和 49［1974］年 4 月 20 日)、2 面。

[23]参考までに菱本氏が論拠とする『聖書　新共同訳』（日本聖書協会　平成4［1992］）の詩編102、第103を掲載する。

詩編102

1　祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩。

2　主よ、わたしの祈りを聞いてください。
　この叫びがあなたに届きますように。

3　苦難がわたしを襲う日に
　御顔を隠すことなく、御耳を向け
　あなたを呼ぶとき、急いで答えてください。

4　わたしの生涯は煙となって消え去る。
　骨は炉のように焼ける。

5　打ちひしがれた心は、草のように乾く。
　わたしはパンを食べることすら忘れた。

6　わたしは呻き
　骨を肉にすがりつき

7　荒れ野のみみずく
　廃虚のふくろうのようになった。

8　屋根の上にひとりいる鳥のように
　わたしは目覚めている。

9　敵は絶えることなくわたしを辱め
　嘲る者はわたしによって誓う。

10 わたしはパンに代えて灰を食べ
　飲み物には涙を混ぜた。

11 あなたは怒り、憤り
　わたしを持ち上げて投げ出された。

12 わたしの生涯は移ろう影
　草のように枯れて行く。

13 主よ
　あなたはとこしえの王座についておられます。
　御名は代々にわたって唱えられます。

14 どうか、立ち上がって
　シオンを憐れんでください。
　恵みのとき、定められたときが来ました。

15 あなたの僕らは、シオンの石をどれほど望み
　塵をすら、どれほど慕うことでしょう。

16 国々は主の御名を恐れ
　地上の王は皆、その栄光におののくでしょう。
17 主はまことにシオンを再建し
　栄光のうちに顕現されます。
18 主はすべてを喪失した者の祈りを顧み
　その祈りを侮られませんでした。

19 後の世代のために
　このことは書き記されねばならない。
　「主を賛美するために民は創造された。」
20 主はその聖所、高い天から見渡し
　大空から地上に目を注ぎ
21 捕われ人の呻きに耳を傾け
　死に定められていた人々を
　解き放ってくださいました。
22 シオンで主の御名を唱え
　エルサレムで主を賛美するために
23 諸国の民はひとつに集められ
　主に仕えるために
　すべての王国は集められます。
24 わたしの力が道半ばで衰え
　生涯が短くされようとしたとき
25　わたしは言った。
　「わたしの神よ、生涯の半ばで
　わたしを取り去らないでください。
　あなたの歳月は代々に続くのです。
26　かつてあなたは大地の基を据え
　御手をもって天を造られました。
27 それらが滅びることはあるでしょう。
　しかし、あなたは永らえられます。
　すべては衣のように朽ち果てます。
　着る物のようにあなたが取り替えられると

すべては替えられてしまいます。
28 しかし、あなたが変わることはありません。
あなたの歳月は終わることがありません。」

29 あなたの僕らの末は住むところを得
子孫は御前に固く立てられるでしょう。
（ルビ省略）

詩編103

1 ダビデの詩。
わたしの魂よ、主をたたえよ。
わたしの内にあるものはこぞって
聖なる御名をたたえよ。
2 わたしの魂よ、主をたたえよ。
主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。
3 主はお前の罪をことごとく赦し
病をすべて癒し
4 命を墓から贖い出してくださる。
慈しみと憐れみの冠を授け
5 長らえる限り良いものに満ち足らせ
鷲のような若さを新たにしてくださる。

6 主はすべて虐げられている人のために
恵みの御業と裁きを行われる。
7 主は御自分の道をモーセに
御業をイスラエルの子らに示された。
8 主は憐れみ深く、恵みに富み
忍耐強く、慈しみは大きい。
9 永久に責めることはなく
とこしえに怒り続けられることはない。
10 主はわたしたちを
罪に応じてあしらわれることなく
わたしたちの悪に従って報いられることもない。
11 天が地を超えて高いように
慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。
12 東が西から遠い程

わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。
13 父がその子を憐れむように
主は主を畏れる人を憐れんでくださる。

14 主はわたしたちを
どのように造るべきかを知っておられた。
わたしたちが塵にすぎないことを
御心に留めておられる。
15 人の生涯は草のよう。
野の花のように咲く。
16 風がその上に吹けば、消えうせ
生えていた所を知る者もなくなる。

17 主の慈しみは世々とこしえに
主を畏れる人の上にあり
恵みの御業は子らの子らに
18 主の契約を守る人
命令を心に留めて行う人に及ぶ。
19 主は天に御座を固く据え
主権をもってすべてを統治される。
20 御使いたちよ、主をたたえよ
主の語られる声を聞き
御言葉を成し遂げるものよ
力ある勇士たちよ。
21 主の万軍よ、主をたたえよ
御もとに仕え、御旨を果たすものよ。
22 主に造られたものはすべて、主をたたえよ
主に統治されるところの、どこにあっても。

わたしの魂よ、主をたたえよ。
（ルビ省略）

[24] 千葉宣一著「6.《思ひやつれし君》（勝海舟訳）の位相―讃美歌の翻訳―（第三講　近代詩の黎明）」『講座　日本現代詩史　１明治期』（右文書院　昭和48［1973］年12月）、100頁。

[25]豊田実著『日本英学史の研究』（千城書院　昭和38［1963］年11月）、443～444頁。
[26]笹淵友一著『浪漫主義文学の誕生』(明治書院　昭和 33［1958］年 1 月)、443～443 頁。
[27]注 15、7～10 頁。
[28]原恵著「日本プロテスタント讃美歌史―［新連載］―日本讃美歌のあけぼの」『礼拝と音楽』第 30 号、1981/Summer（日本基督教団出版局　昭和 56［1981］年 7 月)、55～57 頁。
[29]注 6、20 頁。
[30]江藤淳著『海舟余波　わが読史余滴』(文芸春秋　昭和 49［1974］年 4 月)、[333]、[334]頁。
[31]勝海舟著『海舟座談』(岩波書店　昭和 5［1930］年 7 月)、63 頁。
[32]クララ・ホイットニー著、一又民子他訳『勝海舟の嫁　クララの明治日記（下)』(中央公論社　平成 8［1996］年 6 月)、481～482 頁。
明治 16（1883）年 5 月 31 日の日記には次のような証言が述べられている。

昨夜私は大層うれしいニュースを耳にした。母は天国でそれをご存じだろうか。津田氏が来られてこんな話をされた。親睦会で雄弁に説教をされた大阪の宮川氏が勝氏をたずねたところ、宗教については、ホイットニー夫人の宗教以外のものはいやだと、言われたというのだ。勝氏は日本人の間で暮した母の生活ぶりを見、彼女の死をも見てこられた。母はその生と死において、真の宗教とは如何なるものかを実証した。子供たちも今又同じ道を歩いている。宮川氏は求められるまま、終日勝氏と話し合われたという。何とよろこばしいことであろう！　津田氏は、勝氏は今は未だ受け入れてはおられないが、やがてはクリスチャンになられるだろうと言われた。

おお、神様。母の努力に対して、栄冠を与えたまえ。母はどんなに熱心に勝氏のために祈ったことであろう。私たちが以前ここにいた時、毎日曜の朝、教会へ行く前に1時間、勝氏のため祈りを捧げていた。その時私はこのような熱烈な祈りが無駄になり得ようはずはないと思った。

もしこの大きな影響力をもつ方がクリスチャンになられたら、私たちにどのような喜びがもたらされることか、また、私たちの苦悩にどのような慰めがもたらされることか。もし彼が信者になられたらこのヤシキの人達は皆改宗するであろうし、ここに教会をもちたいという我々の心からの願いもかなえられるであろう。ここのクリスチャンたちは、この地に自分たちの教会ができるようにと祈りつづけているのだ。

ヤシキでは、私達が留守の間（1880年1月～1882年12月）も小さな集会が続いていたし、門には「ヤソキョウ」という表札をかけていたので、勝氏は自分のヤシキに教会をもっている、という評判が長いことたっている。

[33]クラーク著、高橋邦太郎訳「勝家の家庭　生活並に伯最後の改宗」下『勝安芳　日本のビスマルク』第4篇、『本道楽』第3巻3号（茂林脩竹山房　昭和2［1927］年7月）、6頁、注7、p.88の翻訳。

[34]注 31、110 頁。

[35]前掲書、63 頁。

[36]勝部真長著「海軍歴史　Ⅰ（解説）」『勝海舟全集』第12巻（勁草書房　昭和46［1971］年2月、463頁。

[37]司馬遼太郎著『明治という国家』（日本放送協会　昭和64［1989］年9月）、234頁。

[38]前掲書、245 頁。

[39]カッテンディーケ著、水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々（東洋文庫26）』（平凡社　昭和39［1964］年9月）、49頁。

[40]前掲書、161 頁。

[41]前掲書、45頁。

[42]前掲書、39 頁。

[43]前掲書、39～40 頁。

[44]前掲書、40 頁。

[45]注30、［333］、［334］頁。

[46]注39、77頁。

[47]前掲書、84 頁。

[48]注8、109～113、126～137頁。

[49]竹中正夫著『勝海舟と新島襄（新島講座)』(同志社　平成 11［1999］年 4 月)、41 頁。

[50]この讃美歌の現代オランダ語版。

《Loof nu den Here, o mijine ziele1》(Neederlandse Liederenbank［インターネット・サイト］, 1951)、『Lutheran Service Book. From Dutch hymns from the Hymnal for the Churches and their English equivalents』では《Loof nu mijin ziel, du Here》、『Liedboek voor De Kerken』(Leeuwarden: Jongbloed, 1973) では《Alles wat adem heeft》。これらは近年になって突然訳されたものではなく、継承されて今日にいたったものと思われる。

[51]中西光雄氏の私信による。

[52]青木美穂著「藤村詩と讃美歌」『青山語文』第 20 号（青山学院大学日本文学会　平成 2［1990］年 3 月)、84 頁。

[53]拙著「植村正久と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 7 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 20［2008］年 3 月)、29～30 頁。

[54]注 16、144 頁。

[55]ドイツ語原歌詞は以下である。

Lobe den Herren, o meine Seele!

Melodie – aus dem Anhang der Seelen-Harpff, Onolzbach, 1665; Seq. bei Richard Jordan

Johann Daniel Herrnschmidt, 1714; englischer Text

Lobe den Herren, o meine Seele!
Ich will ihn loben bis in Tod;
Weil ich noch Stunden auf Erden zähle,
Will ich lobsingen meinem Gott.
Der Leib und Seel' gegeben hat,
Werde gepriesen früh und spat.
Halleluja! Halleluja!

2. Fürsten sind Menschen, vom Weib geboren,
Und kehren um zu ihrem Staub;
Ihre Anschläge sind auch verloren,
Wenn nun das Grab nimmt seinen Raub.
Weil denn kein Mensch uns helfen kann,
Rufe man Gott um Hilfe an!
Halleluja! Halleluja!

3. Selig, ja selig ist der zu nennen,
Des Hilfe der Gott Jakobs ist,
Welcher vom Glauben sich nichts läßt trennen
Und hofft getrost auf Jesum Christ.
Wer diesen Herrn zum Beistand hat,
Findet am besten Rat und Tat.
Halleluja! Halleluja!

4. Dieser hat Himmel, Meer und die Erden,
Und was darinnen ist, gemacht.
Alles muß pünktlich erf üllet werden,
Was er uns einmal zugedacht.
Er ist's, der Herrscher aller Welt,
Welcher uns ewig Glauben hält.
Halleluja! Halleluja!

5. Zeigen sich welche, die Unrecht leiden,
Er ist's der ihnen Recht verschafft;
Hungrigen will er zur Speis bescheiden,
Was ihnen dient zur Lebenskraft;
Die Hartgebundnen macht er frei,
Und seiner Gnad ist mancherlei.
Halleluja, halleluja!

6. Sehende Augen gibt er den Blinden,
Erhebt die tief gebeuget gehn;
Wo er kann einige Fromme finden
Die läßt er seine Liebe sehn.
Sein Aufsicht ist des Fremden Trutz,
Witwen und Waisen hält er in Schutz.
Halleluja, halleluja!

7. Aber der Gottesvergeßnen Tritte
Kehrt er mit starker Hand zurück,
Daß sie nur machen verkehrte Schritte
Und fallen selbst in ihren Strick.
Der Herr ist König ewiglich,
Zion, dein Gott sorgt stets für dich.
Halleluja, halleluja!

8. Rühmet, ihr Menschen, den hohen Namen
Des, der so große Wunder tut!
Alles, was Odem hat, rufe Amen!
Und bringe Lob mit frohem Mut.
Ihr Kinder Gottes, lobt und preist
Vater und Sohn und Heil'gen Geist!
Halleluja! Halleluja!

[56]勝海舟著「勝海舟漢詩集」『勝海舟全集 14』(筑摩書房　昭和 49［1974］年 11 月)、351～417 頁。
[57]注 19、410～411 頁。

[58]木通隆行著「表情から音相基をとらえる」『日本語の音相』（小学館スクウェア　平成16［2004］年3月）、153～164頁。母音のオ音ではじまり、途中ア音、イ音、ウ音、エ音を加え、そしてオで終わるようにし、全体的に安定感を与えている。

[59]原恵著「初期の讃美歌における脚韻のこころみ」1、2、〈日本プロテスタント讃美歌史22-23〉『礼拝と音楽』No.56～57（1988/Winter～1989/Spring）を参照。

[60]Allchin, George ,「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900』(Methodist Publishing House　1901年)、G. オルチン著、拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成11［1999］年11月)、338～340頁。

[61]どの宣教師会議か明らかにされていないが、明治12（1879）年の日本一致基督教会中会記録の中に次の記事が掲載されている。

　次ニブラオン教師ノ呈セル所ノ改正讃美歌委員ノ報ヲ奥野教師朗読シ併セテ自己ノ意見ヲ陳述ス
其ノ報ノ大略ニ曰ク
委員等讃美歌改正ノ任ヲ蒙テ以還既ニ一年ヲ経ルト雖トモ未タ其ノ功ヲ奏セザルモノハ敢テ之ヲ等閑ニセルニ非ズ惟其ノ方法ニ因ムノミ故ニ願クハ中会ニ於イテ之ヲ商議討論セラレ和風ノ調子ヲ用フベキカ洋風ノ調子ヲ採用スベキカ抑新ニ調子ヲ作ルベキカ執ニカ決定アラン事ヲ請フ其ノ法一定セバ委員等モ亦不肖ヲ顧ミズ微力竭サント云爾
討論数刻ヲ経テ遂ニ此迄用来リシ洋風ノ歌ニ和風ノ五七五七ノ歌ヲ交ヘ漸々ニ改正スベシト決定ス

『井深梶之助とその時代』第一巻（明治学院　昭和44［1969］3月)、433～434頁。

[62]第1章は「英語讃美歌から日本語讃美歌へ―明治初期ゴーブルによる翻訳を中心に」『アジアにおける異文化交流：その世界史的意義』(明治書院　平成16［2004］年3月）を加筆、訂正したものである。

[63]川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル研究』(新教出版社　昭和63［1988］年7月)、77頁、F. C.パーカー著「ゴーブル:その宣教師としての任命と日本への旅」『西南学院大学神学論集』第44巻第1号（昭和61［1986］年9月)、85頁。

[64]小沢三郎著「諜者正木護の耶蘇教探索報告書」『幕末明治耶蘇教史研究』(日本基督教団出版局　昭和48［1973］年11月)、293～294頁。

[65]上田貞治郎他編『ゴーブル訳摩太福音書複製本』附帯記録（上田文庫　昭和13［1938］年11月)、30～31頁。

[66]注 64、293～294 頁。

[67]注 60、321 頁。

[68]前掲書、321 頁。

[69]「[讃美歌]（高木玄眞筆写本)」（明治 7［1874］年 5 月）『覆刻　明治初期讃美歌　神戸女学院図書館所蔵オルチン文庫版』(新教出版社　昭和 53［1978］年 12 月)、『明治期　讃美歌・聖歌集成』第 21 巻（大空社　平成 8［1996］年 12 月)。

[70]注 60、321 頁。

[71]「[讃美歌]（高木玄眞筆写本)」（明治 7［1874］年 5 月）『覆刻　明治初期讃美歌　神戸女学院図書館所蔵オルチン文庫版』(新教出版社　昭和 53［1978］年 12 月)、30～31 頁。拙著「『讃美歌』（高木玄眞筆写本）について」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、48～77 頁。

[72]《Yoi tci gozarimas》は明治 25（1893）年 9 月 10 日附ベンネット宛書簡に掲載されている。讃美歌関連の部分には次のように書かれている。

日本語初期讃美歌については、あまり申し上げる事がありません。最も早く使用せられたものは大きい巻物に大字で書いた十二ばかりのものでした。この巻物を人々の前にかゝげると、二三百人之を見る事も出来、私の学校で私の蒐めた讃美歌を我等のなれた譜に合はせて歌ふ様に子供や親等に教へるに殆ど面倒がありませんでした。尤もヘボン博士は後になつて、日本人は西洋人の調子では歌ふ事が出来ないと注意して呉ました。私の最初に集めた讃美歌の多くは失つたり、忘れたりしました。別に詩作として価値のあるものはありませんでした。日本語研究の初期に於いて、かう書きました。[讃美歌は《Yoi tci gozarimas》を参照]
併しこれは決して一般に用ふるつもりでなかつたし、また決して公表しなかつたものです。次の二節を忘れました。―後略―

[73]川島第二郎氏の詳細なゴーブル研究によると、ゴーブルが来日してから日本初の和訳福音書である『摩太福音書』を刊行するまでの期間は次の 3 期に分類できるという。その 3 期とはすなわち第 1 期 1860～1863 年の 4 年間（日本語習得と漢訳聖書を利用しての試訳の時期)、第 2 期 1864～1867 年頃（ギリシャ語原典からの翻訳を試みはじめた時期)、第 3 期 1868～1871 年（『和英語林集成』初版の刊行によって、彼の意図する翻訳を実現にまで至らせた時期）である。来日前からサムパッチ仙太郎を引き取り、日本語にも親しんでいたはずのゴーブルであるが、第 1 期ではまず仮名文字を習い始めなければならなかった。これは仙太郎が文盲であった可能性を示唆していると考えられる。川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル研究』（新教出版社　昭和 63［1988］年 7 月)、282～283 頁。

[74]川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル訳［摩太福音書］の研究』(明石書店　平成 5［1993］年 9 月)、39～46 頁。

[75]モリソンの英華辞典には訳語として「光」「光栄」、メドハーストの英華辞典には「栄華」

「栄光」、ロプシャイトによる英華辞典には、「光」「栄華」「栄光」「栄威」など。

[76]飛田良文・菊地悟共編『和英語林集成　初版　訳語総索引』(笠間書院　平成8［1996］年2月)。本文中の『和英語林集成』からの訳語、英単語はすべてこれによる。

[77]Medhurst, W. H., 『English and Japanese and Japanese and English Vocabulary; Compiled from native works 』(Batavia: Lithography, 1830)。

[78]飛田良文・菊地悟共編『和英語林集成　初版　訳語総索引』(笠間書院　平成8［1996］年2月)。初版ばかりでなく、第2版の訳語に関しても記載がある。

[79]「Giyo」が［尭］のことで、［Sun］が［舜］であることは、目白大学短期大学陳力衛助教授のご教示による。

[80]Morrison, R., 『Dictionary of the Chinese Language, Three Parts 』(London: Black, Parbury, and Allen, 1822)。

[81]Medhurst. W. H.,『English and Chinese Dictionary』(Shanghai: Mission Press, 1847)。

[82]Lopscheid, W., 『English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation』 (Hongkong: Daily Press, 1866～1869)。

[83]荒川清秀著「近代語研究における英華・華英辞典」『辞游 file』No.7 (辞游社　平成12［2000］年5月)、1～2頁。

[84]村岡典嗣著「漢訳聖書源流考」『増訂日本思想史研究』(岩波書店　昭和15［1940］年10月)、461頁がこの件に関する初出。

[85]高徳（ゴダード）訳『聖経新遺詔全書』(寧波北門外羅宅蔵板、1853年)。Josiah Goddard (1813～1854) アメリカバプティスト海外伝道会宣教師による漢訳聖書。1822 年英国バプティスト宣教師マーシマンらによってインド・セランポールで発行された漢訳旧約聖書に基づいて改訳された聖書。注74、42頁、注84、448～449頁。

[86]裨治文（ブリッジマン）・克陛存（カルバートソン）訳『耶蘇基督救世主新約全書』(上海　美華書館、1859年)。Elijah Coleman Bridgman (1801～1861) アメリカン・ボード中国宣教師、Michael Simpson Culbertson (1819～1862) アメリカ長老派中国宣教師による漢訳聖書。プロテスタントの中国語聖書の翻訳は 19 世紀始めにマーシマン（Marshman, J.)、モリソン（Morrison, R.）によって始められるが、1843 年香港に英米宣教師が集まり、合同翻訳事業を開始することを決定した。この新約聖書は 1852 年に出版されるが英米宣教師の中で訳語の選定で意見の一致を見ることができず、2 つの版を作ることで妥協した。新約出版後、旧約の翻訳に入って英国側の中心的なメンバーであったメドハースト、ミルン（Milen, W. C.）等が脱会して独自の翻訳を完成させた。これに対して米国側は上記2名を中心にして翻訳をすすめ1859年に新約を、1862ないし 63 年に旧約聖書を発行した。中心人物である二人の名前を冠して「ブリッジマン・カルバートソン訳」と呼ばれる。注74、44頁、注84、456～461頁。

[87]川島第二郎氏からご教示いただいた。川島氏によれば、「ゴーブルはウィリアムズとの関

連からこの辞書を所蔵していただろう」とのことである。

Williams, Samuel Wells,『An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect 』(Macao, 1844)、漢名衛三畏『英華韻府歴階』(マカオ、 1844 年)。

[88]安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 8［1996］6 月)、安田寛他編『近代唱歌集成』(ビクターエンタテインメント株式会社　平成 12［2000］年 4 月)、拙著「音楽と宣教」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)。

[89]国際会議『アジアにおける異文化交流：その世界的意義』(平成 13［2001］年 7 月 2 日～6 日)、7 月 3 日「言語部会」の午前中に目白短期大学部陳力衛氏の「英華辞典、漢訳洋書と近代日本語－中国語から日本語へ」という発表と、北京外国語大学朱京偉氏の「近代音楽用語の成立と伝播-日本語から中国語へ」という発表があった。また日本の唱歌の中国、韓国への影響については、北京中央音楽学院張前著「異文化交流と中国音楽の近代化-学堂唱歌を中心に」松下鈞編『異文化交流と近代化-京都国際セミナー1996』(大空社　平成 10［1998］年 7 月)、張前著『日中音楽交流史』(人民音楽出版社　1999 年 10 月)、張前著「中国の唱歌」「中国の学校唱歌をめぐって」安田寛他編『近代唱歌集成』(ビクターエンタテインメント株式会社　平成 12［2000］年 4 月)、韓国芸術綜合学校韓国芸術研究所閔庚燦著「韓国唱歌の形成過程における日本唱歌の影響について」松下鈞編『異文化交流と近代化-京都国際セミナー1996』(大空社　平成 10［1998］年 7 月)、閔庚燦著「韓国の唱歌」安田寛他編『近代唱歌集成』(ビクターエンタテインメント株式会社　平成 12［2000］年 4 月)、劉麟玉著「台湾の植民地時期の唱歌教育」松下鈞編『異文化交流と近代化-京都国際セミナー1996』(大空社　平成 10［1998］年 7 月)、劉麟玉著「台湾の唱歌」安田寛他編『近代唱歌集成』(ビクターエンタテインメント株式会社　平成 12［2000］年 4 月)、安田寛著『日韓唱歌の源流-唱歌と讃美歌の源流』(音楽之友社　平成 11［1999］年 9 月)、安田寛著「旧満州の唱歌」安田寛他編『近代唱歌集成』(ビクターエンタテインメント株式会社　平成 12［2000］年 4 月）等。

[90]日本聖公会では「讃美歌」のことを「聖歌」と呼んでいるので、この章だけ「讃美歌」を「聖歌」と言い換えて使用する。

[91]この章は、「日本聖公会最初の聖歌、 C. M. ウィリアムズ訳の聖歌をめぐって」　『立教学院史研究』第 4 号（立教大学学院史資料センター　平成 18［2006］年 3 月］を底本としている。

[92]「イギリス」『日本キリスト教歴史大事典』(教文館　昭和 63［1988］年 2 月)、92 頁。

[93]B. H. チェンバーレンの「讃美之歌」に関しては拙訳「詩篇日本語訳への提言」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、266～308 頁を参照。

[94]拙著「日本聖公会聖歌目録」『立教学院史研究』第 3 号（立教学院史資料センター　平成 17［2005］年 3 月)、156～177 頁。

C. F. ワーレン、H. J. フォスは、聖歌集とともに伝統的書かれてきた表記（シ、エフ、ワレン・エイチ、ゼ、フォス＝　ヒウ・ゼ・フヲス）を用いた。

元田作之進著「日本聖公会の讃美歌」『日本聖公会史』(日本聖公会出版社　明治 43［1910］年 10 月)、75～78 頁ではバックストンの『救の歌』、三谷［種吉］の『福音唱歌』を日本聖公会の讃美歌としてあげているが、バックストンの『救の歌』と三谷［種吉］の『福音唱歌』はその後の系譜が［純］福音系のためここには掲載しなかった。

また、元田作之進著「日本聖公会の讃美歌」には、『たゝへのうた』(エヴィントン著、明治 7［1874］年)、『聖公会讃美歌』(アンドリウス編、明治 15［1882］年）の記述があるが所蔵先不明である。曲数等記述が具体的なので刊行されたものと思われる。発見されることを期待して、一覧表に掲載した。

[95]『古今聖歌集』昭和 34（1959）年 4 月版序、1 頁。この序の記述に典拠はない。貫民之介の報告によると伝わっているが、塩谷栄二氏も指摘しているように、おそらく落合吉二著「日本聖公会音楽史序説」『教会文化』第 1 巻 2 号（昭和 8［1933］年 12 月）をもとに書かれたものと思われる。塩谷栄二著「明治初期の聖公会聖歌における史実確認」『歴史研究』(日本聖公会歴史研究会　平成 8［1996］年 11 月)。

「日本聖公会音楽史序説」には落合吉二氏が『たゝへのうた』を所蔵していなければ書けない記述が多数存在する。

なお、塩谷氏によれば、『たゝへのうた』には、奥野昌綱及び『教えのうた』の影響が認められるとのことである。「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎」『日本聖公会第 9 回歴史研究者の集い』(平成 9［1997］年 5 月 13 日)。

[96]大江満著『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』(刀水書房　平成 12［2000］年 5 月)、663 頁。その典拠として『基督教週報』第 22 巻第 16 号 (1910 年 12 月 16 日) をあげている。

[97]原歌詞《Art thou weary, art thou languid》、チューン･ネーム《STEPHANOS》、作詞 John M. Neale, (1862)、作曲 Henry W. Baker, (1868)、現行『古今聖歌集』(昭和 34［1959］年 4 月)、第 394《つかれたるものよ　みこえきけ》。

[98]大江満氏の私信による。

[99]元田作之進著『老監督ウイリアムス』(京都地方部故ウイリアムス監督記念実行委員事務所　大正 3［1914］年)、231 頁。復刻版：元田作之進著『日本基督教の黎明（老監督ウイリアムス伝記)』(立教出版会　昭和 45［1970］年 9 月)。

明治五年には、祈祷書中早晩祷、嘆願、特祷、洗礼式文、信徒按手式文等を翻訳され、大阪に於ける第一回の洗礼式執行の時は、和訳洗礼式文が使用せられた。又其頃聖歌 Rock of ages「よゝいわわれて」を訳し、続いて「われをばたのまじ」、「なみかせのあらき」、「われのかみに」、「十字架にかゝりし」等を訳された。

[100] 前掲書、112～113 頁。「彼らは聲を合せて詩九十五篇を誦し、日本語に譯されたる『Rock of ages』を歌い申候」。

この書簡は『The Spirit of Missions』リール 8/3 Vol.38, June 1873 Japan: Letter from the Rev.A. R. Morris. Osaka, Japan, March 14, 1873. pp.387-389. この中の Japanese Service(p.388) に記載がある。

「They join chanting Venite and in singing "Rock of Ages" which has been rendered into Japanese.」

また『The Spirit of Missions』には《Rock of Ages》が日本語で歌われた他の記述も存在する。リール 9/1 Vol.39, August, 1874 Japan: Letter from the Rev. C. T. Blanchet. Yedo, Japan, May 21, 1874. p.504. この中の The work at Yedo に記載がある。

「We were to have Service in Japanese again. They responded heartily and made a bold effort at singing our familiar hymns "Rock of Ages" and "When I survey the wondrous Cross."」

上記の典拠は、大江満著『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』(刀水書房　平成 12[2000] 年 5 月)、416、443 頁。

[101]海老沢有道著『日本の讃美歌』(香柏書房　昭和 22[1947] 年 5 月)、41 頁。

「プロテスタント中、最も早く渡来した聖公会は既に 1872 年 (明治 5 年) に讃美歌集を編纂したとも云われるが、恐らく試作がなされていた程度であろう」。

[102]G. F. フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史　明治初期諸教派の歩み　上 (日本基督教会歴史資料集 7)』(日本基督教会歴史編纂委員会　昭和 59[1984] 年 10 月)、90 頁。

[103]矢崎健一著「手写本『早晩祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第 18 号 (立教大学一般教育部編集委員会　昭和 40 [1965] 年 9 月)、1～40 頁。矢崎氏はこの聖歌をその著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』でも紹介している。矢崎健一著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』(聖公会出版　昭和 63 [1988] 年 11 月)、83～84 頁。

[104]矢崎健一著「手写本『早晩祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第 18 号 (立教大学一般教育部編集委員会　昭和 40 [1965] 年 9 月)、1 頁。

[105]前掲書、9 頁。

ここで、矢崎氏は海老沢有道『日本の讃美歌』(香柏書房　昭和 22[1947] 年 5 月)、付録一から《エスヲ地ノ主トセン》が明治七年神戸版「さんびのうた」の第 2《エス地の主とならん》と相当することを述べているが、原歌詞等の言及はなされていない。

[106]注 104、10～13 頁。

[107]筆者は海老沢有道編『立教学院百年史』よりこの資料の存在を知った。海老沢有道編『立教学院百年史』(立教学院　昭和 49 [1974] 年 11 月)、95、99 頁。

[108]今井烝治著「《よよいわわれて》Rock of Ages 考」『礼拝研究』No. 3(昭和 59 [1984] 年 12 月)、21～22 頁。英詩は『The Hymnal of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』(1940) からのものと述べている。

[109]2005年11月25日、今井烝治氏に直接おうかがいしたところ、当時矢崎論文の存在をご存じなかったとのことであった。また今井烝治氏はW. B. ライト書簡を筆写したがコピーはとらなかったとのことだったが、2005年12月8日に白井尭子氏にこのコピーと活字になった『Mission Field』の1874年12月号（Dec. 1. 1974）をいただいた。これを今井烝治氏にお送りしたところ「×××」と解読不明箇所としたところは「みぬよ」であることと、矢崎資料との相違点のご連絡があった。(2005年12月14日付書簡) W. B. ライト書簡によるとウイリアムズは数篇の聖歌を翻訳していたようである。

We are teaching them to sing. Bishop Williams has translated some hymns into Japanese among others “Rock of Ages.” Which the following as a copy.

Yoyo iwa warete
Waga mio kakuse
Kizu seshi wakini
Nagareshi Midzuchi
Tsumi Yori sukuite
Waga Mune araye
Namida nagasedo
Chikara idasu mo
Kowa tsumi kesanu
Nushi nomi tasuku!
Tsumi shiro motazu
Jujika ni sugaru
Mabuta wo tozashi
Hikitoru iki ni
Minu yoni nobori
Mikurai wo miru ni
Yoyoiwa warete
Waga mio kakuse

今井烝治氏は「×××」と解読不明箇所としたところは矢崎資料の「みぬよ」と判読。また12行目「じゅうじかにすがれ」は「じゅうじかにすがる」に、16行目「みくらをみるに」は「みくらいをみるに」にわたしには思える。それを上記に活字化した。

[110]注99、231頁。注104、1～40頁。海老沢有道編『立教学院百年史』(立教学院　昭和

49［1974］年 11 月)、95、99 頁。注 108、21～22 頁。

[111]注 104、9 頁。

[112]筆者は京都のウィリアムス神学院にうかがい、ウイリアムズ旧蔵資料を閲覧した。讃美歌・聖歌集でこの年代と符合する讃美歌・聖歌集は以下の 2 点である。

『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868)、『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』(New York: James Pott, 1871, rev. 1874)、『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868) には、Shanghai Christmas 1870 とネルスン一家からの献辞の書き込みがあるが、名前のところが破損している。ネルスンは中国在住宣教師。ウイリアムズは当時上海から書簡を発信しており、上海にいたものと思われる。注 96、249、261、275、776～777 頁。

ウイリアムズは 1870 年以来『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868) を所持し続けていたと思われる。

ウイリアムズが京都に住んだのは晩年（明治 28～41 年）であり、明治 9 年 11 月 29 日の築地の火災で図書と家財の大半を焼失している。注 99、133 頁。注 96、452 頁。明治 11 年 12 月 26 日にも大火に会いウイリアムズの住宅も再度焼失する。注 96、414～415 頁。

この 2 点から翻訳したとは即断できないが、当時のイギリス、アメリカで使用されていた聖歌集であり、ウイリアムズがその明治 5～7 年頃所蔵していた可能性は高いと考える。

特に『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868) には、shanghai Christmas 1870 と書き込みがあり、焼失をまぬがれ 1870 年以来所持し続けていたと思われる。

『Hymns ancient and modern』と『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』では歌詞に多少の変更があるばかりではなく、《Rock of Ages》は『Hymns ancient and modern』では 3 番まで、『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』では 4 番まである。日本語訳は 3 番までなのでウイリアムズはまず、『Hymns ancient and modern』を参照したのではなかろうか。《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、は『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』しか収録されていない。

《Jesus shall reign where’er the sun》、《Rock of Ages》《When I survey the wondrous cross》、《Hark, herald angels sing》《Nearer, my God, to Thee》は『Hymns ancient and modern』から、《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that

blows》、は、『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』からの歌詞を掲載した。《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、《Nearer, my God, to Thee》は（注104＝111)。なお《Rock of Ages》と《Nearer, my God, to Thee》は4節あるところ3節しか訳していない。

[113]Loomis, Clara Denison,『Henry Loomis, friend of the East』(New York: Fleming H. Revell, c1923)、p.45。

Mr. Loomis himself constructed a series of Bible maps and assisted the Bible Translation Committee by making out a table of Biblical names in the Japanese script. With his teacher's aid he also began translating hymns for use in Christian services, such as "Jesus shall rein," "My faith looks up to Thee," "Nearer, my God, to Thee," " Just as I am," "From every stormy wind that blows," "There is no name so sweet on earth," and "Jesus loves me." It was not easy to observe the exacting rules of Japanese versification and at the same time convey in any recognisable form the Christian ideas. Judged by later standards of missionary scholarship the results were crude, though they stood for hours of patient labour. My Loomis's first collection was published in 1874, and a second and enlarged edition came out two years later. Other missionaries were at wok on similar collections about the same time. From the beginning the Japanese loved their hymns and, even before they knew the tunes, would all join lustily in the singing.

松下孝氏のご教示による。
上記に掲載されている 7 篇の讃美歌は翻訳され『教のうた』に収録されている。『教のうた』収録の《Jesus loves me》の訳《エスわれを愛す》は奥野昌綱・ルーミス訳であるが、バラ氏からわたされた《Jesus loves me》の逐語訳の改訳であることが伝わっている。[Allchin, George ,「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900』(Methodist Publishing House　1901 年)、G. オルチン著、拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、325 頁]。その部分を掲載する。

ルーミス氏の話しによると、「奥野氏は、一八七三年夏ころ、バラ氏から《Jesus loves me》の逐語訳を渡された。バラ氏の翻訳では "For the Bible tells me so" の部分が『聖書はそう話します』になっていたが、奥野氏ならば、聖書は話などしないと

主張して、そのようには翻訳しなかったであろう。バラ氏の翻訳を、讃美歌の形になるようにと組み立てることが、奥野氏と私が最初にしようとした仕事だった。ー略―奥野氏も次のように述べている。「ミス・クロスビーと大坪師が翻訳した《Jesus loves me》は不完全なものであったので、五、六人の人が協力して改作した。横浜地区の初期讃美歌のすべては、翻訳したのが外国人であるか否かにかかわらず、誤りを正すために私のところに持ち込まれた」。

《Jesus loves me》の初訳はクロスビー訳であるが、改訳でも翻訳者であると主張できるのであろうか。そうであるならばウイリアムズ訳が先行して存在していることを無視しても構わないことになる。
なお、この『Henry Loomis, friend of the East』には、ウイリアムズの名前も、聖公会に関しても何も書かれていない。

[114]注 99、序 1 頁。

[115]矢崎健一著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』(聖公会出版　昭和 63［1988］年 11 月)、43～44 頁。

[116]注 96、154、155 頁。

[117]注 96、670 頁。その典拠として『基督教週報』第 19 巻第 8 号（明治 42［1909］年 4 月 23 日）をあげている。この小文を書いた清水友輔について大江氏は以下のように述べている。
「清水友輔は『老監督ウイリアムス師のおもかげ』と題した小文を雑誌『あけぼの』に投稿し、『基督教週報』にも転載された。一八七九（明治一二）年洋学のため上京した清水は、当時『築地の乞食学校』と呼ばれ古長屋の寄宿舎の立教学校に入学し、ウイリアムズから英語や歴史を学んでいる」。注 96、669 頁。

[118]注 96、677～678 頁。その典拠として元田作之進著［注 99、204 頁］をあげている。
なお、奥野氏側からはこれに類する資料はいまのところ存在しないとのことである。（岡部一興氏の私信による)。

[119]注 96、577 頁。「八二年一月二三日の書簡でウイリアムズは、詩篇の邦訳をフルベッキとともに任命されたと述べており、祈禱書邦訳作業に続いて聖書翻訳委員の仕事もあった」。また 1881 年 10 月 31 日付ウイリアムズ宛フルベッキ書簡にも詩篇翻訳に関する 2 人の関係と事情が述べられている。注 96、235～236 頁。
注 98 の詩篇 95 は Venite と､英語祈祷書に記されたラテン語の冒頭が書かれている。祈祷書邦訳作業で訳された詩頌を詩篇翻訳とするのであれば、明治 6 年頃でウイリアムズの聖歌翻訳の時期と合致する。
この他ウイリアムズによる詩篇の部分訳に関しては、海老沢有道著「C・M・ウイリアムズ訳『十誡』と『マタイ福音書』」「C・M・ウイリアムズ訳『朝晩禱文、附リタニー』」

『日本の聖書（新訂増補版)』(日本基督教団出版局　1981 年 4 月)、139～145、261～272 頁を参照。資料に関しては、[フイエイテノ頌（詩九十五篇)、ユヒラテノ頌（詩百篇)、カンダテドミノ頌（詩九十八篇)、デウスミセラトルノ頌（詩六十七篇)、ベニネデク、アニマア、メア頌（詩百三篇)]（明治 4～6 年）は、注 101、22～23、27、31、39～40 頁を、[『朝晩禱文、附リタニー』(詩九十五篇、詩百篇、詩九十八篇、詩九十二篇、詩六十七篇、詩百三篇]（明治 10～11 年）に関しては、矢崎健一著「朝晩祷文付リタニーの研究」『立教大学研究報告・人文科学』第 9 号（立教大学一般教育部編集委員会　昭和 35［1960］年 12 月)、49～85 頁を、『聖公会禱文』「婚姻式」(詩百二十八篇、詩六十七篇)、「看視病文」(詩七十一篇、詩百三十篇)、「埋葬礼式」(詩三十九篇、詩九十篇)、「産後謝恩式」(詩百十六)]（明治 12 年）に関しては、矢崎健一著「聖公会禱文（四)」『立教大学研究報告・人文科学』第 16 号（立教大学一般教育部編集委員会　昭和 39［1964］年 6 月)、40～45、47～49、61～62、68～70、75～77、79～80 頁を参照。

[120]矢崎健一著「C・M・ウィリアムズの訳書と著書」『キリスト教史学』第 16 集（昭和 40［1965］年 9 月)、57 頁と注 97。

[121]『古今聖歌集』(日本聖公会出版社　明治 35［1902］年 6 月)、序 2 頁、「本集の成るや本委員会等は他の讃美歌の編集者及版權所有者諸君に対し大なる厚意を受けたることを感謝すー略ー」。『讃美歌』(教文館　明治 36［1903］年 11 月)、3～4 頁、「メソヂスト教會の代表者は日本聖公會よりあげられたる委員と共に、協議委員會に列し、ことに著名なる讃美歌百首以上の歌詞をとゝのへ、相当なる譜を之に適合せしめ、以て後来出版せらるべき本書の如きものに共通の材となしぬ。この事業は明治三十四年八月に成り、計百二十五首の讃美歌を得たり。これは共通讃美歌と稱し、同年十二月日本聖會にて用ゐるため出版せられたる古今聖歌集にまづ載せられつ。而してまたこの書にも編入せられたり」。

[122]海老沢有道著『日本の聖書（新訂増補版)』(日本基督教団出版局　昭和 56［1981 年］4 月)、261 頁。

一八七一年（明治五年）の大阪テモテ学校の主日には日本語礼拝を行なっており―略―すでに日課指定の聖書部分はある程度和訳していたことと思われる。しかし、彼は翻訳委員とは別個に聖公会訳を作る考えは全くなかった。翻訳委員に挙げられながら、それに加わらず、聖公会の人々も一時参加したものの結局辞退しているが、ヘボンを信頼したものと思われる。

[123]塩谷栄二著「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎」『日本聖公会第 9 回歴史研究者の集い』（平成 9［1997］年 5 月 13 日配付資料)。

[124]『New York Times』(Saturday, Nov. 22, 1935)、“The father of church music in Japan”.

[125] Allchin, George ,「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900』(Methodist Publishing House　1901 年)、G. オルチン著、拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、330 頁。

[126]注 96、591 頁。

[127] 本章は下記の論考を加筆訂正したものである。「明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽」『日本研究（特集　近代東アジアとプロテスタント宣教師　その研究と展望)』第 30 号（国際日本文化研究センター　平成 17（2005）年 3 月)、261～282 頁。

[128]吉田亮著「序章　総合化するアメリカン・ボードの伝道事業」『来日アメリカ宣教師』(現代史料出版、平成 11［1999］年 3 月)、1 頁。

[129] イザヤ書 29 章 18 節他 10 箇所。『新共同訳聖書　コンコルダンス』(新教出版社　平成 9［1997］年 5 月)、345 頁。

[130]石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会　昭和 34［1959］年 7 月)、7～8 頁。

[131]「Music in Japan,」『The Boston Herald Supplement』(Nov. 8, 1879)。 拙訳「日本における音楽」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、平成 11［1999］年 11 月)、133 頁。

[132]「Music in Japan」『 Dwight Journal of Music』(August 14, 1880)、 p.135。

[133]東京盲学校編『東京盲学校六十年史』(東京盲学校　昭和 10［1935］年 11 月)、17 頁。

[134]前掲書、17 頁。

[135]下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地　近代文化の原点』1（築地居留地研究会　平成 12［2000］年 10 月)、67 頁、中島耕二・辻直人・大西春樹著『長老・改革教会来日宣教師事典』(新教出版社　平成 15［2003］年 3 月)、299 頁。

[136]下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地　近代文化の原点』1（築地居留地研究会　平成 12［2000］年 10 月)、66 頁、中島耕二・辻直人・大西春樹著『長老・改革教会来日宣教師事典』(新教出版社　平成 15［2003］年 3 月)、299 頁。

[137] Parker, F. Calvin, 『Jonathan Goble of Japan 』(Lanham; University Press of America, 1990)、p.210, 218, 299。

[138]川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル訳「摩太福音書」の研究』(明石書店　平成 5［1993］年 9 月)、24、30 頁。

[139]下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地　近代文化の原点』1（築地居留地研究会　平成 12［2000］年 10 月)、64 頁。

[140]前掲書、64 頁。

[141]谷合侑著『盲人の歴史』(明石書店　平成 8［1996］年 9 月)、109 頁。

[142]前掲書、110 頁。ミッションスクールに準ずる学校（神戸訓盲院、日向訓盲院、彦根訓盲院、東北盲人学校)、信者によって創設された学校（旭川盲学校、帯広旭盲学校、稚内盲学校、弘前盲学校、鶴岡盲学校、郡山盲ろう学校、松本盲学校、熊本盲学校)。

[143]鈴木力二編著『図説盲教育史事典』(日本図書センター　昭和 60［1985］年 6 月)、文部省編『盲聾教育八十年史』(日本図書センター　昭和 56〔1981〕年 9 月)、『日本キリスト教歴史大事典』(教文館　昭和 63［1988］年 2 月)、吉田久一著『日本社会事業の歴史　全訂版』(勁草書房　平成 6［1994］年 2 月)、石松量蔵著『盲人とキリスト教の

歩み』(日本盲人基督教伝道協議会　昭和 34［1959］年 7 月)、61～77 頁より。設立だけでなく維持に関しても基督教関係者が評価されている。

[144]中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成 5［1993］年 2 月)、465 頁。

[145]『教育雑誌』第三号（明治 9 年)、複製版『明治前期文部省刊行誌集成』、22～23 頁。中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成 5［1993］年 2 月)、465 頁掲載。

[146]注 133、15～16 頁。

[147]前掲書、29、45 頁。

[148]注 144、465、492 頁。

[149]奥中康人氏のご教示による。以下注 150～153 も同様。奥中康人著『唱歌と規律　近代日本の統治技術としての音楽』(大阪大学大学院文学研究科博士［文学］学位請求論文平成 15［2003］年)、彼はこの論文をもとに、『国家と音楽』(春秋社　平成 20［2008 年］3 月）を刊行した。久米邦武編、田中彰注『米欧回覧実記（１)』(岩波書店　昭和 54［1979］年 12 月)、98～99 頁、久米邦武編、田中彰注『米欧回覧実記（３)』(岩波書店　昭和 52［1977］年 9 月)、153～154 頁。

[150]久米邦武編、田中彰注『米欧回覧実記（３)』(岩波書店　昭和 52［1977］年 9 月)、154 頁。

[151]前掲書、155 頁。

[152]前掲書、156 頁。

[153]前掲書、156 頁。

[154]盲聾教育開学百周記念年事業実行委員会編『京都府盲聾教育百年史』(盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会　昭和 53［1978］年 3 月)、82 頁。

[155]注 130、62～66 頁。

[156]今駒泰成著「ドレーパー」『日本キリスト教歴史大事典』(教文館　昭和 63［1988］年 2 月)、967～968 頁。

[157]「点字聖書」『日本キリスト教歴史大事典』(教文館　昭和 63［1988］年 2 月)、906 頁。

[158]横浜訓盲院編『光を求めて九十年』(横浜訓盲院　昭和 54［1979］年 10 月)、3～5、32～33、67～77、208～210、232～239 頁。今駒泰成著「横浜訓盲院」『日本キリスト教歴史大事典』(教文館　昭和 63［1988］年 2 月)、1467 頁。

[159]注 130、63～64 頁。

[160]伊佐治清市編『岐阜盲学校六十年史』(岐阜県立盲学校　昭和 29［1954］年 5 月)、22、23 頁。

[161]前掲書、27 頁。

[162]A. ハミッシ・アイオン著「十字架の使節　カナダ人宣教師が日本に与えた影響」ジョン・シュルツ、三輪公忠編『カナダと日本』(彩流社　平成 3［1991］年 9 月)、94 頁。

[163]安田寛氏にご教示いただいた。

[164]京都府立盲学校教諭小泉良一氏のご教示による。

[165]注 132、p. 135。

[166]メーソンの J. S. ドワイト宛書簡は『ドワイト　ジャーナル　オブ　ミュージック』のなかで、“Mr. Mason in Japan. Tokyo, July, 21, 1880”として掲載されている。「Mr. Mason in Japan, Tokyo, July 21, 1880」『Dwight Journal of Music』(Sept. 11, 1880)、p. 135。

[167]『回議書類　明治十三年二月～十五年六月』下巻一五九丁。原文は英語。

[168]「メーソンから伊沢修二あて書簡　明治十五年十一月二十日付」『音監往復書簡』明治十六年下、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻（音楽之友社　昭和 62［1987］年 10 月)、238～239 頁。

[169]「解雇通知に対するメーソンからの返信　明治十六年一月十五日付」『音監開申書類』明治十六年下、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻（音楽之友社　昭和62［1987］年10月)、239頁。

[170]この書簡は上沼八郎著「伊沢修二とLuther Whiting Mason」『東京女子体育大学紀要』第五号（昭和45［1970］年）に紹介されている。

[171]「An interesting history」『Congregationalist』(Sept., 10,1885)。

[172] 前掲書。

[173]安田寛著「L・W・メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』第四四巻(同志社大学人文科学研究所　平成10[1998]年12月)。

[174]明治17（1884）年1月14日付書簡。

[175]前掲書簡。

[176]「Music and missions Osaka Japan」『The Musical Herald』(June, 1884)。

[177]明治17［1884］年1月14日付書簡。

[178]山勢松韻（1845～1908）は東京市下谷区中徒町に生まれ、1851（嘉永4）年より箏曲を修業、山田流箏曲界の実力者。明治元（1868）年先師山勢検校死去に伴い、同家を相続し松韻と改名する。明治13年より音楽取調掛に勤務。明治24年、東京音楽学校教授になった。

[179]『米國人メーソン叙勲之件』(外務省外交資料館蔵)、「元文部省雇音樂教師米國人エル、ダヴリュー、メンソン（ママ）氏功績調査書」〈第一　公務ニ関スル功績、第七　教授ノ準備（乙)〉。この『米國人メーソン叙勲之件』は中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成5［1993］年2月）の付録（753～767頁）に全文が掲載されている。「功績調査書」『同聲會雑誌』第5号（明治30［1897］年3月）にはこの部分は転載されていない。

[180]「Children’s Department」『The Musical Herald』(April, 1880)、p91。

[181]伊沢修二著『音楽取調成績申報書』「内外ノ音律ノ異同研究ノ事」(明治17［1884］年2月序)、62頁。

[182]高嶺秀夫（1857-1910）は福島県会津若松の生まれ。明治3（1870）年に上京し、慶應義塾に学んだ。明治8（1875）年、伊沢修二、神津専三郎とともにアメリカに留学、オスウェゴー師範学校で学ぶ。三人とも身分は文部省八等出仕、師範科取調のためのアメリカ派遣であったが、いずれも音楽取調掛（後東京音楽学校）に関わることになる。高嶺秀夫は帰国後、東京師範、高等師範、女子高等師範の校長を歴任。師範教育改革に尽力し、日本にペスタロッチ主義開発教授法を紹介した。また、東京美術学校、帝国博物館理事にもなり、東京高等師範学校校長時代に第8代東京音楽学校の校長（明治37～41年）を兼任している。

[183]高嶺夫人＝中村専はメーソンの直弟子で、第1回（明治13年10月）の音楽取調掛伝習生として洋楽を学んだ。ピアノ、ヴァイオリン、箏に秀で英語にも堪能だったためメーソンに気に入られ、音楽取調掛の助手を務めた。メーソンは通訳官の岡倉覚三（天心）をさておき、彼女の通訳で授業をしたと伝えられている。高嶺秀夫、中村専の略歴は次の5点による。中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成5［1993］年2月)、小島一男著『会津人物事典（文人編)』(歴史春秋出版　平成2［1990］年12月)、『日本史広事典』(山川出版社　平成9［1997］年10月)、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻（音楽之友社　昭和62［1987］年10月)、高嶺秀夫先生記念事業会編『高嶺秀夫先生伝』(培風館　大正10［1921］年12月)。

[184] E. S. モース著、石川欣一訳『日本その日その日　3』(平凡社　昭和46［1971］年1月)、43～45頁。

[185]山勢松韻君談話「メーソン氏逸話」『同聲會雑誌』第6号（明治30［1897］年8月）。

[186]「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General conference of Protestant Missionaries in Japan, Herald in Tokyo October 24-31, 1900』（Tokyo: Methodist Publishing House, 1901)に収録された。拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成11［1999］年11月)。

[187]注177。

[188] Tourjée, Eben,『A plea for vocal music in public schools』（Boston: Mudge, 1871), pp.9～10。“The teaching of music in the schools prepares for participation in the church service”

[189]拙著「19世紀アメリカの宣教と音楽」『人文科学研究（キリスト教と文化）―国際基督教大学学報　Ⅳ-B』第30号（国際基督教大学キリスト教と文化研究所　平成11［1999］年3月）参照。

[190] Walker, Edward Dwight,「The New England Conservatory of Music」『Cosmopolitan』(September, 1889)、pp.490～491。

[191]『Manual of the New England Conservatory of Music, 1886～1887』、 p.34。

[192] ロバート・V・ブルース著、唐津一監訳『孤独の克服　グラハム・ベルの生涯』(NTT出版　平成3［1991］年5月)、42頁。

[193]赤井励氏のご教示による。彼によれば「ミッショナリーオルガンという言葉は、Robert F. Gellermann氏が著書『The American Reed Organ, 4th ed.』(Vest Press, 1982)で使用。カタログ上での標準的な言葉はFolding OrganまたはPort Organ、アクラマタイズド（全天候型）オルガンというような言い方だが、実際の使用局面は、海外派遣宣教師の使用、従軍牧師、墓地での埋葬サービスなど、ほとんどがキリスト教で使用された。そして教会に据え置きで使用されるリードオルガンは「チャペルオルガン」という言い方が一般的のようである」。

[194]注192、218～219頁。

[195] ここまでの典拠は次の8点による。ジョセフ・P・ラッシュ著、中村妙子訳『愛と光への旅　ヘレン・ケラーとアン・サリヴァン』(新潮社　昭和57［1982］年1月)、ロバート・J・スミスダス著、鈴木陽子訳『見えない、聴こえない、私。―ヘレン・ケラーを超えて―』(星の環会　昭和60［1985］年9月)、サリバン著、槇恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか―サリバン先生の記録-』(明治図書　昭和48［1973］年4月)、山主敏子著『ヘレン・ケラー（世界の伝記　四二)』(ぎょうせい　昭和55［1980］年9月)、上沼八郎著『伊沢修二』(吉川弘文館　昭和37［1962］年10月)、73～75頁、信濃教育会編『伊沢修二選集』(信濃教育会　昭和33［1958］年7月、1042、1080頁、Tourjée, Leo Eben,『For God and Music; the life story of Eben Tourjée』(unpublished typescript, Los Angels: Leo Eben Tourjée, 1960)。MacPherson, Bruce & Klein, James,『Measure by Measure; a history of New England Conservatory from 1867 』(Boston: The Trustees of New England Conservatory of Music, 1995)、 p.30。

[196] ロバート・V・ブルース著、唐津一監訳『孤独の克服　グラハム・ベルの生涯』(NTT出版　平成3［1991］年5月)、406頁に「アレクザンダー・グラハム・ベル―略―私はこの生涯の物語を捧げる」と書かれているが、日本語訳、ヘレン・ケラー著、岩橋武夫訳『わたしの生涯』(角川書店　昭和41［1966］年6月）には掲載されていない。

[197] McConathy, Osbourne,『Mason song in Japan』(Music educators Journal First Fall Issue, 1937)、p.99。

[198]伊沢修二のメーソン宛の書簡は、信濃教育会編『伊沢修二選集』(信濃教育会　昭和33［1958］年7月)、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻（音楽之友社　昭和62［1987］年10月)、『音楽取調掛時代（明治13～明治15）所蔵目録（3）各種資料編』第一巻（東京芸術大学図書館　昭和46［1971］

年５月）に収録されている。

[199]撫譜にあたるものは、東京芸術大学、京都府立盲学校、官立訓盲唖院の流れをくむ筑波大学附属盲学校には残っていない。明治 18（1885）年、盲人教授用楽譜表（1 個）と音符（500 個）がロンドンで開催された発明品博覧会に出品されているが、伊沢修二発明になっている。これも現存しない。メーソンの再来日が不可能であることが決定的になったためメーソン作のものを伊沢修二の名前で出品したのではあるまいか。以後伊沢修二は自らの発明に関してまったく言及していない。『米國人メーソン叙勲之件』（明治 28 年 12 月 10 日）は中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成 5［1993］年 2 月）の付録（753～767 頁）に全文が掲載され、撫譜等盲人教育に関するメーソンの功績が述べられているが、「功績調査書」『同聲會雑誌』第 5 号（明治 30［1897］年 3 月）にはこの一文が転載されていない。『同聲會雑誌』は容易に見ることのできる資料だが、『米國人メーソン叙勲之件』は公文書のため中村理平氏が『洋楽導入者の軌跡』で取り上げるまで知られることは稀だった。意図的に削除された可能性も考えられる。

[200]本節は「19 世紀アメリカの宣教と音楽」『人文科学研究（キリスト教と文化）　国際基督教大学学報 IV-B』第 30 号（国際基督教大学キリスト教と文化研究所　平成 11(1999)年 3 月）を大幅に加筆訂正したものである。この内容は『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 6 月)、第 3 章「音楽と宣教」でも取り上げたが、ここでも再考を試みた。

[201]CD 解説「南北戦争の歌《リパブリック讃歌》と讃美歌」『おたまじゃくしと権兵衛さんのすべて』(キングレコード［株］　平成 18（2006）年 7 月）に加筆訂正したものである。

[202]『New York Times』(November 22,1935)、“The father of church music in Japan”。

[203] エバン・トゥルジェの略歴は次の四点による。Tourjee, Leo Eben,「For God and Music; the life story of Eben Tourjee」 (unpublished typescript, Los Angeles: Leo Eben Tourjee, 1960)、『The new Grove Dictionary of Music and Musicians, Vol. 19』(London & Washington: Macmillan, 1980)、pp.94～95。『The new Grove Dictionary of American Music, Vol. 4』(London & Washington, Macmillan, 1986)、pp.404～405。「Obituary」『Zinon's Herald』(April 15, 1891)。

[204]「God’s Apostle of Music, Dr.Eben Tourjeé Musical Pioneer」『The Etude』(April, 1947)、“Music is the voice of God to lead us heavenward”。

[205] Leo Eben Tourjeé, 『For God and Music; the life story of Eben Tourjeé』(unpublished typescript, Los Angeles: Leo Eben Tourjeé)、p.172。

[206]メーソンの略歴は、中村理平著「ルーサー・ホワイティング・メーソン」『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成 5［1993］2 月）他。

[207]『The Mason’s hymn and tune book』(Boston: Ginn and Heath, 1880)、『The Mason’s hymn and tune book for mixed voice』(Boston: Ginn and Heath, 1880)、『The Mason’s hymn and tune book for male voice』(Boston: Ginn and Heath, 1880)、『The Mason’s hymn and tune book for female voice』(Boston: Ginn and Heath, 1880)。

上記は、注 206、435～436 頁と、Howe, Sondra Wieland,『Luther Whiting Mason : contributions to music education in nineteenth-century America and Japan』(Ann

Arbor ： U・M・I, 1988)、p.216 による。

[208]「Music in Japan」『The Boston Herald Supplement』(November 8, 1879)。

[209]拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 6 月)、123～134 頁。

[210]赤井励氏のご教示による。

[211]G. オルチン著『風琴教授詳説』(須原徳義編輯発行　明治 24［1891］年 4 月)。1000 部刊行。「大阪の音楽史」にはオルチン自身によるこの書のエピソードが語られている。「あの本には随分お金を使いました。そして千部の本を売るのに十カ年かゝりまして経済的に困りました」、「大阪の音楽史（西洋音楽その四)」『音楽文化』1855 号（大阪　音楽文化協会)、21 頁。

[212]「大阪の音楽史（西洋音楽その四)」『音楽文化』1855 号（大阪　音楽文化協会)。

[213] 注 202。

[214]安田寛著「L・W・メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』第 44 号（平成 7［1995］年 12 月)。

[215]前掲書にその経緯・結果が詳しく述べられている。

[216]『讃美歌并楽譜』(大阪　美国派遣宣教師事務局出版　明治 15［1882］年 3 月)、初版、2 カ月後 6 曲追加して第 2 版。

[217]『SAMBIKA SONGS OF PRAISE 』(Osaka: American Board Mission, 1882)、何月に刊行されたかは不明。

[218]『SANBI NO UTA』(神戸　出版社不明　明治 12［1879］年 10 月、11 月）の 2 種刊行。

[219]『SANBI NO UTA』(出版地不明　出版者不明　明治 12［1879］年 10 月)。

[220] Talcott, E.,「Letter to Dr. Clark 1881. 8. 30. in Letters from Mission in Japan」『Paper of the American Board of Commisionars for Foreign Missions』。

安田寛氏はこの部分を翻訳し、その著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 5［1993］年 6 月）に掲載（277～278 頁）した。その部分を転載する。

私たちは今キャリー夫妻とカーチス氏と一緒に日本の中央部を旅行中です。数週間は、ミス・バロウズとミス・ダッドレーも一緒に、この美しいところで過ごします。町で私たちは、しょっちゅう東京のメーソン氏とアマーストの七九クラスのカンダ氏にあっています。メーソン氏は２人の音楽生徒と一緒です。両紳士は、他のクリスチャンが簡単に近づけないクラスの人々に上手に近づくことができます。

[221] いままで 15 曲と考えられていたが、阪田寛夫の指摘により新たに 1 曲＜玉の宮居＝Caledonia＞が追加され 16 曲になった。『小学唱歌集』収録曲で、讃美歌と同じ曲が採用されているものを＜番号. 曲名＝讃美歌のチューンネーム＞の形式で以下に記す。＜13. 見わたせば＝Greenville＞、＜15. 春のやよい＝Happy Land＞、＜16. わが日

の本＝Happy Land＞、＜18. うつくしき＝Blue Bells of Scotland＞、＜20. 蛍＝Auld Lang Syne＞、＜23. 君が代＝Weber＞、＜24. 思いいづれば＝ayrshire＞、＜26. 墨田川＝Hamburg＞、＜29. 雨露＝Sicilian Hymn＞、＜30. 玉の宮居＝Caledonia＞、＜36. 年たつけさ＝Render＞、＜45. 榮行く御代＝Portuguese Hymn, Adeste Fideles＞、＜78. 菊（庭の千草）＝St. Denis＞、＜84. 高峰＝Hendon＞、＜85. 四の時＝Fading, Still Fading＞、＜86. 高峰＝rest＞。

[222]朝日新聞文化欄「唱歌に隠された賛美歌」（平成 5［1993］年 7 月 24 日夕刊）、NHK テレビ番組「今夜はあなたとミステリー　唱歌誕生の謎」（平成 7［1995］年 6 月 2 日）、NHK 衛星第 2「ドキュメント日本のうた 100 年―明治期の文明開化」（平成 9［1997］年 10 月 31 日）、安田寛著『唱歌と十字架』（音楽之友社　平成 5［1993］年 6 月）、筆者監修、出演『永遠のふるさと　童謡・唱歌から讃美歌へ（DVD）』（ライフ・クリエイション［いのちのことば社］　平成 22［2010］年 10 月）。なお唱歌と讃美歌に関する文献は、拙著『日本讃美歌・聖歌研究書誌　2010』（キリスト教礼拝音楽学会　平成 23［2011］10 月）、170～172 頁、参照。

[223]『小学唱歌集』初編収録曲で、讃美歌と同じ曲が 10 曲採用されているが、そのうち 7 曲が『讃美歌并楽譜』収録讃美歌である。『讃美歌并楽譜』は明治 15［1882］年 3 月初版であるが、2 カ月後の 5 月 6 曲追加して第 2 版を出版している。『小学唱歌集』初編の実際の刊行が明治 15 年 4 月であるから、競い合って刊行している感を覚える。しかも、追加された 6 曲のうち 2 曲は『小学唱歌集』初編収録の第 18《うつくしき》と《墨田川》である。

　安田寛氏はこの件をその著『唱歌と十字架』（音楽之友社　平成 5［1993］年 6 月）で展開した。315～319 頁。

[224]Japan Weekly Mail, March 6, 1880.

“Mr. Mason has discovered that the Japanese scale contain five tones only, being deficient of the fourth and seventh of the Italian gamut.”

Musical and Sewing Machine Gazette, February 7, 1880 の「Musical Education in Japan 」に引用されている。

[225]「Music in Japan」『The Boston Herald Supplement』（Nov. 8, 1879）、拙訳「日本における音楽」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月）、121～134 頁。

[226]N. G. クラークの G. オルチン宛明治 17（1884）年 9 月 15 日付書簡で「私は、音楽の発展に関してあなたの価値ある助力について聞く機会が度々あります」と述べ、明治 18（1885）年 11 月 6 日付書簡では「あなたが期待以上に早く［音楽による］宣教事業に

打ち込んでいて、そのことで私は深い満足感に満たされている」と述べている。

[227]伊沢修二の略歴は次の2点による。上沼八郎著『伊沢修二』(吉川弘文館　昭和37[1962]年10月)、信濃教育会編『伊沢修二選集』(長野　信濃教育会　昭和33[1958]年7月)。

[228]目賀田種太郎の略歴は、『男爵目賀田種太郎』(故男爵目賀田種太郎伝記編纂会　昭和13［1938］年6月）による。

[229]山住正己著『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会　昭和42［1967］年3月)、遠藤宏著『明治音楽史考』(有朋社　昭和23［1948］年4月)、上沼八郎『伊沢修二』（吉川弘文館　昭和37［1962］年10月)、東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』(音楽之友社　昭和51［1976］年7月)、中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成5［1993］年2月)、安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成5［1993］年6月）等。

[230]「予が關係したる創業教育」『教育時論』第635号（開發社　明治25［1892］年)。

[231]「メーソン氏を弔ふ」『同聲會雑誌』第6号（明治30［1897］年8月)。

[232]三岡丈夫の略歴は次の3点による。中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成5［1993］年2月)、由利正通編『子爵由利公正傳』(由利正通　昭和15［1940］年)、『月刊樂譜』9巻　11号。

[233]目賀田種太郎著『米國在留日本人　The Japanese in America』(五味貞吉　大正15[1926]年5月)、前文5頁（英文)。訳文は安田寛氏著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成5［1993］年6月)、58頁。

[234] Lawler, Thomas Bonaventure,『 Seventy years of textbook publishing; a history of Ginn and Company』(Boston: Ginn and Company, 1938)、p.55。

[235] McConaty, Osbourne,「Mason song in Japan」『Music educators Journal First Fall Issue』(Sept. 1937)。

[236]正木直子・正木みち編・訳『概要「日本の教育の歴史の現状」―1876 年フィラデルフィア万博のために―』(日本図書刊行会　平成10［1998］年7月）の付録「フィラデルフィア万国博覧会文部省関係出品物一覧（抜粋)」には、＜音楽書　1、　音楽に関する21巻（古典及び近世）＞（257頁）が掲載されている。

高嶺秀夫はアメリカ留学時にフィラデルフィアの万博に立ち寄り、日本に出品物について次のような印象を述べている。

常に見物人顆しく唐金細工、瀬戸物等を賞賛する人多く御座候。日本の出品中売払の礼を張付たる品物又沢山御座候。又日本の商人等別に日本流の一店にて日本の物品を商売するところあり、此には西洋人の集まること黒山の如く朝より暮まで絶間なし。然し品物の値頗る過度なる故、扇子の如きやすきものは沢山売れる様子なれども、上等の物品は買人少きよしに御座候。且つ日本の出品には贅沢物のみ多くして、有用の

器械等は絶て稀なり、遺憾と云うべし。高嶺秀夫先生記念事業会編『高嶺先生傳』(培風館　大正 10［1921］年 12 月)、6 頁。

[237]安田寛著「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」『山口芸術短期大学研究紀要』　第 29 号 (平成 9［1997］年 11 月) に 3 人の関係が詳しく述べられている。

[238]安田寛著『唱歌の起源、唱歌掛図と七五調』(近代日本音楽社会史研究会八王子講演原稿、於：大学セミナーハウス、平成 6［1994］年 3 月 21 日)。この会の席上、川本皓嗣氏の指摘により、数え歌《ひとつとや》の楽譜は目賀田の筆跡、歌詞（ローマ字）はメーソンの筆跡によることが判明した。

[239]安田寛著「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」『山口芸術短期大学研究紀要』　第 29 号（平成 9［1997］年 1 月)。

[240]安田寛著『唱歌の起源、唱歌掛図と七五調』(近代日本音楽社会史研究会八王子講演原稿、於：大学セミナーハウス、平成 6［1994］年 3 月 21 日)。

[241]注 222。

[242]「An interesting history」『Congregationalist』(1885. Sept. 10)。

[243] Torrey, Ellizabeth,『Western music in Japan』(Nov. 1898, Vol. 15) pp.4-5.訳文は安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 5［1993］年６月)、22 頁。

[244]Mathews, W. S. B.,「Luther W. Mason and school music」『Music』(Sept. 1892)。訳文は安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 5 年 6 月)、71 頁。

[245] Butterfield, Fred H. & McConathy, Osbourne,『Mason and school music course teachers manual』(Boston: Ginn, 1899) p.25。訳文は安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 5 年６月)、72、239 頁。

[246]『Address by the Rev. Laurence at the funeral of Professor Luther Whiting Mason, held in the Baptist Church of Buckfield Maine』(July 16,1896) 安田寛氏のご教示による。メリーランド州立大学ホーンベック図書館所蔵。訳文は安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 5 年 6 月)、311～312 頁。

[247]前川公美夫著『北海道音楽史』(士別　前川公美夫　平成 4［1992］年 6 月)、49 頁。

[248] 注 220。

[249]「Music and missions Osaka Japan」『The Musical Herald』(June. 1884)。

[250]「日本の音楽研究者に向て」『月刊楽譜』(大正 9［1920］年 11 月)、第 9 巻 11 号、22 頁。

[251]前掲書。

[252]「今昔の感」『福音新報』第 1514 号（大正 13［1924］年 8 月)、「讃美歌に関する資料」『植村正久と其の時代』第 4 巻 (教文館　昭和 13［1938］年 6 月) 391～392 頁に再録。

[253]『福音新報』第 1377 号（大正 11［1922］年)、「讃美歌に関する資料」『植村正久と其の時代』第 4 巻（教文館　昭和 13［1938］年 6 月)、382 頁に再録。

[254] この記事（『七一雑報』明治 14 年 7 月 1 日）と『七一雑報』（明治 14 年 8 月 12 日）の記事は越川美都子氏にご教示いただいた。なお、この基督教演説会の広告（メーソン氏の名がある）が『東京日々新聞』（明治 14 年 6 月 25 日）に掲載されている。日本近代洋楽史研究会編『明治期　日本人と音楽　東京日々新聞集成』（国立音楽大学図書館/大空社　平成 7［1995］年 7 月）、52 頁。

[255] 『七一雑報』に関しては、同志社大学人文科学研究所編『「七一雑報」の研究』（京都　同朋社出版　昭和 61［1986］年 3 月）に詳述されている。

[256] 「メーソン氏を弔ふ」『同聲會雑誌』第 6 号（明治 30［1879］年 8 月）。

[257] 「Music in Japan」『Dwight Journal of Music』（1880 August 14）、p.135。

[258] 「Professor L. W. Mason and American Music in Japan」『The Musical Herald』（Aug. 1881）。

メーソンの日本におけるデビューコンサートの模様が述べられている。以下曲目のみ原文と訳文を掲載する。

Professor L. W. Mason and American Music in Japan
Musical Herald 1881 Aug.

Orchestra*――――――――――Sicilian Italian Hymn.
Ladies stand, bow, and sit.
Singing and orchestra― “Long may thy Reign continue”, two verses.
Young ladies― “Charming Valley”, three verses.
Young ladies―Moral piece, one verse.
(New music.)
Empress speaks. Director answes.
Singing―Japanese, three pieces.
Orchestra―Moral piece.
Young ladies― “Bonnie Doon”, four verses.
Young ladies ― “Auld Lang Syne”, three verses.
(New music.)
Ladies stand, bow, stand, and go out.
Music, orchestra― “Brightry gleams” ――――――――――Haydn
Children from both normal schools march in turn, bow, and sit.
Singing by children― “Cho―Cho”, two verses.
Singing by children― “Rousseau’s Dream”, two verses.
Singing by children― “Happy Land”, four verses.
(New music.)

Standing, bow, face, and march.
Three o’clock, Empress quits the hall.
Music—“Night Song”
Professor Luther Whiting Mason, director.

*オーケストラ――――――《シシリアン　イタリアン　ヒム》
　女性達、起立、礼、着席。
歌とオーケストラ――――《君が代》、2番まで。
若い女性達――――《若紫》、3 番まで。
若い女性達――――道徳的作品、《五倫》、1番まで。
（新作）
皇后陛下お言葉。指揮者答礼。
歌―日本のもの、3作品（《學の道》他2曲？）
オーケストラ――――道徳的作品、（《五常》？）
若い女性達――――《思ヒ出レバ》、4番まで。
若い女性達――――《蛍ノ光》
(新作)
女性達、起立、礼、退場。
音楽、オーケストラ――――《オーストリア国歌》――――ハイドン
両師範学校の子ども達、次々に行進、礼、着席。
子ども達による歌――――《蝶々》、2番まで。
子ども達による歌――――《見渡せば》、2番まで。
子ども達による歌――――《春の彌生》、4番まで。
(新作)
起立、礼、正面を向いて行進。
三時、皇后陛下、ご退出。
音楽――――《ナイトソング》
指揮、メーソン教授

259『Manual of the New England Conservatory of Music, 1886-87』、pp.18～19。

260ホームの概念に関しては、拙論「〈真白き富士の根〉と讃美歌（2）――大和田建樹・三角錫子とキリスト教　小さな教会としての〈ホーム〉――」『フェリス女学院大学音楽部紀要』第2号（平成9［1997］年3月）、61～67頁。

261メーソンの伊沢宛明治22［1889］年9月19日付書簡。東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第1巻（音楽之友社　昭和62［1987］年

10 月)、243 頁。

[262]青山なお著『明治女学院の研究（青山なお著作集第 2 巻)』(慶應通信　昭和 45［1970］年 1 月)、530 頁。

[263]森孝一著『宗教からよむ「アメリカ」』(講談社　平成 6［1994］年 3 月)、13～14 頁。

[264] Evan, Sara M.,『Born for liberty』(New York: The Free Press, 1989)、pp.68～69、88～89、100～101、138。

[265] Cammpbell, Donald P.,『Puritan belief and musical practices in the sixteenth and eighteenth centuries』(Ann Arbor: U. M. I., 1994; theseis［D. M. A.]-Southern Baptist Theology Seminary, 1994)、pp.400～402。

[266]「National Music Charts for the Singing Classes, Seminaries, Conservatories, Schools and Families」、「The National Music Teacher: a practical guide in teaching vocal music and sight-singing to the youngest pupils in school and families」、「Second Music Reader; a course of exercises in the elements of vocal music and sight-singing, with choice rote songs for the use of schools and families」。

[267]アメリカン・ボード日本宣教のきっかけとなったのは一基督者の献金から始まったと言われる。「一七　日本のために祈りし米国の一団とその一団より遣わされたる最初の宣教師」『植村正久と其の時代』第 1 巻（昭和 12［1937］年 6 月)、206～208 頁。

[268] Gellerman, Robert,『R. Gellerman's international reed organ atlas』2nd ed.（Lanham: Vestal Press, 1998)、p.69、153。

上記資料によれば、エステー社のリードオルガンの製造番号は 1850 年―400、1860 年―5600、1890 年―322000、1895 年―506000 である。またメーソン・アンド・ハムリン社は、1856 年―596、1870 年―10000、1880 年―45972、1890 年―103200、1899 年―212377 である。赤井励氏のご教示による。

[269]注 208。

[270]『Illustrated catalogue of Mason & Hamlin』(March, 1880)。

“I fully concur in the views of my friends Zerrahn and Gilmore respecting the unrivaled excellences of the Mason & Hamlin Cabinet Organs. They are, in my opinions, the best reed instruments made. I regard them as indispensable in the parlor, and as powerful auxiliaries to the Piano in the rendition of the most beautiful of instrumental music. Every house should have one, and every family would be the happier for the possession of one”

赤井励氏のご教示による。赤井励著『オルガンの文化史』(青弓社　平成 7［1995］年 8 月)、71 頁。

[271]『The American organs; a short account of its construction and utilities, and a

descriptive list of the various style』(Boston: The Smith American Organ Company, 1871?)。

“Eleven hundred children joined in full chorus; and yet, with all that congregation of voices, in that immense building, which was crowded to repletion, your instrument was heard with all that distinctness which is given by a pipe organ”。

赤井励氏のご教示による。赤井励著『オルガンの文化史』(青弓社　平成 7 年 8 月)、73 頁。

[272]Luther Whiting Mason Letter 1881 to Grand nieces この書簡の存在は安田寛氏にご教示ご提供いただいた。訳文は安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 5 年 6 月)、34 頁。

[273]Walker, Edward Dwight,「The New England Conservatory of Music」『Cosmopolitan』(Sept. 1889)、pp.490～491。

[274]注 259、p.22。

[275]前掲書、p.34。

[276]Anna L. Van Zandt Bing、1864～1923。
平高典子氏にご教示いただいた。なおビングの音楽教育については、安田寛著「晩年のトゥルジェーと日本の洋楽」『山口芸術短期大学紀要』第 28 巻（平成 8［1996］年 1 月）に紹介されている。

[277]幸田延子「外行紀要」『同聲會雑誌』第 1 号（明治 29［1896］年 4 月)。

[278] 注 259、p.24。

[279]本井康博氏のご教示による。
Nov. 16, 1886(Minutes of the Prudential Committee)

It was voted that the thanks of the Committee be presented to Dr. Eben Tourjeé of the Conservatory of Music for the generous offer to receive as pupils of the Conservatory, free of charge for tuitions, any missionaries connected with the American Board, The Clerk was directed to communicate this to Dr. Tourjeé.

[280]渡辺正雄著『文化としての近代科学』(丸善　平成 3［1991］年 1 月）によった。他の部分でも科学とキリスト教に関しては同著による所が多い。

[281]高谷道男編訳『ヘボン書簡集』(岩波書店　昭和 34［1959］年 10 月)、[『ヘボンの手紙』(有隣堂　昭和 51［1976］年 10 月)]。

[282] 『War Songs』(Boston: Oliver Ditson, 1883)。

[283]『日本軍歌　全』(博文館　明治 25［1892］年 4 月)。
[284]三谷種吉著『基督教福音唱歌』(明治 31［1898］年 11 月)、第 1。
[285]奥野昌綱・戸川安宅編『童蒙讃美歌』(倉田繁太郎　明治 23［1890］年 12 月)、第 13。
[286]注 283。
[287]三谷種吉著『基督教福音唱歌』(明治 31［1898］年 11 月)、第 2。
[288]『War Songs』(Boston: Oliver Ditson, 1883)。
[289]『リバイバル唱歌』(聖書学院　明治 42［1909］年 5 月)、第 6。
[290]『霊感賦』(基督教書類会社　大正 11［1922］年 1 月)。
[291]『救世軍歌集』(救世軍本営　平成 9［1997］年 11 月)。
[292]『救世軍歌集』(救世軍本営　大正 3［1914］年 9 月)、第 165、第 144。
[293]『救世軍歌集』(救世軍本営　昭和 10［1935］年 2 月)、第 266、第 299.
[294]『救世軍歌集』(救世軍本営　昭和 29［1954］年 12 月)、第 268、第 301。
[295]『救世軍歌集』(救世軍本営　明治 34［1901］年 11 月)、第 67。
[296]『高木玄な眞筆写本』(大阪　明治 6～7 年)、第 8《流水天にあり》、『讃美歌(さんびのうた)』(横浜　明治 7 年)、第 17《われ、天のみずに》。
[297]日本福音連盟新聖歌編集委員会編『新聖歌』(教文館　平成 13［2001］年 6 月)、第 475《まもなくかなたの》、教会福音讃美歌讃美歌委員会編『教会福音讃美歌』(いのちのことば社　平成 23［2012］年 9 月)、第 336《川辺のあゆめば》。
[298]『進行曲』(十字屋　明治 32［1899］年 1 月)、no.V。
[299]『進行曲粋　教科適用　第一集（文部省検定済)』(開成館　明治 37［1904］年 11 月)、no. 11。
[300]青芳勝久［英文］著、渡辺省三訳『講堂・植村正久・物語』(キリスト教図書出版社　平成 9［1997］年 12 月)、278～300 頁。
[301]森一著『明治詩人と英文学』(国書刊行会　昭和 63［1988］年 4 月)、61～78 頁。
[302]植村正久著、佐波亘編『植村正久と其の時代』第四巻（教文館　昭和 13［1938］年 6 月)、408～414 頁。
[303]これ以前に２人の外国人が日本における讃美歌について論じている。
Carles,「Music for Japanese Hymns」『Chrysanthemum』Vo.2,No.10 (Nov.,1882)。拙訳「日本語讃美歌のための音楽(翻訳)」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第 3 号(平成 10［1998］年 3 月)、『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、261～265 頁に改訂・収録。
Chamberlain, Basil Hall,「Suggestions for a Japanese Rendering of the Psalms」『Transaction of Asiatic Society in Japan』Vol.8,Pt.3 (1880)、［拙訳「B. H. チェンバーレン　詩篇日本語訳への提言―及び試訳『讃美歌』＜韻文訳詩篇＞―」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第 1 号（平成 7［1995］年 9 月)、『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、266～305 頁に改訂・収録。
[304]植村正久著『植村全集』第五巻［教会篇］(植村全集刊行会　大正 12［1923］年 2 月)、413～418 頁。
[305]植村正久著、佐波亘編『植村正久と其の時代』第四巻（教文館　昭和 13［1938］年 6 月)、379～452、711～717 頁、植村正久著『植村全集』第五巻［教会篇］(植村全集刊

行会　大正 12［1923］年 2 月)、448、473～476 頁、植村正久著『植村正久著作集』第三巻（新教出版社　昭和 41［1966］年 6 月)、377-404 頁。

[306]『東京毎日週報』には植村正久の記名がない。『植村全集』に殆どルビが省略された同文が収録されており、これを掲載した。植村正久著『植村全集』第五巻［教会篇］（植村全集刊行会　大正 12［1923］年 2 月)、415～418 頁。 なお、明治時代の文献は旧字のまま引用した。また、横書きにしたため、引用文は漢数字を算用数字にした場合がある。

[307]序文は以下のとおりである。

此ノ讃美歌集ハ明治十九年ノ春一致組合両会カ撰挙セシ委員ニ由リテ成リタル者ナリ組合教会ニテハ松山高吉宮川経輝田村初太郎ジョルジ、オルチンノ諸氏一致教会ニテハ奥野昌綱植村正久瀬川浅ジー、エフ、フルベッキノ諸氏ヲ以テ其員トセリ。明治二十年五月東京ニ集会セル日本福音同盟会ハ大イニ此ノ挙ヲ賛成シテ委員ヲ奨励セリ殊ニ監督教会ニテハ更ニ委員ヲサエ立テ此業ヲ助ケントセラレタリ然レドモ種々ノ都合アリテ十分ニ協力スルコトヲ得ザリキ。此ノ集ノ成ルハ委員総体ノ協力ニ由ルトイヘドモ其実主トシテ之カ編輯ニ従事セシハ松山高吉奥野昌綱植村正久ノ三氏ナリ而シテ之ニ譜調ヲ附シタルハ専ラオルチン氏ノ労ナリ日本ノ諸教会ニテハ未タ和音斉声ノ唱歌ヲ為スノ時機ニ達セズ尚ホ暫ラクノ間ハ同音一声ヲ以テ歌フノ必要ヲ免レザル可シ故ヲ以テオルチン氏此ノ集ノ中ニ在ル譜ヲ稍低キ音ニ引キ下ゲタルモノ少カラス其数凡ソ百バカリモアラン。委員ハ譜調ヲ定メ本集ヲシテ音楽上成ル可ク完全ナラシメンカタメニオルチン氏ヲ補助セラレタル人々ニ向ツテ厚ク感謝ス就中オルチン氏令室ノ如キハ譜調校正ノ事ニ付キ大ニ力ヲ尽サレシ故殊更ニ感謝ノ意ヲ表セザルベカラズ。（以下略）

[308]『新撰讃美歌』（植村正久他　明治 23［1890］年 12 月)、3 頁。

[309] G. オルチンの略歴は、「第 4 章　日本の讃美歌、唱歌、及び替歌と 19 世紀アメリカの海外宣教　第 1 節　2、トゥジェー、メーソン、オルチンの略歴」（70～71 頁）で触れたが、日本の讃美歌における彼の功績を以下まとめる。

日本の讃美歌に果たした G. オルチンの功績は、まず明治初期各派独自に出版していた讃美歌集の統一をはかり、そして＜日本におけるトニック・ソルファ方式の父＞と呼ばれるように、讃美歌における歌唱の分野に大きく貢献したことである。彼は、2 教派（日本基督教会＜長老派・改革派＞と組合教会＜会衆派＞）共通の、『新撰讃美歌』（明治 21［1888］年、歌詞だけの版)、5 教派（組合教会、日本基督教会、メソジスト教会、浸礼教会、基督教会）による『讃美歌』（明治 36［1903］年)、『讃美歌　第二編』（明治 42［1909］年）の編集委員となり、特に音楽の編集を担当した。

また彼は明治初期の讃美歌集をはじめとする讃美歌のコレクション（115 点）のすべてを神戸女学院図書館に寄贈し、後学の徒に道を開いた。

そして、『日本における讃美歌』(“Hymnology in Japan”) を著した。この『日本における讃美歌』は、明治 33［1900］年 10 月、東京で行われた第 3 回宣教師協議会の席上発表されたもので、『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900』(Methodist Publishing House, 1901) におさめられた。

『日本における讃美歌』の副題は＜その過去の歴史、及び統合讃美歌集が実現する可能性について＞であり、1、英語讃美歌の起源と、その進展について　2、日本語讃美歌の始まりについて　3、日本語の教会讃美歌の質について　4、日本における将来の讃美歌集と、将来の讃美歌歌唱について　5、統合讃美歌の可能性について　6、標準讃美歌の統一訳について、の 6 項目で構成されている。

この論文では統合讃美歌の必要性が説かれているが、この論文が発表された同じ年の 4 月、大阪で開催された福音同盟会で共同で讃美歌集を出版することが満場一致で採択され、統合讃美歌集への気運が一気に高まっていた。そして 10 月に、G. オルチンが東京の宣教師協議会の席で、この「日本における讃美歌」(“Hymnology in Japan”) を発表し、この年のうちに 5 教派による讃美歌委員会が組織され、3 年後の明治 36 (1903) 年に 5 教派合同の『讃美歌』が出版されたのである。

この『讃美歌』は版を重ね、改訂が加えられ、昭和 6 年版、昭和 29 年版、『讃美歌２１』と、現在までその基本的な形態を保ちつづけている。

また、「日本における讃美歌」は、日本の讃美歌史を研究する上で貴重なばかりでなく、日本語で西洋音楽を歌うということを考える上でも大変重要な資料である。特に「日本における讃美歌」で G. オルチンが扱った＜日本語で歌う＞ことによって起こるさまざまな問題は、20 世紀の間には解決をみていないように思われる。今世紀の課題として再度研究される必要のある資料といえよう。

[310] 注 308、3 頁。

[311] 前掲書、3 頁。

[312] 別所梅之助著「日本の讃美歌について」、マクネア共著『讃美歌物語』(警醒社　大正 6［1917］年 6 月)、16 頁。

[313] 笹淵友一著「新撰讃美歌について」『礼拝と音楽［季刊］』第 2 号、1974/Summer (昭和 49［1974］年 8 月)、4～6 頁。

[314] 小川和佑著「詩のなかの精神史」『文明開化の詩』(叢文社　昭和 55［1980］年 10 月)、181 頁。

[315] 注 300、290 頁。

[316] 注 302、265、407 頁。

[317] 前掲書、379～452 頁。

[318] 前掲書、391～392 頁。

[319] 前掲書、382～383 頁。

[320]前掲書、713 頁。

[321]メーソン述、拙訳「日本における音楽」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)、133～134 頁。「Music in Japan」『The Boston Herald Supplement』(Nov.8,1879)。

[322]拙著「音楽と宣教」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月）参照。

[323]拙著『日本讃美歌・聖歌研究書誌　2010』(キリスト教礼拝音楽学会　平成 23［2011］年 10 月)、121～122 頁を参照。

[324] 拙訳「松本幹（つよし）著“Hymnology in Japan”『日本における讃美歌』(全訳)」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第 43 号(明治学院大学キリスト教研究所　平成 22［2010］年 12 月)。

[325]園部不二夫著「明治学院音楽史　明治学院における戦前戦後の音楽活動」『管弦楽団 10 周年記念誌　1965-1975』(明治学院管弦楽団　昭和 51［1976］年 12 月)、［再録：「日本の教会音楽史に貢献した　明治学院の音楽史」1～2『聖歌の友』第 98～99 号（1977 年 2～3 月)］。

[326]本節は、拙著「島崎藤村と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 11 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 24［2012］年 3 月）に加筆、訂正をしたものである。

[327]笹淵友一著「新撰讃美歌について」『礼拝と音楽［季刊］』第 2 号、1974/Summer（昭和 49［1974］年 8 月)、4～6 頁。

[328]拙著「植村正久と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 7 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 19［2007］年 3 月)、33～34 頁。

[329]笹淵友一著「讃美歌」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院　昭和 62［1987］年 4 月)、176 頁。

[330]前掲書。

[331]『明治学院百年史』(明治学院　昭和 54［1979］年 4 月)、152 頁、『明治学院百年史資料集』第 1 集（明治学院百年史委員会　昭和 50［1975］年 3 月)、171、181 頁。

[332]拙著「音楽と宣教」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999 年 11 月］、他参照。

[333]伊東一夫著「植村正久」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院　昭和 57 年［1982］年)、42 頁。

[334]村上文昭氏、元関東学院大学教授の私信による。

[335]『新撰讃美歌』(植村正久他　明治 21［1888］年 5 月)、21 頁。

[336]島崎藤村著『春』、明治 41（1908）年、(新潮社　昭和 25［1950］年 11 月、文庫版)、218～219 頁。

[337]注 335、198 頁。

[338]注 336、224 頁。

[339] 島崎藤村著『桜の実の熟する時』、大正 8［1919］年、(新潮社　昭和 30［1955］年 5 月、文庫版)、15 頁、この文庫版から引用。

[340]前掲書、18 頁。

[341]前掲書、18 頁。

[342]前掲書、19 頁。

[343]前掲書、19 頁。

[344]前掲書、20 頁。

[345]前掲書、56 頁。

[346]前掲書、67 頁。

[347]前掲書、70 頁。

[348]前掲書、129 頁。

[349]中村浩介著『西洋の音、日本の耳』(春秋社　昭和 62［1987］年 4 月)、150～154 頁。

[350]小玉晃一･小玉敏子共著『明治の横浜　英語･キリスト教文学』(笠間書院　昭和 54［1979］年 4 月)、145 頁。

[351]三好行雄著『島崎藤村論』(至文堂　昭和 41［1966］年 4 月)、65 頁。

[352]笹淵友一著「逃げ水」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院、昭和 57［1982］年 4 月)、343 頁。

[353]青木美穂著「藤村詩と讃美歌＜逃げ水＞＜月光＞」『青山語文』(青山学院大学日本文学会　平成 2［1990］年 3 月)、85～86 頁。

[354]前掲書、86～95 頁。

[355]伊東一夫著「年譜」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院、昭和 57［1982］年 4 月)、634 頁。

[356]前掲書、635 頁では明治 31 年になっているが、下山嬢子著「藤村と音楽学校」『島崎藤村研究』第 29 号（双文社出版　平成 13［2001］年 9 月)、49～55 頁、下山嬢子著『近代の作家　島崎藤村』(明治書院　平成 20［2008］年 2 月)、425～434 頁によって明治 30 年 9 月入学、明治 31 年 7 月退学に訂正された。岩田ななつ氏のご教示による。またこれより注 364 までは、岩田ななつ著「島崎藤村と西洋音楽」『言語文化』第 29 号（明治学院言語文化研究所　平成 24［2012］年 3 月）により知り得た資料である。

[357]島崎藤村著「韻文について」『太陽』第 22 号（明治 28［1895］年 12 月)、183 頁。

[358]島崎翁助著「『初期藤村』に関する覚え」『島崎藤村全集』第 1 巻（新潮社　昭和 25［1950］年)、530～531 頁。

[359]瀬沼茂樹著『評伝　島崎藤村』(筑摩書房　昭和 56［1981］年 10 月)、137～138 頁。

[360]西丸四方著『島崎藤村の秘密』(有信堂　昭和 41［1966］年 6 月)、53、55～56 頁。

[361]島崎藤村著「沈黙」『中央公論』第 28 巻第 2 号（大正 2［1913］年 2 月)、17～18 頁。

[362]風雨楼主人著「文学界　一月の創作界」『世界之日本』第 24 号（明治 31［1898］年 2 月）の［藤村と唱歌］の項、104 頁。

[363]注 336、196 頁、『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇　第一巻』(音楽之友社　昭和 53［1987］年 10 月)、511 頁。

[364]島崎藤村著「耳の世界」『交響楽』1 巻 4 号（大正 15［1926］年 4 月)、9 頁。

[365]島崎藤村著「北村透谷二十七回忌に」『大観』(大正 10［1921］) 年、［再録 :『日本現代

文学全集十九　島崎藤村集（一)』(講談社　昭和 36［1961］年 1 月)]。

「透谷が亡くなってからもう二十五年にもなる。私が初めて透谷に逢ったのは麹町三番町にあつた巌本善治氏の家の応接間で、透谷は二十九歳、私はまだ漸く二十一歳の青年であつた。当時透谷は巌本氏の主宰する「女学雑誌」に寄稿しはじめた頃であつたが彼が特色の深い論文の最初の試みとも言ふべき「厭世詩家と女性」は早く既にその年頃に出来たものであつた。私の透谷を愛する心はそれから三年の後、彼が僅かに二十七歳で早く斯の世去つた時まで続いていつたばかりでなく、その心は彼が死後になつてますます深くなつて行つた。あの友人と私との縁故も深い。―略－就中私があの友人から感化を受けたことの深かったからであろう。彼こそはまことの天才と呼ばれるべき人であつたと思ふ。」(「北村透谷二十七回忌に」より。)

[366]この小論は「樋口一葉と讃美歌」『礼拝音楽研究』 第 9 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 22［2010］年 3 月）に加筆、訂正したものである。

小学館の『樋口一葉全集③日記編』(昭和 54［1979］年 1 月）に掲載されている樋口一葉訳讃美歌《たのしきくにあり》の注には、歌詞として《The life everlasting》と書かれていた。またそれ以前の筑摩書房の『樋口一葉全集　第三巻(上)』(昭和 51［1976］年 12 月）の日記にもこの原歌詞として同様に《The life everlasting》が記されていた。この「The life everlasting」は讃美歌の項目と思われ、《たのしきくにあり》の歌詞、曲は特定できないままの状態であった。しかし筑摩書房の『樋口一葉全集』の編纂者の一人塩田良平著『樋口一葉研究』(中央公論社　昭和 31［1956］年 10 月)、448 頁にはこの原歌詞として《There is a Land of pure delight》と書かれており、歌詞が特定できたことにより、曲も同時に特定することができた。また、バプテスト系の讃美歌集である『基督教讃美歌』(明治 29［1896］年）には樋口一葉訳讃美歌が日記掲載部分の歌詞を訂正して収録されていた。樋口一葉と讃美歌の関連を明らかするためこの小論を書くに至った次第である。

[367]一般の人が讃美歌を歌っていた例が『クララの明治日記』(クララ・ホイットニー著『クララの明治日記　上』中央公論社　平成 8［1996］年 5 月)、461 頁や安部純子著『ヨコハマの女性宣教師』(EXP　平成 12［2000］年 12 月)、188 頁にあらわれる。また自由民権運動の闘士が讃美歌を歌っていた（西尾治郎平・矢沢保著『日本の革命歌』一声者　昭和 49［1974］年 6 月　260 頁)。『日本軍歌』(納所辨次郎編 博文館　明治 25［1892］年 4 月　14～15 頁）にも讃美歌の曲が採用されている。

また松本幹は「讃美歌信者」すなわち「Hymn-Christian」と呼ばれた人々、すなわち信仰を持ってクリスチャンになるわけではないが、クリスチャンと一緒に讃美歌を歌うことにはこだわりを持たない人々について述べている。

日本製のリードオルガン、ピアノの登場も、1900（明治 33）年以降の音楽の急激な進展に寄与するものが大きかった。これらの楽器はその頃には手頃な価格となっていた。そして多くのクリスチャンが、ノン・クリスチャンがそうするのが流行の先端であると感じたのと同様に、オルガンかピアノのうちの一つを家に備え付けたのである。

讃美歌集は音楽愛好者の中でかつてない人気を勝ち得た。なぜならそれは、高級楽譜を買うことができない一般人の手の届く範囲にある唯一の歌の出版物といっても過言ではなかったからである。楽譜の多くはその当時、ヨーロッパかアメリカから輸入しなければならなかった。今の信徒世代の初期にあたる時代に、「讃美歌信者」すなわち「Hymn-Christian」と呼ばれた人々が生まれた。彼らは信仰を持ってクリスチャンになるわけではないが、クリスチャンと一緒に讃美歌を歌うことにはこだわりを持たない人々であった。日本人キリスト教信者の特徴の一つは、誰もが今も昔も聖書と讃美歌集を携えているという事実である。そしてそれゆえに、讃美歌集だけを携えている人は「讃美歌信者」だと言われることが多い。

拙訳「松本幹著　Hymnology in Japan 『日本における讃美歌』(全訳)」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第 43 号(2010 年)、264 頁。

[368]塩田良平著『樋口一葉』(吉川弘文館　昭和 35［1960］年 7 月)。

[369]木村毅著『切支丹文学の珍種を拾うて(キリスト教伝来四百年記念第 2 集)』(白鯨社　昭和 24［1949］年 5 月)、10～12 頁、塩田良平著『樋口一葉』(吉川弘文館　昭和 35［1960］年 7 月)、446～448 頁。

[370]樋口一葉著『全集　樋口一葉③　日記編』(小学館　昭和 54［1979］年 1 月)、156～157 頁。

[371] 原文縦書。

[372] C. S. Robinson,『The New Laudes Domini』(New York: The Century, 1892)。

[373]森まゆみ著『一葉の四季』(岩波書店　平成 13［2001］年 2 月)、72～73 頁。

[374]注 370、156～157 頁。

[375]笹川洋子著「夢の館――旧上野図書館」『SHINWA LIBRARY NEWS』Vol.11（神戸親和女子大学　平成 15［2003］年 4 月)、2 頁。

[376]注 373、80 頁。

[377]注 369、10 頁。

[378]田辺夏子著『一葉の憶ひ出』(潮鳴社　昭和 25［1950］1 年)、10～11 頁。

[379]注 370、157 頁。

[380]注 378、74～77 頁。

[381]前掲書、10 頁。

参考文献

第1章

単行書

*江藤淳著『海舟余波　わが読史余滴』(文芸春秋　昭和49［1974］年4月)。
*江藤淳著『勝海舟（日本の名著32)』(中央公論社　昭和53［1978］年2月)。
*勝海舟著『海舟座談』(岩波書店　昭和5［1930］年7月)。
*カッテンディーケ著、水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々（東洋文庫26）』（平凡社　昭和39［1964］年9月）。
*木村毅・斎藤昌三共著『西洋文学翻訳年表（岩波講座　世界文学)』(岩波書店　昭和8［1933］年7月)。
*Clark, Edward Warren,『 Katz Awa “ The Bismarck of Japan” or The Story of a Noble Life』(New York: B. F. Buck & Company, 1904)。
*笹淵友一著『浪漫主義文学の誕生』(明治書院　昭和33［1958］年1月)。
*司馬遼太郎著『明治という国家』（日本放送協会　昭和64［1989］年9月）。
*渋沢輝二郎著『海舟とホイットニー』(TBSブリタニカ　昭和56［1981］年4月)。
*子母澤寛著『勝海舟　上（子母澤寛全集6)』(講談社　昭和48［1973］年3月)。
*下田ひとみ著『勝海舟とキリスト教』(作品社　平成22［2010］年10月)。
*竹中正夫著『勝海舟と新島襄（新島講座)』(同志社　平成11［1999］年4月)。
*手代木俊一著『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典　明治期』(港の人　平成20［2008］年3月)。
*豊田実著『日本英学史の研究』（千城書院　昭和38［1963］年11月）。
*日夏耿之介著『明治大正詩史　上巻』(新潮社　昭和4［1929］年1月)。
*クララ・ホイットニー著、一又民子他訳『勝海舟の嫁　クララの明治日記（下)』(中央公論社　平成8［1996］年6月)。
*守部善雅著『勝海舟　最後の告白（聖書を読んだサムライたち)』(いのちのことば社フォレストブックス　平成23［2011］年7月)。
*山口栄鉄著『異国と琉球』(本邦書籍　昭和56［1981］年9月)。

論文等

*岩楯幸雄著「海舟とキリスト教」『六浦論叢』第20号（関東学院六浦学会　昭和58［1983］年10月)。
*勝海舟著「蘭詩和訳長歌・長歌および薩摩琵琶曲譜」『勝海舟全集14』(勁草書房　昭和

49［1974］年 11 月)。
*勝部真長著「海軍歴史　Ⅰ（解説）」『勝海舟全集』第12巻（勁草書房　昭和46［1971］年2月）。
*木通隆行著「表情から音相基をとらえる」『日本語の音相』（小学館スクウェア　平成16［2004］年3月）。
*木村毅著「勝海舟訳の讃美歌（切支丹文学の珍種を拾うて)」『キリスト教伝来四百年記念第 2 集』(白鯨社　昭和 24［1949］年 5 月)。
*木村毅著「日本詩前史大観」『近代詩の詩的展望』(山宮允教授華甲記念文集編纂会編　河出書房　昭和 29[1954]年 3 月)。
*クラーク著、高橋邦太郎訳「勝家の家庭　生活並に伯最後の改宗」下『勝安芳　日本のビスマルク』第4篇、『本道楽』第3巻3号（茂林脩竹山房　昭和2［1927］年7月）。
*佐藤良雄著「海舟の訳詩と唱気人について」『東洋学芸雑誌』第 139 号（興学会出版部　昭和 38［1963］年 5 月)。
*竹中正夫著「勝海舟とキリスト教」『基督教研究』第 55 巻第 2 号（同志社大学神学部内基督教研究会　平成 6［1994］年 3 月)。
*千葉宣一著「6.《思ひやつれし君》（勝海舟訳）の位相―讃美歌の翻訳―（第三講　近代詩の黎明）」『講座　日本現代詩史　1 明治期』（右文書院　昭和48［1973］年12月）。
*手代木俊一著「勝海舟と讃美歌」『礼拝音楽研究』 No.9（キリスト教礼拝音楽学会　平成 22［2010］年 3 月)。
*菱本丈夫著「勝海舟　オランダ語讃美歌＜ローフ・デン・ヘール＞」『蘭学史料研究会報告』No.246（蘭学史料研究会　昭和 46［1971］年 5 月)。
*菱本丈夫著「勝海舟と讃美歌―《なにすとて　やつれし君ぞ》について」『礼拝と音楽』Vol.18 No.9（昭和 47［1972］年 9 月)。
*菱本丈夫著「長崎の鐘」『キリスト新聞』(昭和 49［1974］年 4 月 20 日)。

第 2 章

単行書

*上田貞治郎他編『ゴーブル訳摩太福音書複製本』附帯記録（上田文庫　昭和 13［1938］年 11 月)。
*川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル研究』(新教出版社　昭和 63［1988］年 7 月)。
*川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル訳［摩太福音書］の研究』(明石書店　平成 5［1993］年 9 月)。
*神戸女学院図書館編『覆刻　明治初期讃美歌　神戸女学院図書館所蔵オルチン文庫版』(新教出版社　昭和 53［1978］年 12 月)。

*手代木俊一著『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)。
*飛田良文・菊地悟共編『和英語林集成　初版　訳語総索引』(笠間書院　平成 8［1996］年 2 月)。
*裨治文（ブリッジマン、Elijah Coleman Bridgman)・克陞存（カルバートソン、Michael Simpson Culbertson）訳『耶蘇基督救世主新約全書』(上海　美華書館、1859 年)。
*松下鈞編『異文化交流と近代化-京都国際セミナー1996』(大空社　平成 10［1998］年 7 月)。
*Medhurst. W. H.,『English and Chinese Dictionary』(Shanghai: Mission Press, 1847)。
*Medhurst, W. H.,『English and Japanese and Japanese and English Vocabulary; Compiled from native works 』(Batavia: Lithography, 1830)。
*Morrison, R.,『Dictionary of the Chinese Language, Three Parts 』(London: Black, Parbury and Allen, 1822)。
*安田寛他編『近代唱歌集成』(ビクターエンタテインメント株式会社　平成 12［2000］年 4 月)。
*安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成 8［1996］年 6 月)。
*Lopscheid, W.,『English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation』(Hongkong: Daily Press, 1866～1869)。

論文等

*荒川清秀著「近代語研究における英華・華英辞典」『辞游 file』No.7(辞游社　平成 12［2000］年 5 月)。
*Williams, Samuel Wells,『An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect 』(Macao, 1844)、漢名衛三畏『英華韻府歴階』(マカオ、1844 年)。
*小沢三郎著「諜者正木護の耶蘇教探索報告書」『幕末明治耶蘇教史研究』(日本基督教団出版局　昭和 48［1973］年 11 月)。
*Allchin, George ,「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900』(Methodist Publishing House　1901 年)、G. オルチン著、手代木俊一訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)。
*高徳（ゴダード、Josiah Goddard）訳『聖経新遺詔全書』(寧波北門外羅宅蔵板、1853 年)。
*手代木俊一著「英語讃美歌から日本語讃美歌へ―明治初期ゴーブルによる翻訳を中心に」『アジアにおける異文化交流：その世界史的意義』(明治書院　平成 16［2004］年 3 月)。
*手代木俊一著「『讃美歌』(高木玄眞筆写本）について」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)。
*F. C.パーカー著「ゴーブル:その宣教師としての任命と日本への旅」『西南学院大学神学

論集』第 44 巻第 1 号（昭和 61［1986］年 9 月）。
*原恵著「日本プロテスタント讃美歌史―［新連載］―日本讃美歌のあけぼの」『礼拝と音楽』第 30 号、1981/Summer（日本基督教団出版局　昭和 56［1981］年 7 月）。
*村岡典嗣著「漢訳聖書源流考」『増訂日本思想史研究』（岩波書店　昭和 15［1940］年 10 月）。

第 3 章

単行書

*海老沢有道著『日本の讃美歌』（香柏書房　昭和 22[1947］年 5 月）。
*海老沢有道著『日本の聖書（新訂増補版）』（日本基督教団出版局　昭和 56［1981］年 4 月）。
*海老沢有道編『立教学院百年史』（立教学院　昭和 49［1974］年 11 月）。
*大江満著『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』（刀水書房　平成 12［2000］年 5 月）。
*G. F. フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史　明治初期諸教派の歩み　上（日本基督教会歴史資料集 7）』（日本基督教会歴史編纂委員会　昭和 59［1984］年 10 月）。
*元田作之進著『老監督ウイリアムス』（京都地方部故ウイリアムス監督記念実行委員事務所大正 3［1914］年）。復刻版：元田作之進著『日本基督教の黎明（老監督ウイリアムス伝記）』（立教出版会　昭和 45［1970］年 9 月）。
*矢崎健一著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』（聖公会出版　昭和 63［1988］年 11 月）。

論文等

*今井烝治著「《よよいわわれて》Rock of Ages 考」『礼拝研究』No. 3（昭和 59［1984］年 12 月）。
*落合吉二著「日本聖公会音楽史序説」『教会文化』第 1 巻 2 号（昭和 8［1933］年 12 月）。
*Allchin, George ,「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900』（Methodist Publishing House　1901 年）、G. オルチン著、手代木俊一訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月）。
*塩谷栄二著「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎」『日本聖公会第 9 回歴史研究者の集い』（平成 9［1997］年 5 月 13 日配付資料）。
*塩谷栄二著「明治初期の聖公会聖歌における史実確認」『歴史研究』（日本聖公会歴史研究会　平成 8［1996］年 11 月）。
*B. H. チェンバーレン著、手代木俊一訳「詩篇日本語訳への提言」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月）。

*手代木俊一著「日本聖公会最初の聖歌、 C. M. ウィリアムズ訳の聖歌をめぐって」 『立教学院史研究』第 4 号（立教大学学院史資料センター　平成 18［2006］年 3 月）。
*手代木俊一著「日本聖公会聖歌目録」『立教学院史研究』第 3 号（立教学院史資料センター　平成 17［2005］年 3 月）。
*矢崎健一著「C・M・ウィリアムズの訳書と著書」『キリスト教史学』第 16 集（昭和 40［1965］年 9 月）。
*矢崎健一著「手写本『早晩祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第 18 号（立教大学一般教育部編集委員会　昭和 40［1965］年 9 月）。
*Loomis, Clara Denison,『Henry Loomis, friend of the East』(New York: Fleming H. Revell, c1923)。

讃美歌集

*『古今聖歌集』(日本聖公会出版社　明治 35［1902］年 6 月)。
*『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』(New York: James Pott, 1871, rev. 1874)。
*『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868)。

第 4 章

単行書

*伊佐治清市編『岐阜盲学校六十年史』(岐阜県立盲学校　昭和 29［1954］年 5 月)。
*伊沢修二著『音楽取調成績申報書』(明治 17［1884］年 2 月序)。
*石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会　昭和 34［1959］年 7 月)。
*Walker, Edward Dwight,「The New England Conservatory of Music」『Cosmopolitan』(September, 1889)。
*奥中康人著『唱歌と規律　近代日本の統治技術としての音楽』(大阪大学大学院文学研究科博士［文学］学位請求論文　平成 15［2003］年)。
*奥中康人著『国家と音楽』(春秋社　平成 20［2008］年 3 月)。
*上沼八郎著『伊沢修二』(吉川弘文館　昭和 37［1962］年 10 月)。
*川島第二郎著『ジョナサン・ゴーブル訳「摩太福音書」の研究』(明石書店　平成 5［1993］年 9 月)。
*久米邦武編、田中彰注『米欧回覧実記（1）』(岩波書店　昭和 54［1979］年 12 月)。
*久米邦武編、田中彰注『米欧回覧実記（3）』(岩波書店　昭和 52［1977］年 9 月)。
*サリバン著、槇恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか―サリバン先生の記録―』(明治図書　昭和 48［1973］年 4 月)。
*信濃教育会編『伊沢修二選集』(信濃教育会　昭和 33［1958］年 7 月)。
*鈴木力二編著『図説盲教育史事典』(日本図書センター　昭和 60［1985］年 6 月)。

*ロバート・J・スミスダス著、鈴木陽子訳『見えない、聴こえない、私。―ヘレン・ケラーを超えて―』(星の環会　昭和60［1985］年9月)。
*高嶺秀夫先生記念事業会編『高嶺秀夫先生伝』(培風館　大正10［1921］年12月)。
*谷合侑著『盲人の歴史』(明石書店　平成8［1996］年9月)。
*Tourjée, Eben,『A plea for vocal music in public schools』 (Boston: Mudge, 1871)。
*Tourjée, Leo Eben, 『For God and Music; the life story of Eben Tourjée』(unpublished typescript, Los Angels: Leo Eben Tourjée, 1960)。
*東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻（音楽之友社　昭和62［1987］年10月)。
*東京盲学校編『東京盲学校六十年史』(東京盲学校　昭和10［1935］年11月)。
*中島耕二・辻　直人・大西春樹著『長老・改革教会来日宣教師事典』(新教出版社　平成15［2003］年3月)。
*中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成5［1993］年2月)。
*Parker, F. Calvin, 『Jonathan Goble of Japan 』(Lanham; University Press of America, 1990)。
*ロバート・V・ブルース著、唐津一監訳『孤独の克服　グラハム・ベルの生涯』(NTT出版　平成3［1991］年5月)。
*McConathy, Osbourne,『Mason song in Japan』(Music educators Journal First Fall Issue, 1937)。
*MacPherson, Bruce & Klein, James, 『Measure by Measure; a history of New England Conservatory from 1867 』(Boston: The Trustees of New England Conservatory of Music, 1995)。
*盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編『京都府盲聾教育百年史』(盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会　昭和53［1978］年3月)。
*E. S. モース著、石川欣一訳『日本その日その日　3』(平凡社　昭和46［1971］年1月)。
*文部省編『盲聾教育八十年史』(日本図書センター　昭和56〔1981〕年9月)。
*山主敏子著『ヘレン・ケラー(世界の伝記　四二)』(ぎょうせい　昭和55［1980］年9月)。
*横浜訓盲院編『光を求めて九十年』(横浜訓盲院　昭和54［1979］年10月)。
*ジョセフ・P・ラッシュ著、中村妙子訳『愛と光への旅　ヘレン・ケラーとアン・サリヴァン』(新潮社　昭和57［1982］年1月)。
*『音楽取調掛時代（明治13～明治15）所蔵目録（3）各種資料編』第一巻（東京芸術大学図書館　昭和46［1971］年5月)。
*『Manual of the New England Conservatory of Music, 1886～1887』。

論文等

*A. ハミッシ・アイオン著「十字架の使節　カナダ人宣教師が日本に与えた影響」ジョン・シュルツ、三輪公忠編『カナダと日本』(彩流社　平成3［1991］年9月)。
*上沼八郎著「伊沢修二とLuther Whiting Mason」『東京女子体育大学紀要』第五号（昭和45［1970］年)。
*下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地　近代文化の原点』1（築地居留地研究会　平成12［2000］年10月)。
*手代木俊一著「19世紀アメリカの宣教と音楽」『人文科学研究（キリスト教と文化）―国際基督教大学学報　Ⅳ-B』第30号（国際基督教大学キリスト教と文化研究所　平成11［1999］年3月)。
*手代木俊一著「明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽」『日本研究（特集　近代東

アジアとプロテスタント宣教師　その研究と展望)』　第30号（国際日本文化研究センター　平成17（2005）年3月)。
*安田寛著「L・W・メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』第四四巻（同志社大学人文科学研究所　平成10［1998］年12月)。
*山勢松韻君談話「メーソン氏逸話」『同聲會雑誌』第6号（明治30［1897］年8月)。
*吉田亮著「序章　総合化するアメリカン・ボードの伝道事業」『来日アメリカ宣教師』(現代史料出版、平成11［1999］年3月)。
*「An interesting history」『Congregationalist』(Sept., 10,1885)。
*「Children’s Department」『The Musical Herald』(April, 1880)。
*「Music and missions Osaka Japan」『The Musical Herald』(June, 1884)。
*「Music in Japan,」『The Boston Herald Supplement』(Nov. 8, 1879)。 手代木俊一訳「日本における音楽」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、平成11［1999］年11月)。
*「Music in Japan」『 Dwight Journal of Music』(August 14, 1880)。

第5章　第1節

単行書

*青山なお著『明治女学院の研究（青山なお著作集第2巻)』(慶應通信　昭和45［1970］年1月)。
*赤井励著『オルガンの文化史』(青弓社　平成7［1995］年8月)。
*Evan, Sara M.,『Born for liberty』(New York: The Free Press, 1989)。
*遠藤宏著『明治音楽史考』(有朋社　昭和23［1948］年4月)。
*G. オルチン著『風琴教授詳説』(須原徳義編輯発行　明治24［1891］年4月)。
*上沼八郎著『伊沢修二』(吉川弘文館　昭和37［1962］年10月)。
*Cammpbell, Donald P.,『Puritan belief and musical practices in the sixteenth and eighteenth centuries』(Ann Arbor: U. M. I., 1994; theseis [D. M. A.]-Southern Baptist Theology Seminary, 1994)。
*Gellerman, Robert,『R. Gellerman’s international reed organ atlas』2nd ed. (Lanham: Vestal Press, 1998)。
*故男爵目賀田種太郎伝記編纂会編『男爵目賀田種太郎』(故男爵目賀田種太郎伝記編纂会　昭和13［1938］年6月)。
*信濃教育会編『伊沢修二選集』(長野　信濃教育会　昭和33［1958］年7月)。
*東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』(音楽之友社　昭和51［1976］年7月)。
*手代木俊一著『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成11［1999］年6月)。
*手代木俊一著『日本讃美歌・聖歌研究書誌　2010』(キリスト教礼拝音楽学会　平成23［2011］年10月)。

*中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房　平成5［1993］年2月)。
*日本近代洋楽史研究会編『明治期　日本人と音楽　東京日々新聞集成』(国立音楽大学図書館/大空社　平成7［1995］年7月)。
*Butterfield, Fred H. & McConathy, Osbourne,『Mason and school music course teachers manual』(Boston: Ginn, 1899)。
*前川公美夫著『北海道音楽史』(士別　前川公美夫　平成4［1992］年6月)。
*正木直子・正木みち編・訳『概要「日本の教育の歴史の現状」―1876年フィラデルフィア万博のために―』(日本図書刊行会　平成10［1998］年7月)。
*目賀田種太郎著『米國在留日本人　The Japanese in America』(五味貞吉　大正15［1926］年5月)。
*森孝一著『宗教からよむ「アメリカ」』(講談社　平成6［1994］年3月)。
*安田寛著『唱歌と十字架』(音楽之友社　平成5［1993］年6月)。
*由利正通編『子爵由利公正傳』(由利正通　昭和15［1940］年)。
*Lawler, Thomas Bonaventure,『 Seventy years of textbook publishing; a history of Ginn and Company』(Boston: Ginn and Company, 1938)。
*渡辺正雄著『文化としての近代科学』(丸善　平成3［1991］年1月)。
*『Address by the Rev. Laurence at the funeral of Professor Luther Whiting Mason, held in the Baptist Church of Buckfield Maine』(July 16,1896)。
*『The American organs; a short account of its construction and utilities, and a descriptive list of the various style』(Boston: The Smith American Organ Company, 1871?)。
*『Illustrated catalogue of Mason & Hamlin』(March, 1880)。
*『Manual of the New England Conservatory of Music, 1886-87』。

論文等

*伊澤修二著「メーソン氏を弔ふ」『同聲會雑誌』第6号（明治30［1897］年8月)。
*伊澤修二著「予が關係したる創業教育」『教育時論』第635号（開發社　明治25［1892］年)。
*植村正久著「今昔の感」『福音新報』第1514号（大正13［1924］年8月)、「讃美歌に関する資料」『植村正久と其の時代』第4巻（教文館　昭和13［1938］年6月)。
*Walker, Edward Dwight,「The New England Conservatory of Music」『Cosmopolitan』(Sept. 1889)。
*幸田延子「外行紀要」『同聲會雑誌』第1号（明治29［1896］年4月)。
*Talcott, E.,「Letter to Dr. Clark 1881. 8. 30. in Letters from Mission in Japan」『Paper of the American Board of Commissioners for Foreign Missions』。

*Torrey, Ellizabeth,『Western music in Japan』(Nov. 1898, Vol. 15)。
*手代木俊一著「19 世紀アメリカの宣教と音楽」『人文科学研究（キリスト教と文化）　国際基督教大学学報 IV-B』第 30 号(国際基督教大学キリスト教と文化研究所　平成 11(1999)年 3 月)。
*Tourjee, Leo Eben,「For God and Music; the life story of Eben Tourjee」（unpublished typescript, Los Angeles: Leo Eben Tourjee, 1960)。
*McConaty, Osbourne,「Mason song in Japan」『Music educators Journal First Fall Issue』(Sept. 1937)。
*Mathews, W. S. B.,「Luther W. Mason and school music」『Music』(Sept. 1892)。
*安田寛著「Ｌ・Ｗ・メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』第 44 号（平成 7［1995］年 12 月)。
*安田寛著「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」『山口芸術短期大学研究紀要』　第 29 号（平成 9［1997］年 11 月)。
*安田寛著「晩年のトゥルジェーと日本の洋楽」『山口芸術短期大学紀要』第 28 巻（平成 8［1996］年 1 月)。
*山住正己著『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会　昭和 42［1967］年 3 月)。
*「An interesting history」『Congregationalist』(1885. Sept. 10)。
*「Music and missions Osaka Japan」『The Musical Herald』(June. 1884)。
*「Music in Japan」『The Boston Herald Supplement』(Nov. 8, 1879)、手代木俊一訳「日本における音楽」『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社　平成 11［1999］年 11 月)。
*「Music in Japan」『Dwight Journal of Music』(1880 August 14)。
*「Professor L. W. Mason and American Music in Japan」『The Musical Herald』(Aug. 1881)。

讃美歌集

*『讃美歌并楽譜』(大阪　美国派遣宣教師事務局出版　明治 15［1882］年 3、5 月)。
*『SANBI NO UTA』(神戸　出版社不明　明治 12［1879］年 10 月、11 月)。
*『SAMBIKA SONGS OF PRAISE 』(Osaka: American Board Mission, 1882)。

CD、DVD

*CD『おたまじゃくしと権兵衛さんのすべて』(キングレコード［株］　平成 18［2006］年 7 月)。
*DVD『永遠のふるさと　童謡・唱歌から讃美歌へ (DVD)』(ライフ・クリエイション［いのちのことば社］　平成 22［2010］年 10 月)。

第５章　第２節

単行書

*高谷道男編訳『ヘボン書簡集』(岩波書店　昭和 34［1959］年 10 月)、[『ヘボンの手紙』(有隣堂　昭和 51［1976］年 10 月)]。

讃美歌集、行進曲集、歌集

*『救世軍歌集』(救世軍本営　明治 34［1901］年 11 月)。
*『救世軍歌集』(救世軍本営　大正 3［1914］年 9 月)。
*『救世軍歌集』(救世軍本営　昭和 10［1935］年 2 月)。
*『救世軍歌集』(救世軍本営　昭和 29［1954］年 12 月)。
*『救世軍歌集』(救世軍本営　平成 9［1997］年 11 月)。
*三谷種吉著『基督教福音唱歌』(明治 31［1898］年 11 月)。
*日本福音連盟新聖歌編集委員会編　『新聖歌』(教文館　平成 13［2001］年 6 月)。
*『高木玄眞筆写本』(大阪　明治 6～7 年)。
*奥野昌綱・戸川安宅編『童蒙讃美歌』(倉田繁太郎　明治 23［1890］年 12 月)。
*『リバイバル唱歌』(聖書学院　明治 42［1909］年 5 月)。
*『霊感賦』(基督教書類会社　大正 11［1922］年 1 月)。
*『進行曲』(十字屋　明治 32［1899］年 1 月)。
*『進行曲粋　教科適用　第一集（文部省検定済)』(開成館　明治 37［1904］年 11 月)。
*『日本軍歌　全』(博文館　明治 25［1892］年 4 月)。
*『War Songs』(Boston: Oliver Ditson, 1883)。

第６章

単行書

*青芳勝久［英文］著、渡辺省三訳『講堂・植村正久・物語』(キリスト教図書出版社　平成 9［1997］年 12 月)。
*植村正久著、佐波亘編『植村正久と其の時代』第四巻（教文館　昭和 13［1938］年 6 月)。
*植村正久著『植村全集』第五巻［教会篇］(植村全集刊行会　大正 12［1923］年 2 月)。
*手代木俊一著『日本讃美歌・聖歌研究書誌　2010』(キリスト教礼拝音楽学会　平成 23［2011］年 10 月)。
*森一著『明治詩人と英文学』(国書刊行会　昭和 63［1988］年 4 月)。

論文等

*小川和佑著「詩のなかの精神史」『文明開化の詩』(叢文社　昭和 55［1980］年 10 月)。
*笹淵友一著「新撰讃美歌について」『礼拝と音楽［季刊］』第 2 号、1974/Summer（昭和 49［1974］年 8 月)。
*手代木俊一訳「松本幹著“Hymnology in Japan”『日本における讃美歌』(全訳)」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第 43 号（明治学院大学キリスト教研究所　平成 22［2010］年 12 月)。
*別所梅之助著「日本の讃美歌について」、マクネア共著『讃美歌物語』(警醒社　大正 6［1917］年 6 月)。

第 7 章 第 1 節

単行書

*小玉晃一・小玉敏子共著『明治の横浜　英語・キリスト教文学』(笠間書院　昭和 54［1979］年 4 月)。
*島崎藤村著『桜の実の熟する時』、大正 8［1919］年、(新潮社　昭和 30［1955］年 5 月、文庫版)。
*島崎藤村著『春』(明治 41［1908］年)、［(新潮社　昭和 25（1950）年 11 月、文庫版)。
*下山嬢子著『近代の作家　島崎藤村』(明治書院　平成 20［2008］年 2 月)。
*瀬沼茂樹著『評伝　島崎藤村』(筑摩書房　昭和 56［1981］年 10 月)。
*中村浩介著『西洋の音、日本の耳』(春秋社　昭和 62［1987］年 4 月)。
*西丸四方著『島崎藤村の秘密』(有信堂　昭和 41［1966］年 6 月)。
*三好行雄著『島崎藤村論』(至文堂　昭和 41［1966］年 4 月)。
*『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇　第一巻』(音楽之友社　昭和 53［1978］年 10 月)。
*『明治学院百年史』(明治学院　昭和 54［1979］年 4 月)。
*『明治学院百年史資料集』第 1 集（明治学院百年史委員会　昭和 50［1975］年 3 月)。

論文等

*青木美穂著「藤村詩と讃美歌＜逃げ水＞＜月光＞」『青山語文』(青山学院大学日本文学会　平成 2［1990］年 3 月)。
*伊東一夫著「植村正久」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院、昭和 57［1982］年 4 月)。
*岩田ななつ著「島崎藤村と西洋音楽」『言語文化』第 29 号（明治学院言語文化研究所　平成 24［2012］年 3 月)。
*笹淵友一著「讃美歌」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院、昭和 57［1982］

年 4 月)。
*笹淵友一著「新撰讃美歌について」『礼拝と音楽［季刊］』第 2 号、1974/Summer（昭和 49［1974］年 8 月)。
*笹淵友一著「逃げ水」、伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』(明治書院、昭和 57［1982］年 4 月)。
*島崎翁助著「『初期藤村』に関する覚え」『島崎藤村全集』第 1 巻（新潮社　昭和 25［1950］年)。
*島崎藤村著「韻文について」『太陽』第 22 号（明治 28［1895］年 12 月)。
*島崎藤村著「北村透谷二十七回忌に」『大観』(大正 10［1921］) 年、［再録 :『日本現代文学全集十九　島崎藤村集（一)』(講談社　昭和 36［1961］年 1 月)］。
*島崎藤村著「沈黙」『中央公論』第 28 巻第 2 号（大正 2［1913］年 2 月)。
*島崎藤村著「耳の世界」『交響楽』1 巻 4 号（大正 15［1926］年 4 月)。
*下山嬢子著「藤村と音楽学校」『島崎藤村研究』第 29 号（双文社出版　平成 13［2001］年 9 月)。
*手代木俊一著「植村正久と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 7 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 19［2007］年 3 月)。
*手代木俊一著「島崎藤村と讃美歌」『礼拝音楽研究』第 11 号（キリスト教礼拝音楽学会　平成 24［2012］年 3 月)。
*風雨楼主人著「文学界　一月の創作界」『世界之日本』第 24 号（明治 31［1898］年 2 月)。

第 7 章　第 2 節

単行書

*笹川洋子著「夢の館――旧上野図書館」『SHINWA LIBRARY NEWS』Vol.11（神戸親和女子大学　平成 15［2003］年 4 月)。
*塩田良平著『樋口一葉』(吉川弘文館　昭和 35［1960］年 7 月)。
*塩田良平著『樋口一葉研究』(中央公論社　昭和 31［1956］年 10 月)。
*田辺夏子著『一葉の憶ひ出』(潮鳴社　昭和 25［1950］1 年)。
*森まゆみ著『一葉の四季』(岩波書店　平成 13［2001］年 2 月)。
*『樋口一葉全集③日記編』(小学館　昭和 54［1979］年 1 月)。
*『樋口一葉全集　第三巻（上)』(筑摩書房　昭和 51［1976］年 12 月)。

論文等

*木村毅著『切支丹文学の珍種を拾うて（キリスト教伝来四百年記念第 2 集)』(白鯨社　昭和 24［1949］年 5 月)。

*手代木俊一著「樋口一葉と讃美歌」『礼拝音楽研究』第9号（キリスト教礼拝音楽学会　平成22［2010］年3月）。